

34

有縁の女 辻 和子 無縁の女 網野善彦 選択縁の女 上野千鶴子

『女学雑誌』と『あごら』 福田光子
孤立からグループネットワークへ 高橋 ますみ
日本型フェミニズムと〈あごら〉 斎藤千代

✿ アグネス／真理子 ✿ 花の応援団 ✿
資料・均等法で女はどう変わったか

<あごら>15周年記念の集い特集



事実に基づいて真実を考える——あごろ

- 1号<女が働くこと> ￥200
●資料 働く女は過保護か ●調査 共働き実態
●意見 女が働くこと 松谷みよ子ほか(品切)
- 2号<女性と能力> ￥200
●調査 働く女性の地位向上をめぐる
●討論 女性と能力 ほか
- 3号<主婦の解放> ￥200
●調査 団地の主婦の解放意識
●討論 主婦の解放 ●解説 二分二乗法
- 4/5号<何かしたい主婦のために> ￥300
●記録 何かしたい主婦のためのセミナー
●壁を破った人々 ●資料 2つの差別裁判
- 6/7号<運動をすすめよう> ￥350
●報告 解放への道——海外の婦人たち
●資料 各国の母性保護 ●討論 婦人運動をすすめる
- 8号<子殺しを考える> ￥380
●資料 世界各國の妊娠中絶立法例
●討論 性の二重性をめぐって (品切)
- 9号<働く女と主婦の接点> ￥430
●論文 働く女と主婦の接点 神田道子ほか
●調査 働く女と主婦 ●討論 人口抑制と産む性 (品切)
- 10号<女と法> ￥700
●記録 名古屋放送女子若年定年制
●資料 法律の中の女性 ●討論 産む性と法律 (品切)
- 11号<女と教育> ￥750
●論文 主婦が学ぶということ 伊藤雅子
●調査 教科書の中の女性差別 ●討論 <女と教育>
- 12号<メキシコ会議と世界行動計画> ￥750
●記録 国際婦人年世界会議とトリビューン
●資料 世界行動計画、ILO活動計画ほか
- 13号<国際婦人年国内集会と行動計画> ￥750
●記録 国際婦人年国内集会
●調査 国際婦人年 ●討論 メキシコ会議
- 14号<女の記録入選発表> ￥750
●隣にこわい 佐多稲子 ●アメリカ考察 水田珠枝
●新女大学研究 エリザベス・マウア
- 15号<職場の中の女性差別> ￥750
●調査 日本の著名企業100社にみる男女差別
●概説 女子労働市場の現場 正木直子(品切)
- 16号<女と結婚> ￥750
●文化人類学から見た日本の結婚・祖父江孝男
●討論「結婚の幻滅」●随想 私と結婚(品切)
- 17号<女と生涯学習> ￥780
●生涯学習への提言 ●女子成人教育の問題点
●調査 婦人学習グループ ●ルポ 女が学ぶ所
- 18号<いま女性解放は> ￥1300
●討論 日本の女性運動をどう展開するか
●ルポ いま職場でたたかう39人の女たち
●資料 女性差別に関する国連条約ほか(品切)
- 19号<女にとって子どもとは> ￥800
●論文 日本の近代の国家と母性 中島 邦ほか
●資料 優生保護法改訂をめぐる経過 (品切)
- 20号<女性解放と男女雇用平等法> ￥1300
●論文 女性史におけるウーマンリブ 水田珠枝
●論文 女性解放論の模索と反省 田中寿美子
●資料 労基研報告 雇用平等法案ほか
- 21号<子と母の関係を問う> ￥1100
●論文 親ばなれ子ばなれ 伊藤雅子 ほか
●調査 著名企業144社にみる女性の就労状況
- 22号<男女平等と母性保障> ￥1200
●保護派と平等派の接点を求めて
●いた女の働く場は——現場からの報告
- 23号<女たちは、いま変わる> ￥1500
●コペンハーゲン会議と女性差別撤廃条約
- 24号<女と戦争> ￥1500
●ふたたび戦争を起こさないために
- 25号<女と情報> ￥1500
●つくられる女からつくる女へ●情報化社会と女
- 26号<女がモノを言うということ> ￥1500
●情報化社会の中での自己確立を目指して
- 27号<いま平和を支える> ￥1500
●女たちの発言と行動の記録
- 28号<産む産まない産めない> ￥1800
●優生保護法をめぐる考察と運動の記録
- 29号<子どもがあぶない> ￥1400
●危いのは子どもだけか……問題の本質をさぐる
- 30号<均等、平等、保護> ￥1600
●実質的平等、結果の平等を問う均等法を考える
- 31号<均等法、派遣法、そして……> ￥1600
●均等法以後、どう変わるか、何をすべきか
- 32号<記録ナイロビ会議> ￥2000
●国連とNGOの2つの会議 ●2000年への戦略
- 33号<新聞切り抜きに見る女の16年> ￥1800
↑リブの台頭(1970~72) ●女性記者座談会



一九七二年二月生まれのハあごらVは、昨年二月、満十五歳の誕生日を迎えました。恐らくは三号雑誌、一年ともたないだろうと、人も思い、私たちも思っていましたのに、雑誌は通巻百三十号を越え、読者から出発した会員の拠点も、全国十四を数えるようになりました。

振り返ってみますと、十五年は、あつというまの短さにも、また三十年以上もの長さにも感じられます。山あり谷あり、何度か終刊の話が出ながらも命脈を保ってきたのは、そのたびに、この灯を消さないで！という声が沸き起こってきたからでしょう。フェミニズム雑誌が次々と生まれては消えていくなか、孤塁を守るハあごらVに温かい支援が続いたことを私たちはほんとうに感謝しています。

継続は力なり、と励ましてくださる方々のご声援とご温情に心をふるい立たせてきた日々でしたが、続けることだけがよいことなのかという反省も、私どもには常にありました。ともかくも十五年を一つの区切りとして、「第二世代」のありようを模索してみようと、昨秋「十五年の集い」を持ちました。この号は、二日間にわたる集いの記録を中心にまとめたものです。

国連女性の十年を挟み、日本の女性の情報も、創刊当時とは大きく変わりました。

私たちが考えなければならないこと、しなければならぬことは何か、一つの区切りを節目に、もう一度原点に返って考え直してみたいと思います。

この号には返信用のハガキを入れました。ぜひ、あなたの声を届けてください。

I 記念講演とパネルディスカッション 4

有縁の女 辻 和子 5

無縁の女 網野善彦 18

選択縁の女 上野千鶴子 33

討論(司会) しま・ようこ 54

II へあごらんの十五周年を祝う夕べから 74

大槻壽子／中西珠子／中村智子／円より子／木下ユキエ／丸山尚ほか

III これまでのへあごらんを振り返って 101

『女学雑誌』と『あごら』 福田光子 101

孤立からグループネットワークへ 高橋ますみ 107

日本型フェミニズムと『あごら』 斎藤千代 114

IV 「第二世代」のへあごらんを考える 138

第二世代に求められる情報誌像 細谷洋子 138

これからのへあごらんと『あごら』 三好久美子 140

一つの節目に思いきった脱皮を 斎藤千代 144

★全国のへあごらの拠点 149

★おもしろいですヨへあごらん可能性教室 150

アグネス／真理子❀花の応援団

152

「禁児車」発言をめぐる

173

林 真理子／上野 千鶴子／松崎陽子／道下匡子／若桑みどり／
長崎陽子／多賀幹子／笹野美知子／辻中若子／佐藤洋子
宮迫千鶴／東京新聞「発言」欄／ますのきよし／週刊文春

★婦人週間四十周年全国会議から

185

あいさつ 佐藤ギン子 185 祝辞 中村道子 186

国連婦人の地位委員会報告 有馬真喜子 187

婦人週間、昨日・今日・明日

縫田曄子／牛尾治朗／猪口邦子 191

仕事と育児を考える

小宮山洋子／汐見稔幸／前田 薫／ヤンソン由実子 203

★あごら読書室

217

★ネットワーク

家庭科の男女共修を考える会

221

ばってん：うーまん

223

★あごらのあごら

224

資料Ⅰ 均等法で職場の女はどう変わったか 226

資料Ⅱ 婦人週間四十年間のテーマの変遷 238

資料Ⅲ 『あごら』バックナンバー一覽 249

I 「有縁の女」「無縁の女」「選択縁の女」

一九八七年十月十七、十八の両日、私たちは〈あごろ〉十五周年の集い」を、東京都勤労福祉会館で持ちました。第一部は講演と討論、第二部はパーティー、第三部は仲間うちでの話し合いです。その記録をお目にかけます。まずは第一部から――。

高橋ますみ 早いもので『あごろ』という女の問題の総合情報誌を出し始めてから十五年がたちました。この間にいろんな出会いがあり、そして、血縁とか地縁とか、そういうものとは関係なく女の問題をいっしょに考えていきたいという縁で結ばれた仲間たちが全国各地に根を張って、緩やかで息が長い活動になっていったというふうに私は思っております。

今日ここで十五周年の集いをこれから二日間にわたって催していきたいと思っております。どうぞ皆さん、せっかくの縁でございますので、いろんな出会いをまた得て次の活動に結んでいかれますようにと願っております。簡単ですがご挨拶にかえさせていただきます。

司会・細谷洋子 それでは、いよいよ皆さまお待ちかねの講演会に入ります。講演会の司会は、私、札幌の細谷洋子がつとめさせていただきます。つたない司会ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

今日は、辻、網野、上野、というすばらしい三先生をお迎えし、それぞれのお立場から「女の縁」についてお話しただくわけですが、最初にお話しただく辻和子さんについて、三好がご紹介させていただきます。

三好久美子 〈あごろ九州〉の三好と言います。辻和子さんのご紹介をさせていただきます。

辻さんは、一九五二年から一九八六年まで福岡のRKB毎日放送というテレビ局でプロデューサーとして、ま

たディレクターとしてお仕事をされていました。ちょうど私の生まれてからの人生とほとんど同じ年数だったわけです。特に私の印象に残っている番組としては、水俣を扱った『苦海浄土』とか、伊藤ルイさん、伊藤野枝さんのお子さんで、いま平和運動とか人権運動をされている方ですが、その方を紹介した『ルイズーその絆』とか、戦後すぐ中国に特派員として行かれて知り合った中国の残留日本女性と辻さんとの関係を番組にした『二十五年目の再会』などがありますが、ほかにもたくさんさんのすばらしい番組をおつくりになりました。心が揺さぶられるような作品で、その感動は、今でも私、忘れられません。もし機会あればぜひ見ていただきたいと思います。プロデューサー、ディレクターというのは表に出ない仕事だと思っただけでも、福岡でRKBの辻さんを知らない人はたぶんいないのではないかと思います。特にフェミニスト運動をはじめ、いろいろな地域活動をしている私たちにとっては親しくて頼もしい存在です。では、よろしくお願いします。

有縁の女 辻 和子さん

辻 和子 ただいまご紹介いただきました辻 和子でございます。

いまご紹介にあつたように、テレビのディレクターとかプロデューサーというのは裏方の仕事でございます、こういう皆さんのようにたくさんの方の前でお話をするということに慣れておりませんので、ほんとうに足が震えております。こちらの斎藤千代さんから、「足を震わせないで胸を震わせてお話しください」というお励ましの便りをいただいたんですが、実は、今日はちょっと風邪をこじらせておりまして、本来はもうちょっと美しい声なんです、たいへんお聞き苦しいと思いますけれどもお許しくださいませ。

◆ 縁が縁を生んで……

実は、皆さまにはちょっと遠いから見えにくいと思いますが、これは、私がずっと取っております『婦人民主新聞』の、今年の六月十二日号です。これを見ましたら、今日初めてお目にかかります上野千鶴子さんがお出

しになっている「女のネットワーキング巡り集会」の「こっちの水は甘いよ」の「女縁でつくる未来社会」という記事が出ておりました。

私は、実は今日初めて上野先生にお目にかかったんですが、びっくりいたしましたのは、その左側に佐多稲子さんの「婦民と私」という記事がございまして、これに私の四十年前の写真が載ってたわけです。私はもうほんとうにびっくりいたしました、お目にかかってないけれども、やっぱり同じ紙面に、しかも六月十二日というのが私の誕生日でして、ほんとうに縁のあるということを感じまして、今日上野さんと初めてお目にかかったんですが、感激で胸がいっぱいです。

この新聞に出ておりますように、へ婦人民主クラブ」というところで私は長い間働いておりましたので、佐多稲子さんの「婦人民主クラブと私」という意味の「婦民と私」という記事に四十年前の写真が出たわけです。

私は、いまご紹介いただいたように、RKBに入ったのは一九五二年なんですが、戦争中に、中央公論の今の社長さんのお父さんの嶋中雄作さんという方がおつくりになった女学校を出てから行く二年制の学校、「生活科学と広い教養を身につけて、生活の指導者たるべき婦人の育成を目的とする」という理想を掲げた非常に私塾的な学校に学んでおりました。この国民生活学院という学校の学院長は谷川徹三さんで、生徒主事が松岡洋子さんだったという縁で、私の今日の仕事の方向とか生き方とかは、戦争中に国民生活学院で学んだことにとても影響されていると思います。

今のお若い方は、松岡洋子さんってご存じないと思うんですが、エドガー・スノーやパール・バックの秘書をしてらした、アメリカで勉強してきた評論家で、戦後は日本ペンクラブの事務局長なんかをなさった方です。

終戦直後の一九四六年に学校を出ましてから一年足らず出版社に勤め、その松岡さんの関係で、一九四七年に松岡洋子事務所というところで松岡さんの仕事を手伝ってくれないかということで働き始めました。終戦後二年ですが、その事務所にはへ婦人民主クラブ」の事務所もあり、当時発行しており今でも続いています『婦人民主新聞』の編集もそこでやっておりましたので、私もそれを両方手伝いすることになりました。

婦人民主クラブというのは、宮本百合子さん、佐多稲子さん、羽仁説子さん、加藤シズエさんたち、そのほか何人もの方が中心になってつくった団体ですが、今、へ婦団連」をずっとやってらっしゃる櫛田ふきさんもらっ

しゃいました。櫛田さんのことを、ご年配でしたから「おばちゃん」、宮本さんのことは「百合子さん」、佐多さんのことは「稲子さん」、そして「洋子さん」、「説子さん」というふうに、私たち十代の若い者でもそういう方たちを先生ではなくて、さんづけで呼ぶというような、非常に民主的な雰囲気の中で、その「婦人民主クラブ」の仕事と『婦人民主新聞』の仕事と両方しながら松岡さんの仕事も手伝うということで働きました。その松岡事務所は、有楽町の元毎日新聞社のありました「ヘラルド・トリビューン」というアメリカの新聞社の半分を借りたところにあつたものですから、戦後の帝銀事件とか下山事件とか松川事件とか、そういう事件が起こるたびに一番敏感にそういうジャーナリスティックな事件を受け止めることができました。

松岡事務所の中で、女が変われば世の中が変わるということを私は植え付けられました。その後、松岡さんがアメリカへ行った留守の間に私はちょっと病気になる、事務所を辞めました。でも食べなきゃいけませんから、『スポーツニッポン』という新聞の広告部の外勤なんかをして働いたんですが、その時にNHKのラジオでございませうけれども、「勤労婦人の時間」という番組で「経済的独立は婦人を幸福にするか」という論文募集がありまして、それに私は応募しました。当時、妹と、今、作家になっております従妹（いとこ）と私と、三人で三千円ずつの給料を出し合って九千円で暮らしているとか、メニューヒンを聴きに行くのに毛布を質に入れて行くなど書きましたら、作文の内容が非常に具体的でよろしいということでNHKから三千円の賞金が送られてまいりました。『スポーツニッポン』の私の給料が七千円でしたから、「これはもう放送局というところはすごいお金のあるところだ」と思って、放送局に入りたいと思いました。

その時、ラジオのプロデューサー担当の方が高橋菊江さんとおっしゃって、後で総評の婦人部長になられる方ですが、この方が、「辻さん、ちょっと暇だったらうちの番組に出てくれない」と言っていて、まあ、今で言うサクラですけれども、銀座の近藤書店の前で「本が買いたいけどなかなか買えない」というようなことを言ってくれと言われたのです。「それはとてもおやすい御用だし、私の実感だから言いわ」と言いまして、アナウンサーのインタビューに答えて「本は買いたいけどなかなか給料が少ないから買えない」というようなことを申しましたら、その放送を聴いた大学生からミカン箱いっぱいの本が送られて来ました。私はもうラジオと言うかマスメディアの力の大きさにびっくりいたしまして、ますます放送局へ入りたいと思ったわけです。

◆ 民放の女たちを結ぶネットワークづくり

それで、ラジオ九州の婦人プランナーの試験を受けまして、入ったのが一九五二年です。今は放送局も女性が非常に活躍してますけれども、民放が始まった当時も非常に女性プロデューサーというのは活躍していました。それで、番組もたくさん持っておりまして、私は、入った時も婦人プランナー募集ということで、私ともう一人『ひまわり』という雑誌の編集をしていた人と二人入ったんですが、各局で女性プロデューサーが活躍していましたので、女性プロデューサーの会をつくろうと思ひまして「土曜会」という会をつくりました。

各局の女性プロデューサーが集まって、当時は自分たちで会費を出し合って、アメリカから帰ったばかりの石垣綾子さんとか、『アサヒグラフ』の編集長だった飯沢匡さんとかお招きしてお話を聞くというようなことをやってましたが、プロデューサーたちですから、やっぱりそういうただの懇親会だけじゃなくて何か番組をつくろう……プロデューサーが集まればやっぱり何か番組にしてそれを全国的に放送したいと思うわけでございますから、番組をつくりました。全国の放送局、たくさんの方の民間放送の中で女性プロデューサーがいるところ、いないところ、男性の担当者も含めまして「土曜会」に入ってもらって、母の日に「私のお母さん」というタイトルで作文募集をいたしました。選者には壺井栄さん、芹沢光治良さん、今井正さんを決めまして、スポンサーには森永をつけました。秋の結婚シーズンには各地の結婚の風俗を録音構成で集めてそういう番組を交換し合うとか、そういうようなことをやっていたわけです。

中心は私たち女性プロデューサーがリードしてやってたわけですが、その会に男性が加わってからも、例会とか総会をリードしていたのは女性だったのです。各地方局の番組担当者というのは、部長とか、そういう長が付く偉い人が多いもんですから、彼らは、何か会に出るとくちばしの黄色い女の子がキャーキャーと言ってリードをするというのは非常におもしろくないわけですね。それで、私たちが知らない間にいろいろ根回しをしまして、ある時……もう一つ地方局の共同制作の会があるんですが、その会で「土曜会」でやっている活動は全部吸収してゆきます」というふうに突然その会の席上で言われました。男の人たちのそういう意味での裏の工作というのは非常に巧妙で、……彼らが言うには、「女は正論ばかり吐き過ぎる。そんなことでは社会的なこととはやっ

ていけない」と言うんですね。それはなぜかと言うと、「男の人たちが、録音会社や何かからリベートをもらう」というようなことはよくない」と女たちは言うものですから、そういううるさい女たちは排除していいこうということ、**〈へ土曜会〉**は潰されてしまいました。

会は潰されましたけれども、私たちは、その会で「女性の広場」という番組をつくって、北海道、東北、東京、名古屋、大阪、九州と六局で共同でつくる放送番組をやっていましたから、番組は一九五四年から六一年まで続きまして、その番組の中でいろいろな女性の立場から、いろいろなことを訴えてきました。そういう番組の後押しをしてくれたのは、『暮らしの手帖』をおつくりになった花森安治さんであり、朝日新聞に「ひととき」をおつくりになった影山三郎さんでした。そういう男の方たちは、「あなたたちが今がんばってやってたら、絶対世の中は少し変わってくるよ」というふうに女の後押しをしてくださいました。それで、私たちは、**〈へ土曜会〉**は潰されたんですが、その後も番組を中心に活躍していましたし、その後で**〈放送婦人会議〉**というのをまたつくりました。北陸放送で今でも活躍していっぱいいます金森さんを中心にして勉強会をやりました。

一九六一年に京都で多田道太郎さんと加藤秀俊さんをお招きして「ラジオ・テレビコミュニケーションにおけるメカニズムと作り手の良心」というテーマでセミナーを開きました。そうしたら、この時に、加藤秀俊さんが「放送は憶測のメカニズムで動かされている」という観測をなさいましたので、それじゃ視聴者はどうとらえているんだろうということ、私たち**〈放送婦人会議〉**、これは全国の女性プロデューサー、ディレクターの会ですが、その人たちで、京都でつくったセミナーの結果を東京の集まりへ持って帰りました。早稲田大学の本明寛教授の下でモチベーション・リサーチの勉強をしました。それから長野へ行きまして、信越放送の伊藤さんという、やっぱり古くからの仲間の協力を得て、長野の主婦百人に番組をどう観ているかというようなことをモチベーション・リサーチで聞きました。

今考えてみますと、そういうふうに、**〈へ土曜会〉**を潰された後でも、その時の仲間は形を変えて放送界の中における女のネットワークというもので結ばれていました。

一九六四年に**〈放送婦人会議〉**を解散して、その後私は、また何かそういう……女が手をつないで、番組の上でも、それから私たちの地位の向上と言うか、ラジオやテレビを観ている人は女の人が多いのだから、もっとた

くさん作り手や力のあるところに女の人が出ていくべきだという考えの下に、一九六七年に「日本婦人放送者懇談会」というのをつくりました。

アメリカに「AWRT」と言いまして、「全米婦人放送者会議」という組織があります。その会長が日本に来たというようなことがきっかけで、日本にもそういう組織をつくらうじゃないかということで、民間放送だけでなくNHK、広告代理店、それからフリーの人も入れまして「日本婦人放送者懇談会」というのをつくりました。私は、それをつくった翌年ぐらいに九州の福岡の本社に転勤になりましたけれども、九州の会員として今でもずっと年に二回ぐらいは東京の会に出ております。

◆ アメリカ女性のネットワークキングに学ぶ

忘れられないのは、一九七一年にアメリカのAWRT、アメリカン・ウィメンズ・ラジオアンドテレビジョンの二十周年の大会に出席したことです。アメリカは、非常に女性の力が強く、まあウーマン・リブなんかもアメリカで非常に力が強かったんですが、アメリカ女性のキャリアというものすごく、自分たちが不当に扱われていることに対する抗議の仕方というようなものに圧倒されて、私は生まれて初めてアメリカへ行ったんですが、非常に刺激を受けて帰ってまいりました。

その時に、私は、戦争中の勉強のせいにするわけじゃないんですが英語は全然できませんで、英語のできる人にもいつもしがみついていたんです。あるとき迷子になりました、ヒルトンホテルの中のある一室に迷子になって入っちゃったんですね。そこはアメリカのAWRTの幹事と言うか偉い役員ばかりの部屋だったんです。私は抜け出そうにも抜け出せなくて、彼女たちに何かお話をしなければならいんですが、ものすごい片言の英語で、何かコミュニケーションしなければならいという気持ちでいっぱいでした。その当時、米中接近と言いますか、中国とアメリカが非常に仲良くしてピンポン外交とかそういう時期だったものですから……私は、ご紹介にあつたように、一九五七年、昭和三十二年に里帰り婦人の一時引揚げ取材ということで中国へ特派員で行きまして周恩来に会ったりしたものですから、「私中国行ったことあるよ」式に言ったわけです。そうしたらおばさまたち

がワーツと集まって来まして、「周恩来はどういう人か」とかいろいろ聞かれて、私も周恩来はどういう人だというふうな英語は言えませんが、必ずアメリカへ行ったら中国のことは聞かれるだろうと思ひまして、私はなぜ中国へ特派員で行ったかということを英語のできる人に「中国で命を助けてもらうためにたくさんの人が中国人と結婚した。その中国人との間にできた子どもが一時里帰りするための一時引揚げ取材のために私が行った」というようなことを詳しく書いたタイプに打ってもらった紙を持って来てたんですが、その時は迷子になってましたからその紙を持ってないわけですね。それで、詳しい話はできませんし、何か彼女たちとコミュニケーションを交わそうと思って、私の妹がイギリス人と結婚していることを話しました。「でもどうして子どもはいないのだ」と言つから、「妹は先天性の心臓病だから子どもはできない。でも妹の幸せは私の幸せ」とまあ英語で言つたつもりなんです。そうしたら、「お前はいい子だ」とそのおばさまたちがチュッチュしてくるわけです(笑)。それで、私は何かボーッととなつてしまつてその部屋を出たんですが、翌日の朝、朝食会で見ましたら、その方たちが私にひどく親しく、昨日話した女の子だなどというふうな形で挨拶されるんです。それで、私たちの仲間は、「どうして辻さんあの人たちを知っているの」と言つから、「あなたたちが私を置いて行つて迷子になつて行つた部屋のおばさまたちよ」と言ひましたら、「あら、あの人たちはAWRTで一番偉い幹事ばかりよ」と言ひまして、もうびっくりしたんですが、「ああそうだ、昨日言えなかったことは伝えなければいけない」と思ひまして、たぶん朝食会ではそのおばさまたちと会うだろうと思つて、私が中国へ行った理由を英語で書いた紙を持つて行つてましたので、「私が昨日言えなかったことは、こういう理由で中国へ行つたんです」と言つふうに回しましたら、おばさまたちがその紙をずっと回して、「ああこういうわけで彼女は中国へ行つてたらしいな」ということで、またその朝食の席上で私がチュッチュされたものですから、もうすぐみんなの嫉妬を呼んで(笑)「あなたは英語が一番できないと言つてたのにどうしてあんな偉い人と話せたんだ」なんてずいぶん後までからかわれました。

でもその時に感じたのは、アメリカでも女の地位がけつして放送界においても高くなって、何十年という仕事をしながらちつともこの人の地位を上げないではないかというふうな、母親大会の時のようにマイクの前に質問者がいっぱい並ぶんですけれども、抗議をしている女の人の厳しい表情とか、そういうきちつと言つべ

きことは言うというような態度に私はたいへん感動いたしました。私は、その時に働き出してから十七年のキャリアでございましたから、かなりのキャリアがあると思っていたのですが、二十年、三十年と働いているアメリカ婦人がいっぱい、六十歳、七十歳ぐらいの方もたくさん出ていらっしゃるんです。私は、アメリカに行ってもほんとうのキャリアウーマンというのを見た思いがいたします。その後AWRTの三十周年というのがあり、一年にもアメリカへ行っただんですが、一番感激したのは、私が迷子になったときに会ったそのおばさまとか、サンフランシスコの放送局にいた相当年配の課長クラスだった方たちにお会いすることができたことです。十年たってもまだ現役で働いている人たちに、そして十年前に通訳してくれた日本女性の方にも連絡をとって、ニューヨークで再会することができました。

◆ 後輩をふやすための活動も

そういう形で、ラジオ・テレビの中でのネットワークづくりというのを考え、〈日本婦人放送者懇談会〉というのを、何人かの友達とともにつくったわけです。今はその〈日本婦人放送者懇談会〉は東京の局が中心ですけれども、地方局の人も何人か入っていて、放送関係で功績と言うか、いちじるしい仕事をした人に、年一回「SJ大賞」と言う〈日本婦人懇談会〉の頭文字をとった賞を差し上げています。橋田寿賀子さんなんかは、NHKの放送文化賞をおもらいになる前に私たちが差し上げたし、その次が黒柳徹子さんとか兼高かおるさん、それから澤地久枝さん、この間はアグネス・チャンさんに差し上げましたが、その方たちが一緒に、「私がしてきた仕事が女の人たちに認められた。女の人たちからこういう賞をいただくのはとても嬉しい」と言ってくれました。そういうテレビの表面に出る方だけじゃなくて、われわれの仲間のプロデューサー、ディレクター、それからアナウンサーをはじめとして地道に仕事をしてきた人にも「SJ賞」という形で、お金ではなくてほんとにトロフィーだけでも差し上げています。

そのSJ大賞やSJ賞をあげることのほかに、女子学生のためのマスコミ案内というのを数年前から始めました。三十四、五年も働いていますと、放送の仕事の中でも非常に女性の地位が変わってまいりまして、女子学生、

四年制の大学、大学院卒業生の中で放送局に入りたいという人はとても多いんですね。そういう人たちは、私たち何十年も働いている先輩の、別に苦労話というのじゃないんですけれども、「放送局に働くところという困難があるからそれを覚悟して来なきゃだめよ」という一種体験談みたいなものをお話しして、その後質疑応答するというような会を一年に一回持つようにしています。この女子学生のためのマスコミ案内の第一回で来たのがNHKの久能木あゆみさんです。久能木さんは、結婚されて黒田あゆみさんになっています。私たちは、後に続く人を信ずるからこういう会をやったわけですが、そういう人たちの中からマスコミへ入って来て、第一線で仕事をやってくださる仲間ができたということで、〈日本婦人放送者懇談会〉をつくってよかったと思いました。

◆ 仕事で結ばれた女縁

さて、ただいままでのところは放送関係の中でのネットワークづくりというお話をしたんですけれども、私は、先ほどご紹介があったように、仕事をしていく中でたくさんの方と出会い、その方たちとの縁が自分の今日の生活、生きていくことの支えになっているということではなとうにこの仕事を選んでよかったと思っています。一九五四年、昭和二十九年の炭鉱不況の時に本社で作りましたキャンペーン番組の『飢えるボタ山の子ら』というのを、これは全国的組織で放送しなきゃいけないと思って、私は、全国十九局ネットでこのキャンペーン番組を放送したんです。そしたら、「この放送を泣いて聴きました」と言ってお電話をかけてくださったのが、富本一枝さんです。ご承知のように平塚らいてうさんなんかといっしょに雑誌『青鞥』で活躍された方で、青鞥の当時は尾竹紅吉というペンネームでしたけれども、後に陶芸家の富本憲吉さんの奥さんになられた方ですが、そういう方に放送を聴いていただいたということで出会うことができ、私の生涯にとって忘れられないすばらしい方にめぐりあえました。そのころは、ラジオの時代で、私は、『女性のおゆみ』という女性解放史をドラマタイズしたものを放送しておりました。それも〈婦人民主クラブ〉時代の先輩の林小枝子さんというライターの人と組んで、何かNHKではできないものを民放でやろうということで女性解放史をドラマタイズしてやったんですが、その中で「青鞥の女たち」をやるとき、まだ当時青鞥の半分ぐらいの方はお元気でいらっしやいましたから、

平塚らいてうさんはじめた皆さんの青鞥に活躍した方たちのお話を生き証言として伺うことができたんです。

そういう中で、富本一枝さんたちの後に『青鞥』の編集をやった伊藤野枝さん……「伊藤野枝さんがどんなにすばらしい女性であったか、もう目がキラキラしてとっても野性的で、本当にすばらしい女の人だったのよ。辻さんは九州の放送局だったら、野枝さんの生まれた糸島とかそういうところへ行くところあるでしょうから」と富本さんにずっとお話を伺っていた野枝さん、その伊藤野枝さんの三女の伊藤ルイさんと、その後また番組で出会うことになるわけです。伊藤ルイさんは、『ルイズーその絆は』という番組でご紹介しましたけれども、今、すばらしい活動をされていて、日本全国を昨日沖縄から帰って来たと思ったら今日はまた大分へ行くというような活動をされながら、少しも気張らなくて地道に息の長い活動をされている方ですが、私は、女の歴史の手渡しと言いますか、そういうことを仕事の中でできてきたこと、それと富本さんに出会えて、富本さんから聞いていた伊藤野枝さんのお子さんのルイさんとまた出会って、福岡でルイさんを励ましながら活動のお手伝いができること、……ほんとうに不思議な縁というものを感じます。

それから、先ほどご紹介のありました石牟礼道子さんですが、これはRKB毎日の木村栄文というたいへん優れたディレクターが『苦海浄土』というドキュメンタリーを作りまして、その時にテレビのために石牟礼さんが『詩篇苦海浄土』ということで一種の書き下ろしをしてくださったわけです。それで、番組を作るのにもたいへん時間がかかりました。民放と言ってもなかなかこういう番組はスポンサーが付かないし、経費がありませんから、石牟礼さんはずっと旅館にお泊めすることができないということと、私の二DKの団地に合計二十日間ぐらい石牟礼さんをお泊めして番組を作りました。やっぱり寝起きを共にするといいですよ、生活と共にすると、ほんとに人間性というものが丸ごと膚で触れますから、そういう経験をさせていただいたということで石牟礼道子さんとも非常に親しくさせていただきました。とても体の弱いかたで、視力のおとろえたご自分の目をかばって、「辻さん、ニンジンが目にはいいのよ」とおっしゃって、もうすぐたくさんさんのニンジンをバターで炒めて召し上がるのです。ですから、私も、いやでもニンジンが好きになりました。

そういう石牟礼さんとの何日かの生活を通して、水俣の患者さんたちとももちろん知り合いになりましたし、ユージン・スミス夫妻、アイリーン・スミスさんとユージン・スミスさんが水俣に行っていたときも、番組にも出て

いただいたんですが、知り合いになりました。ユージン・スミス氏は、ご承知のように沖縄で傷を受けていますから、その傷の痛みを忘れるためにウイスキーを飲まずにいられない。トリスのビンがわぁっと並んでいるんです、お部屋へ行くと。そのことからだもずいぶん痛められていたと思いますが、でも、とてもいい写真をいっぱいお撮りになっていました。そして私がその後「有職婦人クラブ」の世界大会でアルゼンチンへ行ったときに皆さまもごらんになったことがあるかもしれませんが、上村香子ちゃんという胎児性水俣病のお子さんを抱えてお母さんがお風呂に入れている写真ですね。あれを「辻さんの役に立つのなら」と言って焼いてくださいますして、その写真をアルゼンチンで、世界の人に水俣のことを訴えようと思って持って行ったりしました。

そのユージン・スミスさんがアメリカに帰るといときに、私はもうスミスさんとは二度と会えないだろうと思います。アメリカへ行っても長くないというか、ご病気が進んでいましたから。それで、羽田に送りに行きました。そして、羽田で吉田ルイ子さんというフォト・ジャーナリストを紹介してくださいまして、その後また吉田ルイ子さんにも私の作った番組、『女の性を考える』というたいへん大きなトーク番組ですけれども、そういう番組にも、ルイ子さんに来ていただいたりしました。

それから、一九五七年に中国に特派員で行ったときに、北京から日本向けの放送をしましたが、そのとき世話になった北京放送の陣真さんという女性ディレクター、すばらしく美しい日本語を話す方で、日本向けの放送なんかやってらっしゃるんですが、やっぱり文化大革命のときはたいへんなご苦労なさって、そういう方とも三年ほど前、二十七年ぶりに再会しました。向こうで帰るに帰られなかった残留婦人の人と二十五年目に再会して、それは私も出演して『二十五年目の再会』という番組に作りました。

そういう形で、私は、何かしら番組を作って知り合いになった人、知り合いになった人、の縁で、今まで仕事ができているという感じがいたします。

◆ 思いがけない転職で、おもいがけない縁が……

こうして、歴史の中で女の人たちがどんなふうに変わってきたかということも仕事の上から見ましたし、最

後にはずっと婦人向けのワイドショーのプロデューサーなんかをやらされたんですが、この番組の中で、私は、かつて長野でモチベーション・リサーチをしたことを思い出し、家に行って、奥さんたちとちゃぶ台ごはんを食べながら「テレビにどういうことを望みますか」という話をしながらその番組の内容を作ってきたんです。それで、ベアミセスといって二人ずつ奥さんにテレビに毎日出てもらうとか、司会の一人に主婦の人を登用するとかいうようなことをやりました。

その番組は、女の人たちが観てくれたから、二桁の、一二パーセントとかの視聴率になりました。朝の番組です。二桁の視聴率というのはなかなか取れないんですが、その二桁の視聴率が取れたときにパッと私はその番組をはずされて子会社に出向させられました。子会社というのは「RKBトラベルサービス」というところで、旅行をやれというわけです。プロデューサーで得た顔で客を集めて、「あなたは、何だかよくアメリカとか海外へ行ってるから海外旅行するように」と言うのです。旅行会社なんていうのはそんな甘いもんじゃないんですが、一種の配転です。そんな中でも、私は、横になるというのはあまり好きじゃありませんから、何かうちの商品になるものはないだろうかと思って、「台湾食べ歩きツアー」という雑誌のツアーがありましたので、それに応募して、それに行かせてくれ、そうすると「RKB食べ歩きツアー」という商品を作るからと言ったんですが、「会社ではそんな金は出せない」と。それで、旅行会社ですのに、私は、二十三万五千円というお金をまるまる自分で払って、休暇をもらってそのツアーに行きました。でも、そのツアーに行きましたおかげで、また人生の後半たいへんな楽しみを分けていただくことになった、ほんとうにすばらしい方、田辺聖子さんご夫妻にそこで出会いました。十二年前のことです。

ですから、そういうふうな形で、番組だけではありませんけれども、会社の中の仕事の中でも、行ったところいろいろな人に……まあ田辺さんが有名人だからということではなくて、女性としてもうほんとうにすばらしい方です。彼女は昭和三年の早生まれ、私は二年の遅生まれで、同じ時期に戦後を過ごして、女の人の地位と言うか女の人の移り変わりをいっしょに見て憤慨したり怒ったというような、同世代の田辺聖子さんと出会えたということは、子会社に出てそういう旅行なんかに行かなければ出会えなかったことですし、そういう意味で私は、自分の人生の中でとてもいい縁の触れ合いができたことを、いまだに感謝しています。

田辺さんはいっしょに旅行に誘っていただいたり、写真を撮りましたが、あの忙しい方が実にすばらしいアルバムを作られるんです。写真の見出しに、いろいろな週刊誌とか新聞の見出しを切り抜いて横に張ってアルバムをお作りになるんですが、そのいっしょに旅行に行った写真の見出しに「『いっしょに老人ホームに入ろうね』と言える友達がいる幸せ」なんていうのを書いてあるところをばつと切り抜いて私たちの写真の横に張ってくださったりするんですね。そういう何か……いつでもこのことがあったらあの人に話したい、このことは第一番にあの人に話したい、と言えるようなお友達、田辺さんを、その旅行で知り合ったというのは私はたいへん幸せだったと思っています。

この間、古い機関誌を見てましたら、「女三人寄れば」と言う見出しで「女性プロデューサーよ手をつなごう」というような、昔民間放送の機関誌に自分が寄稿したのが見つかりました。それは、男の人たちに「土曜会」を潰されてくやしけれども、女たちはまだこういうふう頑張っているよという一種の自分のデモンストレーション的に書いた記事でしたけれども、そういう記事もその当時は『民間放送』も載せてくれてたんです。でも、非常に残念なことには、私たちがいくら声をかなり頑張っても、会社が全然女のディレクター、プロデューサーを、まあアナウンサーだけは採りましたけれども、一時ほとんど採らなかったんですね。さっきお話ししたように、最近では女性プロデューサー、ディレクター、それからリポーターの活躍がともございますから、放送局も女の人を採るようになったし、また受ける人も、さっきお話ししたような私たちが主催する会なんかで一所懸命研究して積極的に入ってきてくださるというように、世の中が少しずつ変わってきました。私が一九四七年、昭和二十二年におかっぱ姿で『婦人民主新聞』の編集をしていたころから見るとほんとうに世の中は変わったと思います。

今日は風邪をこじらせて、とても聞き苦しいまとまりのないお話で恐縮でしたが、後、すばらしい先生方のお話がありますので、これで私の話は一応終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございます。(拍手)

司会 一つ一つの出会い、縁を大切にしながら、私たちの生活空間を広げていらした貴重なご体験を、しみじみとうかがわせていただきました。どうもありがとうございます。

無縁の女 網野善彦さん

司会 続きまして、網野先生の「無縁の女」を伺いたいと思います。〈東海〉の浅野美和子さんが網野先生のご紹介をさせていただきます。

浅野美和子 〈あごら東海〉の浅野でございます。網野善彦氏のご紹介をさせていただきます。

網野先生は、ただいま神奈川大学の教授でいらっしゃるんですけども、以前は名古屋大学にお勤めでいらっしやいました。ちょっと私事にわたりますが、私は、十一年ほど前に研究室に入れていただきまして網野先生のご指導を仰ぐことになりました。その時に〈あごら〉に入っただけだったものですから、〈あごら〉のお話をして雑誌をお見せしたところが、「ぜひ取りたい」というふうにおっしゃって、それでさっそく会員になっていただくことになりました。「呼びかけ人は斎藤千代さんです」というふうに申し上げたところ、「大学時代の同級生だ」というふうにおっしゃって、「それは、それは……」とこれまたびっくりしたことの一つでございました。それ以来、網野先生は〈あごら〉の数少ない男性会員でいらっしやいまして、今日は「無縁」という題なんです、〈あごら〉とは非常に縁の深い有縁の方でいらっしやいます。

網野先生のご本で非常に有名な『無縁・公界・楽』というご著書がございます。この本は、歴史学界に非常に大きな反響を巻き起こしまして、この本を知らなくては歴史は語れないというぐあいになつております。中身はここではご紹介する時間がありませんが、これまでの発展史観を否定はなさいませんが、それにプラスしてもう一つ新しい考え方の枠組みを提供なさったもので、私も少しばかりものを書きますけれども、大いにその考え方を利用させていただいております。

お若いころに「常民文化研究所」というところに関係されまして、漁民とか職人といったような農業をやらな人たちの生活にずっと注目をされて、その人たちが、先生のおっしゃる公界という場所にあつて、非常に自由

と平和を楽しみながら、しかし究極的には天皇につながっているというようなことをずっとおっしゃっておられます。そういうことを書かれた本が、たとえば『日本中世の非農業民と天皇』でありますとか、最近のものでは『異形の王権』などが出ております。歴史を非常に具体的に細かく見て、精彩のあるものにしていくという方法を採ってらっしゃいまして、いわゆる社会史というものの先鞭をつけておられます。

「無縁」ということは何かマイナスのイメージがありますけれども、その逆で、非常に可能性に満ちたことであるということをごこれからたぶんお話しただけではないかと思えます。では先生、お願いいたします。

網野善彦 ただいまご紹介いただきました網野でございます。

いまお話にございました、この会に尽力なさっている斎藤さんと大学時代ほぼ同じ時期を過ごしましたので、そのご縁で今日のへあごろへ十五周年というたいへん晴れがましい会に何うことになったわけでございます。

ただいま辻さんから、最近の女性についての、感慨深いお話がございましたが、私がこれからお話し申し上げますのは、時代がたいへん古くなりまして、中世、近代以前の女性のあり方について、若干考えておりますところをお話ししようと思つて用意してまいりました。その意味で話がだいぶ古めかしくなると思いますがご了承いただきたいと思います。

◆ルイス・フロイスの驚愕

皆さまよくご存じのとおり、十六世紀のころ、ポルトガルやイスパニアの宣教師が日本にたくさんやってまいります。その中の一人に、たいへん著名な、ルイス・フロイスという、日本に長い間住んで日本で死んだ宣教師がいますが、この人は、長い間の日本での生活を通じて、日本の風俗、習慣、あるいは日本の社会のあり方とヨーロッパの風俗、習慣のあり方との違いについて、非常に興味深く思ったことをまとめて、『日本覚書』（『日欧文化比較』）を書いております。その中に女性に關してもいろいろなことが書かれておりますけれども、私は、不勉強なので、わりあい最近これを読みまして、実はたいへんびっくりしてしまったのであります。フロイスは、

キリスト教徒の立場から、比較的客観的に日本女性のあり方についてのコメントをいろいろしているのですが、まず真つ先に、「日本の女性は、処女の純潔を少しも重んじない」ということがでてくる。たとえそれを欠いても結婚するに当たって何らそれは障害にならないし、また名譽も全く失わない。これはヨーロッパとはまるで違つと、フロイスは言っております。それからまた「ヨーロッパでは財産は夫婦の共同のものとなっているけれども日本では各人が自分のものを持っており、ときには妻が、夫に対して、自分の金を高い利息を付けて貸しつける」とも書いてあるのであります。どうもたいへん恐ろしい妻ということになりますけれども。さらに、ヨーロッパでは妻を離別するということは、夫にとつても不名譽、妻にとつても最大の不名譽なんだけれども、「日本では意のままにいつでも離婚をする」と。しかも、「離婚をした女性は、それによつて再婚に当たつて何らの障害もないし名譽も失わない」とも言っており、「日本においては、しばしば妻が夫を離別するということがある」ともフロイスは書いております。これを読んだとき、果たしてこのフロイスの言っていることはほんとうであらうかと私は疑つたのですが、これから若干申し上げますけれども、この疑いは私の偏見だったようであります、どうもこれらのことはまぎれもない事実だったと私は思うのです。

また、フロイスの話の中でおもしろいと思ひましたのは、「日本では娘たちが両親に何の断わりもなく家を出かけて何日も留守にする。妻の場合も夫に何ら断わらないで旅に出かけてこれまた何日も留守をして、それがまた全然問題にならない」ということが出てまいります。女性は、好きな時に好きな所へ行く自由を持っていたようなのであります。

さらに非常にびっくりしたことは、「日本では子どもをおろすことはきわめて普通のこととて、二十回もおろした女性がある、日本の女性は、赤子を育てていくことができないと思つとみんな喉の上に足を乗せて殺してしまふ」……たいへん残酷な、という感じを覚えますけれども、そういうこともフロイスは書いていますのであります。さらに加えますと、「日本では尼さんたちの僧院、お寺は、みな淫売婦の街になっている」とも言っています。後で申しますように、江戸時代に間引きが行なわれたのは事実ですし、熊野比丘尼もいるのですから、このようなことは当然あり得ると思ひますけれども、おそらくこれはヨーロッパ人の偏見なのではないかとお考えになる方も少なからずおいでになるでありませんよう。

◆ 大きな自由を持っていた昔の日本の女性

たしかにフロイスは、日本の女性のあり方には批判的なのですが、一方では「ヨーロッパの女性はほとんど字を書かないけれども、日本の女性、特に身分の高い女性は、文字を書くことができないと、非常に名譽を欠くことになる」とも書いておりますし、そのほか風俗に関してはかなりの確な叙述をしています。先ほど申しましたように、私は、最初これはほんとうのことを書いているのだろうか、かなりの史料批判をしないと信じられないのではないかと、とも考えたのですが、それ以後、このフロイスの記事に関心を持っていろいろの史料を見たり本を読んだりしておりますと、どうもフロイスの語っておりますこの十六世紀ごろの日本の女性のあり方は、かなりの確で正確なものではないかと、最近では考えるようになったのです。

たとえば、女性が男性を、妻が夫を離婚することがしばしばあるという問題について考えてみます。これは江戸時代、夫のみが離婚する権利を持っていた、夫の専権離婚が当時の離婚のあり方としてきた、今まで学会の中でも支配的だった見方と大いに異なることになります。たしかにいわゆる「三下り半」という離婚状はすべて男が出しておりますので、夫だけしか離婚の権利がなかったという理解がそこから生まれてきていたのでありますが、最近平凡社から高木 侃さんの『三くだり半』という本が出まして、この見方は間違いだったことが明らかになりました。高木さんは離婚状をたくさんお集めになって、総合的な研究をなさったわけですが、それによりますと、実は夫がやむなく離婚状を書いている場合がかなりある。離婚状を書くことは夫の権利だけでなく義務でもあった。明らかに妻の側からの離婚の要求を夫が受け入れざるを得なかった場合でも、形式上は夫が離婚状を書かなくてはならない、そういうケースが江戸時代にたくさんあったのだということを高木さんは明らかにしておられます。つまり、離婚状は、再婚するためには男性のほうも女性のほうも持っているなければならない。それがないと再婚はできないので、夫は離婚状を書く義務を負っていたと解すべきではないかと指摘していらっしゃるわけであります。そうすると先ほどのフロイスの指摘は、それよりも時代がさかのぼっておりますから、ほぼ間違いない正確なものではないかと思われまします。高木さんは、「明治初年のころの統計では離婚率がかなり高い。それが明治以後にしだいに減っていく。この傾向をみると江戸時代の離婚率の高さはかなり高いのではないか」と

も言っておられます。ですからわれわれが思っているより、江戸時代の女性は、「自由」であった、夫に対してはかなり自己を主張していたということが言えるようです。もっとも、先ほど申しましたように、夫のみが離縁状を書けるという、江戸幕府の法的な枠がある。この法的な枠、制度だけを追いかけてみますと、家父長権のきわめて強い社会を予測せざるを得なくなるのですが、実態はどうもかなり違っているということが、大きな問題としてそこに出てくるのではないかと思います。

◆ 自由だった男女の交際

それから、先ほど申しましたように、日本の女性は、処女性を全く重んじないとフロイスは言っていますが、これを、江戸時代の古文書の上から証明することは非常にむずかしいことです。しかし、フロイスよりすこしのちのコリヤードの『懺悔録』にてくる女性の話を見ると、これもほんとうではないかと思われましますし、先ほどご紹介いただいた常民文化研究所の大先輩宮本常一さんの『忘れられた日本人』という興味深い本を読んでもみましても、同様な感想を持たざるをえません。フロイスは、意外に事実を的確に指摘しているのではないかと思わざるを得ない話がたくさんできます。たとえば宮本さんの本の中に出てくる「土佐源氏」などもその一例になりましょうし、最近岡山県の方から、高度成長期に入る前ぐらいまでは、いわゆる夜這いの習慣はまだ行なわれていたという話をうかがったことがあります。また宮本さんはお祭りの日や縁日、つまり特別の時間、特別の空間で、戦後もまだ、古代に「歌垣」と言われた習俗、つまりその時間その場では世俗の関係がいっさい切れて、男は一人の男、女性は一人の女となって、自由な男女の交渉が行なわれたということを先ほどの本の中に書いておられますし、先ほど申しました岡山県の方も、高度成長期まで同じようなことが行なわれていたと話しておられました。

さらにまた、江戸時代以前には、神社やお寺に御籠（おこもり）をすることが行なわれており、中世ではこういう寺院・神社への参籠は、たいへん熱心に行なわれました。絵巻物を見えますと、その場面では男女が共に板などを枕にして寝ております。もちろん明かりはついておりません。真っ暗だったわけですから、この空間も先

ほどと同じような意味を持っていたのではないかと思うのであります。

実際、鎌倉時代後期の法令でこの問題がとりあげられており、天皇の宣旨で、石清水八幡宮に対して、参籠の際に男女を混雑せしめてはならないということを通達した事実がありますので、当然その逆のことが広く行なわれていたものと考えられます。寺社の参籠の場もやはり神仏の下にあり、そこでは世俗の縁が切れる。だから先ほどの祭りなどと同様の男女の自由な交際が起こりえたので、ときどき神仏からさずかった子どもなどという話がでてくるのはこのような背景があったからなのだと思います。こういう状況をフロイスは、何かの形で知った上で、先ほどのような記述をしたのではないかと思いますので、フロイスの指摘を誇張とはいえないと思うのであります。

◆ 自由な旅、自由な「めとり」

それから、旅の問題についてフロイスは、娘が親に断わらずに旅に出かける、あるいは妻が夫に何も知らせずに旅に出ると言っておりますけれども、これも事実と見られます。宮本さんが触れていらっしゃるように、女性が一人で家出して奉公に行くとか、二、三人の女性だけで、ほとんどお金を持たないで旅をするということは盛んに行なわれていたようですし、抜け詣りなどを考えれば、これは十分に江戸時代にさかのぼりうると思います。中世の絵巻物を見ましても、市女笠という顔を隠す深い笠をかぶり、かけだすきをしてわらじを履いて旅をする女性の姿が、時には全く一人の旅ではないかと予測させるような場合をふくめて、見ることができます。説話の中でも、赤子をつれて山中を一人で旅する女性がでてくるのです。どうも女性の旅も日本の社会では非常に活発に、しかも自由に行なわれていたことを事実即して確認できるように思われますので、この点でも、フロイスの指摘は、決して間違いではない、むしろ的確に事実を指摘していると考えられます。

そういう女性の旅の際には当然さまざまな危険があり得たと思うので、実際、いわゆる「女捕(めとり)」「辻捕」という行為が行なわれたことが知られており、鎌倉幕府の法令である御成敗式目の中にも、こういう行為をしてはならないという禁令が出てきますので、こういう行為がしばしば行なわれていたことは確実です。ところ

が御成敗式目の規定は、たいへん齒切れが悪い。あまり処罰は重くないし、そのうえ、法師、あまり地位の高い僧侶の場合には情狀酌量をする余地があるなどというよく訳のわからない但し書きがついているのであります。そしてこのように幕府が禁令を出しているにもかかわらず、社会的には「女捕」は天下公許である、供も連れず輿にも乗らず、一人で旅をする女性を「女捕」ることは「天下の御許し」世の中の公認であるという考え方があったようなのです。この言葉が『物くさ太郎』という御伽草子の中に出てくることはそれをよく物語っております。道を歩く女性がさきほどのようなスタイルをしているのは、それ自体他の者がたやすく手をかけてはならないことを服装を通じて示しているのであります。旅姿は、神仏のお参りに行く人としてすでに神仏の世界にしていることを示していると考えられますので、そうたやすく手をかけることはできなかったのではないかと思います。にもかかわらず、このような一方の社会的な慣習が、室町時代に日本の社会にあったというのは、道で起こったことはその場だけですべて処理をする、道での問題を外の世界には持ち出さない、という古くからあった慣習と関わりがあると思うのです。道もまた神仏の前の世界と同じように世俗の縁の切れた世界だったのだと思います。それゆえ、道で起こった「女捕」についても、その場だけのことで処理されるという慣習を、社会が認めていたのではないかと思うのです。しかしこう考えてきくと、日本の前近代の社会の男女の關係は、われわれの思っていたよりもはるかに自由なものであったと考えざるを得なくなってしまうります。

それから、また子どもをおろす、あるいは殺す、という問題ですが、先ほどこよっと間引きのことを申し上げましたけれども、私は、どうも単純に、貧苦のためのみによるのではないと思うのです。もちろんそういうことも大いにあると思いますが、おそらく貧しいためだけにこういうことが行なわれたのではないだろうと考えております。これはむしろ当時の女性のきわめて現実的な感覚の中から行なわれた行為である一面があったのではないかと思うのです。

実は、この話を、私が今勤めております神奈川大学の短期大学部で話をしたことがあります。教えておりますのはほとんど女性でございますけれども、こういう話をしながら私は「思いの外に」とか「いままで考えていたよりも」という言い方で話しているうちに、ふと気がついた。現代の女性の若い方々が、果たしてこれを「思いの外に」と受け止めるのであらうかと思ったのです(笑)。これを「意外に」と思うのは私も時代後れな「おじん

になってしまったことの明瞭な現れであるような気がしまして(笑)、「君たちはどう思う」と聞いてみましたが、にやにや笑って答えてくれませんでした。

◆ キリスト教的倫理の束縛がなかった日本

それはともかく、ここからいろいろな問題が考えられます。

一つは、先ほど申しましたように、日本の前近代の社会の男女の関係が、常識的に考えられているよりもはるかに自由であったという点ではありますが、フロイスの書き方ですと、日本の女性はその命をも大事にしないし、きわめてルーズであると言いたげな口調であります。キリスト教徒であるフロイスは、その宗教的な倫理からこうした女性のあり方を嫌悪し、批判的に記していることは間違いないと思います。しかし逆にいって、宗教的な倫理、キリスト教の倫理によって規制されなかったがゆえに、日本の社会ではこのような男女の自由な関係が保たれたとも言えます。日本の社会でも親の権利がたいへん強く、男女共に不本意な結婚をすることは大いにあり得たであろうと思いますので、このような自由なあり方を通して、一生の伴侶とするに悔いのない人を男女のおのに見いだすことができたのかもしれませんが。墮胎にしましても、現実的な女性の対処の仕方とも考えられるので、一般に「悪」と言い切ることはできないと思います。ですから、フロイスの評価に従う必要はないのですが、ここに事実として日本の社会にキリスト教のような宗教、——人びとの生活倫理にまで規制を及ぼし得るような宗教がなかったということが一つの大問題として浮かび上がってくることはなっています。

ご承知のようにフロイスたちの布教によって十六世紀の後半から十七世紀の前半にかけてキリシタンが非常に増えるわけですが、強力な俗権力、江戸幕府によってこれは徹底的に弾圧されます。またキリスト教と同じような役割を果たしたかもしれない一向宗や浄土真宗、日蓮宗も、また俗権力によって徹底的な弾圧を被って、ごく一部に隠れキリシタンとか隠れ念仏のような形で小さな集団が残るだけにまで押し潰されてしまう。このことが日本の社会に及ぼした影響はきわめて大きく、現代の社会にも通ずる重要な問題がそこにあると思います。このように、なぜ日本に宗教が大きな社会的な力を持ちえなかったのか、なぜ俗権力によって弾圧されてし

まうのか、という問題は、なぜ日本の社会において男女の関係が自由なままに続き得たのかという問題とその根を同じくしているのだと思います。これは道徳的あるいは感情的な判断によるのではなくて、実証的、理論的に解決をしていかなければならない問題だと思うのですが、あまりにも問題が大きいのでここではこれ以上立ち入らず、フロイスの時代をさかのぼって、十四世紀以前、鎌倉時代から南北朝のころまでの女性のあり方についてフロイスの描いた女性のあり方を念頭におきつつお話し申し上げてみたいと思います。

◆ 中世の女性は、さらに大きな力と自由があった

鎌倉時代の女性の実態を調べてみますと、これまた予想をはるかにこえてたくさん、女性が古文書の中に姿を現してまいります。私が学生時代、最初に勉強した若狭国（福井県）太良荘——全国の荘園の中で一番たくさん古文書が伝来している荘園を取り上げて見ましたが、実にさまざまな女性の姿が見られます。まずこの荘園の開発領主はその所領を祖母から譲ってもらっている。平安時代の終わりのころの人で出羽房雲巖という人なのですが、その人の子どものころ、太良荘の現地で育てた乳母が文書に出てまいります。この人は鎌倉幕府の御家人になっていくのですが、この人をふくむ御家人の名簿が鎌倉時代のごく初期に作られますが、その中には雲巖と名前を並べまして、宮川武者所後家、藤原氏という女性が姿を現します。後家ですけれども、この女性は鎌倉幕府の御家人なので、これによって、女性で御家人になった人もいたことは間違いないと思います。また、この雲巖は、後におちぶれまして、若狭国の最有力の御家人の保護を受けることになりましたが、その所領の一つである太良荘の荘官——公文に任命されたのは、雲巖を保護した中原時国の母親中村尼という女性であります。ですから女性の荘官もいたわけです。また雲巖の他の所領で、末武名という名田について雲巖の死後長期にわたる所領争論が展開されますが、その主役になったのは雲巖の家来の娘、藤原氏女と、先ほど申しました最有力の御家人の中原時国の孫娘中原氏女で、両方とも女性が当事者となって、御家人の所領である末武名を争っております。いずれも一時的にはこの名女主職に任命されておりますので、もちろん女性の名主もいたことになります。また、この荘園は京都の東寺の荘園になりますが、それ以後の預所、荘園領主側の管理者は当初は定宴という坊さんだった

のですが、その後、この預所の地位は女性が継ぐべき職であるということになり、鎌倉中期から南北朝時代まで太良荘の預所になったのは、一貫して女性でありました。

この女性の預所は、けっして単純な名義だけの預所ではなかったもので、なかには年貢の上がりが悪いのたいへん腹を立てまして、百姓たちに興を担がせ、現地に乗り込んで行って年貢や公事をびしびし取り立てて、百姓から猛烈に糾弾される女性も現れてくるのです。これによって実体を持った預所であったことがよくわかります。しかもこれらの事件に関連して、女性たちが書いた平仮名の書状が東寺の文書の中にかなりの数伝来しております。先ほどのフロイスは、日本では高貴な女性、地位の高い女性が文字を書くと言っておりますけれども、非御家人、名主クラスの女性である藤原氏女もちゃんと平仮名で文字を書いておりますし、少なくとも侍クラスの女性たちは、すでに十三世紀の後半には平仮名でかなり自由に書状を書くことができたのではないかと思います。日本の社会の中への文字の普及は、フロイスが述べているよりずっと早く、また深かったと言うことができます。思います。

南北朝時代に入りまして、太良荘では百姓名の名主の中に女性たちがぞろぞろ出る。しかし室町時代になりますと、ほとんど女性の姿が文書の中に出てこなくなってしまう。ここにかんがりの大きな社会的な変化があったと思われませんが、それはあとでふれることとして、ともかくいまあげてきましたように、南北朝時代までの女性、荘園の預所にも現地の荘官にも御家人にも、あるいは百姓名の名主にもなっている。さらに、実は地頭になっっている女性のいることも別の史料で確認できますので、社会のいたる所に女性の活動を見ることができると言ってもよろしいかと思えます。これは、太良荘の例外的現象ではないか、と言われる方もあります。若狭はたしかにそういう国でありまして、若狭国の一宮、二宮の神主の系図は、男系だけではなくて女系もたどっています。最近、先祖のルーツを探ることをおやりになる方がたくさんおいでになりますが、私はこの場合、男系だけではなくて女系も十分たどる必要があると申し上げているのですが、この若狭国の神主の系図は、女系を南北朝時代ごろまではたどっている、全国的に見ても非常に珍しい系図であります。そういう系図を残している国なので、若狭国には特別にフェミニストが多かったのかもしれないということも考えられないこともないのですが。

◆ 家の中核は女性が管理

東日本については保留いたしますけれども、西日本のかんりの地域においては、いろいろな状況から見まして若狭と同じ女性のあり方は広く発見できるのではないかと思います。南北朝ごろまでの、現在残っている田畠や屋敷の譲り状とか、あるいは土地を売買するときに書かれる売買証文売券の差出者や宛て名に女性がかなりの比率で現れてくることから見ても、このようなことがいえると思うのです。

女性が譲与、売買できる財産をこの段階まで持っていたことはこれをみても間違いないので、これも先ほどのフロイスの記述を裏づけるものといえましょう。しかも特にここで注目すべきは、家屋や屋地のような土地の売買・譲与に女性が現れる比率が高いと見られる点で、女性と家との関係は大きい問題となってきました。これは家に縛られた女性という問題とはやや違った意味をもっているのです、あるいはそれにもつながる問題かもしれません。女性が家はいずれにせよきわめて深い関係にあったように思われます。東大の史料編纂所の保立道久さんが、最近の著書『中世の愛と従属』（平凡社）の中で、中世の家屋の中に塗籠という閉ざされた空間がある。現代風に言えば納戸になると思うのですが、そこは家の中できわめて重要な意味を持っており、納戸の神と言われる神がいる場所であったわけです。宮本常一さんは、日本の家屋の中に最も早く入ってきた神は、かまどの神ではなくて納戸の神であろうと言っているように思いますけれども、家を家たらしめる閉ざされた空間であったのだと思います。そこは夫婦の閨房であると同時に、財物、大事な物を収納する部屋でもありまして、家の中における「聖なる場」であったと言いうことができます。つまり家の最も中心的な部分というべき場なのですが、女性は、まさしくその塗籠、納戸の管理者であったのではないかと、保立さんは言っているのです。家女、あるいは家刀自と女性が言われたのはここに理由があるというのです。家の聖地性の中核とでも言うべき場を女性が管理しているわけで、屋地の売券に女性がしばしば姿を現すのもおそらくそのことと関係があるだろうと思うのです。神の世界と俗の世界の境界とも言うべき場を媒介として女性は家に深くかかわりを持っているということができます。

それと関連することですが、倉の管理者には女性が多い。倉を管理して高利貸しをする女性が中世には数多く

見いだせるのです。もちろん高利貸しの中に男性がいなかったわけではありませんけれども、この場合は僧侶が多いのです。この当時の金融、高利貸しは、初穂として神様、仏様に進められ倉にしまつてある神様の物や仏様の物を貸し出す。当然、神や仏にお礼として利息を付けて返すという原理になつていたようです。これは古代の出挙という習慣の流れをくんでおり、私は、金融の出発点は、神物である初穂の貸し出しにあると思うのであります。そうした神物・仏物をしまつておく倉庫の管理者には女性が多い。したがって女性の借上、土倉高利貸しがたくさん姿を現すのはきわめて自然なことなのだと思います。同様に戦争などで危険な場合、女性の手元に物を預けるということが盛んに行なわれる。女性のところなら安全なのです。こう考えると当時の社会では、やはり女性は、神仏にかかわりの深い存在と見られていたのだと思います。つまり性そのものが「聖なるもの」、人の力をこえた自然に結びつく特質を持っていたとされていた、と考えられます。それゆえ、世俗の縁から切れた「無縁性」を持っていたわけで、それゆえに女性は世俗の争い、戦乱の中にあつても平和な管理者になり得たのではないかと思うのであります。

こういう女性の性自体の持つ聖なる特質、神仏に近いともいうべき特質は、旅する女性の場合、より明らかに見ることができます。古代から中世にかけて現れる歩き巫女のような巫女、あるいはうかれ女、遊び女と言われていた遊女につきましてもそのようなことが考えられます。古代や中世の遊女は、けっして近世的な「淫売婦」と賤称されるような人びとではないのであります。フロイスは尼僧院が淫売宿だと言っていますが、この見方を逆転させれば、遊女は神仏につかえる人だったということになるのです。事実古代の遊び女は太宰府のような官庁にかかわりを持っていたようだし、中世の遊女、傀儡、白拍子は、「朝廷に所属する者」と言われていて、朝廷のどこかの官庁に統轄されておりました。遊女たちは番を組んで宮廷の儀式に奉仕をしていたと見られますし、中には神社における祭礼などに奉仕をした人がいたことも十分推定できます。遊女、白拍子、傀儡は天皇の直屬民だったといえるわけで、神仏に直屬した人もいたと思います。中世前期までの天皇はまだ「聖なるもの」という性格を持っておりますので、遊女や白拍子も「聖なる集団」という一面を持っていたとみなくてはなりません。遊女の社会的地位はけっして低くはなかったわけで、天皇や貴族の子どもを産んだり、勅撰和歌集に和歌を採られた人もいたことはよく知られていますし、朝廷の女房たちの世界とも深く結びついていたと考えられます。

◆ 聖なる世界とつながる「無縁」の遊女たち

こういう遊女のあり方を、最近、後藤紀彦さんが見事に明らかにされ、天皇に直属してさまざまな職能を通じて奉仕している供御人と遊女のあり方が非常によく似ていると強調しておられます。

この供御人という集団は、職能民、商工業者や芸能民、農業以外の生業に携わる人びとが多いのですが、こういう人びとの中に、女性の姿をたくさん見いだすことができるのです。早くも八世紀のころから女性の商人や高利貸しが見られる。花売りの女性や仏の銭を貸し出して大いに富を得た女性が出てきますし、十世紀以降には、炭を売る大原女、魚売りの女商人、あるいは桂女と言われる鵜飼の女性たちも鮎売りの商人です。またこんにゃくだとか麩（からこ）などを売る女性の商人、さらには小袖を売る商人などが平安時代の末から鎌倉時代にかけて商人たちの中に見いだされます。しかもその中には正式に供御人という地位を公認された女性も多く見られるのです。男女を問わず供御人と言われる人は、神に直属する神人と同じように、一般の平民とは違って、課税、課役を免除されており、広い範囲に旅をして、交易に携わる人びとだったのでありますが、いずれも「聖なるもの」に結びつくことによって特権を保障された「聖別」された集団でありました。その中に女性をたくさん見いだせるということは、先ほど申しました女性自身の「無縁性」「聖なる性格」と無関係ではないと思うのであります。そしてそういう遍歴する女性たちは、特有な衣装をつけております。白い布で頭を巻くなど、一般の女性の日常とはだいぶ違った衣装をつけております。先ほど申しました旅する女性の姿、こうした職能民の姿とは違っており、むしろ物詣でに行く時の姿とみてよいと思います。こうした旅装束、あるいは遍歴民の女性のつけた衣装は、そういう衣装をつけることによって一般の世俗から離れて「聖なる世界」を歩く女性と見られていたのだろうと思います。

このように、中世において目的はさまざまありますが、旅をする女性は私たちが想像するよりもはるかに多かったことは間違いないところであります。しかも南北朝時代までは、そういう旅、遍歴そのものが神仏などの人ならぬものの力とのつながりによって支えられていた。道路、橋、市場、宿など、旅する人びとが通り、交易を営む場所自体がやはり世俗の縁の及ばない「無縁の場」、聖なる世界とのつながりを持った場だったので、そ

室町時代の 働く女たち

東京国立博物館所蔵
『七十一番職人歌合』より



はたおり (機織)
さかづり (紺掻)
こうかき (紺掻)
いおうり (魚売)
こめうり (米売)

ういう場が中世前期には広く見られたことも女性の旅を容易なものにしていたと思われます。

◆ 南北朝動乱で貴賤が逆転

ところが、南北朝動乱の後、室町時代から戦国時代にかけてマジカルなものと結びついた神仏や天皇の權威は、徹底的に凋落してしまいます。これは日本の社会の權威の配置や構造を大きく変化させ、遍歴する人びとの中の一部、特に聖なるものの權威に依存するところ大であった人びとは、賤視の方向に差別されていくことになります。日本の社会において現代でもなお問題になっております被差別部落の直接の源流は、この時点、室町時代以降と私は考えております。そしてそれと並行して遊女や巫女のような人びとに対する賤視が固定化してきます。このことは、その他の商工業に携わる職能民の女性にも甚大な影響を及ぼしたことは間違いないと思われます。戦国時代のころに作られた職人歌合にはたくさん女性の商人たちが出てまいりますけれども、安土桃山時代のころに作られた洛中洛外図になりますと、女性が店で女主人として活躍していることが明らかな店はだいぶ減ってまいります。むしろこの図には道で客を引く遊女、あるいは道を歩く熊野比丘尼、瞽女、小原女というふうな、どちらかと言えば江戸時代に賤視された女性が描かれるようになってくるので、このあたりで女性の地位全体に大きな社会的な変動が起こったことはまず間違いないと私は思うのであります。

もっとも、先ほど申しましたように、日本の場合、キリスト教のような宗教によって社会生活そのものが厳しく宗教的倫理をもって規制されることがなかったがゆえに、フロイスが述べたような女性の世界は江戸時代になっても潜在的には続いていたと思うので、ときどきそれがちらりちらりと表面に出てまいります。一例だけ申し上げますと、これはいまのところ全国でも唯一例だと思えますが、江戸時代に女性の庄屋が備中国真鍋島に登場します。これはおそらく氷山の一角であろうと思うので、江戸時代になっても法的制度の面は別として、宮本さんが『忘れられた日本人』で展開なさったような「女の世間」が広く社会の中にあつたことは間違いないと私は考えております。

しかし、このように、女性の社会的な地位が室町期以降低落していったことは、全体としてはやはり事実と言

わざるを得ないので、それはマジカルな要素をおびた神仏の世界、聖なる世界と女性との結びつきがうすれたこととおそらく深いかわりがあると思います。とはいえ、そうはいっても、キリスト教に相当するような宗教を欠いた江戸時代の社会で、女性の前代以来の聖なる性格が潜在し続けていたことは当然予想できます。先ほど私をご紹介いただいた浅野さんが研究していらっしゃる如来教あるいは、天理教のような新興宗教の教祖に女性が多いということ、このことは、おそらく無関係ではないと思うのです。こういう日本の前近代の社会における女性のあり方が、近代以後、あるいは現代に至る女性のあり方、この会を含めましてさまざまな形で議論されております日本の女性の地位の問題とどこでどのように絡んでいるのかという問題は私にとってもまだまだ未解決でありまして、今日のような機会に辻さんや上野さんをはじめ、お集まりの皆さんにこのへんのところを教えてくださいいただければ幸いと考えている次第でございます。

司会　ありがとうございます。豊富な史実を基に、中世・近世の日本女性の生き生きとした姿を具体的にお示しになり、差別の発生源にまで貴重なご示唆をいただきました。後の討論でさらにくわしく伺いたいと思います。

選択縁の女 上野 千鶴子さん

司会　続きまして、上野千鶴子さんの講演、「選択縁の女」に入ります。札幌からまいりました今村雅子をご紹介します。

今村雅子　今村と申します。これから上野さんの紹介をさせていただくんですけれども、私などよりも、今日参加していただいている方のほうがもしかしたら上野さんについてはお詳しいのではないかと思っております。

上野さんは、社会学者であり、フェミニズムの理論家であり、『思想の科学』で「マルクス主義フェミニズム」というタイトルで連載をなさっていらっしゃいますけれども、これが完結したあかつきには、フェミニズムにかかわる者としては批判する者も共鳴する者も必読の書となるのではないかと、私はファンの一人として楽しみに

しております。

ほかにもたくさん著書がございます。講演会の記録で『マザコン息子の末路』とか、『フェミニズムの最前線』とかいうのもございまして、その中の内容はいへん重たいんだけど、たいへんおもしろく読める本になっております。ということは、講演会の話もきっと楽しいものだろうと、私も上野さんの本物のお顔に接するのとお話を聴くのを楽しみに北海道からまいりましたので、これから参加者の一員となりまして上野さんのお話を聞かせていただきたいと思います。それではお願いいたします。

上野千鶴子 上野でございます。今日はパネルと言いつながら、講演を三つ聞くようなたいへん重厚な話が続いています。私は、今日は学者の部分でやろうかフェミニストの部分でやろうか迷いましたけれども、たったいま網野さんの重厚な学者の話を四十五分間お聴きになった後、同じような話を二度もお聴きになったらぐったりお疲れになるだろうと思いますので(笑)、今日は私は、学者の部分はかなぐり捨てて、フェミニストの部分でやっていただこうと思います。どうぞお疲れでしたらリラックスなさってください。

◆ フェミニン・ミステイクか フェミニン・ミステイクか

六〇年代のアメリカのフェミニズムというのは、ご存じのとおり、ベティ・フリーダンという人の『フェミニン・ミステイク』という本から始まりました。この本は、日本語のタイトルが『新しい女性の創造』というふうになっておりますけれども、これは文字どおり訳せば「女らしさの秘密」とか「謎」とかというふうに訳すものです。ベティ・フリーダンは、このときに郊外中産階級の妻が表面的には何不自由のない生活を送っているが抱え込む不満、イライラ、孤独というものを書き著して、女らしさと思われたものの謎を解き明かしました。こういうふうな不満、イライラというのを、女性が、たとえば夫にぶつけますと、ふつう夫は怒るか戸惑うかどうかですね。「俺はこういう幸せな生活をおまえにさせてやっている。いったい何の不满があるんだ」というふうに戸惑うのがおちでした。それに対して、女性は、ふつう真っ先に我れと我が身を責めます。「この幸せ

なはずの生活がちっとも幸せだと感じられないのは、私の頭が変に違いない」というふうに思ってきたものでした。それをベティ・フリーダンが解き明かして、「それには理由があるんだ。なぜならば、そういう郊外中産階級の妻たちの生活の中にあるものは、耐え難い孤独、孤立、そして自己実現の道がないというこの閉塞なんだ」ということを書き著したわけですね。

ベティ・フリーダンは、その後離婚をいたしまして、全米最大の女性組織であるNOW（全米女性機構）をつくり初代の会長になりました。私は、ベティ・フリーダンの『フェミニン・ミステイク』という本のタイトルを最初に聞いたときに、これはもしかしたらフェミニン・ミステイクの間違いじゃないかと思ったんです（笑）。フェミニン・ミステイクというのは「女の間違い」という意味です。結婚して郊外中産階級の妻になるというのは、これは絵に描いたような女の幸せとされていたはずなんだけれども、その生活の後で何が待ち構えているかなんていうのはちよっと考えてみればすぐわかるんじゃないかと思ったりします。「そんな間違いを冒すあなたが悪い。そのどつばにはまるあなたの自業自得だ」と言ってもいいのですが、これまたたいがい女性にとってはそれ以外の生き方の選択肢は示されていませんでしたから、こういう言い方は酷なところもあります。私自身はまわりの女の人たちの生き方を見て、こんな間違いは自分でわざわざ冒さなくても、もう他人さまが冒してくれている、自分で冒すまでもないと思って、というふうに思うもんですから、そういう道を選ばなかったんですけれども、ベティ・フリーダン自身は、自分の冒した間違いを後で解消いたしました。この中には、間違いを冒した方も、解消なさった方も、また冒し続けていらっしゃる方もいろいろいらっしゃると思いますけれども（笑）。

◆ 地縁を失った近代の女たち

そういうミステイクが、女に予測できたかと言いますと、私は「ちよっと考えればわかるじゃない」と言いましたが、フリーダンの時代にはそれは無理もなかった、予測もつかなかった、とたしかに言えます。なぜなら、彼女たちが結婚した後でそういう孤独や孤立や閉塞が待ち構えているというのは、そのときにはやはりわかりませんでした。結婚した後、男たちは仕事に出かけます。近代家族というものは、「男は仕事、女は家庭」の性別役

割分担で出来ておりますが、家庭にいる女は、いわば「家にいる女」だったわけですね。つまり主婦は家婦だったわけです。だからこそ夫は自分の妻のことを「うちの家内が」と、つまり家にいる女、というふうに呼んできたわけです。ところが、昔は家内と言っても家内は十分にまわりとつながっていました。何しろ親戚縁者ネットワークがありましたし、それから地域共同体がありました。だから、家にいながら共同体の中で生きていた。共同体とつながり合っていたわけですね。それが、近代社会になると、男のほうはさっさと仕事に行くけれども、女のほうは、かつてつながり合っていたはずの共同体がすっかりなくなってしまっていました。

男のほうもやっぱり地域共同体を失いましたが、代わりにうまいこと別な共同体をつくりました。企業社会という共同性を男たちはうまくつくったのです。それに代わるものを女はつくれなくて、女は共同性を失いました。そういう意味では近代化の過程でいろんなテクノロジの革新がありましたけれども、たとえば水道を引くということが戦後農村の生活改善運動の中で行なわれたときに、農村の婦人会がこぞって反対するなんていう妙なことも起きました。彼女らの言い分によると、水道を各戸に引いたとたん井戸端がなくなってしまうというんですね。井戸端でみんなが出会う場というのがなくなってしまう。そういう逆効果というのもあったわけです。

そういう共同性を失って孤独と閉塞というのを一番切実に味わったのは、転勤族の妻たちでした。転勤族と言っても、夫は行く先々に自分を待ち構えている企業という共同体があります。ところが、女は、いわば根こぎにされて次の場所にボンと植え移される。それが根づくか根づかないうちに、すぐにまた別の所に植え移されるというのを、否応なしに経験してきました。フリーダンのような悩みを最も切実に共有し、それから最も切実に抜け出そうとした女性たちが何よりもこういう郊外サラリーマン転勤族の妻たちであったということは、非常に象徴的だと思います。

ということ話を話すたびに私は、〈へあごら東海〉の高橋ますみさんのことを思い起こします。高橋さんは、ご存じのとおり転勤族の妻として生きてらしたご自分の体験の中から今のようなたたのグループをおつくりになられた方です。転勤族の生活の中で、女たちは、いわば家という名のタコツボの中にはまっていったわけですね。このタコツボは、男にとってたいへん都合がいいというか、女を一人ひとり隔離して都合よく操るにはたいへんうまくできた仕組みだったろうと思います。

◆ 「コミュニティの復権」はまっぴら

けれども、こういう共同体が解体、消失したということを問題にしますと、最近すぐさま表れる掛け声は、「コミュニティの復権」ということです。行政、都市社会学者、デベロッパなどは、「コミュニティの復権」ということが大好きですね。私は、これを聞くたびにぞっとします。考えてみたら、私たちが都会に出て来たというのは、あの息がつまるような共同体から逃げて来たんじゃないのか。それをもういっぺん復権しろ、たとえば都会にムラをつくれなんて……。昔の隣近所は、井戸端会議もあった、長屋づきあいもあった、みそ、しょうゆを借り合った、あれはよかったというけれども、その代わり夫婦げんかの一言一句も全部聴かれているとか、家の中の経済状態もみんなわかっていてとか、いわば逃げも隠れもできない息のつまるような関係があったわけですから、あれから逃げて来たのに何で戻らなきゃいけないの、ということになります。良いことと悪いことは必ず結びついていきますから、悪いことだけ捨てて良いことだけとるというわけにはなかなかいきません。いわばなくなってしまったものをもう一度回春させよう、復権しようというのは、これはほんとうはきわめて非現実的な話ですし、それから理念的にも捨ててきたはずのものをもう一度、なんていうのはとてもないという気がします。私は、個人的には「隣近所だからと言って何で気の合わない人と仲良くしなきゃいけないのよ」というふうに思っている人間ですので、ことさらそういうふうに思います。

◆ 「男女相互乗り入れ社会」も幻想

そういうコミュニティの復権というのが解決策にならないとすれば、じゃあどうすればよいのか。女は、これまでいわば家に閉じ込められてきたわけですから、そこから出て行けばよいのです。出て行く先はいったいどこでしょう？ 国連婦人の十年のときにこういう標語ができました。「男女相互乗り入れ社会」というやつですね。この相互乗り入れというのは、近代社会は公と私というものを分離しましたから——公が仕事の間、私が家庭の間です——これを相互に乗り入れしよう、女が私の場からどんどん公の場へ出て行こう、つまり職場へ出て行こ

う。男のほうは、逆に家庭へどんどん戻ってもらおう。これを相互乗り入れと申します。もちろん男性には家庭に戻って来てほしいですけども、じゃあ女が出て行く先がほんとうに職場しかないのか……と思いませんか？私は職場だけがほんとうに出て行く先なのか、職場がほんとうに公なのかというふうに思います。それとも一つ、出て行った先の公と呼ばれる職場で、たとえば職場の中にいる男たちがそんなにいい目をしているのか。男たちはそんなにそこで自由なのか、と考えてみたら、たいしたことないじゃないかということが、職場に出てみれば女にもわかってきたりいたします。

女たちが、自分たちの閉じ込められたタコソボから何と外へ出始めるといふことをし始めたのはここ二十年ばかりのことだったわけですけども、出て行く先が、男がこれまで公と称して独占してきた職場だけだったということは、やっぱりとても貧しかったんじゃないかという反省がしだいに生まれてきました。

それともう一つ、現実にも女に職場の壁は厚かったです。女たちが叩いても叩いても男たちはなかなか職場の扉を開けてくれませんでした。もちろん辻 和子さんのようなケースもありますが、辻さんの話を聞いて思いますのは、この方たち、いわばキャリアウーマンのパイオニアの世代の方たちは、非常に幸運なことに、戦後混乱期、つまり企業が男も女も差別してられなかったいわば非常時に職場に出て行った人たちの生き残りですね(笑)。その後社会にもう少し余裕が出てくると、企業社会の壁は女に対して非常に厚くなりました。

◆ 出歩く女たちが選択縁をつくった

そういう意味で女たちは出歩く先がなかったわけですが、この二十年、女は自前で出歩く先をつくってきました。職場以外につくったのです。これまでであった地域共同体、これを地縁と申します。それから家族や親族が血縁です。その血縁でも地縁でもない。じゃあ社縁かと言つと、社縁でもない。私どもがこれまで知っているような人間関係、血縁、地縁、社縁のそのどれでもないような第四の関係というのを女たちはつくってきたと思います。さっき網野さんは、中世の旅する女の話を書きました。女たちは外出の自由を持っていたんだそうですね。網野さんは、このことは今回の講演ではお使いになりませんでした。網野さんのお使いになったことばに有

名な「アジル」ということばがございます。「アジル」というのは、「自由な空間」というくらいの意味ですが、旅する女がアジルをつくったわけですね。それに引っかけ言いますと、私は、最近主婦の方たちのお集まりではこういうふうに標語をつくって皆さん方を励ましています。「出歩く女が未来をつくる」、どんどん出歩く。皆さんがたが家を空けるのはいいことだ、未来のためにいいことだというふうに言っています（笑）。そういう形で女たちは出歩く先をつくってききましたけれども、その出歩く先に何があったのでしょうか。それは血縁地縁ではない、社縁でもない。何と名前を付けようか考えました。網野さんの無縁という名前は、これはなかなかすてきな名前です。実を申しますと私は、網野さんの『無縁・公界・楽』という本にたいへん影響を受けました。「これだ!!」と思いました。けれども、私も学者の端くれですから、人がつくったことばを同じように使うのはしゃくにさわる、ちょっと変えてやりたい。それから、無縁は縁が無いという意味ですね。有縁と無縁で、縁が無いだけじゃちょっと困る。無いということの中身を積極的に表現したい、と言うんで「選択縁」ということばをつくりました。

選択縁ということばは、論理矛盾です。選択縁は選び合う縁（えにし）と書きます。縁というのは選べるものでしょうか。先ほど辻さんのおっしゃったとおり、辻さんのご紹介のあった『婦民』には、私の写真と辻さんの四十年前の写真が、同じ紙面に載っていています。これをご縁と言います。辻さんはこれを選ばませんでした。私も選べませんでした。偶然ですね。しかも強いられた偶然です。イヤイヤかもしれません。「袖ふれ合うも他生の縁」という日本語もございますが、何かの偶然という意味なんです。

縁ということばには強制というニュアンスがございます。たとえば親子の縁、あなたと何かの縁があって親子となりましたと言いますが、親子なんて言うのは、ほんとうに選べない強制的な縁です。できれば切りたくないような縁でございますが、そういうことばがもとも縁ということばです。そうすると、「選び合う縁」というのはほんとうは論理矛盾なんですが、このことばをあえて使います。使うに当たって私は網野さんからたいへんな励ましを受けました。もちろんご本人から直接ではありません（笑）。というのは網野さんは「無縁」ということばを使っていらいっしやいます。これは無縁という縁、縁がないという縁です。これは論理矛盾です。れっきとした学者がこういうことばをお使いだから私も使っていいたろうと思って、こういう造語をいたしました（笑）。

◆ 選択縁の先陣も基底も女たち

この「選択縁」は、ずいぶんいろいろなところで発展してまいりました。女の世界だけではありません。子どもたちの世界にも広がって、一度も顔を合わせたこともないのに、旧知の仲のように自分の悩みを話し合う深夜放送族、あるいはパソコン通信の仲間たち、そういうようなネットワークの中で、無縁の縁、選択縁というのが、新しい人間関係として、どんどん都市型の社会の中で生まれてまいりました。しかしながら私はこれを、あえて「選択縁」からもう一步進めて「女縁」と呼び直したい。なぜなら、選択縁を今一番力強く造り出しているのが女たちだからです。女たちが選択縁を一番先んじて造り出しているからです。

この選択縁、女たちが造っているさまざまな活動を、地域活動と呼び間違える人がいます。これを地域活動と言われるたびに、私は、居こちが悪くてムズムズして気持ちが悪くてしょうがないのです。何が地域活動ですか。こういうのを「地域活動」と呼んで、女たちが選択縁ネットワークをやり始めたのはいいことだと行政もデベロッパも申します。だけど彼らの発想の根本は都市づくり、町づくりをやるときに、居住の近接、あるいは接触の頻度さえあれば、きつと仲よく過ごさだろうという、非常に安直な発想です。同じマンシヨンの同じフロアー同士、あるいは同じ階段同士というような長屋型の発想しかない。けども実際に調べてみると思いがけない事実がわかってまいります。

◆ 十五分圏内からの十五、六人の選択

私は、実際に女縁の調査研究をやってみました。それで、ずいぶんいろいろなことがわかりました。人間は、自分の生活圏の中では、そんなに長い時間をかけて空間移動をしません。だいたい徒歩十五分圏内ですべて生活の用は足りるような暮らし方しかないということがわかっています。もし皆さん方がどこかの集合住宅に住んでいらつしやるとしたら、徒歩十五分圏四方の中には、一万人の人口が入ります。今女の人たちが作っている選択縁ネットワークのサイズは、非常におもしろいものです。〈あそこ〉というのは全国何百人の組織ですけ

れども、その中でも核になっている部分は、いいところ七、八人からマキシмум十五、六人までのサイズです。これだいたい対面可能でお互いにコミュニケーションが人間的にうまくいくサイズの上限です。そうすると、一万人の母集団から十五、六人選ぶ、これはたいへんな選択をしているわけです。誰でもいいってわけじゃないですね。隣だから仲よくしているわけじゃないです。それから交通手段、徒歩だけじゃありません。今の女の人次は、ずいぶん交通手段が多様化しました。自転車とバイクは、いま女の足です。自転車十五分圏でどれだけ入るか、郊外団地なら人口は十万入りますよ。それから女の人は車も持っています。車十五分圏だとどれだけ入りますか。たんへんな人口が入ります。一万人とか十万人とかという母集団の中から、十五、六人お互いを選び合っているんです。それはもう居住の近接なんていうふうな地縁じゃない。これを安直に「地域活動」なんて言わないでください(笑)。彼女たちは何を基準にして、選び合っているかというところ、フーリングだったり、共同保育をしようという志だったり、あるいは趣味だったり、スポーツだったり、よく遊ぶ食べ歩きなんていうのもありますけれども、食べ歩きのグループもれっきとした女縁です。こういうふうな、ある選択の基準があって、それをアンテナに張って選り合わせた人たちが何人かでネットワーキングを作り上げているような女の集団を女縁と呼びます。

◆ 〈へあこら〉よりも女性解放に役立つ(?) ママさんバレー

調べてみた結果、またおもしろいことがわかりました。こういう女縁の人間関係の結び付きの強さとそれを結成した動機には、何の関係もないということがわかりました。たとえば〈へあこら〉は女性解放を高く掲げた志の高い団体です。こういう団体の人間関係の強さと、食べ歩きやスポーツのような集まりの中で培われた人間関係の強さは、ちっとも変わらないのです。みなさん方が〈へあこら〉の集会へ行こうというとき、「今日ママさんバレーだから、行かなくちゃ」なんて言ってトレパン、トレシャツで行く隣の奥さんなんか見てたら、「何よ、意識が低いわね」という気分におなりになるかもしれないけれども、でもそういう方たちがやってらっしゃるスポーツのような集まりの中で培われた人間関係と、強さはちっとも変わらない。それどころか、むしろお互いに支え

合いや、あるいは家族に対する影響力は、どうかすると、遊びのグループのほうが強かったりなんていうこともあります。

女縁の絆が強いのは、ママさんバレーとかママさんコーラスとか、チームプレーをやっているところですね。チームプレーだと誰かがぬけるとダメメーজが大きい。だから休むと必ず声がかかる。夫の反対で出て来られないっていうと、仲間が寄ってたかって「あんたのだんなが悪いわよ、説得してあげる」というふうに買って出る。でも女性解放というのは夫の前で言うのは気恥ずかしいですね（笑）。「おまえ何しにいくんだ」「へあごら」の集会よ」「いったい今日は何するんだ」「女性差別の勉強会」「おまえの頭で何の勉強だ」なんて言われたりするかもしれない。ちょっと気恥ずかしくて言いにくいところがあります。だからコッソリ行く。ところがコーラスやバレーだと「今日はママさんバレーだから、出かけるわよ。みんな待っているから抜けられないの。あなた今日は子どもとお留守番していてね」というふうに堂々と出て行きます。そうするとむしろコソコソ行くような志の高い集まりよりも、堂々と行く遊びの集まりのほうが、はるかに夫や子どもに対して影響力が強かったりします。しかも試合に勝っちゃったりすると全国大会に行かなきゃいけない。堂々と泊まりがけで出歩くいわけになる。なんて……？（爆笑）。

調べてみるといろいろおもしろいことがわかってくるものです。私は「女縁」社会の成り立ちや中身に非常に興味をもちまして、これに夢中になりました。私は半年間、女のネットワークについて調査研究をいたしました。その研究の結果、非常におもしろいことがわかりましたので、それをいくつか紹介したいと思います。この調査は女のネットワークを使って女のネットワークの研究をするということをいたしました。アトリエFという主婦のサークルで昨年ついに調査企画会社を作った方たちがいらっしやいます。これまで無職だった主婦五人、平均年齢五十二歳の女の人たちが、いっきに社長と重役におなりになったという、そういう会社が大阪にございます。ただし社員はいなくて、社長と重役しかいないところですから、まだ弱少零細企業ですけれども。その方たち自身がどういうふうに集団として育ってきたか、そのプロセス自体がおもしろい。私は彼女たちに「自分たち自身を研究材料にしてごらんよ」と励ましました。そして「それを自分たちの仕事にしてごらんよ」というふうにたきつけました。いっしょに組んで彼女たちといっしょに、彼女たちの周辺にある女のネットワークキングの

調査研究をいたしました。グループインタビューやりサーチを半年かけていたしました。

◆ 女縁交際タブー集

その中でもしろいことがわかりました。「女縁」という仕組みがどんなふうに成り立っているかを考えてみた中で、「女縁交際ルール集」というのが出て来ました。その中のいくつかをご紹介します。ルール集というか、タブー集って言ってもいいんですね。

1. 言わない、聞かない

第一にこういうルールがあります。「夫の職業は言わない、聞かない」。これが昔の婦人会的な女の人間関係と新しい女縁の大きな違いです。昔はだいたい女たちが自己紹介するとき、「どこそこの会社に勤めている何とかの家内でございます」という紹介の仕方をしたものでした。女は「誰々の妻」だったわけなんです。それを言わない、聞かない。言わない聞かないがこうじて、三年ばかりつき合っていたけど、母子家庭じゃないかと思っていたなんて人があるぐらい、そのぐらい女の話に夫の影がささない。これもちょっといきすぎだと思えますけれども。

それから「子どもの学校のことを言わない、聞かない」。「今度うちの息子が無事名古屋大学に入りました」なんて言わない。子どもの手柄はあんたの手柄じゃない。そういう節度は守る。それとなくもれ聞こえてしまうとかわかってしまうということはあっても、それを話題にして「宅の子どもは……」なんてことは言わない。

ふつう女ってのは、集まると夫と子どもの話しかないもんだという見方がされていましたが、「夫と子どもの話をしない」それが女縁交際タブー集の第一です。夫と子どもの話をしないと、女はもう話すことがなくなると思われてきましたけれど（笑）、ほんとうになくなるのでしょうか、なくならないのです（笑）。女の人は自分のことをいっぱいしゃべりたいんですね（笑）。夫と子どもの話をしなくても、女には話すことがいっぱいあります。

そのようにして、女縁の人間関係ができあがっています。これがタブーその一です。

2. 女縁を金儲けの手段にしない

第二は「女縁を金儲けの手段にしない」というタブーがあります。女のネットワーキングというのは、目はしきく企業から非常にうまい販売ルートだと目をつけられています。こういう女のネットワーキング、女同士の人間関係をビジネスに最初に利用したのは保険会社でした。保険業界はおばさんたちを雇いまして、彼女たちの持っている人脈資産を食いつぶし、食いつぶしたところにクビにするという、そういう商売の仕方をやってきました。親戚縁者に保険に加入してもらい、友達に入ってもらい、人間関係をこじれさせるというふうなことを女たちはやってきたわけです。新しく起きてきたビジネスでも、こういう女の集まりを商品の販売ルートにしようとして、企業はなかなかめく目がありませんから目をつけています。パンストの販売とか、ランジュリーの販売とか、キッチン用品をあるお宅でクッキングパーティーをやりながら販売するとか、なかなかめく目がないやり方で、これを企業はすでにやっています。

女縁をこういうことに利用しない。これを利用すると女縁関係がこわれます。けれどもこれはいわば女縁の外側にある。金儲けの手段に女縁が利用されるっていうのは女の人たちはきらいですけど、女縁自体が金儲けの手段になることはちっともかまわない。いま女の人たちは自分たちが作り上げて来たネットワークが何とか他の人たちの役に立たないかということを考え始めたところです。そういう人たちはいま自分たちで仕事起こしを始めて、あるいは株式会社を作ったりしはじめました。

〈あごろ東海〉の方たちがお作りになった〈WINN〉という株式会社もその成果のひとつだろうと思います。各地にそういうものが出て来ている。それは、仲間たちがお互いに支え合うために作り出した仕事ですから、女縁を金儲けの手段にするということとは違います。

3. 「情報はこちらだけ」

三つ目のタブーは、「情報はここだけの話」っていうことです。これはやっぱり最低のマナーです。女縁の集まりでいろいろな話をするんですが、ここだけの話で、外には漏らさない。だから女縁関係は、実は、その人たちが抱えこんでいる一番深刻な内心の悩みのうちを打ち明け合う、セラピーみたいな役割をしています。そういう親・兄弟にもまざるような、非常に重要な切実な人間関係を作っています。私の知っているケースですと、た

たとえば、息子に嫁が来たけど、その嫁が自分の思うような女ではなかった。嫁のぐちが言いたい。傷心の姑さんがこういうサークルに出入りしている。この姑さんは節度のある人で、嫁の悪口は地縁、血縁には言わない。地縁、血縁に言えば、必ずまわりまわって嫁の耳に入って関係がこじれる。それでよその離れた利害関係のない女縁でしゃべるわけですね。聞く側もそれはほかには言わない。これはきつとたいへんおもしろいことです。離婚相談とか、最近離婚だけでなく恋愛の相談もありますし、それから不倫の相談なんかもあります。けれどもそういう隣近所や家族に知られては具合が悪い話だいたい女縁に持ちこみます。そういう意味では、いわば「ほどの距離」っていうのがたいへん重要な意味を持っています。そういう距離を保った女縁関係での支え合いが、今のようない孤立した都会の人間関係ではとても自由な意味を持っているということがわかってきました。

4. 「ほどの距離」を守る

四番目がいま申しましたほどの距離です。女縁関係を実際に調べてみたら非常におもしろいことがわかりました。この人間関係は、とても熱いようにみえながら結構距離を置いたクールな関係だということもあるんですネ！たとえばメンバーの中に冠婚葬祭の節目があります。これに対して、祝いごとをしない。子どもが入学したからって入学祝いはやらない。結婚したからって結婚祝いはやらない。したということはわかってますが、情報としてはなんとなく耳に入っている。でもオメデトウと言うくらいで仲間で金一封を包もうかなんてことはやらない。その気持ちのある人はやるけれども、仲間でいっしょにやるっていう、地域婦人会のような強制はない、っていうのが女縁のオモシロイところです。この「ほどの距離のコントロール」っていうのが、女たちがこういう女縁の中で学んだ非常に重要な人間関係のノウハウだと思っています。

これはある老人ホームの方にお聞きした話ですけども、老人ホームに入所した人、特にお婆さん間の人間関係が非常にむずかしいんだそうですね。ひとつのタイプは、非常に孤立して、友達ができなくて、一人ぼっちでポツンと座って口もきかない、さみしい孤独なお婆ちゃんになってしまふタイプ。さもないければ、誰かがちょっと親切にしてくれるとベターッともとたれて、甘えてのめり込んでいくから、今度は相手からうとましがられて、そこでこじれるタイプ。ぼつんと孤独になるか、べつたり依存になるか、どちらか両極を行きつ戻りつなさるのだそうです。

こういう人たちというのは、基本的に家族の中の人間関係か、さもなければ見ず知らずの赤の他人との人間関係か、そのどちらかしか知らない、中間を知らない。どうもこの中間を知らないところを見ると、単に家族の中だけで暮らしてきた主婦の人だけじゃなくて、どうやら職場で働いてきた人も同じみたいです。

それをしないですむのが、グループ活動を長い間やってきた女の人。どこまで踏み込んでどこで距離をおくかということをよく知っていて、人間関係の距離というものをコントロールできる。どこでやさしさを示し、どこでは示さないかということを知っているような人たちなら、老人ホームに入っても人間関係をうまくやれるんだということです。

5. 「パート女縁」で「多角女縁」

それから、このルール集の第五は、驚くべきことがわかりました。調査というものはやってみないとわからないものです。私はもちろん調査研究を始める前に仮説を立てて、仮説から出発をいたしましたけれども、その仮説がものの見事に崩れたものの一つにこれがございます。それは、まるごと入れ込まない「パート女縁」という概念です。「パート女縁」というのは変な概念とお考えになるでしょう。私は女縁の人間関係は非常に結びつきが強くて、お互いに心理的に支え合っていて、困ったときや病氣したときの助け合いもあって、これはすごい、これこそ都会の孤独というものを支え合うためのこれからのすばらしい人間関係だ。こういう人間関係というのは、血縁、地縁、社縁よりもっと強い絆(きずな)になって女たちが巻き込まれていくんだらうというふうに思っておりまして、そうじゃないということがとてもはっきりわかりました。

おもしろいことには、女縁活動のある一つのグループにたいへん熱心で活動的な人は、それだけをやっているわけじゃないということがわかりました。一つの活動に熱心な人は、ほかの女縁にもたくさん入っててどこでも熱心だということがわかった。その典型例は今お話を聞いたばかりの辻和子さんですね。ご存じのとおりへあごらでもご活躍ですし、いまお聴きしたら「婦民」でもずいぶん昔からやっていらっしゃる。そのほかにご自分の職業関係の中でもずいぶんネットワークキングを作ってらっしゃる。「そんなたくさんやってよくエネルギーありますねえ」というふうに辻さんを見て思いますけれども、やる人は、やればやるほどたくさんやる。やらな人は、やらなければやらないほど何にもやらない、ということがはっきりわかりました。何にもやってない人

は、ほんとうに何もやってない。やってる人は何でもかんでもやっている。それから調べてみると、あるグループにかかわっている人は、別なグループに行ったときに自分が他のグループにかかわっていることをべらべらしゃべらないということもわかりました。そういう形で、言わばグループにみせる顔をちゃんとし使い分けしていらっしやるんですね。ある所で見せる顔とべつな所で見せる顔と、ちゃんと使い分けしている。

ある政治的な運動に非常に熱心にかかわっていらして、ほとんどフルタイムの「活動專業主婦」——最近、專業主婦は專業主婦でも、家事專業じゃなくて活動專業だという主婦が現れましたが、その一人、この人はもうフルタイムの活動專業・主婦じゃないかと思うぐらいその活動に入れあげている方が、「食べ歩き」のグルメの会にも入っていらっしやいます。食べ歩きという軟弱なブルジョア的な趣味の極ですね。いま大体ホテルのランチタイムは、サラリーマンはともに行けませんから、着飾った主婦たちで満員です。そういう所にも行ってらっしゃる。何という退廃、とか、何という落差、とかというふうに驚きますけれども、実は彼女は、両方ともこなして、食べ歩きの会に行った時には自分が政治的な運動にかかわっている話はなさらない。で、政治的なグループに行ったときには食べ歩きの会に行っていることはおくびにも出さない。彼女は、いわゆるブルジョア趣味とそういう志とを使い分けている器用な女だと思われるかもしれません。だけど、食べ歩きの会に出ていらっしやる方それぞれが、みんなほかの活動もやってらっしゃるとお考えになってみたらどうでしょう。その中には職業をお持ちの方もいらっしやるし、ほかの活動に熱心な方もいらっしやるし、その中ではある一つの顔しか見せていらっしやらない。だから、女の人は一つのグループに見せる一つの顔しかないんじゃない、いろんなグループで活動しながらいろんな顔をしっかりと使い分けて、それをバランスとりながら暮らしていらっしやるということがよくわかりました。

こういうことができる人のことを「個人」と呼びます。近代というのは、こういうことができる人格を「個人」としてつくり出したはずですよ。

そうしますと、実は女は、とくに「個人」やってるんですね。考えてみたら、じゃあ男は「個人」なんだろう。男は、会社という人間関係の顔しかない。これっきやない。男たちは、ほんとうは個人やってない。これは文章書かせてみるとはっきりわかります。私は、男の人の文章と女の人の文章を読み比べてつくづく思うこと

がありますが、女の人は、「私は……」というふうに一人称単数形でものを書くことがほんとうにお上手です。生き生きした文章をお書きになります。ところが、男は、自分の妻や子どものことを、僕は、私は、で書き始めても、途中からトーンが変わって、いつのまにか「私たちは」とか、「われわれは」、「社会は」になっているんですね（爆笑）。最後になると「僕は」は、どこにもないのです。初めにあったはずの「僕の妻は」、「僕の家庭は」は、どこかへ消えていることがたいへん多いのです。そういうのを読むたびに、こういう文章を理論的と呼んでいいんだろうか、こういうのを客観的と言っただろうか、ただ〈私〉がないだけじゃないか、というように思うんですけれども。

そういうふうにと考えると、実は男よりもっと早く「個人」になってしまっているのは女じゃないか。家族の中でも女のほうが早く「個人」になっているんじゃないかという気がします。いま血縁にむしろ思い込みが強いのは男のほうがですね。そういうことが出てまいりました。その意味では女の人たちは、実は自分のアイデンティティをうまく操作しています。これまでアイデンティティは一つしかないというふうに思われていたんですけども、多様なアイデンティティ、マルチ・アイデンティティをうまく使い分けながら、それを自分できちり押さえて保つような人間関係の中に生きていらっしゃる。だから、「個人」として生きていらっしゃる。これは、丸ごと入れ込まない「パート女縁」です。だから、女縁はフルタイム女縁でなくて「パート女縁」であるというふうに思います。

◆ ステレオタイプな「男の選択縁」

「女縁」ってなかなかおもしろいなあと思うんですが、こういうのをなぜ女縁かというと、いつも男の方から文句を言われます。「女縁があれば男縁もあるでしょう。差別しないでくださいよ」と言われるんですけども、「男縁」はあるでしょうか。男縁と比べてみると、女縁というものの時代を一步先がけた新しさが非常によくわかります。

私は、女縁との比較研究のために男縁研究もやってみました。いま選択縁というのが男の社会でも非常に盛ん

です。一つは、サラリーマンの研究会ブームです。異業種交流研究会、アフター・ファイブの研究会ですね。ところが、この人たちがこういうことをやるのもほとんどはたいがい下心があります。その異業種交流研究会で、やがて自分の商売に結び付けるようなことをやってやろうとか、そこから何か情報や人脈をつかみ取って来ようと思って社縁ヒモがついている。アフター・ファイブも利害を離れられないんですね。こういうことがわかりました。

二つ目には、男縁の集まりは、仮に利害を離れた場合でさえ、まず集団づくりの第一にやるのは、会長を決めることです。男縁の方たちは、長と名の付く役職が大好きです。十人ぐらいメンバーが寄ると、総務部長とか渉外部長とか、いつの間にか全部「長」が付いてしまったり、お互いに「会長」「部長」と呼び合うのがお好きです。

それから三つ目には、規則とか会則をただちにお作りになります。会費いくらとか、本会は、××××を目的としてとか、実際書いてあるのは、「会員相互の親睦を目的とし、月に一回銭湯に入る」とかその程度のことなんですけれども(笑)、それでも会則を作っちゃうんです。これは会社のワープロを使って直ちにワープロで打ってくる(笑)。会社のコピー機で直ちにコピーをやって来てみんなに配る。つくり上げたものはいつの間にか、会社の約款とよく似たものが出来ている。見てみると、「何だ、これはミニ企業じゃないか」というのが出来上がっちゃっているんですね。そういうのを見ると、何かずいぶん利害を離れたように見えながら、男の方たちは、なまじ企業という組織のモデルがあるだけにこのモデルから離れるのがこんなにむずかしいんだということが逆によくわかります。

それから四番目に、そういうことが何にもない、あるいは利害をほんとうに離れた男性たちの集まりというものもあります。ないことはありません。俳句の同人の集まりとかね、まあ俳句も結社とかうるさいですけども、利害や浮世の地位を離れたほんとうにリベラルな集まりはございます。私はこれを、「君子の清遊」と言っています。なぜ君子の清遊と言うかという、まさかの時にクソの役にも立たない(笑)。病氣した時に来てくれますか。弁当作って差し入れに来てくれますか。子ども預かってくれますか。せいぜい葬式に花輪が一つくるだけでしょう。利害を離れたらほんとうに離れてしまって、クソの役にも立たないというのが出来ますので、どうも

男縁というのはうまくいかないもんだなあとというのがよくわかります。

そういう意味では、男の方たちは、なまじモデルに縛られている分だけ不自由。女たちは、どうしていいかわからないから、かえってモデルのないことをやっている、だからこそこれだけ自由で生き生きしているんだと思います。

女が元氣印でいられるその秘密を、ある男性の方がこういうふうに喝破なさいました。「それは決まっていますよ、上野さん。女たちは、真空地帯に出かけて行ったからなんです。何にも頭打つものがないからあんなに元氣なんですよ」とおっしゃいました。これはほんとうだと思えます。

一つの要素は、今の皆さんがたの年代は日本の社会の中で核家族が一番増えた年代です。だから、たとえば郊外の主婦たちがつくったサークルの方が、たとえば京都市の旧市街地の婦人会なんかと交流なさるとこんなふうにおっしゃいます。「さすがお姑さんがいらっしやるところの女の方は違いますねえ。ちゃんと譲ることをご存じで自己主張なさらない」というふうにおっしゃる。裏返せば、「自分は譲ることを全く知らず、自己主張しかやらない」ということを言っているわけですから。そういう自己主張の強い女たちを、姑のいない核家族が育てました。核家族化はわがまま勝手な女たちを育てる一つの原因には違いなかったんですが、だけれども、だからこそ、女たちは、自由な自己主張のできる人間関係というのをつくってきました。女たちは、縦型の人間関係が嫌いです。女たちは、「長」がほんとうに嫌いです。

ですから、私たちが調査したときも、たとえば調査票に代表と書くのを気を遣いました。「代表？うちの会にはいません」と言われる。だから、しょうがないから「連絡先」と書くとか、そういうふうに気を遣いました。

それと三つ目は、さっき辻さんが奇しくもおっしゃいましたが、女は正論が好きです。女は、正論を通します。辻さんのように企業社会に入った方たちは、女は正論を言うから駄目だというふうに嫌われたわけですから、今の社会では正論を言うとは常識だと思われれます。正論が通らないのが常識です。ところが、女たちは、常識な世界をつくりました。そこでは正論が通ります。そういうふうにして女たちは、これまでの常識だと思われてきた縦型の人間関係とはまったく違った前代未聞の人間関係をモデルのないところで作り出したわけですね。そういう意味で、何もないところに出て行った、私でもなく公でもないところに出て行った女たちの強さの秘密

はそこにあると思います。現実には企業社会に出て行った女もたいへん多いです。だけど、企業社会に出て行った女たちは元氣な人もたしかにいます。が実は慘憺たる思いを味わっています。システムがありますから頭打たれますもの。実際に労組で闘っている労働者の女性たちは、非常に苦しい思いをして闘っています。だから、すでに組織や縦型の構造のあるところに出て行った女たちは、相当苦しい闘いをやっていますけれども、何にもないところに出て行った女たちは、ほんとうに元氣です。元氣いっぱいです。それはある意味では時代の逆説であると思います。いわば何も無いということを手にとった女たちのパワーがいま全開しているというふうに思います。

◆ 女縁の実績をつくったフェミニズム

最後に申し上げたいのは、この十年から二十年——フェミニズムが始まってから二十年です。へあごろんが出来て十五年です。「国連婦人の十年」から十二年です——この十年から二十年というのは、女たちは相当程度に男社会を批判告発してまいりました。それと同時に女たちがその間に積み上げてきた実績があります。これはバカにできません。たいへんなものです。批判告発だけではなくて、たしかに何か手応えのあるものをつくり上げてきたというふうに思います。私は、この十年ばかり男社会の批判告発をしてきました。私は、いつのまにか若輩ながら有名人になってしまいました。原因を考えてみますと、きっと、人間がいけずで口が悪いもんだから男に嫌がらせを言うのがほかの人よりうまかった。きっとそれで受けたんだろうと思っっていますけれども。

そういう批判告発をやってきたわけですが、それだけではなくて、女たちがつくり上げてきた実績があります。それが「女縁」だっと思います。今の社会の影にあるもう一つの社会、今の社会の抑圧から逃れて女たちがやっとの思いで息がつけるシェルター、避難所、アジール、それが女縁だったわけですね。私自身がやってきたことも、自分にとって呼吸のしやすいシェルターづくりでした。だけどこのシェルターは、今大きくなって、無視できなくなってきました。いっぱいいっぱいこの社会の中に女たちにとってそういう息のしやすい穴ぼこが開いてきています。そういう女のスペースの一つをやってらっしゃる大阪の女の方に私はインタビューに行きました。

その方が、物腰のやさしい温和な笑顔を浮かべてこんなふうになっことおっしゃったことを私は今でも忘れられません。「ここにいるとねえ、気持ちのいい人ばかりとつき合っているからほんとうに世間知らずになってねえ」とおっしゃるんです。そこは世間じゃあないんです。世間と違う呼吸ができるんです。そういうものを確実につくってきたと思います。その中の一つが「あごろ」だったというふうに思います。

いまそういう実績を積み上げてきたのは女たちであって、男が圧倒的に立ち遅れている。これまでの十年は女性問題ですが、これからの十年は男性問題——男が問題だという時代だというふうには私は思っております。「お父さんはお荷物だ」という時代ですね（笑）。そういう意味で言うと、いま女たちは、男社会を批判して、「あっちの水は苦いぞ」と言うことを言うただけじゃなくて、いまは堂々と、「こっちの水は甘いよ」というふうに言っている時期です。これから女だけじゃなくて、子どもたちもそういうシェルターを必要としています。男たちもそういうシェルターを必要としています。今のこんなに息のつまるような企業社会から、何とかもっと人間らしい空間を取り戻すための、これだけがほとんど唯一の希望になるようなモデルだというふうには私は思っています。そういうものを地道に着々と積み上げてきたたくさんの方の草の根グループが日本の各地にあります。その中でいつでも私たちにとって目に見える一つの星として十五年間その灯をずっと掲げてくれたのが「あごろ」でした。「あごろ」のご活動を私は心から尊敬しています。「あごろ」十五周年記念おめでとうございます、と心から申し上げたいと思います。ありがとうございます。（拍手）

司会 どうもありがとうございます。いけずで口が悪いと自称してらっしゃる上野さんに褒められたんだからたいへんなもんだと思います。ほんとうにありがとうございます。

予定よりちょっと遅れておりますけれども、予定どおり十分休憩をとりました、ちょっと短くなりますが四十分ぐらい討論の時間をとりたと思います。いま四時二十八分ですから、四時四十分から討論を始めたいと思いますので、四時四十分ぐらいになりましたらまた皆さんお席にお着きくださいますように。いまロビーで『あごろ』のバックナンバーを販売しておりますが、今日一日だけ半額です。スーパールの呼び込みみたいですが、今日のをがすとまた定価になりますので、ぜひ、お買い求めください。

母から子に語り伝える民話集

不思議な釣鐘

お領内の寺々から集められた釣鐘が、城の片すみに、一時の間、野積みにされとつたそうだが、夜になると、延命寺の鐘が、ひとり

で、
かアんえりたやのーン、オンオンオン
て、鳴りだすそう。最初の鐘は、海に沈んでしもて、これは、そのあと、新しくこさえた鐘じゃのに、おんなしように、
かアんえりたやのーン、オンオンオン
で、夜になると、ひとりでに鳴るんじやとい。



日本図書館協会

選定図書

美森成生・文

藤川秀之・絵

B5変型上製

1800円

菜の花と雷さま



やがで春になって、南の方から菜の花が咲きだして、ほこ谷まで、黄色に連なつたんや。娘が播きもて行つたんが、咲いたんよのう。

それが春の風に波うつとる。南から、黄色の道がでけたよう。その道をたどつて、娘は戻て来たんよ。

日本図書館協会選定図書

全国学校図書館協議会選定図書

美森成生・文

日暮修一・絵

B5変型上製

1800円

菜の花と雷さま

BOC 出版部

〒160 東京都新宿区新宿1-9-6
電話 354-3941(代) 振替 東京3-39331

〔討論〕 有縁・無縁・選択縁をめぐって

しま・ようこ 皆さま、たいへんお待たせいたしました。

それでは、これから講師の先生とご参会の皆さまと、つまり私たち全部でこの問題をもっともっと深めて、パーソナルな、より個人的なレベルに近づけて、討論の時間を持ちたいと思います。

私がしま・ようこでございます。コーディネーターなどという名前を書かれまして、ちょっと今日は抵抗いたしまして、私はコーディネーターを引き受けた覚えはない、お三人の講師の先生のお話を私がどう感じたかを一言話させていただくというそんなつもりでございましたので。からだをこわし、しゃべることがいまたいへん辛い状態にあるものですから、失礼させていただきますが。

今まで私は、「縁」という日本語を使ったことがどうもなかったということに気づきました。私もへあごろん会員なんですけれども、たんへん不熱心な会員で、あんまり熱心に参加をしないんですね。と言いますのは、もちろん女性運動に関心を持ち、かわわっておりますけれど、女性運動もまた歴史的な一つの公害を振りまくという私の乱暴な持論があるものですから、不熱心にかかわることにしております。

そんなことで、この企画の段階からすべて一緒に参加させていただかなかったものですから、「あら、どうしてへあごろんが、縁などということばを使うのかなあ」と、とても不思議に思ったんですね。しかし、三人の講師の先生のお話を伺いまして、私なりにそれぞれ納得できるものもございました。縁ということばに含まれる偶然性は、とらえ直してみたい、と。……どうも今まで私たちは、必然的にものを考えとかそういう発想がより良くて、偶然に身を任せるのはマイナスであるという、これは男縁がつくった偏見でしょうけれど、持ってきたと思うんですね。しかし、私は、どうも最近、世の中に必然的なことは何もないのではないかという、かなり偏ったたしかめをしております。ですから、偶然に結ばれる縁に身を聞くと言いますか、自分からかわわっていくことはきわめて主体的なことだとは思っております。しかしそれにしても、縁は、自分から結ぶというよりも、日本語の縁ということばには「結ばれる」感じがどうしても強いですね。ですから、「どうしてこのへあごろんが縁ということばにこだわったのかしら」と、まだ少し心のどこかにひっかかっておりますが。でも、辻さんと網

野さんと上野さんのお話伺いまして、私なりにこういうふうになす感じました。

辻さんがおっしゃいました「有縁」、ご自分が切り開かれてきた、しかし視点を変えればそれはたまたま時代の条件が切り開いてくれたに過ぎない、何でもない一つの縁の状況ですね。この「有縁」ということは、その後、網野さんがご指摘になりました、——私は全く網野さんのご専門領域をよく知らないんですが、——自分なりにほんの少しページをめくらせていただきましたら、「無縁」ということは、どうも権力からの「無縁」、男たちとは書いてございませんけれども、解釈すれば男たちがつくってきた権力的なもの、体制的なもの、システムからの自由、無縁、平民という、そういう感じが私としてはどうしても強くご著書から読み取れたわけなんです。

そこで、私は、お三人の講師の先生のお話をこうとったわけですね。根本にあるものは、やはり私たちは名もない「個人」です。辻さんが私たちが名を知っている方々のお名前をいろいろお挙げになりましたけれども、それらの方々もたいして有名じゃないですね。この二十世紀の一瞬、私たちがちょっと有名だと錯覚しているだけで、私たちがみんな名もない人間ですね。そういう意味で名もない、権力を持たない、一人一人の平民、庶民には無縁の社会を基盤に置く非常にさばさばした気軽な感覚、この感覚だけで自足したり満足してしまいたいへん危ないので、無縁の基盤に立って「有縁」、つまりとても大事な平民としての日々の私たちとつながる——楽しかったり、辛かったり、じゃまくさかったりですけれども、そういうさまざまな有縁の方々との関係を誠実に大事にしたい。

ただし、ここまでですと文部省がお説教しているような考え方になっちゃうと思うんですね。それを基盤にしなから、つまり基盤ですから忘れたってかまわない。しかし、あるとないでは大違い。忘れてもいいけれどしっかり持っておきたい。無縁の上に私たちは有縁を生きている。そこで、私なら私、皆さま方お一人お一人の私が、自分の好みで、自分勝手にランダムに、でたらめに、でいいと思うんですが、自分の好みで選んでいく「選択縁」という、論理矛盾を含めて上野さんがおっしゃいましたけれども、選択縁の世界で自分で選んでいく。その選び方の多様さのようなものをこれから何とか私たちがもうちょっとエンジョイしながら、講師のお三人の先生、それぞれに伺いながら、できればお一人の先生にお答えをいただく形ではなくて、「この問題を私は三人の先生に

質問したい。お三人の中で一番お答えくださりたい方にお答えいただきたいんですけれど」というくらい、この「私」と「講師個人」とのつながりからもう一息自由になったところで、新しいこの場の瞬間の縁というようなものに懸けるそういう話し合いができれば、ちょっとおもしろいんじゃないかと。

講師のお三人の先生のたっぷりおもしろいお話を伺えましたので、これからは主役は私たち一人一人、個であるというようなつもりで質問の矢を向けて、お三人の先生が参加している私たち一人一人と、ここでこの場の「場縁」を結んでいただく楽しみを味わっていただけたらなんてふうに思いますけれど、いかがでしょうか。

司会 それでは、ちょっと時間がありませんが、ステージの下にマイクを一本用意してありますので、ぜひ皆さん、おっしゃりたいことがある方、質問その他もろもろお話しになりたい方は、どんどん前のほうに出て来ていただきたいんですが。

◆ 「天皇の地位が下がったので、聖なる性が賤視されるようになった」というのはおかしい

藤谷不三枝 大阪からまいりました藤谷不三枝と申します。へ真宗大谷派における女性差別を考えるおんなたちの会」というところからまいりました。

まずお三人のかたのお話、楽しく承りました。特に網野さんにお聞きしたいことなんですけれども、最初にリス・フロイスという宣教師のお話を出されましたんですけれども、最初のうち何をおっしゃりたいのかもうひとつよくわからなくて、後でだいたい何かわかったように思うんですけれども、わかったというのは、同意したという意味ではなしに、言われんとすることがわかったように思ったんですけれども。そのことにも関連するんですけれども、女性の性そのものが神仏に直属するような特権を保障されておったということを出されたんですけれども、女性の性ということを神聖化するというのは、私は人間として真に評価されていないんでないかなという感じがするわけです。たとえば天皇の権威が動乱の中で低落していった、それで、そのことに携わっていった女性たちが室町以降に賤視の方向に固定化していくことなんですけれども。そうしたら、そういう神仏に携わっておった女性たちが卑しめられていくんだから、天皇の権威はまた上げて、ということになりはしない

かというふうに思うわけですけれども。誤解でしたらちょっとお話し願いたいんです。

しま 網野先生よろしくお願いいたします。網野さんがお答えくださった後で、もしコメントの追加がございましたら、ぜひ辻さん、上野さんをお願いいたします。

網野 いまご質問の後のほうの問題ですけれども、天皇の権威と併せて、先ほど申しましたように、それとも結びついた神様、仏様の権威全体が低落していくわけですから、天皇の権威だけの問題ではないのですが、しかし日本の社会ではどうも、いまご指摘のあったように、室町期以降の天皇の権威の低下と女性の地位の低下が期せずして起こっており、社会の深いところでそれが関わりのあることは事実のようなんです。私には、どうもそう思えて仕方がない。もちろん私は、天皇の権威が今後高くなることを望むほうではない。むしろそれに対して一番厳しく批判したいと思っておりますが、この事実を目をつぶっていたのではどうしようもないと思います。なぜそういうことに結果的になっているかということ、実は、われわれ自身の問題に帰ってくると思うのです。私もこの問題をどう考えていったらよいか、まだまだわからないことがいっぱいあるものですから、簡単にはお答えはできないのですが、こうした事実の上に立って、それをもっと深くとらえ考え直していく方向で進んでいきたいと思っています。これは、天皇をなぜ今までズルズル、ズルズルわれわれがひきずっているかという問題とも、実は表裏の問題です。これは解けているようにみえてけっして解けていない問題だと思うので、その現状の中に、その理由をわれわれ自身の問題として根本的に考えていくための一つの手がかりには、今の問題があるのではないかと思っております。

それから、女性が「聖なる世界」により深くつながりを持っているととらえられていたと申しましたが、これも私にはどうもほんとうだと思わざるを得ない。そうした事実があるのでお話ししたのですが、この事実をどうお考えになるかはそれぞれのお考えに任せるほかないと思います。その事実を現代の立場に立ってこれをどう考えるかというところまでは、今日はお話し申し上げる時間はないのですが、ただ前の問題にもからみますが、日本に宗教がなかった、生活倫理を規制するほどの宗教を持たなかった、ということが日本の社会に古くからの習俗を最近まで残すことになっている。おそらくヨーロッパよりもずっと古くからの習俗が残っているだろうと思うのです。「旅の恥はかき捨て」だとか、「酒の上のこと」なんていうのは、いずれも酒宴や旅が非日常的なア

ジール的世界だったことの名残りだと思えます。そういうことわざが今にいたるまで残って生きた作用をしているような社会なので、これについてもそうした事実の上に立って、これからわれわれは何を考えるべきかが問題になってくると思うのです。

一つはっきり言えることは、天皇に代わりうるだけの新しい「聖なるもの」が、戦国期に生まれようとして徹底的に叩きつぶされ、ついに誕生できなかった。そういうことははっきり言えると思うんですね。だからと言って現在宗教を持つべきだ、と私は申し上げているつもりはないので、そうでない道……宗教によるのではない、新しいあり方を考えていきたいとおりますが、しかし、宗教のこれまで果たしてきた、またすでに世界の民族の中で果たしている大きな役割の意味はやはり考えてみる必要があるな、という気がしております。

それから、先ほど申しましたような、子どもをどんどんおろしてしまうような女性のあり方と宗教の問題とが絡んでいることは確かだと思えます。それは端的に言えば、南京で中国人を虐殺する日本の軍隊が、われわれ自身の身近にいた庶民たちから成っているのだという事実とおそらくかわりがあると思いますので、そういう問題をひとことではなくてわれわれ自身の問題として考えていく必要があると。そのためにあまり見たくない事実かもしれないけれども、見るべきものは最後まで見なくてはいけない、というつもりで申し上げたんで、これからどうするかは、われわれ自身が考えるべきこと……われわれと言うと叱られるかもしれませんが、私自身は私なりに今後とも考えていこうかと思っております。

あまりきちんとした答えにはなってないんですけども、私もわからないことだらけなものですから。以上お答えいたします。

藤谷 いま言い忘れたんですけれども、支配差別の構造というのは、虐げられ卑しめられた者によって褒めたたえられなければならないという、褒めたてられることによって貫徹するというふうにいるんです、私は。ですから、たとえばいま出ました水子の問題でも、水子供養ということは一番被害を受けた女性自身が拝んだり祭ることによって貫徹すると言いますか、支配の側から言えばこれでよしということであって。ですから、たとえば神社とかの大工さん、宮大工というのは、専門の方がだいたいいてはるんですよね。よく神社を大工としてやる方というのは被差別部落の方が多いって聞いているんです。そういうふうにならば虐げられた者によってその

支配差別の構造を何か褒めたたり祭り上げるといことをしないと貫徹しない、と、支配側から言えば。そういうふう思うんですけれども……。

網野 宮大工に被差別部落民が多いというお話はいまはじめて聞きましたが、かつて神人であった集団の一部に被差別部落あるいは被差別民の源流があることは事実だと思います。お答えになるかどうか分からないけれども私は、さきほど申しましたように十四、五世紀の以前と以後とでは、差別のあり方がずいぶん違うと思うのです。それ以前の時期にも、区別、差別はありますが、それ以後の差別、賤視とは、そのあり方、差別の構造が違うと思っているんです。その違いを考えないで前の時期と後の時期とを同じように考えて、問題を処理しようとするのでは、日本の社会の中の差別の問題は根本的には解決はしないだろうと考えています。そこにはいまおっしゃるとおり支配者の側のいろいろな意図も入ってくることはたしかだと思うんですが、支配者の意図だけではなくて、それとも大いにかかわりつつ、社会自体のあり方の中にある差別の構造を明らかにする必要があるだろうと思っております。どうもお答えにはなっていないかもしれないので、辻さんと上野さんのほうからも何かおっしゃっていただければと思いますけれども。

上野 マイクを握っている時間の長さで声の大きさは権力と比例いたします。私は、すでに四十五分間マイクを独占いたしました。だから、できるだけマイクを握る時間を減らそうと思います。一問一答じゃなくて、皆さん方のご関心はバラエティがあたりでしょうから、どんな質問を出していただいて、後で私に三分か五分頂戴できればお答えできる問題についてはお答えしますし、答えられないことや答えたくないことは答えません。答えなかったことについて食い下がりたいことは後でパーティーがありますから、残っておしゃべりするという手もございます。そういうやり方はいかがでしょうか（拍手）。

しま ありがとうございます。それではこういたしましたでしょうか。三人ないし五人ぐらいの方々に質問をお出しただきまして、そういう質問を私たちまたまたいま壇の上に乗っている五人がお答えをどのようにさせていたどうかはちょっと二、三分ご相談させていただいて進める。そんな形はいかがでしょうか。もし、今のご質問とは別なご質問が生まれても、お一人に絞られてしまう可能性がありますね。ですから、たぶん上野さんがおっしゃったのは、たくさんバラエティに富む質問を、一つ一つお受けしていきますと、一つで十五分ぐらいかかっ

てしまいます。ですから、先にお出しただいただいだろうかと思ひますけれども、いかがでしようか。(拍手)
じゃあ、お出しになりたい方は、どんどんお出しになって順番は早い者勝ちということでもやりましょう。

◆ 中世の女にほんとうの自由があつたのか

田嶋陽子 法政大学の田嶋と申します。

たいへんおもしろいお話を伺わせていただきました。

質問が網野さんと上野さんとにつづつあるんですけども。網野さんの場合と……まあ上野さんにも共通したことなんですけれども、網野さんの場合、いまこの同じ話を学生にしたら、学生は「ふふーん」と笑っていて答えなかったとおっしゃったことが網野さんの視点を何か示しているような気がしたんですけれども。あのころ十四世紀のころと、もしかしたら今の女の人は、主婦であらうとそうであるまいと、その自由度というのは同じで、どういうふうに同じかと言うと、首につけた犬の首輪のひもの長さが長いか短いだけのことであって、当時の女はいろんな職をさせられていたと言ひますが、ひとつここで疑問なのは、管理させてもらっていただけであって支払われていなかったんじゃないかということですね。させてもらっていた……それは今の主婦でも、マンションの中でちゃんと主婦やって家を管理させてもらっている。ちょうどマンションの管理人と同じで、子どもを管理させてもらっている。ただし不払いで。それと同じことなのかどうか、それが一つですね。で、もしそれが同じだとすれば、別に犬の首輪のひもの長さが長かったか短かったかだけの違いなんじゃないかなあというのが私の意見であつて、そのところをお聞きしたいということです。

それから上野さんのところでは、これはあまりにも話がおもしろくてうかうか口開けて笑っていると何かのどの奥から抜けていっちゃうんじゃないかと思つたんで。これも私の思い過ごしかもしれないんですが、二点ほどあります。選択縁、女縁の話は非常によく調査なさつていておもしろくて、そんなふうになれたらどんなにいいだろうという夢を抱かせてもらえてとてもありがたかったんですが、一つ気になるのは、「個人」とおっしゃったときに……いろいろ禁止条項を上げてらして、女がたとえば夫のこと、子どものことはこれは口にしない、一つの

ルールとして、ということを上げられました。そしてまた、食べ歩きとそれからほかの所に行くのでは女が顔を
使い分けているとおっしゃって、これが個人の資質というふうにおっしゃったんですが、もし私がそこで聞き間
違いないとすれば、実は明治時代の女というのは、一人の女の優秀な資質というのは、結婚したら昼間は聖女
と言いますか、非常に巧みに家事労働を牛耳る良妻賢母の顔で、夜は魔女じゃなくて娼婦になるぐらいセックス
に巧みで、というのは、これは私は詳しく知りませんが、何せ女子大の寮に入ったときに寮長さんから真っ先に
それを教えられたもんで覚えているんですが（笑）、女というのは、そういうふうには朝昼晩、朝昼晩、顔を使い
分けることで生き延びるということなんです。だから、もしかしたら明治時代の女の資質が、たまたま形を変
えて今の女縁をやっている女たちはただ生き延びるために適応能力の一つとして現在もそれを発揮していらっ
しゃるんじゃないか。別に個とは関係ないんじゃないかということなんです……いやあ……まあそ
うふうには私は思っただけですね。

それともう一つは、子どものことや夫のことを徹底して話さないということは、徹底して女の立場とか、もしか
したらこの社会の成り立ちとかを話してもしょうがないから話さないのか、あるいは回避しているのか。もしかし
たら女が抑圧されている根本のところを話さない、そういう団体というののもどうか、というのが一つですね。
それから、そうやっていろいろ「女縁」を結んでいらっしゃる人たちが、いったいどうやって食っているのか
ということが私のもう一つのアレなんです（拍手）。もちろん上野さんは、そんなところは全部もうお考えに
なっただけで話をしてくださったとは思いますが。

それから、企業に入っていられっしゃる方は、やっぱり闘っていると思うし、闘わない人もいるし、うまく適応
している人もいると思うんですが、その人たちは、やっぱり自分の足で自分の手で食っていると思うんですね。だ
から、亭主を企業で働かせていて、自分だけ何と言っただけで楽しくやっているといるというの、何か私としては
気が小さいせいかなぁ……（拍手）何か胃のへんが痛くなるような気もするんですが、そこをどう
なふうに考えていらっしゃるのか、ぜひお聞かせください。
しま　ありがとうございます。

それでは、網野さん、上野さん、もう一人ぐらいのご質問を掛け合わせてお答えくださいますか。会場で「ど

んどん質問をぶっつけてください」とおっしゃっておられますが。

◆ 女を聖なる性と考えるのは危険では

浅野美和子 最初の方に関係したようなご質問になりますけれども、網野先生は、やはり女の性が聖なるものに近いというふうにおっしゃっていたんですが、私自身もそういうことを勉強しておりまして、聖なる女のことをやっているんですけれども、私が思いますのに、自分が女ですから、別に男とそんなに変わりはないくて、ただ昔……昔と言うか現代もそうかもしれないけれども、そういうふうな観念があるだけなんじゃないかと。世の中にそういうふうには、女は聖なるものであるというふうに言ってしまうことがかえってむしろ危険なのではないか。聖なるものであるものの一番中心は何かと言うと、現在母性だと思っんですけれども、母性は聖なるものであるというふうに言われてしまうと非常に危険なことにつながるんじゃないかと、こういうことを思っております……。

◆ 「女捕」はつまり強姦じゃないの

佐々木あしゅら 佐々木あしゅらと言います。

網野さんの話を『日本の歴史』とかそういう雑誌でちよくちよく見ていて、それで女にかかわるということで、どうしても一つだけ質問と言うんじゃないんですけれども、私なりに今日行って必ず話をしたいと思って来ました。それで、そのことを言いたいと思います。

性は解放されているとか、自由な性交渉というのはいったい何なのか。それはたとえばアメリカのフリー・セックスと言うのと、網野さんの言っているのと、どうも何か悪い意味のフリー・セックスというのと変わらないような気がします。というのは、結局私が聞いていると、これは女を強姦しほうだいとしか聞こえないんです。結局、そういうアジールというのは、女にとって何だったのかなあと思うと、結局お祭り行けば襲われるサ、そう

いうのがセックスなんだ、そういうのが男と女の関係なんだと思わなきゃいけないと言うか、ほかに選ぶところがないという。それは、別に中世じゃなくなつて今だつてそうなんです。今だつてほんとうに何かちよつと雑魚寝でもすれば男は手かけてきて、それでそのことを言つたら、でもそれでも良かったんじゃないのかとか、そういうふうに通つてしまふのが今の日本の男と女の間接だと私は思う。もちろん、それにあらがってみんな生きてゐるから、それだけが全部そうだとは言いません。だから、網野さんが女が一人で旅をしていれば当然危険があるはずだと。「当然」というところがまず私にはわからない。小さい時から、小学生、中学生のまだ月経なんか始まる前から「一人で歩いていたら危ないよ」と言われて、それでも一人で歩きたいから、危ないかもしれないけど一所懸命怖い怖いと思ひながらも、毎日夜でも友達といっしょに遊んで一人で帰る。その気持ちがやっぱり見えてないところから女の問題を取り扱われると、結局一つ一つは事実なのかもしれないけど、それを再構成するときに全然違つた意味になつちゃうんじゃないかというふうに私は思つて、ぜひ私のこの女としての気持ちをわかつてほしい。今だつて法律では禁止されているけど、強姦とか売春なんてやりたいほうだいですよ。私もこの間売春してみました。ほんとに何てことでしようということですけども(笑)。ほんとうにやりたいほうだいと言うか、売るほうも売るヒモと言うかそういう人のところに面接に行つたんだけど「結局あんただつて男と関係があつたら同じだからできるよ」と言うんですよね。つまり、そういうような日本の男と女の間接なんです。そういうふうに通つて何と言ふのか、男のほうが言つて来て、それに……まあ何か反対しないと言ふか、結局強姦が少しソフトになつたようなそういう感じがベースにあつて、そのパリエーションでつき合つてゐるようなところが、特に若い時とか、中学生とか高校生とか集まつてゐるときに、お互いに初めてセックスをするというときに、まだそういうふうになつてゐると思うし、私が実際に中学生なんか聞いた話でもそういうことあるし。だから、「中世は女の性は解放されてゐた」というのを読んだんだけど、そういうふうに通つて書かれちゃうと、いま実際に私たちが生きてゐることに影響するんです。だから、私なんかは、さっきの話聞いていると、「ああ中世の女はもっと自由だったんだなあ」と思う。それは、性というのは、男にとっても女にとっても、男も性的な存在だし、女も性的な存在だし、エロティックなはずだし、とても性というのは男にも女にもまとわりついてゐたはずのものが、なんで、ある時から、女にそれがまとわりついたのである。なんで女は常に強姦されて、それが不思議じゃ

ないというふうになんが思うようになってきたのか、ということが大事なんであって、一度そういうふうになつてしまつたら女の地位はどんどん下がっていくに決まっているし、それがあるとき何かのきっかけで卑しいということになるのは当然なんです。私は、そのことをずっと知りたい知りたいと思って大学にも行つたし、今もあまり勉強してないけど……でも、いつも考えているんです。なんで日本で売春というのが始まつたのか。強姦が始まつたのか。それは、最初は意味は違つたものかもしれないけど、ずっとそれが今までできているんだということ、それが私のからだにかかつていることを私は知っているから、もっとそれをちゃんと研究して、それでお金もらっている人は、女の立場というのを考えてやってください。それだけです。

しま ありがとうございます。質問をお出しになりたい方はまだまだおありでしょうから、どうぞ。

◆ 男にも「選択縁」があるのでは

いのうえ・せつこ 上野さんのファンで神奈川から来ました。上野さんだけというわけじゃないんですけども……ファンです。

今日はすごく女性の方が多いので、上野さんは、いろいろな女の縁の話をされたと思うのですけれど、さっきもちらつと出ましたが、私もすごく男好きな女で、女と同じように男とも選択縁を結んだりして生きています。これから上野さんに聞きたいなあと思つているのは、東京へ出て来られていろいろ聞かれたと思いますけれども、いま、ものすごく土地が上がっていますよね。一坪が億という時代で、今日午前中ちょっと南青山へ行つてきたのですが、一週間前にあつた家が全然なくなつています。地上げ屋がどうだったのかわからないけれども、歯がぬけたようになっていて、これからのものすごい勢いで階層文化と言うか、ほんとうに一部の金持ちというべきかそういう人たちと、庶民とはたいへんな格差が出来ていくと思う。私は、横浜の住宅街に住んでいるのですが、七十坪ぐらいの住宅街が一億なんです。もう、住んでいる者には税金が上がるだけで、娘や息子たちの時代には、家を建てるなんていうのは絶対不可能な時代になる。これからどうなるのか……ぐーっと元に戻るとは思えないですね。そういう意味でもものすごく社会が変わっていくのじゃないか。そうすると、今まで何となく優雅に……

ということばはあまりよくないのですけれど、みんながいろんな「有縁」「無縁」「選択縁」なんていろんな生き方をなんて言ってきたけれど、これどうなっちゃうんだろうか。もう九九パーセントの女は、働かないと部屋代だって払えないですよ。実際東京で一DKで十万円ですから、絶対に一人じゃ暮らせない、何人かで暮らすというようなそんな感じになっていく。そういう中でどういうふうに変わっていくのかなあ、女の縁が変わっていくのかなあと、私は逆にもしろいなと思っている。どういうふうに変わるか見てやろうと思っているのですけれども、上野さんは、その点どのように思っているのか。

それから、さっき、男はみんな「社縁」につながっちゃうというふうにおっしゃいましたけれども、そういう縁じゃない縁を持っている男たちもいま四十代の初めぐらいから下の世代というのは出てきていますよね。いわゆる仕事とか何かに関係なく、たとえば……さっき「男は弁当持ってきて来ますか」と上野さんはおっしゃいましたけれども、弁当持ってきて来ないけれども金を持って来るとか、いろんなことでまたいい縁を持っている人もあるわけで、私なんかは女、男関係なく、そういう新しい縁をつくっていききたいなあというふうに思っています。その点、上野さんはどう考えていらっしゃるのか。二つですけれど後で聞かせてください。

しま　ありがとうございます。時間がながいのがたいへん残念ですが、もしほかにおありでしたら、もうお一人だけどうぞ。

◆ あなたはなぜ売春をしたの

川崎昌子　川崎と申します。東京でビジネス書の編集をしています。パネラーの方というよりも先ほどの大学生の方にちょっとお聞きしたいんですけれども。

たしかに網野さんが最初におっしゃられたおおらかな性ということに関して、今も同じで、たとえば売春とか強姦の問題がいろいろあると思いますけれども。いまたたとえば売春をする人は、別に売春しなくてもいいと言いか、選べるわけですね。社会の体制が売春とかを強いると言いかそういう感じになっているんじゃないかとたとえば女子大生の人たちとかで売春している人は、別に生活に困っているわけでもなくて、何と言うのか、

ちよっとまとまったお金が欲しいから売春して、それで後は何と言うかふつうにまじめに働かず、家庭で主婦をして子どもはまじめに育てるんだというような感じの人がそういう感覚でやっている人もいます。そういう感じのほうが、むしろ生活に困っているというように人に比べて圧倒的だと思うんですけど。だから、個人に選択権があると言うか、別に売春しなくてもいいわけだし、してもいいわけだし……してもいいわけというのはちよっと語弊がありますけれども、強制されて身売りに出されるとか、お金に困っていることじゃないので、ちよっと……うまく言えないんですけども、たしかに強姦とか売春の問題があると思うんですけども、いくらでもその当事者の女性が防げると言うか、もっと声高に叫べば叫ばれるんじゃないかというそういう部分があると思うんですね。だから、先ほどの方は、「私も売春をやりました。簡単にできました」ということなんですけれども、どういう動機でされたのかどうか、ちよっとわからないんですけども、研究のためにやられたのかわからないんですけども（笑）、おおらかな性という意味とそういう売春とかの問題はちよっと違うんじゃないかと思いますけれども。あまりまとまらなくて何を言っているのかわからないと思いますけれども。

◆ 「女縁社会」はヘテロセクシュアルな社会で可能か

山家嘉子 上野さんがおっしゃった「女縁社会」とは、ヘテロセクシュアルな中で女縁社会なんでしょうか。ホモセクシュアルな中でもこれが当てはまるとしたらどういふことなのかお聞きしたいと思います。

しま では時間が迫りましたので、このへんでよろしゅうございますか。

たいへん申しわけありませんが、お一人三分ずつお答えください。最後に佐々木さんも一分で結構ですからお答えいただき、その後は、川崎さんと佐々木さんで個人的にお話しあいいただきたいと思います。

◆ 現代とは違う自由があったと思う

網野 いくつもの質問を受けたように思いますが、最初のお話、首輪の長さの長短だけのことじゃないかという

ことだと思いますが、私の勉強がまだ不足なのかもわかりませんが、中世以前の職能民の女性性は、たしかにある支配の枠の中に組み込まれている人もいますけれども、強制されてそういう仕事をしているのではない、むしろ支配者のほうが枠組みをつくってこれを必死で組みこもうとしていると言えらると思います。男女の関係でも同様です。

たとえば、一例ですが、旦那のほうが檜地師、まげものを作る人で、女が小袖売りの商人である、という例がある。夫婦が全く別の仕事を持って働いているという事例を南北朝期の史料で確認できます。そうした事例は漁村で男が漁業をし女が魚売りをするという形にもみられると思います。中世の遊女の場合も、金銭的な身売りで遊女になったのだと見る見方が今でもありますし、たしかにどういふ事情でこいう女性集団ができるのかについてはまだわからないことがたくさんあるんですけども、私は、どうも身売りによって遊女になるということとは違ふ、と思っています。中世では身売りをすれば不自由民、下人になってしまいますからさういふことではないと考えざるをえない。おそらくそれ以外の事情が働いているのだらうと思いますし、遊女の職能としては「好色」という「芸能」があげられています、少なくとも中世の前期には、それ自体、たとえば「売春」ということばのようにマイナス評価を持った職能ではない、と私は思うんです。最初のご質問についていえば、遊女をふくめて商人など遍歴する人たちは、支配者の方からみると最もつかまえてにくい集団なので、支配者側は、いろんなやり方でつかまえてようとしているけれどもなかなかうまくいかない、神人や供御人などという制度をつくったのもそのため、こいう人たちを官庁を通して統制しようとしていることはたしかですが、現在の警察による売春の統制とは全然意味が違うということは間違いない言えると思います。やはり近代の状況を近世中世以前の状況にあてはめすぎて考えていらっしゃるのではないかと思います、いかがでしょうか。

それから先ほど、女性の性が聖なるものに近いと申しましたが、これは人類全体の視野から考えるべき問題で、年よりと子どもと女性とが、社会の中で、より神に近い存在と考えられていたことは広く見られるようです、日本の場合でもさういふことが言えると思うのですが、日本の場合、それがかなりはつきり文献でたどれる点、女性が文字を持っていることとあわせて、興味深いと思います。それを現代にとらえ返してこいう意味を持つかが大問題だと思うのですが、神に近いということは畏れられている要素があったことになるので、単に母性の

問題だけにはならないように思うのですが。自然との対処の仕方、女性と男性とで違いがあると言えるのではないかと思います。これは、次のご質問、道を歩く女性に「性が解放されている」と書いたことについてのご批判とも関連してきます。この書き方はたしかにほかの方からもご批判をいただいております。書き方としては不意なところがあったと思っております。

ただ、そこで主張しなかったことは、神社仏閣にお詣りにいくという動機だけではなく、ほかの動機もふくめて、中世前期の女性が自由に旅をしていることは間違いないですね。それに関連して先ほど「女捕」が天下の公許だと申しましたが、これは必ずしも男性の側だけから出ている論理ではないかと思うんです。

ですから、道や参籠の場、歌垣の場における男女の関係について、私が今日お話ししたことを書いたところ、ある学者が、「お前は男女を動物と考えておる。そういう場所で男と女は動物化するというふうにお前は言っている」と批判されたのです。しかし、私は必ずしもそうは考えていなかったもので、非常に意外な感じをそのときに持ちました。むしろ、そういう場所こそ、一個の男と女という平等の関係が中世の世界の中では成り立ち得たのではないかと思います。それは「強姦」とおっしゃったようなことは全く違う関係としてあり得ただろうと思うのです。たくさん男性と女性の中から一生の伴侶を見いだす自由をわれわれは持っておりますが、そういう場所で、一生の伴侶とすべき最もいい人と会うこともあるいは可能であったような場ではなかったか、などと考えているわけです。ですからさっきおっしゃったような、道で会った女性を男はつねに強姦する……というような事態が直ちに起こるとは思っていない。女性は畏敬される一面も持っていたわけですから女性のほうにも当然選択権があったらうと私は思っています。お答えとしては不十分ですが、三分過ぎたものですから、これくらいにさせていただきます(拍手)。

しま　ありがとうございます。上野さんどうぞ。

◆ 「女が食わしてもらつ」ことは間もなくできなくなる。

上野　ウーン、三分じゃたりない、十五分ほしい。けれど、手短かにいきます。

田嶋さんはベシミストですね。どうして物事の明るい面を見ないんだろう。そして、話がどうしてあんなにむずかしいんだろう、と思いました。いくつか誤解を正したいと思います。

私は、女がいくつか顔を使い分けしている、と言いましたのは、女がベツタリ一つの役割を演じていないということを言っているわけです。昼は聖女、夜は娼婦、これはどちらも「男に都合のいい役割」です。いま女が使い分けしているのは、「自分に都合のいい役割」です。自分に都合がいいために、そういうさまざまな顔を自分のために持っているわけですから、全く同じことはで別のことを表現されたとは思えません。

二つ目に、「夫と子どものことを話さない」と私が言ったとおっしゃいましたが、これは完全に誤解です。私は「夫の職業を話さない」「子どもの学校を話さない」と申しました。実際には彼女たちは、「夫や子どもの悩み」を話しています。

三つ目に、「女縁をやっている連中はどうやって食っているんだろう」という話は、どこでもいつでも聞かされるから、私はもうウンザリして答えるのもいやなんだけれども、女縁を最初にまづつくったのは、それをつくる切実な動機があった、主婦の孤独から這い出した人たちでした。けれど、実際に女縁づくりは働く女の人たちもやっています。

見えますと、働く女でも、非常に積極的に仕事をしている人は、アフター・ファイブにも積極的な女縁づくりをやっていますし、働いていない女も、積極的な人はいくつもの女縁をやっています。やっていない人は、働いていようがいまいがやっていません。それだけの違いです。

働いてる女たちにとっても、アフター・ファイブの脱社縁の「女縁づくり」は、絶対に不可欠です。働いていない女が、「どうやって食っているのか」と言われたら、「食わしてもらってるじゃないか」と言われるけど、別に好きで食わしてもらってるわけじゃないでしょうと言いたい。たまたま職があつて食えるだけのラッキーな立場にいた人が、食えない人を差別することないじゃない。たまたまそういう状況にいる人が、自分の立場を、どんなふうにもいいから逆手にとって、まず自分にできることをやる。できるかぎりのことをやればいいと私は思う。自分が食えるようになるまで時代は待ってくれないんだから、とりあえず食えないときだって、自分が食えるまで待つという必要はない、と思います。私が印象的だったのは、高橋ますみさんの『女40歳の出發』にある

ことばです。「もう、人に雇われて働くには遅すぎた」という一言です。もう雇ってもらえないのなら、ほかのことをやればいいじゃないですか。

それと、田嶋さんの質問と井上さんの質問の両方から始めてですが、女が、好きだろうが好きでなかるうが、「食わしてもらう」ことはもうできなくなります。どっちも働かざるを得なくなります。それはもうハッキリしてますが、私がいま心から憂えているのは、女が企業社会に完全に取り込まれてしまうことです。女たちのこれからの働き方は、三十五までは子育てをやり、三十五早々に、アッという間に企業の中にもう一度取り込まれるという生活、家庭と職場の二つしか経験しないという一生を送る可能性があります。

私は「へあごろ」の皆さん方、そして「へあごろ」と同じように「草の根女縁」をやっている方たちにつねづね申し上げたいのは、女たちに女縁の楽しさを味わわせてほしいということです。これからの女たちは、三十五までだったら就職はいくらでもできます。その女性たちに、三十五になる前、再就職するまでの間に、一刻も早く女縁の楽しさを味わわせてください。たいへんなことになります。彼女たちは家族の密着と職場の疎外と、この二つしか知らない女になります。彼女たちは、もうたいへんな情況に投げ込まれるだろうと思います。

その人たちを何とかしていく道というのは、私でもなく、公でもない、地縁でも血縁でもなく社縁でもないような第四の人間関係を味わわしてあげる。その味をいったん覚えたら、社縁・地縁・血縁だけじゃバカバカしくてやってられません。——そういう関係の中にその人たちを一刻も早く招き入れてあげること。それがもし、いま女縁づくりをやってる人たちにできなければ、これから先の女たちは、あつというまに企業社会に取り込まれてしまつて、老後はまた家族べつたりに戻つてしまつて一生になると、心から憂えています。

それから、選択縁の男たちの話ですが、山家さんの質問もそうですが、女縁社会つて、ヘテロセクシュアルな社会の産物です。そのとおりです。女縁社会は男女隔離社会の産物です。ホモセクシュアルな社会では、レズビアン・コミュニティがありますが、これも男女隔離の一つの産物です。私は「選択縁」の「混成社会化」を心から望んでいます。その「選択縁の男たち」になるためには、男が変わらなければなりません。選択縁の混成縁化が起きるためには、変わらなければならないのは、女ではなく男です。それが私のお答えです（拍手）。

しま　ありがとうございます。それでは佐々木さん、ほんの一分、お答えいただけませんか。

◆ 真実知りたくて売春したんだ

佐々木　なんで売春したか、なんて質問に答えるのはナンセンスだと思うんですけど。私の周りには、売春してる女のひと、売春なんて自分は絶対にしないと思ってる女の人がいて、「あんたは後者のほうだ」と男たちに言われていて、私は子どもの時からずっとそれがわからなかったということがあったということです。

それから、強姦でも防げるんじゃないかという話は、そんなことを言うんなら、殺人だって防げる。「こいつ自分を殺そうとしてる」と思ったら防げる。私が問題にしようと思ってるのは、女の人はどうして売春をするのかとか強姦されるのかということじゃなくて、なんで男が女を強姦したり、女を売ってもうけるのか、ということです。七十分二万円のうち八千円男が持っていくけど、男は電話番号しかしていないんですよ。何でなのかなと、私は真実知りたいから。いい男がいたら、いい男に飛びついて、それで一生送りたいとか、私はそんなことできなかったんです。ほんとうのこと知ってたんです。

しま　ありがとうございます。それでは辻さん、ひと言何か……。

辻　別にありませんが、さっきちょっとしまさんが、私が非常に有名人の名ばかりあげたとおっしゃいましたが、言いわけではないのですが、たいへん短い時間に四十年間の話をしなければいけません。私は仕事の中でもほんとに無数の、有名人でない、魚の行商のおばさんや、学生や、水俣の人たちと、いっぱい仲間になりました、そういう人たちのことや、残留婦人のことなどもくわしくお話ししたかったですけれども、非常に気持ちばかりあせて、十分にお話ができず申しわけなかったと思います。私は主婦向けワイド番組を長い間制作していました。毎日二人ずつの主婦をペアミセスという形で登場させました。その人たちのグループも有形無形に番組を支えてくれました。

志賀島のお糸おばさんに数年ぶりで会ったとき、彼女はすっかりカンカン部隊（魚をカンカンにつめりヤカーで福岡市内を行商するおばさんたちの呼び名）の中心人物になっていました。最初に会ったときは、「嫁入りしたときは魚の名前もよう知らんじったお糸ちゃん」といわれていた七十代のお糸さんが八十代になり、すっかり貫祿ができて、私のこともよく覚えていてくれました。彼女たちは新鮮な魚をお得意さんに届けるという商売

の楽しさと同時に、得たお金で孫をよろこばせる楽しみを語ってくれました。組合長の「収入を得るということがすなわち力を得るということ」と言ったことはが印象的でした。

一九五七年に中国で会った残留婦人に二十五年ぶりで再開したときも、その背後に四千人はいるといわれる残留婦人の姿を考えずにはいらませんでした。

さきほど「売春」のお話がでていましたが、私が富本一枝さんから頂いたお手紙の中で忘れられない一節がありますので紹介します。

『写された幕末（アソカ書房刊写真帖）を昨夜みました。文久慶応時代の洋娼の顔つきを、私はあかず眺めたものです。いや、喰い入るほどびっくりみつめたのです。

なんとという生々と、大胆な、野性的な、あざやかな、強烈でたくましい顔つきでしょう。生活が彼女たちを封建的なものからサッサと脱皮させたそのおどろきを、つよくかんじさせられました。

文久年間に海外で商売をしていた彼女たちに、私はスゴイものをかんじ、アットウされたといったら、おそらくオエラ方の婦人先生がたにハリトバサレ、イヤな目顔をむけられるでしょう。

これは私に、生活が人を変革させることを、あらためて思い及ばせたということなのです。「道具」が必要からつくり出され、つくりかえられてきたこと、必要がつねに人間生活を改造してきたこと、むづかしい理論、感傷、そんなところから、新しいものは決してつくり出されていなかったということ——。どうもはっきり伝えるほど上手にいけないことをカンベンして下さい。」

上野さんがおっしゃった働く女も働いていない女も積極的な人は女縁づくりをしているというお話がありましたが、そのとおりだと思います。働いている女たちにとっては、アフター・ファイブの女縁づくりがどれほど支えになっているか、私は放送局を辞めたあとも、働いている人、家庭の主婦両方を結ぶグループに入りました。女のネットワークがあることで、その楽しさのおかげで生きていると思うことがしばしばです（拍手）。

しま　ありがとうございます。今日の私たちの会は、とにかく一つの「結論」という暴力を出さなかったことだけはよかったと思いますが、まだまだこれから話せそうな雰囲気になりましたので、これから後の時間にそれぞれ話して頂くよう、期待したいと思います。ありがとうございます。（拍手）

司会 どうもありがとうございます。いつもながら後半になると盛り上がって時間がないのがほんとうに残念です。たんへん長くなって申しわけありませんが、最後に斎藤千代がごあいさつ申し上げます。

斎藤 「出歩く女が未来をつくる」と、上野さんがおっしゃいましたが、今日は、北海道や九州からも大勢お出かけくださいまして、ほんとうにありがとうございます。ようこそ出歩いてくださいました。これで女たちの未来が、またひとつ開けたのではないかと思います。

〈あごろ〉というのは、AGORAZZ E I N、つまり「話し合う」場です。そういう話し合いを続けながらたくさんの方が支えてくださったので何とかやってこられたのだと思います。

もうひとつ、〈あごろ〉はたいへん軟弱だったから続いたんじゃないかと、私は思っています。

上野さんは〈あごろ〉を「志の高いグループ」と評価してくださいましたが、そういう部分も少しはありますが、大部分は、むしろ志が低かったから続けられた、という気がします。

私たちは「ひっちゃかめっちゃか方式」と称して、すべて予定を立てず、結論を出さないというやり方でやってきました。この企画も周到な計画を練ったわけでもなく、女縁？ 何となくオモシロそうね、ウン、ウン、といったかんじで、何となくやってしまいました。何も彼も準備不足でたいへんご迷惑をおかけしましたが、この後のパーティーも、全くの準備不足で、どうなることやら、心配な面もたくさんあります。でも、討論もせっかく盛り上がったところですので、ぜひ続編をお楽しみください。必然性ではない偶然性の楽しみがあるかもしれません。

講演会は、諸先生や皆さま方のおかげで、『特集あごろ』のような、たいへんまじめな充実した会になりましたが、これを〈あごろ〉の「昼の顔」としますと、第二部は「夜の顔」。歌あり、踊りあり、お酒あり、何よりいい女たちがいます。お申し込みのない方も、飛び入りでどうぞご参加ください。ごちそうがもし足りなくなったら、一つのおにぎりでも半分にして食べましょう。それがフェミニニストの精神だと思います。どうぞ「ご自分のために」いくつもの顔を持って、〈夜のあごろ〉もエンジョイしてくださいますよう、お願いします。では、ほんとうにありがとうございます。第二部の会場でお待ちしています。



ⅡへあごらVの十五周年を祝う夕べから

講演会を三つ一度に聞いたような重量感のあるバネルディスカッションから一転して、一同は、花とゴチソーとお酒の待つパーティー会場へ。久しぶりにめぐりあう顔、顔に、あちこちではずむ話。せっかくのスピーチも十分聞きとれなかったのが、申しわけなく、また残念でした。聴取不可能な部分が多く、一部割愛したことをおわびします。

司会 きょうはお忙しいなか、長時間にわたる講演会にご参加くださいましたうえ、夕べのつどいにもおいでくださいまして、ほんとうにありがとうございます。

夜の部の司会は、へあごら九州Vの弥次喜多コンビ、甲木(かつき)京子と三好久美子で進めさせていただきましたと思います。遠隔地から突然まいりましたので不行き届きの点も多いと存じますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

最初に、へあごら運営会議Vの責任者の一人、福田光子がごあいさつを申し上げます。

福田光子 皆様、こんばんは。「へあごらVの十五年を祝う夕べ」にたくさんの方々がお集まりくださったことを、運営委員の一人としてたいへん嬉しく、心からお礼を申し上げます。

ひと口に十五年と申しますが、この十五年の歩みは、決して平坦な道ではなく、山あり谷あり、清く貧しいのがへあごらVの良さ、などとおだてられたり、自分にも言いよかせたりして、雑誌「あごら」をとにかく出しつけて女の情報誌として生き残ってきたことに、いまあらためて、ひとしお深い感慨をおぼえます。

十五年前に斎藤千代さんが播いたひと粒の種が、北は旭川・札幌から西は佐世保や福岡に小さな根をおろし、曲がりなりにも全国組織としての形を作り、私自身、へあごら九州Vという地方の一拠点にあってへあごらVの運動を支えてきた者としても、やはり十五年の節目を迎える今、格別の感慨があります。たしか十七年前のある



日、国会議事堂前の地下鉄の駅でぱったり斎藤さんとお会いしたとき、目を輝かせて、いよいよ△あごろ△を始めることにしたとおっしゃった日のことが、遠い日のようでもあり、また昨日のこのようにも思えます。

その後三年で国際婦人年。国連婦人の十年の時期と重なる△あごろ△の歴史は、一九七〇年以後の多様な女の運動の一端を担うなかで、地方にちらばった拠点の間の交流をとおして、女の情報の送り手としての役割を、ささやかながら果たしてまいりました。

メキシコ、コペンハーゲン、ナイロビと、三たびの世界婦人会議の参加をとおして肌で感じとった連帯の感激は、雑誌「あごろ」に記録をとどめ、歴史的な足あととして残すことができたことを、よろこびとしております。さて、国連婦人の十年も終わり、差別撤廃条約や均等法の成立をみましたが、これから、まだまだ残るさまざまな女の問題をきりひろく運動に向けて、きょうお集まりの皆様といっそう連帯の輪をひろげて△あごろ△の次の段階への歩みを進めたいと念願しつつ、この一夕を共に楽しく過ごしたいと思います。

簡単ではございますが、ごあいさついたします（拍手）。

司会 では、仙台の河北新報社の男女差別定年制撤廃を、長い闘いの末に勝ちとられた大槻さんに、ひとことお願いしたいと思います。

大槻寿子 きょうは△あごろ△十五周年のお祝いと、斎藤千代さんにお礼を申し上げたくて、仙台からまいりました。

れっきとした労働組合がありながら、たった一人で河北新報社の男女差別定年訴訟を起こしました。なにせどこにも属しておりませんでしたので孤軍奮闘、そのうち共鳴する人が少しずつ集まりはじめました。このような状態の時に斎藤さんがわざわざ私の家まで取材に来られまして、「あごろ」の誌上に載せてくださいました。その後、私のつたない文章まで「あごろ」に採り上げてくださったりました。このように初期の段階から「あごろ」を通して、ひろく多くの人にご紹介いただきましたことなど、心から感謝しております。

おかげさまで一審判決も全面勝利いたしましたし、私の在社中に、和解で、口頭ではありますが判決以上の内



容で、「河北新報社は今回の和解をするに際して、大槻さんに対し、男女差別定年により昭和四十六年三月に定年退職扱いし、その後長期間二号嘱託として処遇してきたことについて、深く遺憾の意を表明します」という内容の謝罪まで勝ちとることができました。

ほんとうにありがとうございます。心からお礼申し上げます（拍手）。

藤井里子 それでは、△あぐら△創立十五周年を祝しまして、僭越ながら△あぐら△大阪△の藤井が、乾杯の音頭をとらせていただきます。「早くしろ」という声が聞こえました。

乾杯！

（乾杯！ おめでとうございます！ 等の声）

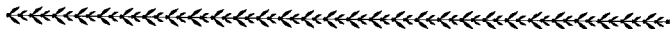
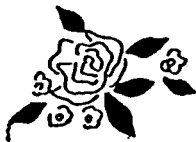
もう一回やりましょうか？ はい、それでは第二回目、乾杯！

どうも皆さん、遠いところをありがとうございます。とにかく、飲んだらすぐに食べましょう。それじゃあ、皆さん、いただきます！

司会 では、スピーチをお願いしたいと思います。皆さん召し上がりながらお聞きください。

参議院議員の中西珠子さんです。長い間、女の問題に取り組み、国際的な活動も続けてこられた方として、ご存じの方も多いと思います。

中西珠子 本日は△あぐら△十五周年記念、ほんとうにおめでとうございます。きょう午後からの講演会、また皆様方の質問の鋭さ、ほんとうに感銘を受けました。上野先生も指摘になったように、選択縁、女縁のネットワークを広げて、この世の中を良くしていくためにも女性ががんばりませんと、出歩いて女性ががんばりませんと、日本はますますひどいことになっていくのではないかと、私は心配しております。たとえば、均等法は出来ましたが、ほんとうの意味の雇用上の男女平等もないし、最近の労働基準法の改正にもありますように、ほんとうに女が企業の経営の効率のために使われてしまうようなことになっていく。



また、男性が会社人間として、家庭でほんとうに幸せをかみしめることができないような、ものすごい長時間労働を強いられていて、子どもは、ちっとも父親との触れ合いがないような情況に置かれ、女だけが育児をしなければならぬという現状は健全ではない。固定化した男女役割分業観がいつまでも是正されず、まだずっと日本にはびこっておりまね。それからまた、老人介護が女性の負担になっているという問題もございませう。

私は、均等法や労働基準法の改正ばかりでなく、二年前に通った労働者派遣事業法の改正にも取り組まねばならない。またこれからパート労働法をつくるという動きも出ておりますけれども、パート労働者の現状をそのままにしておいて、ただちょっと福祉的な要素だけを加えたような、パート労働法が出来たのでは困りますし、いずれにしても、女性の地位の向上と幸せのためにがんばっていきたいと思っております。私は常日ごろから「あごろ」の皆様方のご活動に対して、心から敬意を表しておりましたし、また、斎藤さんが十五年前にお始めになったこの「あごろ」がこのように立派に発展して、日本じゅうで支部をお持ちになり、また、私もきょう三冊、本を買わしていただきましたけれども、すばらしい出版活動をなすって、ほんとうにいいお仕事をなすっている一方、時には孤独にさいなまれる家庭の主婦の憩いの場、心の洗われる場というものも提供なすって、ほんとうにすばらしい活動をなすっていると、心から敬意を表しております。

私も女として、国会の場で一所懸命女性の問題を取り上げて闘っていきたいと思っておりますが、皆様もどうぞお元気で活躍下さいますように、心から皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。「あごろ」の一層の発展、斎藤さんはじめ皆様の一層のご健勝をお祈りいたしまして、私のご挨拶といたします（拍手）。

司会 中西さんはたいへんお忙しい中をおいでくださいましたが、またこれからお回りになる所がありがたいです。と、とり急ぎスピーチをお願いしました。

皆様、おなかもだいぶおすきと思います。しばらくお休みしますので、しっかり食べて、話して、飲んでください。あと十分ぐらいしましたら、またマイクをゲリラ的に回して、いろんな方にお話ししていただきたいと思います。

* * *



司会 では、スピーチを再開します。

「宮本百合子」の評伝や横浜事件のドキュメンタリーなどで皆様よくご存じの中村智子さんをお願いします。

中村智子 ハあごろV十五周年おめでとうございます。私はこんどハ榎目(まさめ)の会Vという会をつくらうと呼びかけたところで。榎目とは、節(ふし)がない、つまり夫と子ども、夫子(ふし)のない女性の会ということと名づけたわけです。非婚、離婚、死別を問わず、夫子のない女性が、榎目の縁(上野さんの言われた女縁のひとつ)で結ばれた新しい友達(輪)をひろげようということです。

十一月十五日に初会合をひらく予定ですが、六百人を超す申し込みがあり、会場が百二十人しか入れませんので、五人に一人の抽せんにしたところです。「高齢化社会に向けて、シングルライフを前向きに楽しく心豊かに生きよう」というだけの呼びかけに、これほど大勢の女性が、申し込みのがきに熱い期待を記して参加されたことに、正直いって驚いています。これから発足いたしますので、十五年のキャリアを持たれるハあごろV先輩のご経験を学びたいと存じます。よろしくお願いいたします(拍手)。

司会 次は「ニコニコ離婚講座」の円(まどか)さん、どうぞ。

円より子 先ほど、ちょうど斎藤さんにお会いしたので、「どうしておやめになるんですか」とお聞きしたんです。そうしたら「もう疲れました」とおっしゃる。さまざまな意味があると思いますが、文字どおり「疲れた」というのもよくわかります。ひとつのことをし続ける、ネットワークを持続するのは大変なことですよのね。

私も「ニコニコ離婚講座」を始めて十年になるのですが、私もまた時々疲れて、やめたいなあと思うことがよくあるんです。それでも、離婚に対しては世間の目がまだまだ冷たいんですね。「離婚するのもいい」と言う人、つまり離婚の賛成派がかなり増えてはきていますが、それはあくまで一般論であって、「でもやっぱり私はしないわ」という方が多い。特に男の方と話す腹が立つてくるほど離婚への偏見が大きいだけに、まだまだ聞わなければいけないと思うので、元氣じるしで生きていきます(拍手)。



司会 なかなか珍しいお顔が見えて、もう何年ぶりかなあというようで、大変お話が盛り上がっているようです。私なんか初めてここに出まして、びっくりしたり感心したりなんです。が、ふだん、なかなか直接お目にかかれないう方のお話もありますので、どうぞこちらにも、お耳を傾けてください。

△婦人問題懇話会Vの木下さん、お願いします。

木下ユキエ 十五周年、ほんとうにおめでとうございます。私は△日本婦人問題懇話会Vという大変いかめしい名前の会の会員でございます。

実は斎藤さんも、△わいふVの田中喜美子さんも、昔から同じ△懇話会Vの仲間同士なのですけれども、斎藤さんが新しくこの△あごらVを作られた意義を、あとになって「なるほどそうだったのか」と思い当たりました。私、実は明治以来の婦人団体とか、女性の集団とか、そういう歴史的なものを、発生順、創立された順序で、明治初年の頃からずーっとリストアップして並べてみたことがあるんです。そうすると、その名称というのは、ご存じのように、婦人とか新婦人とか、日本婦人とかいうのが上についていましたね、途中がちょっと違って、最後のほうは協議会とか協会とか、何々同盟とか何々なとかとか、もうほとんどずらーっと、日本の女性団体の歴史はそれで埋まってたんですね。そしてある日、ある所でパッと、ひらがなの△あごらVというのが出て来るんです。もうこれは、女性のグループ活動の歴史の中では、後の世まではっきり記録され記憶される、一つのすごい転換だと思いました。

これはね、斎藤さんをはじめとした皆さんの新しい運動っていうかな、女たちはこういうふうにして生まれ変わって、飛び立っていくんだということが、「名は体を現す」と言いますけれども、実によく、この△あごらVが象徴していると思います。そして、それに共感し協力し合って一所懸命支えていらっしゃる皆さんというのは、ほんとうにすばらしいと思う。私も同じ△懇話会Vの仲間として、斎藤さんのような先輩を持たたことをとても頼もしく嬉しく思っています。

実は私どもの会も、今年二十五周年になるんです。それで、きょう、会場で百一、三十枚ほどチラシを配らせていただきましたが、十一月十四日に、私どもも記念集会をいたします。で、その一つのイベントとして、△パ



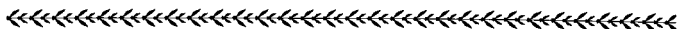
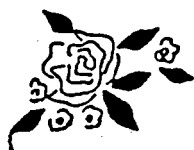
「ト」は、この四半世紀間の女性の状況をふり返りながら、女性問題の評論や運動、または研究活動を精力的に続けてこられた方たちが三人、まずお話をします。みんな会員なんですけど、樋口恵子さん、松井やよりさん、井上輝子さん。その後に「パートⅡ」として、実は二十代の女性たちの発言が続くんです。私たちが会員の手づるで出会えた、さまざまな大学出の、いろんな働き方をしている人たち、そういう、これからの二十一世紀に向けて女性の問題を背負って切り開いていこうとする人たちをみんなで口説いて九人確保しましてね、きのう打ち合わせをすませました。その方たちに壇上に登っていただきまして、昔からこういう運動をやってきた四十代、五十代世代の人間と、その若い、これからの人たちが、どういうふうにやってつなげていくか、そういうお話し合いをするつもりであります。夜は、皆さんと同じように、こうしたパーティーの場も設定してございますので、もしお時間ございましたら、ぜひお出まじただきたいと思います。お祝いに駆けつけましたのに、宣伝を加えまして申しわけございません。

どうも、きょうは皆さんおめでとうございました（拍手）。

司会 続いてもうひと方お願いしたいのですが、ずーっと八住民図書館Vのお仕事をしていらっしやる丸山さん。こういう席では非常に貴重な男性でいらっしやいます。どうぞお願いいたします。

丸山 尚 いくら八あぐらVのパーティーでも、男が一人というのはさびしいです（笑）。網野さんとは若干面識があったものですから、網野さん、ご出席くださると思って期待していたのですが……。ただ、とっても幸せです。この会場に何人の女性の方がおられるかわかりませんが、黒一点というのは、私の生涯ではこれ一回きりでしょう（笑）。（「また来てください」等々の声） ありがとうございます。

それはともかくとしまして、八あぐらVの活動というのは、非常に歴史的に意味があると思います。戦後の社会の中で女性が果たしてきた役割というのは非常に大きい。私は社縁は持っておりませんけれども、男の端くれですので、きょういろいろ壇上でお話になったこと、たいへん耳の痛い思いをいたしました。しかし、男社会も変わってきているわけでして、これからは、少しは期待できると思います。



例えば、私は八住民図書館Vという市民運動を中心としたいろんな自主的な出版物やミニコミの収集と公開保存、そういうことを目的にした資料センターをやっております。もちろんその関係で斎藤さんを存じ上げ、きょうこへ来てはじめてわかったのですが、田中喜美子さんと藤谷不二枝さん、私たちがやっております八住民図書館Vを支えてくださっている方々が、八あごらVとかかわりがありだった。で、きょう初めてここで会った。こういうネットワークの場を与えてくださったってことは、私がこれから八住民図書館Vをやっていく上で、たいへん大きな励ましを受けたと思っております。やっぱり、男も大事ですけれども……失礼しました(笑)、女も大事ですけれども、男もやっているんです(拍手)。

この八住民図書館Vというのは、始まって十二年経ちますけれども、さっきも田より子さんとお話しております、最初のメンバーはいるのかというと、誰もいないんです。いないんですけれども常に十人前後の人たちが何やかやとやってくれておりますと申し上げたんです。ただ、現在十二、三人の中核メンバーがおりますが、女性是一人です。あとは全部男。男でも無償の行為に殉じて、一所懸命やっている人はいっぱいいる(拍手)。

これからは、男と女がどうやって手を取り合っていくかということなんです。今までは、女性にうんと負担をかけ過ぎました。一人ではできないことを、女性は集団を組んでやるという力を持っています。例えば八草の実会Vはたいへんな歴史を持って、一つの実績を果たしています。先月、私は八どんぐり会Vの三十周年にもお邪魔させていただきました。これはたいへんな力を、やっぱり男に対して与えている。世の中に対して、たいへんな影響力を持っています。

それから八あごらVの十五周年、八わいふVその他たくさんさんの活動が、男に対してたいへんな影響力を持っている。そういうことをもうちょっと、フェミニズムももちろん結構ですけど、大事にしていきたいと思っています。これからは、男と女が一緒になって世の中をどう変えていくか。やっぱり、柔らかくって、したたかな発想をお互いに持ち合って、励まし合ってやっていきたいと思っています。そしていま八住民図書館Vを、ここにおられるたくさんの方々が会員になってくださって、支えていただくと嬉しいんです。もちろん、いま私が名前をお挙げした方以外にもたくさん、恐らく会員の方はおられるに違いありませんが、ぜひ、そういう形でこれからもよろしく願います。ちょっと酔っぱらっちゃいまして、どうもすみません(拍手)。



司会 心強い応援歌をありがとうございます。

* * *

丹羽雅代 ハぐるーぶ・どくだみVです。歌をちょっと歌いたいと思います。

(ハぐるーぶ・どくだみVの皆さん出演。

ギター伴奏で「らしくの歌」)(拍手)。

ハぐるーぶ・どくだみVというのはどうして出来たかとよく聞かれます。ドクダミのダミという字は、矯める、止めるという字なんです。ドクダミというのは、ご存じのように、初夏のころに白い花を咲かせます。すごい地下茎が発達しているところから、女たちの運動、私たちの運動も、あの繁殖力のように、いろんなところにネットワークをつなぎたいという思いで出来たグループで、名前もハぐるーぶVとしました。

私たちのグループは、ふだん歌を専門にやっているのではなくて、こういう、きょう来ているメンバーも、子持ちだったりシングルだったり、ふだんは仕事をしながら……。わりと家が離れているものですから練習するという時間がないのですが、歌を専門家に任せるのではなくて、私たちも歌をひとつの闘いとして歌っていくということをやっています。専門家が歌をうまく歌えばいいというのではなくて、私たちが誰でも歌うということのできるようにと。ですから、皆さんにも先ほど楽譜をお渡ししました。これからそれも歌いますので、一緒に歌を覚えていってほしいと思います。

次に、今年の四月にあった地方選の時に、私たちのメンバーで作った新しい歌を歌いたいと思います。

(演奏)「新しい風」(拍手)。

らしくの歌

詩=ひろば合唱団 曲=佐藤十三郎



1. 子供 らしく 大人 らしく 生徒 らしく
2. お嬢さん らしく 姑 らしく 母親 らしく



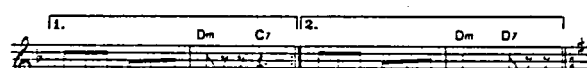
先生 らしく 娘 らしく 息子 らしく
父親 らしく 旦那 らしく 主婦 らしく



男 らしく 女 らしく 「らしく」とはひとびとを
男 らしく 女 らしく 「らしく」とはこゝろじんを



おなじかおに することば「らしく」とはじぶんを
せけんが規定 することば「らしく」とはじぶんを



1. しはるこーとは あまやかすことば
2. しはるこーとは あまやかすことば



部長 らしく 課長 らしく 半社員 らしく お茶くみ らしく



アルバイト らしく パート らしく みんな らしく だ



「らしく」とは 管理者が 管理される ひとにつかう



支配 者が 支配 される ものにいうことば



社会人 らしく 国民 らしく 日本人 らしく 国際人 らしく



らしくらしく らしくらしく らしくらしく だ だ だ



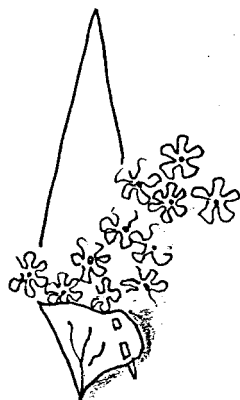
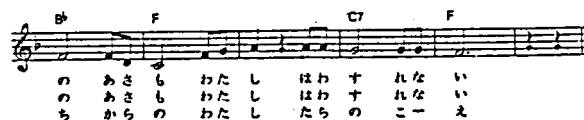
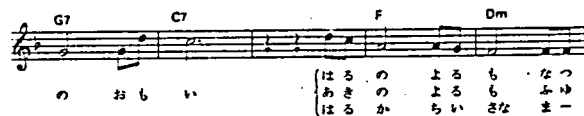
なんという胸の痛みだろうか

39・曲=ビスレータ・バラ 訳=上田達生



私は忘れない

詩=七五郎 曲=山崎宗彦





次に「大きな橋」を歌います。これも私たちの仲間が作った歌で、国境を超えて連帯していこうという歌です。
(演奏) 「大きな橋」(拍手)。

今度は、一番最初に歌いました「なんという胸の痛みだろうか」を歌いたいと思います。ビオレータ・パラの作った詞です。とってもやさしいメロディーで、やさしい歌です。覚えて帰っていただけたら嬉しいと思います。歌詞カードはさっきお渡ししたと思いますが、ごいっしょにどうぞ。

(演奏) 「なんという胸の痛みだろうか」(拍手)。

もう一つ、「生命の歌」。先ほど歌いましたので、覚えていらっしゃる方はいっしょに歌いましょう。

(演奏) 「生命の歌」

たのしく情熱こめて歌おう生命の歌を
たのしく情熱こめて歌おう生命の歌
ふしぎな力あふれ、歌おう生命の歌を
ふしぎな力あふれ、歌おう生命の歌
やさしく怒りこめて歌おう生命の歌を
やさしく怒りこめて歌おう生命の歌

△東海Vの高橋ますみさんは名古屋でしっかり歌唱指導をして下さるそうです。ぜひお願いします(拍手)。
(「ありがとう」「ありがとうございました」の声 あちこちで)

司会 すばらしい歌を聞かせていただいて、宴も盛り上がってきましたが、ここで、きょうおいでになれなか



った方々から、激励のお手紙とか電報とかいただいていますので、紹介させていただきます。

山口のリ子（事務局） 一部をご紹介します。

まず、祝電から。

パート末組織労働者連絡会 山口静子さん 記念集会おめでとうございます。この十五年 多くを学ばせていただきました。女たちの時代を開く力を信じつつ、ご活躍とご健康を心からお祈り申し上げます。

舟本恵美さん おめでとうございます。△あごろ△の運動が女の歴史をいかに支えてきたか、いま実感しています。

ボランティア労力銀行 水島照子さん △あごろ△十五周年の記念のつどい おめでとうございます。△ボランティア労力銀行△も今年十五周年を迎えました。来し方行く末に共感するものが多く、ご盛会と、ますますのご発展をお祈り申し上げます。

三浦文子さん △あごろ△十五年の歩みを祝し、今後のご発展をお祈りします。

次に、お葉書です。

青木やよひさん 十五周年おめでとうございます。もう、あれから十五年にもなるのかと、創刊号に書かせていただいた当時のことを、信じられない気持ちで思い浮かべております。当日は残念ながら先約がございますので伺えませんが、ご盛会のほど念じ上げます。

天野正子さん △あごろ△十五周年、本当におめでとうございます。△あごろ△もいよいよ青年期に入ったのですね。より一層、自由な役割実験を演じられることを期待して。

伊藤雅子さん この度は、△あごろ△十五周年をお迎えのこと、心からの敬意をもってお慶び申し上げます。これまで△あごろ△が果たしてこられた役割の大きさ、拓いてこられた道の貴重さを、あらためて思っています。当日を楽しみにさせていただいていたのですが、急に出勤しなければならなくなりました。無念です。ご厚意に謝しつつ、おわびいたします。



井出祥子さん あいにく、岡山での学会へ出張のため出席できず、残念に、また申しわけなく思います。これまでの△あごらVの社会への貢献に感謝するとともに、今後のご発展をお祈りいたしております。

大野 曜さん（文部省婦人教育課長） △あごらV十五周年おめでとうございます。女性をめぐる情報を女性の手で、確実なネットワークとして作りあげていらしたこの十五年間の活動と、そのためのご努力、熱意に心から敬意を表します。常に民間の立場、女性の立場から発言され、これからもそうであってほしいと思います。

たいへん残念ですが、山口県へ出張のため、おうかがいできません。ご盛会をお祈りいたします。

金住典子さん 十五周年おめでとうございます。女性の視点からの幅の広い情報誌、女性の視点からの鋭い問題の掘り起こし、女性の視点の全国的ネットワークづくり、いずれも△あごらVがおはじめになって、つづけておられる輝かしい足跡であると思います。これからますます斎藤さんにはお体に気をつけられて、皆様とともにがんばっていただきたいと存じます。

神田道子さん 十五周年おめでとうございます。着実な歩みをされていることを評価し、また心づよく思っております。当日は残念ながら所用のため出席できません。今後のますますのご発展を期待いたしております。

日下部穂代子さん △あごらV十五周年、心から「おめでとう」を申し上げます。斎藤さんに初めてお会いしたのは、たしか新橋駅のホームのようだったと記憶していますが、原稿をお渡ししたのを覚えております。

十五年間というのは本当に大変な期間です。静かにつつましやかな斎藤さんのなかに、すばらしい情熱と実行力が秘められていることを知るにつれて、感動と感嘆を覚えずにはいられませんでした。今後、ますますご活躍を祈っております。出席させていただき、お祝いを申し上げたく思っていたのですが、突然父が入院することになり、お伺いできなくなりました。まことに残念ですが、当日のご盛会と限りないご発展を、かげながら祈っております。

小竹雅子さん（障害児を普通学校へ・全国連絡会） 十五周年のつどいのご招待ありがとうございます。網野善彦さんには、私たちの会でもお話をうかがったことがあります。パネルディスカッションで新しい地平を拓くことができればと期待いたします。

駒野陽子さん 十五周年おめでとうございます。パネルディスカッションもパーティもぜひ伺いたいと存じて



はおりますが、あいにく、前から午後は講演をたのまれており、夜は教え子の結婚式があり……というわけで、私はどうにもやりくりがつかず、ほんとうに残念でございます。△婦人問題懇話会△も今年が二十五周年で、いま、十一月十四日に開く予定の記念集会の企画を練っております。△アジアの女たちの会△も十周年。今年は記念集会の多い年ですね。

近藤悠子さん 十五周年おめでとうございます。きびしい状況のなか、よくがんばっていらっしやいましたね。当日、私は先約がございますが、「婦人民主新聞」の編集長 北村敏子が参上いたします。なお、辻 和子さん、なつかしい方です。よろしくお伝えくださいませ。

寿岳童子さん 十五年の歳月、しみじみとおよろこび申し上げます。十月十七日は予定が入っていて残念です。不参加をお許しください。

俵 明子さん ぜひ伺いしたいのですが、その日地方にありまして 出席できません。残念です。

十五年、重い年月なので、あらためて深い敬意を捧げます。

堂本暁子さん 女のさまざまな局面と一緒に歩み、切り開いた△あごろ△に敬意と応援を心から送ります。

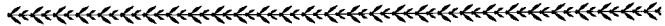
特に優生保護法の歴史・成立過程を調べ、人口政策としての性格を明確にして下さった仕事は力作でした。今後もあります、二十年、三十年の歩みを期待します。十七日は仕事で出張しなければと思いますが、まだ予定が立ちません。

永畑道子さん 先駆的存在の△あごろ△、たいへんな苦心もありだったことでしょう。心からおめでとうを言わせてください。当日、東京におりませんので欠席いたしますが、盛んなお集まりを、遠くから祈っております。

縫田暉子さん △あごろ△十五周年、おめでとうございます。ほんとうによくがんばってくださいたと、あらためて敬意を表します。記念の日是不在で参加できませんが、ご盛会を祈っています。

羽太宣博さん △あごろ△十五周年おめでとうございます。日本の婦人運動を地道に支えてこられたこれまでの活動と熱い思いに敬意を表します。

当方も仙台に来てまる一年。市民運動をはじめ災害・国際親善など、あらゆる問題にとりくんでいます。こち



らの婦人団体とも、取材を通していろいろ勉強が続いています。しかし運動のエネルギーは今一つというのが実態です。「何とかしなければ」といつも自分に言い聞かせては、右に左にと走り回っています。

林郁さん 十五周年 おめでとうございます。よくガンバリましたね。

十五歳（十五周年）は中学三年。最も多感で揺れるとき。「女」を強調したくない女が増えつつあります。一見、多様化の時代です。この過渡期（コーナー）を、どのように女を素敵に生きるか。（私は今、もの思う秋。です）。

林慶子さん 創立十五周年おめでとうございます。

長いようで短く、短いようで長かった十五年間の上に「今」が構築されている、と感無量です。思いは一つ、すべての打算を打ち捨てて燃えたこの十五年間、多くの友とともに生きたこと、私の誇りです。

東浦めいさん 十五周年、ほんとうにおめでとうございます。一九七〇年代、ずいぶん景気のよいフェミニストのグループがたくさん生まれましたが、十年以上長生きしたものが少ない中で、いつも「大丈夫かしら」とハラさせながら義務教育を卒業されたこと、ひとえに皆様方のご努力のたまものと深く敬意を表します。当日、残念ながら伺えません。今後のご発展をお祈り申し上げます。

福本英子さん 十五周年だそうで、おめでとうございます。都合をつけてぜひお祝いに参上したいと思っておりますが、いつものことで、まぎわになって、やっぱり時間がとれないことになってしまいました。残念ですが参加できません。ご了承ください。予定の立ちにくい毎日で、ほんとうに心残りです。

十七日は盛会でありますように。そしてへあごらVがますます大きい環になりますように。

増田れい子さん 十五歳 おめでたうお祝い申し上げます。十七日の集会、魅力満点なのに、私は福岡でおしやべりをしておりまして残念に存じます。これからますますエネルギーな活動を。支援惜しみなく、ついでまいります。

もろさわ・ようこさん 十五周年おめでとうございます。ますますのご発展を、信濃の山国の地から、念じております。講演とディスカッションに、東京近辺のへ歴史をひらくはじめの家Vの仲間が何人か参加する予定です。



山本まき子さんへあこら十五周年記念、心からお祝い申し上げます。明日に向かって限りなく前進されま
すよう期待し、へあこらVの皆さんに拍手を送ります。

喫茶りんこの木 十五周年おめでとうございます。私たちもお店をはじめて二年半。病氣と自転車操業でヒー
ヒー言いながらも、「持続は力だ!」と、がんばっています。細谷さんには、いつも励まされています。札幌の
女たちの動きの中に、いつも身をおいていきたいと思っています。これからも、どうぞよろしく願います。

「静かでゆるやかで 確かな運動」に乾杯!

そのほか、各地からお葉書をいただいております。

浅野道子さん	伊賀孝子さん	石井セイさん	石井雪枝さん	伊藤祐子さん
犬養智子さん	井上輝子さん	岩見禮花さん	巖谷平三さん	浦野文子さん
小沢美智子さん	金子みつさん	加納美紀代さん	小島サカエさん	近藤いね子さん
貞閑 晴さん	佐藤欣子さん	猿橋勝子さん	志熊敦子さん	下村満子さん
高木由利子さん	高橋喜久江さん	田辺聖子さん	中島はるみさん	中村紀伊さん
中本かず子さん	長橋の男さん	二瓶万代子さん	萩原洋子さん	橋爪希代子さん
服部 正さん	平岡ふき子さん	平岡美智子さん	福島美代子さん	藤田たきさん
古屋繁子さん	保科朋子さん	本多房子さん	松本路子さん	三巻秋子さん
務台きよ子さん	山川振作さん	山崎朋子さん	山本和子さん	渡辺晴子さん

ほかにもたくさんの方々からいただいておりますが、時間の都合で割愛させていただきます。

司会 あちこちでお話の花が咲いているようですので、しばらくまた、グループコミュニケーションをお続けく
ださい。

* * *



司会 では、またスピーチをお願いしたいと思います。

トルコからおみえのミナイさんです。いま、BOC出版で「イスラムの女たち」という翻訳の本を作りかけているところなんですけれども、その著者の妹さんに当たられる方です。お名前は、私フルネームで伺ったのですが覚えきれませんでしたので、ご自分でおっしゃっていただきたいのですが……。本の内容も、どうぞ全国の仲間にPRしてください。

ミナイ 私、ナフィサ・ミナイと申します。十五周年記念おめでとうございます。姉の本を紹介してくれと頼まれたのですが、今のところはあまり日本語ができませんので……。英語でしたらもっとよく説明できますけど。この本は、初めて一九八〇年くらいにアメリカで出版されました。その後、イギリスとドイツで出版されて、これからは日本語で翻訳されます。イスラム女性の問題についていろいろ研究して、ずーっと昔からイスラムの女性たちがどうやって変わっていったかという本です。非常に面白いと思います。翻訳の終わるのを私共のしみにしています。よろしくお願いします（拍手）。

司会 続きまして、きょう、パネラーとしてお話しいただいた辻さんと上野さんに、だいぶお疲れと思いますが、今度はリラックスして、ぜひ何か一言お願いしたいと思います。

辻 和子 ハあごろ九州Vの皆さんにはたいへんお世話になっております。ハあごろVの方というのは、なにかオズオズしている人間を引っ張り出してきて話をさせるとか、そういうのがすくお上手なんですね。きょうもまんまと福田さんの説得に乗りまして、もう終わりましたけれども、福田さんに対して恥をかかしたのではないかと、たいへん申しわけなく思っています。

でも、皆さんがさっきおっしゃったように、ハあごろVというのは、実に独特な集まりで、私は心から尊敬しています。十五周年、ほんとうにおめでとうございます。これからますますご発展なさいますようにお祈り申し上げます。ほんとうにきょうはありがとうございました（拍手）。



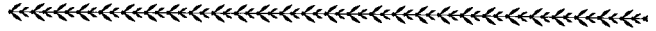
司会 ファンが多くて、あっちこっちでつかまっていらっしやる上野さん、壇上でもリラックスしてありましたけれども、また一段とリラックスしてお願いいたします。

上野千鶴子 さっき、言い足りなかったことを一言。私は、△あごろ△の皆さんね、責任があると思います。あなたたちは——残念ながら私たちみんなそうですけどね、平均年齢が上がっています。おばさんばかりでしょう（「言える言える」の声）。私たちね、やっぱりこの思いをね、十歳以上若い下の世代に手渡すことができる。あの人たちが今どうなっているかといったら、子どもにかまけた十年間過ごしたら、あと、企業にパートでからめとられるっていう、その生活の中にすぐ入っていつちゃってるのね。女縁の味を味わうことなしにね。この人たち、また、家族と企業の間をパタン、パタンと往復するんじゃないかと心配なの。私たちが今やっている女縁だって、私きょう、ずいぶん△あごろ△の方をすばらしいとお褒めいただきましたが、ほんとうにすばらしい△あごろ△であっていただくためにはね、「女縁が十五年続いた、ばんざーい」って言うだけじゃなくってね、伝えていただかないと思うの。種播いてください。いつ会っても同じような顔ばかりとかね、だんだん毎年毎年 同窓会みたいに年とって行って（笑）、これで二十年だね、これで三十年だね、では、やってつままないと思うの。やっぱり、今まで私たちが積み重ねてきたものを、ほんとうに種播いて育てていてください。いったん女縁の味をしめたのだから、その味を他の人にも味わわしてあげてください。それは、あなた方、あなた方だけでなく、私たちみんなの責任だと思っています（拍手）。

司会 もしかしたら今のお話は、各拠点の共通の悩みではないかと思っています。

△あごろ九州△も、私は二十代で入りましたけれども、いま、二十代の会員がいらないですよ。それはもうほんとうに、どうしよう、という大きな問題で、いつもそのことを思っています。

続いて、全国からお集まりの会員の皆様にご発言いただきたいと思います。まず、きょう一番遠い稚内からいらした熊谷さん、どうぞ。



熊谷千恵子 △あごらVの十五周年おめでとうございます。どうして私がここに立つのかわからないのですけれども、多分日本の最北端から来たというだけで、珍しがられているのではないかと思います。日本の最北端にも上野千鶴子ファンは何人かいます、ぜひとも呼びたいという話もちらはらと出ています。

きょうはほんとに、こんなすてきな会を催してくださって、ありがとうございます（拍手）。

司会 次に、仏教界の女性差別について鋭い問題提起をつづけていらっしゃる藤谷さんと羽向（うこう）さん、どうぞ。

藤谷不三枝 △真宗大谷派における女性差別を考える女たちの会Vのメンバーです。真宗大谷派においては、女性差別に関しては、まだ近代に到っていないというぐらいひどい状況にあります。例えば、お寺の住職になれないとか、あるいは、教団の中で議員にはなれないとかいうふうに、戦後も来てないわけです。そういう中で、例えば近代個人主義の批判ということが話される場合があるんですけれども、どうも女性差別に関しては近代にもまだ到っていないのに、短絡的に何か近代個人主義を批判されると、どうもおかしいという感じが、ひとつしています。

そのことと、宗教教団にありがちなことなんですけれども、非常に観念論的、あるいは教条主義的になってしまっていて、枠を外れた、羽目を外した運動あるいは連帯ということがなかなかできず、宗教者ばかりでかたまっていたり、というように陥りがちだと思うんです。私はいろんな一般の方々、あるいはセクトの運動とか、いろんなほかの思想の方ともかわり合って運動をしていきたいと思っています。その二つが言いたかったことです。どうも（拍手）。

羽向貴久子 愛知県の西尾市からまいりました羽向と申します。

△真宗大谷派における女性差別を考える女たちの会Vという長たらしい名前の会の連絡先をしています。ひとりでずうっと女の問題を、ボーヴォワールを読んでから二十数年考えておりましたけれども、ちっとも仲間を



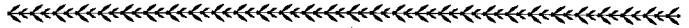
見いだせずになりました。寺に入りまして大きく問題が立ちはだかつてきまして、お仲間が見つかったと思ったら、どんとどんと輪が拡がっていつて、今まで何をしていたのだろう、「あごろ」というような機関誌もあったのかと最近二か月ほど前に知って、自分ではひとりであつたつと本を読んでもつもらったのですが、どこに目を付けていたんだらうと思う昨今です。これからは縁が出来たことで、いろいろ叱咤していただいて、やっていきたいと思っております。よろしくお願いいたします（拍手）。

司会 それでは、あと、皆さん順々に自己紹介をなさりながら、できるだけ発言してください。

羽後（はのち）静子 ハ東海BOC Vの羽後です。きょうはカメラのほうを務めさせていただきました。四年前、ハあごろ九州Vからハ東海BOC Vに移り、今はケータリング・サービスを仲間とやっております。パーティー料理の出張サービスです。陶芸展のオーブニングパーティー等、二年半で五十回近くパーティーのお手伝いをさせていただき、喜んでいただいております。これも一つのネットワークキングの方法かなと思っています。興味のある方には、あとでまたお話をしたいと思います（拍手）。

沢田好江 埼玉県の大宮からまいりました。私は先月の後半に、近くに出来た図書館で高橋ますみさんの「女40歳の出発」という本とハ東海BOC Vの「主婦の壁を破るセミナー」という本を読みました。ただ、東海のことしか書いてなかったので、東京はどうなっているのかと思ひ、104に「ひらがなでハあごろVと書くところはありませんか」と聞いたら、一つだけあるということで（笑）電話番号を教えてもらって電話したら、こういう会合がありますからいらっしゃいませんか、という手紙をいただき、入会案内を読みまして、ひかれるものがありましたので来しました。

私は月二回、働くお母さんとその子どもたちにモダンダンスの指導をしています。働いているお母さんたちです。どうしても夜なんです。場所は池袋で、七時から……といっても七時二十分から八時ごろなんですけれども、がんばりまして、私の産休とかいろいろとりまけて、一応六年続いています。現在私自身はモダンダンス



はやっておりません。去年の二月、けいこ中に腰をいためまして、どうも踊れそうもない、とお医者さんに言われ、ちょっとメゲていたのですけれども、何かしたいなという気持ちでこちらに参加しました。きょうは山口さんが励ましてくださったので、三歳になる一人息子を置いてこちらに泊まります。なにか心配だなぁと、時々ふと頭をかすめているんですが……。

体を動かすことが好きなので、今はリハビリを兼ねて太極拳とヨガを勉強しています。みんな、これからだんだん皆、年をとっていったって、若くなることはあり得ませんので、どうやったら元気に過ごせるかということをやりたいのと同時に、体を動かす人も動かさない人も集まれる、そういった溜まり場のような広場のようなものを、埼玉県にもつくれたらいいなぁと思っているところです。どうぞよろしくお願いいたします（拍手）。

藤井里子 せひ埼玉県につくってください。私は大阪ですけど、今おっしゃってくださいだったので心強くなりました。実は私もここに入ってから十年以上ですが、小さな子どもを連れて来れるのも、この良さんですよね。ところで、女の広場——だいたいハあごろVなんて格好いいけれど、これギリシャ語なんですよ。私、知らなかった。私はこれだね、ポルトガル語の通（つう）なんです（笑）。ポルトガル語ではね、アゴーラといったら、今、現在という意味なんです。誰も知らないでしょ（笑）。信じない？ ほんとなんだから（「信じます！」の声）。ありがとう！ で、ちょうど語呂がいいでしょう。「広場」、そして「今」も大事なことから。「今」の「ひろば」がいい。で、「あした」になればまた「今」がいい。その広場を大阪でもせひつくろうと思っています。埼玉と一緒にね。いつ出来るか、それは知らんけど、それもまあ、死ぬまでやってもらおう（笑）（拍手）。

斎藤美栄子 ハあごろVは十五周年ですけれども、斎藤千代さんはもっとその前から活動を始めていらっちゃったと思うんです。ちょうどそのころ、私の大学の先生が「女子学生」国論」を唱えられ、私たち女子学生は、女性として、また一人の人間としてどう生きるか、とても真剣に考えだしたところだったのです。そんな折に斎藤さんのことを知り、千駄ヶ谷のビルの一室に、発足したばかりのABCVの事務所を訪ねて行き、会員にしていただきました。



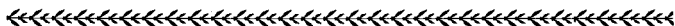
それから二十三年、「あごろ」の一冊目から読ませていただいている。『会員骨董品』という価値を持つだけで、私のほうからは何のお役にも立てず、申しわけなく思っています。その間私は、娘、妻、嫁、三人の子の親、そして少々の仕事を持つ女として、忙しい毎日を過ごしてきました。

「あごろ」とともにずっと女性の生き方について問い続けてきて、女性解放はまず夫婦の間から、と思ったのですが、夫の母や弟がいたりしましたから、「あごろ」なんか読んでいるだけで、すごい思想の本を読んでいるみたいに思われて（笑）……。子どもが出来たときなど、疲れも手伝って、私たち夫婦の生活は平等じゃない、なんて、けんかばかり。結婚しなきゃよかったんだ、と言われ、じゃあ、というんな本読んでみたりしても、この男性も同じみたいで、換えてもあまり変わり映えしないという感じがして（笑）。

何だかと言っても、次々と押し寄せる家事育児を片づけなきゃならず、「あごろ」もさっと目を通してはツンドクという状態が長年続きましたが、今では育児が楽になり、興味を持って続けてきた仕事のほうにかなりウェイトがおけるようになってきました。こうなってきましたと、夫のほうが重労働でかわいそうかな、という感じで見られる余裕が出てきたようなところです。

さて、女性として人間としてどう生きるべきか、この結論はまだ出ていません。というか、こういうパターンでなくちゃいけないということはないな、と思うようになりました。個人の性質や好み、それぞれの状況に応じて、その人の一番望む方法で生きてゆければいい。まあこれは当然のことで、男にも女にも言えることです。これがなかなか難しい。男性、女性、子どもたち、このすべてが調和を保ちながら皆でハッピーになれるよう、これからも「あごろ」の皆様とともに模索していきたいと思います。ありがとうございます（拍手）。

加藤登紀子 八年ほど前に結婚して専業主婦をしていましたが、結婚で自分の姓が変わってしまったことが不満でした。「あごろ」の会員の人から、せめて「あごろ」の中だけでも旧姓を使ったら、というアドバイスをいただきました。あごろの仲間と古い友人の一部の人には旧姓を使っていますが、地域では戸籍上の姓なので、そこでの知り合いと、旧姓を名乗っている場で会うと戸惑うことがあります。旧姓を使う場を拡げてゆきたいのですが、一度戸籍名を使ってしまうと変えるのがたいへんで、むずかしいなあと思っています（拍手）。



山田和枝 名古屋からまいりました。△あごろVのことは、結婚して間もなく近くの東図書館によく通いました時に「あごろ」の本を見て、題名というか、そういうものに心は非常にひかれておりましたけれども、何となくああいうものを読む女というものが、非常に頭でっかちだけの女になるんじゃないかなという抵抗があり、わざと遠ざけるようにしていたのです。それでも、ここにいらっしゃっている石川さんが家庭科共修の問題をやってみて、こちらのほうの問題、少し考えるようになって、それから「あごろ」の本を紹介していただいて、かわるようになってきました。まあ、かかわってみて、やはり頭でっかちというのではなく、ほんとうに自分の足もとを見つめるところから物事が始まるということを、いま非常に痛感しております。たくさんの方に会えたことをほんとうに感謝しております。ただ、上野先生もおっしゃってましたように、これからの若い人たちにこういうことをどう伝えるのかという、やはりそういうところが一番難しいとこだなと感じております（拍手）。

浅野美和子 愛知県の尾西というところからまいりました。

高橋ますみさんと二人で△あごろVの勉強会を名古屋で始めました。最初のうちはずいぶん盛会で、お互いに講師をやり合ったりしていたのですが、悩みを話し合うというので自己紹介ばかり（笑）。そういうことを続けて、五周年、十周年、そして今回十五周年。十五歳といえばおとなの入り口なんだなあという感じがしています。最初△あごろ東海Vを始めたころは、女性問題というのまだまだわからないことだらけで、とにかく女性問題というのが頭についたいろんな運動をあれこれやってみたんです。けれども、私が一番やりたいのは女性史なんだということがわかってきまして、先ほどちょっと会場で話したように、網野先生に弟子入りをしまして、ちょっと勉強し、それからまた少し学校に行きまして、その後は女性史の勉強をして、いま△知る史の会Vという女性史を勉強する会を、高橋ますみさんの家でやっております。講座なんかと呼ばれて話したりしますが、それと同時に自分の勉強のほうをなんとかやっていこうと思うんですけれども、なかなかお金を稼ぐのと両立しない。経済的な自立と研究者としての自立はなかなか一致しないというのが現実です。

△あごろ東海Vも、いま、最初の状況とはだいぶ変わっており、何とかならなきゃいけないのではないかなあと考えております（拍手）。



斎藤千代 新宿の事務局におります斎藤でございます。

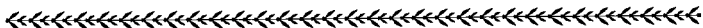
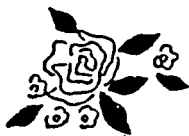
△あごらVの始まりといえますか その前身の△BOCVの時から考えてみますと二十三年かかっている、もうほんとうに、これはかわり過ぎだと思っております。一刻も早く足を洗いたいと思っておりましたが、きょうの十五年というほんとうにいい区切りが出来まして、やっと責任者も下ろさせていただけるようになりました。ほんとうに長い間ありがとうございました。

上野さんが「△あごらVはおばん宿で……」とおっしゃいましたけれども、こういうおばん族はもうこれで引退いたしますので、二十歳ぐらい若返って、さらにのびやかな、いきいきした△あごらVになることと信じております。どうぞよろしくお願いいたします（拍手）。

石川由紀 △九州Vから△東海V、そして△東京Vへと、△あごらVの渡り鳥（笑）です。夫が転勤する度に私の職業が変わるものですから、職業は何ですかと聞かれると一番困るという状態です。というのはいまこういうジャンルがないんですね。だから説明にちょっと困っているんですが、その話はこちに置きまして、いま一番がんばってるのは△家庭科の男女共修をすすめる会Vです。ずっとやっていますが、跡継ぎが出来まして、娘が事務局をやるといって若返りをしました。

きょうお昼、上野さんの話とかいっぱい聞きたかったのですが、来れなかったのは、午後△男の子育てを考える会Vの十周年記念会があり、多分△あごらVのほうで盛会だろうなと思って、天秤にかけて向こうのほうにいました。そしたら案の定そうでしたけれども。さっき△男の子育てを考える会Vに出いたと言ったら、△男の子育てる会V（笑）——そうじゃなくて、男が子育てにかかわろうという会なんです。

△あごらVの新宿の事務局には年に一回くらいは顔を出しますが、なかなか出せなくて、でも、きょうここへ来ると、懐かしい人いっぱい会えるだろうなと思って来ました。斎藤さん、すごくきれいですね（拍手、「斎藤さん乾杯！」の声）——△あごらVの事務局に行った時、斎藤さんがね「明日入院するんです」という時だったんです。あの時、もうすぐく、何と言ったらいいのかわかんなかったんですけれども、きょうお会いしたら、きれいな、とにかく！ 嬉しかったです！（拍手）ほんとうに。



あのお、引退とか何とかで、引退して普通のおばさまになりますと言った人が、またプロデューサーとか何とかで戻っていますけれども（笑い）、たぶん普通のおばさんかになるはずはないので、こういう引退があるのか（拍手）、それを見せていただけたら、私も、何か次の定年後とかいうか、それが考えられるような気がしますので、ぜひまたすてきな道しるべをひとつ作っていただきたいと思います。どうも長々とすみません。ありがとうございます（拍手）。

高橋ますみ 毎週木曜日の一時半には「瞑想ヨガ」というのをやっております高橋ますみでございます。実はヨガの先生から、「たのむから、わしの弟子だということを言わないでくれ」（笑）と。そうしないと、自分のところの看板に傷がつく（笑）、ということを言われておりますけれども、もう五年ぐらいヨガをやっています。で、そのヨガをやった後に、二十分間瞑想に入るんですけれども、その瞑想の時には、私は屋敷になってしまつて、いびきをかいてしまうんです（笑）。それで、私だけがいびきをかいているのかと思つたら、ほかの八東海BOCVのメンバーもみんないびきをかくというので、まあほっとしているんですけれども（笑）。

そういうことを始めたきっかけは、平安殿という結婚式場が名古屋にありまして、そこが仏滅でもシャンデリアを消すわけにいかない。それで、何かいい使い途がないだろうかということ、私ども八東海BOCVが無料で会場を借りることにしました。最初は仏滅だけという約束だったのですが、交渉の結果、普通の時も借りられるようになりました。まあ、そんなことでやっております（拍手）。

三船照子 仙台の三船です。夫の転勤で仙台に移り住んで、ちょうど十年です。

へあごろ十五周年の区切りに、私も何かやりたいな、と思つて、そのためのエネルギーがほしくて出かけて来ました。いま、落合恵子さんがハクレヨンハウスVで「女の本屋」というのをやっていますね。神戸でも「女の本がいっぱい展」というのをやっていますが、私もそのミニ版を仙台でやりたいと思っています。

私、いま、仙台の中心部に出来たファッションビルの四階にある百坪の本屋で週に二日働いています、オープンして半年、売れなくて、みんな頭をかかえています。売れなくて、というより、家賃がとて高く、人件費



やいろんな経費が大きいんですね。ただ開店のとき、経営者に「女性問題関係の本のコーナーをつくりたい」ということで声がけをいただき、二百五十冊選定して置いたものですから、この灯は消したくない、むしろ棚の拡充をしたい、と思っているのです。それで「女の本展」みたいなのをやって仙台の女のグループにもアピールし、私もお店に何かお返ししたい、そして何よりも私自身が、女の運動とか、時代の中で、人とか気分とかがどうなのか、とかいうようなことを、もうちょっとはつきりつかみたいな、というようなことがあります。そんなことをいろいろ考えて、いま、わりと興奮しているところです（拍手）。

桑原ちゑ子　桑原です。きょうはいろんな方に会えると思って嬉しくって。そしたら、やっぱり嬉しいことばかりでした。どうもありがとうございます（拍手）。

司会　それでは、これから体操じゃない、モダンバレージャン、モダンダンスを始めます（笑）。モダンギャルと一緒にどうぞリラックスしてください。

* * *

（沢田さんの指導で、全員輪になって楽しいひととき）

* * *

最後に、十五年間、主力となってへあごらVを支えてこられた斎藤さん、福田さん、高橋さんに花束が贈られて閉会。

その後、合宿できる人は合宿して、午前二時すぎまで「第二世代論」などを語り合いました。

Ⅲ これまでのへあごらゝを振り返って

二日目は和室で車座になり、それぞれの自己紹介の後、十五年の中心を担ってきた福田さん、高橋さん、斎藤さんの話を聞きました。自己紹介にかなりの時間をとったため、最後の斎藤さんは予定の時間がなくなり、急きょ内容を変更、「第二世代論」討論の時間もなくなるなど、ハブニングもありましたが、前日の講演会とはまた違ったくつろいだ雰囲気の中で過ごしました。

『女学雑誌』と『あごら』

福田 光子

おおげさな題がついてしまつて実は気恥ずかしいのですが、へあごらゝの十五年、それからへあごら九州Vの十年という節目を迎えて自分たちのやってきたことを考えたときに、いま、私たちがどんな役割を果たしているのかということをもつて考えるわけなんです。それは、過去をふりかえっているような時代に女性ジャーナリズムがどんな役割を果たしてきたのかを検証してみることと同じことだと思ふんです。

それで、明治時代の「女学雑誌」、大正の「青鞥」、昭和の雑誌としての「あごら」と並べてみて、その時代背景や役割などを対比してみたら面白いのではないかしらというようなことを、斎藤さんの前で言わなければいゝのについて言つてしまつたんですね。それじゃあ話してみなさいと、それみたいへん突然なんです。こんなことを話すんだつたら、二、三年準備をしまして問題をあたためて、ちょうどお酒が発酵するようにじわりじわり味がでてきた時の話がいんですよ、本当は。ところが即席もいいところです。

私が「女学雑誌」という雑誌を知りましたのは国立国会図書館におりましたころ、レファレンスを担当してまして、ある時、たいへん長い期間にわたつて一人の女性が毎日この雑誌を閲覧に来館されたのがきっかけでした。それは、あとからわかつたのですけれど、多分お名前をあげればご存じと思ふ方のお嬢さんなのですが、もう

適当なお年で、和服を着て、毎日国会図書館に通ってこられて、その借りるものといったら、きまって「女学雑誌」。何のために、どんな研究の目的でこの雑誌をあけてもくれても借りられるのだろうかという興味：いわばのぞき趣味から、いったい「女学雑誌」とは何ものだろうかと、たいへん興味を抱くようになっておりました。

国立国会図書館では、雑誌は一年分を全部合本にして製本してしましますから、手に触れると明治の香りがただよってくるというふうな味わいは残念ながら無理です。どの雑誌も同等に黒いレザーの表紙に統一されてしまっております。それでも表紙をめくると実に面白いんです。明治の表情があらわれます。幸いに最近は見る機会が多くなりました。京都の臨川書店という本屋さんが復刻版を出しまして全巻三十九万六千円という値段で買えるようになりました。ですから今はごく新しい図書館でも少しはお金持ちの地方都市でしたら「女学雑誌」の復刻版を備えることができるようになりました。福岡でも、福岡県立図書館にもありますし県立の福岡女子大学の図書館にも備えられております。私立の女子大学や短大でも復刻版を所蔵しているところが大いふえました。

そもそも、この「女学雑誌」の発刊はいつかと申しますと、明治十八年七月二十日。創刊号の巻頭にかかげられた発行の主旨は、今日読む者にも感動を呼びさます、すぐれた名巻頭言であり、みずみずしい開化のメッセージです。しかしその後にくく誕生した世にいう婦人雑誌が長い命脈を保っているに較べればたいへんにはかない運命に終わりました。明治三十七年二月には二十歳に満たない命を閉じて廃刊となりました。それでもかなり長い年月です。この時期は雑誌の運命からしても、なかなか象徴的だと思います。明治十八年というのは、いわゆる自由民権運動である秩父事件の翌年であり、この雑誌の廃刊は日露戦争の始まりの年、明治三十七年です。

日本の明治という時代のちょうど真ん中を駆けぬけていった雑誌という感じなんです。一号から五二六号まで、明治十八年から明治三十七年まで、ひと口に二十年と申しますが、明治中期の激動の時代です。「女学雑誌」の直面した時代背景をみますと、①教育勅語の発布と教育と宗教との葛藤の時代 ②帝国議会の開設と自由民権運動の挫折 ③日清戦争と露・独・仏三国干渉とによる国民感情の動きがあげられると思います。これは私どもが経験してきた戦後（一九四五年以降）と形や現象こそ違いますが、どこかつながる動向が感じられます。

「女学雑誌」は最初の編集者が近藤賢三ですが、二四号以降五二三号までは巖本善治、そして最後五二四号から五二六号までを青柳有美とつづきますが、一般には巖本善治が主たる編集発行人として通っております。巖本

善治の夫人が若松賤子で、幼い頃「小公子」を読んだ人ならばたいいその名前は心のどこかに刻まれているはずです。明治の最初の「小公子」の翻訳はこの若松賤子です。

巖本善治という人はいたいへんな理想主義者で、有名な明治女学校の校長をつとめました。もともと明治女学校は木村熊二の発想によって創立された学校ですが、その後ずっと巖本善治が校長となり、幾多の優れた女性がこの学校から輩出してあります。羽仁もと子、野上弥生子、それに確か高村光太郎の「智恵子抄」の智恵子、相馬黒光など、数えきれない才女たちが育ったわけです。

百歳という長寿を全うし現役の最長老として亡くなられるその日まで書きつづけた野上弥生子さんの絶筆となつた「森」という小説は、明治女学校がその舞台となり、若き日の魂の成長の跡を惜しみなくとどめた名作であり、この作品の中に巖本善治がしばしば登場することは、お読みになられた方には周知のことです。

巖本善治は、明治女学校を経営するかたわら「女学雑誌」を刊行しまして、一方で自分の意見の発表の場として、もう一方で教育の理想の実践の場として、二足のわらじをはいてその仕事をつづけたわけです。

内容構成は、表紙裏の目次で始まり、社説、女学、教育、評論、雑報、時文片々、そして時には小説、伝記など。二十ページ前後、多少の増減はありながら、短文の中にエッセンスを濃縮して無駄のない編集となっています。

二十一年間に五百二十七号といえますと、月に二回ないし四回。月刊ということはあまりなく、半月刊もしくは週刊という形で発行しつづけたわけですから、実にエネルギーです。

ページ数はちょうど今の「月刊あごら」と同じくらいです。「月刊あごら」よりも判は大きく、手にとってみると、何ともいえない明治の香りがつたわってまいます。全部タテ書きです。表紙の色も体裁も時々変わりますが、一貫して「女学雑誌」としての風格が一本貫かれています。

「女学雑誌」の中心の思想というのは何であつたかという点について、「明治女学校の研究」「女学雑誌の基礎的研究」の筆者である青山なを氏は次の四点をあげておられます。

① 中正主義 創刊号の社説「発行の主旨」参照

② 女学 一一号「女学の解」参照

③ ホーム（家庭及び家族教育）一二五―一二七号、内村鑑三「クリスチャンホーム」参照

④ キリスト教 一四三―一四九号 女学及び女子教育

青山なを氏の著作集は全部で五巻かと思えます。東京女子大からその後東北大学に学ばれ、学位論文は東北大学に提出されて文学博士となりました。元来源氏物語の専門家でいらっしやいましたが、その後、日本の女子教育にも深い関心を持たれて、この明治女学校の研究が博士論文となりました。（著書を示して）こんな厚みのある研究がすでに出ておりますので、興味のある方はぜひごらんになるとよろしいと思います。

さて、「女学雑誌」の書き手と読者について申しますと、実にいろいろな人が寄稿しています。女性では中島湘煙、つまり岸田俊子、巖本甲子（若松賤子）、津田仙、その他、男性では森 有礼、福沢諭吉、植木枝盛……。明治の知識人といわれる人びとがたくさん執筆しています。それというのは明治六年に「明六雑誌」という雑誌が発刊されました。この雑誌は婦人問題を熱心にとり上げているんですね。しかしたった一年の運命で、明治七年には廃刊になってしまいます。それでこういう書き手たちも、何か言わなければいけない、何かをやらなければという思いがあつて、「女学雑誌」がたいへん期待された中で生まれたのではないかという気がします。

ですから、読者は待ちうけていたんじゃないでしょうか。ほかに類書があるわけではありません。今の「あら」とは違います。競争相手はせんせんないわけで、ある意味でやりやすく、なんと数千部出していたようです。数千部というたいへんあいまいな数ですが、発行部数はどこにも正確な記録はありません。いろいろな人の語り伝えだけです。

その数千部がどういふふうになまかれていたか、ということなんです。当時の販売ルートというのは今のような流通センターがあるわけでもないし、東販とか日販とか取次店を経由してということも全然ないわけです。ただ「女学雑誌」の販売所というのがあるわけです。各地に。それはどんな所にあるのかと申しますと、東京でしたら神田と芝と日本橋と京橋です。それから横浜、小田原、尾張名古屋、京都、大阪、彦根があります。どうやら藩のあった所は早くにひらけた所に違いないわけで、仙台、高崎、長崎、もうひとつは出雲の松江です。それから広島、四国は土佐。十七か所の販売所がありまして、恐らくその販売所から買ったんだろうと思います。当時かなりの知識層が読者だったに違いありません。

とにかく日本で最初に放たれた女性雑誌の矢は、当時の先覚的な女性たちに深い感銘を与えないはずはありません。先に申し上げました野上弥生子さんをはじめ、いろいろな方々がいろんなものに書いておられます。皆さんの中にすでにお読みになられた方もいらっしゃると思いますが、相馬黒光さんの「黙移」の中にも出てまいります。相馬黒光という人は、有名な中村屋という新宿の菓子の老舗を創立した相馬愛蔵夫人です。臼井吉見の「安曇野」にも登場する人で、「黙移」は有名な隨筆として知られています。また羽仁もと子さんの「わが半生記」、この中にも「女学雑誌」からいかに多く啓発されたかを書いていきます。

けれども、まず「女学雑誌」は、明治初期、その開化の時期、巖本善治という男性の手によって刊行されたわけです。明治という時代、いわば啓蒙期において男性の手によって女性の啓蒙と女性の教育の役割が果たされたわけで、それだけに、当時の男性の視野で女性をどうとらえていたかを知る貴重な材料でもあります。

「女学」とは何を目ざすのか、くり返しくり返し、いろいろな号で論じられております。「女学」という当時であっても耳なれないこの新語について非難する人士もあって、それに対して弁明の意味をこめて一一一号に論じられている「女学の解」を引用しますと、

女学は婦女子に関する一科の学問なり、其心身に就て其将来に付て、其權利地位に付て、及び其現今に必要な雑多の事物に付て、凡そ女性に特別關係ある凡百の道理を研究する所の学問なり

と定義しております。女性学の花ざかりの昨今、その含むところにひびき合う時間の差がちぢまる思いがします。またフェミニズムの潮流をさぐる者にとっても、女学はただならぬ重みを感じさせるものに思えます。しかし女学を固定化することをさけるもののように、巖本善治の考え方もかなり流動化しております。最初は女性性調和の生物である。それから神の愛と神の義をもっとも忠実に実行できるのは女性だ、と。彼はもちろんキリスト者です。男性の足らざるところをうめていくのが女性だという考え方は、もちろん男性の発想から発したものだろうと思います。しかし最後にやはり男女の真の平等なしには真の人間の平和はないし、幸福はないのだというような進んだ意見を述べております。けれども、時代はこのような意見を受入れがたい方向へ、つまり日本はほとんど国家主義的な方向、富国強兵の方向をたどることになります。そして、幾度か発売停止となり、国家権力の及ぶところとなって、ついに廃刊のやむなきにいたるわけです。明治三十七年二月十五日の号をもってその命は

絶えたのです。花の命としては、さほど短くはないのですが、非常に苦しい中で、財政的にも大変だったでしょうけれども、弾圧を受けながら、その中で五百二十六号を出しつづけて廃刊という運命をたどったわけです。（はつきりと、廃刊という処分にあつたのですか？）そうではなくて、最後には、売れなくなるし、何回か発行停止の処分をうけ編集者も交替し、ついに間もなく息絶えたというわけです。

考えてみますと、雑誌の果たした役割というか、背負った重みというものから考えますと、明治という時代を象徴する雑誌だったんだなあと感じます。ほかに「世界婦人」とか同種のものはありませんけれど、「女学雑誌」は、いまなお輝く存在ではないかと思っています。

それに続く大正期の「青鞥」、それから昭和においては何がその役割を担っていくのか。「女学雑誌」が私どもに提起した課題があるとしたら、誰がそれをうけとめていくか。そういう問題として、きょうは、私どもは、△あごろVの問題を考えてみたと思うわけです。歴史の評価は百年くらいを経て、はじめて定まるわけですね。百年ぐらいの歳月を射程に考えながら△あごろVの運動、雑誌「あごろ」、その内容というようなものを考えている集団（グループ）があつてもいいのでは……。

「女学雑誌」と「あごろ」とが共通している点のひとつとして、家事を女性のものとしていないということがあると思います。それから、女を家の中にとどめておくということも一貫していると思います。そういう認識というか発想の共通点があります。羽仁もと子さんはもちろん明治女学校に学び、しかもこの「女学雑誌」からもたいへん大きな影響を受けたはずですが、彼女の創立した自由学園、△友の会V、彼女の発刊になる「婦人之友」は、家事を女性のものにして、それを生活の信条にして、今日まで生きのびてきたという事情があります。

さて現在、「あごろ」は、過去の「女学雑誌」やら「青鞥」とは、当然のことながらたいへん違った状況の中で違った体験をしているわけです。つまり情報化社会と言われる時代を生きのびるために、これから雑誌「あごろ」はどうあるべきかという課題がそのひとつだと思います。

情報というのは人を管理する魔力を持っています。情報によって操作されてしまったつらい過去を私たちは体験しました。いわば管理されない情報を女たちの手で作り出していかなければならないということがひとつの役

割だと思えます。

もうひとつ、△あごらVをささえている各地の拠点の機能というのは、過去の雑誌の発想の中にはなかったと思います。これからの女のネットワーキングの問題にもつながるわけですが、拠点という花の種が各地に散って、その根がこれから育つかどうか、本当に拠点の根が強く育っていくのかどうかということが、またひとつの△あごらVの課題だろうと思います。

斎藤さんが「あごら」を発刊したのは、非常に大きな課題を投げかけたことなのだと思います。斎藤さんは、これからは自分の名前を△あごらVから消していきたい。もっと拠点が△あごらVを支えるものになってほしいと希望されています。それをどのようにかなえていくのか、中央志向型の文化の形から地方の時代に合った形の△あごらVを今後つくり上げていかなければならないと思います。

最後に、「女学雑誌」と「あごら」が非常に共通している点に思い及ぶのですが、女の解放という問題を、男からの解放とかいうことではなく、男と女が共に生きる社会を作っていく、という点です。随所に述べられているこの論調の中で、「女学雑誌」が後の世に提起した問題を受け止めていく責任があるのではないか。以上がしめくりでございます。

△あごらの十五年とともに——孤立からグループネットワークへ—— 高橋ますみ

名古屋の中心地「栄」、松坂屋本店とプラザミシンが向かいあうメインストリート南大津通りの交差点を、ちょっと西へ入った左側に、私たちの〈東海BOC〉のオフィス、〈スペース・ウィン〉があります。〈ウィミズ・インターナショナル・ネットワーク・オブ・ナゴヤ〉の略で、これは、一九八五年のナイロビ世界女性会議に参加した名古屋の草の根グループの名称をそのまま記念につけたものです。

JR名古屋駅からいらっしやるのならば、地下鉄「栄」で降りて、ウィンドーショッピングしながら数分歩かれてもよし、地下鉄「矢場町」から松坂屋の店内を通り抜けて、交差点を渡られてもよいでしょう。

でも、いらっしやる時には、必ず電話で予約なさってからにしてくださいネ。せっかく遠方からお越しいただいても、不在でカギがかかってたつてもよくありますから。火曜日なら大丈夫です。みんな集まって、ワイワイガヤガヤやってます。

〈あごろ〉を急進的な婦人運動の活動グループととらえていらっしやる方々には、おしゃれなこの小さな空間を意外に思われるかもしれませんね。

総ガラス張りのウィンドーには、かわいいうブラウスや、クッション、手作りアクセサリーが定価をつけて並んでいます。

透明ガラスのドアを押すと、左側の棚には、「あごろ」のバックナンバーや婦人問題の本がずらり。赤いカーペット、赤いイス、それに白い壁と白い机。

ギャラリイとしての機能が果たせるように設計してありますので、もし、絵画・手工芸などの展示即売などのご希望がありましたらぜひお使いください。

名古屋進出への足がかりに連絡事務所としてお使いいただくのもいいかと思ひます。

各種学習会や、シャンソン教室にも使われています。

岐阜県下の女性たちの手作り人形、アクセサリー、クッション、絵、袋物などの十人展とか、染色と織りの展示即売会、のら猫の写真展などもありました。

今は、交通事故で、せきずい損傷、体の自由がほとんど失われてしまった、もと小学校教師、小久保かよ子さんが、わずかに動く左手にホルダーをしぼりつけて描かれた日本画の展覧会をしています。とてもきれいでやさしい草花の絵です。その絵はがきは七枚入り三百五十円、三組なら千円になりますので、ちょっとまとめて買っていただけませんか。

ついでに、ケニヤのナイロビの孤児施設援助のための、小鳥の絵はがきもいかがですか。

集会や、デモ行進、署名活動も主要な女の運動ですが、日常生活の営みの中で、ちょっとした消費にも、女たちの能力の育て合いを心がけていただくことを運動の一環として取り入れていくのも大切ですよ。

上野千鶴子さんの講演の中で、こんなこと言われてましたよネ。女性のグループについて、子どもの学校・成績、夫の地位などを聞かない、話さない、ここだけの話にしておく。人間関係はほどほどの距離に。一つのグループにまるごと入れこまない。グループ活動をしている人は、それだけをやっていてるのではないと。

私も、〈あごら〉や〈BOC〉の活動の中で、思い当たることばかりだと、実感しながら拝聴しておりました。それに、女性のグループを、金もうけの手段にはしないとおっしゃって、「でも〈東海BOC〉の活動はそれに当たらない」とわざわざ付け加えてくださいました。

〈東海BOC〉は、ひとりひとりでは、どうにもならなかった経済的自立を、グループでならば、なんとかならないかと試みているわけです。でも、「みんな仲良く、みんなで何か」はほんとうにむずかしいことです。お金もうけどころか、活動を維持していただくだけでもたいへんなことです。

ちよっと誤解されそうなこともあります。

「リフレッシュ・クリーム（しわとり用）」の個人輸入もしています。

これは、中国系米人の女性生物学者、メイリイ博士が、〈東海BOC〉の活動資金を作るためにと、私どもを日本の販売窓口にしてくださったものです。中国二千年の不老長寿の研究から生まれたクリームで、成分には、真珠の粉が入っているのだそうです。現在は、厚生省の販売許可を取る手続きを研究中です。

このクリームを、アメリカから贈られたときには半信半疑でしたが、内緒で、毎晩塗っているうちに、このごろ、「若くなった、以前よりは見られるようになった」などと、人びとに言われるようになり、だんだん本気になって、遠慮しながらも、個人輸入して、ご縁のあった方にお分けするようになりました。上野千鶴子さんのおかあさま方がとても気に入ってくださり、定期的にご注文いただいています。

もし、お試しになりたい方がありましたらどうぞお問い合わせください。航空運賃、税関の手続き、それに私どもの事務費を加算しても、デパートのウィンドーに並んでいる輸入クリームほど高価ではありません。

*

女性問題総合情報誌「あごら」との出会いから、私の十五年をお話するにしましては、〈東海BOC〉の活動の

一端の説明は、あまりにも唐突で、皆さまは違和感をお感じでしょうか。

でも、私にとっては、ごく自然な〈あごろ〉との十五年間の歩みでした。

「あごろ」創刊号に出会って、出版元の〈BOC〉は〈バンク・オブ・クリエイティビティ〉、つまり、女性の能力預託銀行が母体になっていることに、私はすっかり魅せられてしまったのです。実際の運営の実体はなまやさしいものではないとは、あとで知ったことで、そのときは、そのアイディアにまいてしまったのです。

その当時、富山県下の立山連峰の、山麓の小さな田舎町の、地方新聞の通信局のおかみさんをしていた私が、自分の能力を預託して何かできそうだなって浮かれてしまうなんて、おめでたいといかない方がないですよ。考えてみたら、具体的に登録できる能力もないのに、東京の新宿にあるという〈BOC〉につながるを持って、経済的な自立を企てようなんて、ちょっと冷静に考えてみたら不可能に近い話です。

私には、ヨチヨチ歩きと赤ん坊との二人の息子がいて、それに、姑の介護と葛藤とで、ほとんど、心の病氣といていいような心理状態にいました。

ほんのわずかな可能性を信じて、〈BOC〉へ私の日常生活に根ざした社会寸評の原稿を送ったのが、私が、ものを書いて、稿料をいただくことのはじまりでした。

八百字のコラムの原稿料が六百円。子どもたちや姑が寝静まって、深夜に帰る夫を待ちながら、チマチマと書いたものが、とにかく、現金になって振り込まれてきたのですから、私はすっかりうれしくなっていました。活字になって送られてきたものと、元原稿とを照らし合わせてみると、腕のよい美容師にでもかかったように、私の文章のムダは、きれいにカットされ、表現もさりげなく変えられていたりしました。

文章の書き方をきちんと人から習ったことのない私にとっては、まさに、原稿料をいただきながら、文章教室で学んでいるようなものでした。でも、私はなかなか疑い深く、掲載回数も増えるにしたがい、いったい自分の原稿料の何割が搾取されているのだろうと、思いめぐらすようになりました。

三年ほど前になりますか、〈あごろ北海道〉のお招きで、斎藤千代さんとごいっしょに、スピーチをさせていただいたことがあります。「〈BOC〉からいただくコラムの原稿料は、わずか六百円でした」と申しましたら、

あとで千代さんから、ますみさんの原稿は、新聞の折り込み広告の裏に書きなぐってあって、清書の手間賃のほ
うが高くついたぐらいと言われてしまいました。が、まったく、そのとおりだったと思います。(ごく最近になっ
て、新聞の家庭欄一面全部(約一万五千字)を請負っていた(BOC)が得ていた報酬が、わずか五千円だった
ことを知りました。)

今、私は、名古屋で〈東海BOC〉を創って、千代さんと同じ側に立つ経験をしています。

フリーライターになりたい、原稿料などいただかなくとも、書くチャンスを与えてさえいただければ幸いと、
私どものグループに参加していらした方がありました。

雑誌や新聞に数回活字になる経験をされると、事務運営費として取られた原稿料の一角が借しいので、「独立
してフリーライターになります」などとおっしゃいます。こういう場合も、お引き止めしないことを原則にして
いて、「どうぞ頑張ってください。もしあなたに断り切れないほどのお仕事が無いんだら、あとに続く後輩の
ために、下請けなどさせてくださいネ」と言って送り出しています。

一つの仕事を企画し、段取りして、報酬を得るまでには、数年前からの人間関係の種播きがあり、何回もの連
絡や打ち合わせ、折衝、訂正やおわびがあり、請求書を出して、報酬を得るまでには、多くの仲間たちの協力が
いります。

私のいただいた六百円原稿料の、その十倍が(BOC)へ支払われていたとしても、私にしては、取られず
ぎではないのだと、仕事の仕組みに納得がいくまでに、私の体験を通して数年かかったのですから、フリー宣
言をする人を非難する資格は私にはありません。

フリー宣言をしてさわやかに飛び立って行った彼女が、一年後に舞いもどってきて、——実はほんとうにそう
いう人がいたのですが、「また今年から〈東海BOC〉で頑張ります」などと、さわやかに挨拶されたりすると、
これから彼女にとってのほんとうの仲間としての第一歩なのかもしれないと思ったりします。

グループで分けあうわずかな報酬を惜しいという人は、本当の欲張りではないのかもしれない。私のほう
がもっと、金額では払い切れないほど多くのことを、(BOC)と〈あごら〉から手に入れました。

まず、全国各地に、本音で語り合える友人がたくさんできました。（あごろ）のめざす、ゆるやかな連帯が私の好みにあっています。

昨年の夏は、高校生の息子が、札幌の細谷洋子さんのご紹介で、土幌の有機農業をやっている開拓農家にホームステイさせていただきました。帰ってきてから、息子にとつての、私の植打ちの上がったことといったらありません。生まれてはじめて、飛行機に乗ってのひとり旅で、見知らぬ土地の空港で、あたたかく出迎えてくださった方が、親戚の人ではなく（あごろ）の仲間だったことに、彼はほんとうに感動してしまったようです。それに彼が育った近隣で見ると、おおかあさんたちにくらべると、私はちょっと変わったおおかあさんで、細谷さんのところも、やはり同じように変わったおおかあさんだったそうで、息子はすっかり細谷一家のファンになってしまいました。

開拓農家で、牛の世話や干草刈りをさせていただいて、汗を流すことや農作物を作る苦勞を体験し、生活の価値基準が彼の幼い心の中で大変革したようでした。

「開拓農家は都会からみたら、きびしい生活だけれど、本ものの豊かさは向こうのほうだとボクは思う」などと申しております。

秋になってその農家から送られてきた、農薬や化学肥料を使っていない、質素な出来ばえのトウモロコシやジャガイモを、彼がどんなに大切がって料理をしたことか。生涯のわすれられない大きな思い出が、彼の胸の中で育つてるようでした。大学生になった今夏、今度は自転車で土幌へ出かけるそうです。

息子のことを申しましたが、自分の置かれている主婦的な状況を客観的に整理できるように、私が自分の人生の主人公になりえたのは、もちろん収穫も収穫、大収穫でした。

（東海ＢＯＣ）へはじめて訪れられる方々は、ここは、あやしげなところではないが、何か自分は、利用されるのではないかと用心深くしたり、または、そのへんの主婦とは違うぞ、といった緊張りをされたりしますが、そのどちらでもない、身の丈の「自分」を長い年月をかけて、認識するようになりました。

周囲の目を基準にするのではなく、常に、自分はどうかありたいかを受け入れていることがとても心地よいのです。この生き方を味わってしまおうと、もうあともどりはできません。

私が新宿の〈BOC〉へ書き送り続けていたコラム原稿は、夫の勤める新聞社の編集関係の方の目にとまり、「うちの高橋君の奥さん」としてではなく、定期的に執筆をお願いしたい。通信局の電話番号をしている地方夫人の立場とは、この際切り離して」と言われたときには、舞い上がりそうな気分でした。

「高橋君の奥さんとしてではなく……」このうれしいことばを、私は何度脳裏でくり返したことでしよう。その当時、私は、地方通信局のおかみさん、〇〇ちゃんのおかあさん、高橋一族の三男の嫁としてしか社会に場を与えられていませんでした。

〈BOC〉への能力預託がきっかけで、妻、嫁、母親としてでなく、一人の人間として生気を得た私が、今もかつての私と同じような状況にある女性に、ちょっとだけ早く歩きだした者として、共に仕事をし、育ちあう場を用意しておきたいと思うようになったのは、ごく自然ななりゆきだったと思います。

たまたま私は、「書く」ことからはじまりましたが、人によつては、料理、洋裁、手工芸、プランニングなど、いろいろです。その結果〈東海BOC〉の仕事は種々雑多で、焦点が絞り切れないのも、また悩みの種です。

ケータリングサービス、つまり出前出張パーティなども、この頃はかなり手を染めています。チーフは二人。ここにご出席の羽後静子さんがその一人で、彼女は、おつれあいの転勤で、〈あごら九州〉から私どもの輪に参加されるようになりました。それにもうお一人が池戸清子さんで、料理の仕事をしながら、老実業家の自伝『石筍』の出版を手がけています。お二人とも、私の主宰している学習センターでも、にわか講師になって、国語や英語を中学生に教えたりしています。

時には子守さん、時にはインタビュア、時には受付け係と、変身の楽しさも、〈東海BOC〉にはあります。これは、入社してから定年までの企業戦士には味わえない経験ですネ。

〈東海BOC〉が今まで手がけてまいりましたファッションショーや、スウェーデン国立人形劇場の招へい、

陶芸展などについては、学陽書房から出しました「女40歳の出発」に書きましたので、よろしかったらお読みください。新宿の〈BOC〉で売っていただいた私の初期の原稿は、「主婦が歩きだすとき」(BOC出版部)に収録されています。

いま〈東海BOC〉で、責任者を勤めているのは、奥村和子さん、桜井京子さん、それに私の三人です。〈あごら東海〉で共に学びあった仲間で、十年を越すおつきあいです。

三人ともかなり頑固で、それぞれ独自の個性を持っていますが、女性問題の視点という共通項があり、刺激しあい、衝突と折合いをくり返しながらやっています。誰かが落ち込んでいるときは、そっとしておいたり、お祭りを企画して気分転換をはかったりと、工夫しあっています。

それに私たちを囲んで、時には事務員に、時には義理買いお客さんに、そしてシンクタンクになって励ましてくれる伴走者が数人います。いずれも〈あごら東海〉時代からの友人たち、それに新しく出会った人びとも加わって、臨機応変に内輪の側に立つ仲間です。毎月〈東海BOC〉が出す機関誌「インフォメーション」を読んで反応し、セミナーに参加する人びとがいます。

このごろは、時代の流れでしょうか、かつて私がそうであったようなハングリーな主婦は、まずいけません。行政の社会教育センターや公民館、それにパートの求人もかなりあって、中途半端な出口はたくさんできました。グループでなんとか、などと思うのは、古典的な幻想になりつつあるのでしようね。

〈東海BOC〉も方向転換をせまられているのでは、と思うようになりました。

それは、みんなで相互に育てあったり支えあったりといった発想ではなく、主体的にプロとして生きる各個人のネットワークの様相をおびてきました。一人でできる部分と、共有したほうがよい部分を各個人が上手に使い分けながら、〈東海BOC〉のネットワークを存続させていくのではないかと思います。

それに、独自の目的意識をもった在野のさまざまなグループが相互の違いを認めあいながら、つなげる点を求めあっていくグループネットワークの中心近くに〈東海BOC〉は存在していくのかもしれない。

日本型フェミニズムと「あごら」

斎藤 千代

いまお二人のお話を伺いながら、改めてしみじみと「ありがたいなあ」と思いました。

「あごら」は、たくさんの方が物心両面で支えてくださったからこそ、今日まで続いてきたのですが、わけでも福田さんと高橋さんからは、大きなはげましを受けました。

「あごら」には、情報活動としての「あごら」の発行に象徴される活動と、高橋さんがいま盛り立てていらっしゃる「BOC」の活動の、二つの面がありますが、福田さんは雑誌「あごら」に、高橋さんは「BOC」に入れ込んでくださいました。

「あごら」を出し続ける気力も失せかけたとき、福田さんが集会で、「明治の『女学雑誌』、昭和の『あごら』でございます！」と氣迫をこめて売り込んでおられる、という情報が入って、もう一度氣力をふるいたせたときもありました。率直に申しますと、私には「女学雑誌」と「あごら」の関係ははっきりとは見えないし、「あごら」が昭和を代表する女の雑誌というのもおこがましく思えるのですが、あの控え目な福田さんが、そこまでおっしゃったかと思うと、胸の内が熱くなったものです。

高橋さんは、私がやりかけて、あえて小休止した「BOC」を、見事に花ひらかせてくださいました。夢にはれこむ人は多いのですが、夢を現実に変える人は少ない。その困難な仕事を成就なさったのです。もしも高橋さんが大輪の花を咲かせてくださらなかつたら、私は多分、未完の「BOC」が気がかりで、「あごら」に集中できなかったろうと思います。お二人に、改めて心からのお礼を申し上げます。

ところで、私はもともと「BOC」から出発して「あごら」を呼びかけた人間ですから、この二つは、私の中ではどんなにしても分けられないひと続きのものです。しかし「あごら」が「BOC」と雑誌「あごら」の二面を持っていることは、外側の方々に「あごら」を不鮮明なものとして印象づけている一因でもあるようです。

いまこうして福田さんのお話と高橋さんのお話を別々にお聞きになりますと、それぞれについて納得してくだ

さったと思いますが、二つは同根、というふうに申し上げると混乱なさる方もおありでしょう。でも、その二つを結ぶものが見えたら、〈あごろ〉と、〈あごろ〉の目指すフェミニズムを、皆さんはもっと立体的に理解してくださるのではないかと思います。きょうは時間があまりにも短いのでむりかと思いますが、時間が許せばそこまでふれたいと思っています。

ところで、プログラムに書きました私の題は、「日本型フェミニズムと〈あごろ〉」です。何とも気恥ずかしい大げさな題ですし、本来ならこういう題ではまだ何一つ話せないのですが、これからの「第二世代」を考えていくうえで、〈あごろ〉と「フェミニズム」を問い直すひとつのきっかけになれば、と、あえて挑発的な題をつけてみました。

「日本型」ということが私の頭をかすめるようになったのは、女の運動にかかわっている海外の方、とくにアメリカの方から、「〈あごろ〉はアメリカのウィミンズ・リベレーションの影響を受けて生まれたのか」という質問を、ほとんど例外なく受けるためです。「〈あごろ〉の前身の〈BOC〉の前駆的な活動が始まったのが一九六〇年。六〇年代の日本に多発した無名の主婦の反戦・市民運動の一つとして出発したわけで、直接的な影響はない」と答えることにしていますが、こういう質問者がフェミニズムを「輸出品」として考えているところがたいへんおもしろく感じられます。

実は、イギリス人の友人も、「アメリカ人から、アメリカのリブの影響で運動を始めたのかと言われた」、と笑っていましたが、フランス人に聞けば、恐らくフェミニズム発祥の地はフランスだと答えるのではないでしょうか。

情報は移動するもの。フェミニズムについての情報は「輸出」も「輸入」ももちろんできますし、その輸出入された情報が各国のフェミニズムに大きな影響を与えていることは疑いありませんが、輸入された情報が行動をとまなう思想として根づくのには、それなりの土壌が必要でしょう。フェミニズムの源流と流れについて、いちどきちんと考える時期に入ったように思われます。

ところで、女性たちの間ではもうかなり耳慣れたことになった「フェミニズム」ですが、あなたは、日本語でどんなふうにお訳になりますか？ フェミニズム、フェミニズム、と口にするわりには定義があいまいな感じがしますので、とりあえず手近な辞書ではどんな説明になっているか、事務局の方たちに調べていただきました。

まず、日本の代表的な辞書「広辞苑」(岩波書店刊、一九八三年、第三版)では、「婦人の社会上・政治上・法律上の権利の拡張を主張する説。女性解放論。女権拡張論。女性尊重論」(ついでながらフェミニストは「①女性解放論者。女権拡張論者。男女同権主義者。②俗に、女に甘い男。女性崇拜家」という、たいへん古典的な解説です。

また日本の代表的な百科事典の「世界大百科事典」(平凡社刊、一九六七年版)は、「女権主義、男女同権主義などと訳されている。ラテン語のフェミナ(femina)(女性)から発生した言葉。フェミニズムには明確な理論体系があるわけではなく、時代とともに変化し、また国によっても変化する女性尊重の思想または運動である。それゆえに他の理論・世界観ならびに運動によってささえられ、裏打ちをされて発展するものである。したがって、いろいろの色合いをもったフェミニズムがあることになる。けれども近代的なフェミニズムには、大別して二つの潮流があった。その一つは女権主義、すなわち両性の平等を基礎とする社会組織の建設を求める思想ならびに運動であり、他の一つは母性の擁護を目的とする思想ならびに運動である。もっとも、この二つの潮流は判然と区別されうるものではなくて、おのおのが互いに関連し合って発展したのである。けれどもそのうちのいずれが主流となっているかは、時代と国によってかなりの差異がある。女権主義はフランス革命の影響をうけてイギリス、アメリカ合衆国などに盛んになったもので、その代表的な運動は婦人参政権運動であった。この流れのフェミニズム運動は、性的立場による各人のあらゆる不平等を排除し、あらゆる性的特権と、あらゆる性的な過重負担を廃止して、法律および習慣の基礎を男女共通の人間性に置こうとする運動である。イギリスのM・ウォルストンクラフトの「女性の権利の擁護」とか、J・S・ミルの「婦人の隷従」などによる主張は、この流れにそうものである。また母性の擁護はドイツやスカンディナヴィア諸国に盛んになったもので、女権主義の発展よりも

ややのちの時期のものである。この派の特徴は男性と女性の平等を求めるといよりも、むしろ女性の立場を男性の立場に対立させたままで、女性としての自由、すなわち子をそだてる自由、母権の確立、恋愛および結婚の自由などを主張するものである。この派に属する代表者はエレン・ケイで、その母性擁護の主張はドイツおよびスカンディナヴィア系のフェミニズムの典型である。このようにして発達した二つの流れも、社会主義を基調とする婦人解放運動によって統一された。なぜならば、それは男女の法律的・政治的・経済的不平等を廃止して、両性を共通の人間性に置こうとするものであると同時に、子をそだてる自由、母権の確立、恋愛および結婚の自由の事実上の確立をも目的とするからである。しかし社会主義を基調とする婦人解放運動は、たんに婦人の解放をめざすのではなくて、搾取され、圧迫されているプロレタリアートの階級的解放運動の一環としてのみ意味をもつ点の特徴である。すなわち従来のフェミニズムが男性と女性との対立および不平等から出発して、男性に対する女性の解放運動という色彩が強かったことは全く基調を異にするものといふべきである。（玉城肇）と、古典的な女権論・母性論の両論を紹介し、それらが「社会主義フェミニズムに統一された」と紹介しています。これは一九八五年版では次のように訂正されています。

「一八三〇年代のフランスで生まれて欧米に広がった男女同権主義に基づく女権拡張の思想と運動を意味する言葉。またフェミニストは、女性および女権を尊重する人びとの呼び名とされてきた。しかし一九六〇年代末以来の女性解放運動のなかで、それは性差別の克服という広い意味をもつものとされ、「女性による人間解放主義」という定義があたえられ、それを主張する人びとをフェミニストと呼ぶようになった。（水田珠枝）」

フェミニズム発祥の地、フランスの辞書「Grand Larousse de la Langue Française」（一九七三年版）では「①社会のなかで女性の役割拡大をめざす人たちのドクトリン、運動。②きわだった女性らしさの特性を多少とも表わす男性個人の立場」

「Dictionnaire du Français contemporain」（一九七六年版）は「男性と平等の権利を女性にあたえることを目指す主義・主張」

またフランスの代表的な百科事典「Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse」（一九八三年版）は、「①社会における女性の役割と権利の改善・拡大のための戦闘的な運動。②女性の役割と権利拡大をめざす人び

と・立場」と、あっさりした記述です。

イギリスの代表的な辞書“*The Concise Oxford Dictionary*”（一九八二年版）は、「両性の平等を根拠に女性の権利を主張すること」

アメリカの辞書では“*The Concise Columbia Encyclopedia*”（一九八三年版）が、「女性の政治的、社会的および教育の平等をめざす運動」

“*The Merriam-Webster Dictionary*”（一九七四年版）が、「①両性の政治的、経済的および社会的平等の理論。②女性の権利と利益を目標として組織化された活動」となっています。

イギリスからアメリカに渡った百科事典“*Encyclopedia Britannica*”（一九七〇年版）には、↓参政権運動↓女性解放運動と記されているだけで、フェミニズムについての記述はありません（ついでながらブリタニカの日本語版「ブリタニカ国際大百科事典」（一九七五年版）には、項目そのものありませんでした）。

最後に見た“*Encyclopedia Americana*”でやっと少し納得のいく説明に出会いました。一九六四年版ながら、「アメリカーナ」は、アダムとイブに始まり、A4判十一ページにわたって、各国の事情までくわしくふれていますが、まとめとしては次のように言っています。

「フェミニズムは全世界的な文化的運動で、すべての人権、すなわち、道徳的・宗教的・社会的・政治的・教育的・法的・経済的権利に関して、男性と完全に平等の権利を女性に保証することを目的とするものである」（以上、日本語訳は、いずれも寺沢恵美子さん）

しかし、この説明でも、皆さんは多分納得なさらないでしょう。

この二、三年、日本の国内でもフェミニズム論争が盛んで、雑誌「現代思想」誌上での青木やよひ・上野千鶴子論争、それを受けた京都の日本女性学会を中心に八五年と八六年に行なわれた論争については、皆さんも記憶に新しいことと思います。

八五年の十一月に京都で開かれた「フェミニズムの最前線」という講演会で、上野千鶴子さんは、「フェミニズムの最前線」なんて恐ろしい題をもらったが、そういうタイトルの講演会があれば私のほうがお金を払って

聞きに行きたいくらいだ」と前置きして、次のように語っておられます。

「この前、十一月三日に社会主義理論フォーラムという大きな集まりが東京でありまして、そこで女性部会というのがありました。そこにちよつとのぞきに行つて来たんですけれども、朝九時から夜の九時まで、停電をものともせず、延々と熱気の中で続けられたフォーラムでしたが、そのフォーラムの女性部会のメインセッションのテーマが「さまざまなフェミニズム」というものでした。ということは、フェミニズムはもう一つじゃないんです。いろいろあるんですね。ああ言つてる人もいれば、全く正反対のことを言つてる人もいます。そのそれぞれが、自分のことをフェミニストと名乗つてゐる。じゃあフェミニズムっていったい何なのかしら、と、だんだん混乱してくるっていう時代です。

そういうことがなぜ起きてゐるかというのをちよつとまあ考えますと、第一の理由は、フェミニズムが多様化するほど成熟して来たという現状認識があります。それだけフェミニズムの層が厚くなつてきたから、いろんなものが出て来たという、これは歓迎すべき事態です。それが第一。だけでも、ほんまかいなという気持ちもありまして、一つは理論が要求されるような時代というのは、世の中がどんづまりになつて、ちよつとどうやら動きがつかなくなつてきたらしい。そうすると世の中を変えることができなければ、物の見方を変えるところにとぐらいいしかなれないというんで、これはむしろ理論に対する要請や理論の多様化ができた。ということとはフェミニズムが運動として行きつまつてきた証拠じゃないか、という考え方もあるわけですね。昔から孔子さんに「大道すたれて仁義あり」なんていう言葉がありますが、「運動すたれて理論あり」みたいな感じになりかねないところがあります。そうすると私なんか理論家としては、責任を問われかねないんですが、そういう状況に來ている可能性がある。具体的にその中で、今どう動きをとればいいのか、フェミニストがわからなくなつてゐるということなんです。

そのうえ、理論が多様化しただけじゃなくて、解放戦略、つまり今どうすることが女性解放につながるのかという戦略について、全く正反対に分かれた方向性が出ています。一つは、女性が職場進出をどんどんやってくるところが解放であるんだという考え方。この考え方は長い間続いてきたわけですけど、それに対して最近、エコロジカルフェミニストと称する人たちが正反対のことを言っています。「労働への参加による解放」ではな

くて、むしろ「労働の拒否による解放」こそが女性の解放なんだと。だから、職場から女は総撤退しよう、なんてことをいう人がいるわけですね。職場に出れば出るほど、資本制への加担と抑圧が強まる。だから、それを拒否することこそ解放だ、なんて正反対のことを言う。そうなると、いま職場に出ようか出まいか迷ってる女の人は、もう行き暮れて、ディレンマの中で立ち往生せざるを得ない。どうすればいいかわからなくなるわけですね。この社会主義理論フォーラム女性部会の副題が「行くも地獄、のこるも地獄の中で」という恐ろしいコピーでしたが、職場に出ても地獄、とどまっても地獄というそういう状態で、こっちが正しい、いやあっちが正しいという正反対の意見が出ています。

それからもう一つは、例えば、女性性というふうなことを考えましても、私たちが青木やよひさんと呼んでやりました五月のシンポジウム（日本女性学会主催のシンポジウム）の中でもやっぱり、その女性原理というものをむしろ積極的に強調していくことが女性解放につながるんだという立場と、私のようにそういうことを言ってるもろっちゃ迷惑極まりないんだという立場と、全く正反対の立場が現れて、両方ともがフェミニストと名乗るといふ、こういう状況です。だから、いったいどっちが正しいのか、自分が個人的に現在ただ今どうすればいいのかっていうことが、だんだんわかんなくなっている、というそういう状態になってきているだろうというふうに思うんですね」（松香堂刊「フェミニストの最前線」）

このあと、「こういう事態は日本だけではない」という話が続くわけですが、いま世界的に百家争鳴的な状態にあることは間違いなく、「第三波フェミニズムの時代に入った」などという見方をしている人もいます。ひと口にフェミニズムと言っても、ラディカル・フェミニズム、マルクス主義フェミニズム、エコロジカル・フェミニズムなどがすでに日本語化しており、こういう「ことば」を知らないフェミニストの潮流からはずれると思わせられるような悪しき傾向さえ生まれています。ことばの意味は、青木やよひさんや金井淑子さん、江原由美子さん、上野千鶴子さん、井上輝子さんなどのご著書にくわしく出ていますので、ここではあえてふれません。

しかし、フェミニズムの内容が、六〇年代、七〇年代、八〇年代と、どんどん変わってきているというか、新しい考え方が次々に生まれているのは事実です。

六七年版の平凡社「世界大百科事典」の記述のように、「明確な理論体系があるわけではなく」ではなくて、今や、「明確な理論化を目指して」大論争中というところでしょう。

ともかく、こういうわけで、フェミニズムを定義するのはたいへん難しいし、定義を私は本来好まないのですが、物事を考えていく手続きの一つとして、もしも、「あなたは辞書風に言うならどう定義するか」と聞かれたら、いま現在の私は、「いま現在のフェミニズムは」と前置きしたうえで、多分概略次のように答えると思います。

「男性的視点に立つ過去の価値観とは異なった女性的視点に立つて、諸現象・諸科学を洗い直そうとする全世界的な文化運動・人権運動。生産第一の効率重視主義に反対し、人間の生と性を尊重。性別・貧富・人種・民族・学歴等に起因するあらゆる差別の解消を目的とする」

お断りしたように、これは「いま現在」の答えで、「将来は」変わるかもしれませんが。そしてもちろんこれは私の独断と偏見に満ち満ちていますので、大いに反論していただきたいと思います。

私見としては、私は、第一波のフェミニズムは思想的にはヒューマニズムの系譜に立つて生まれたものだと思っていますが、ヒューマニズムとフェミニズムの関係を考えていくと、一冊の本でも言いつくせません。人前で話せるだけの勉強を私はまだしていませんので、ここではお話しできませんが、一般に考えられているよりは、その源流は古いと思います。

「フェミニズム」ということばがいつごろから使い出されたかについては諸説があり、公式に使われたのは、フランスの劇作家アレキサンダー・デュマ・フィスが一八七二年に自作の「男一女」(「Homme-Femme」)の中で女性の権利を求める当時の運動を名づけて使ったのが最初という説が一般に流布されていますが、カレン・オッフェンさんの論文「フェミニズムとフェミニストの語源について」(「Revue d'Histoire Moderne et Contemporaine」vol. 34, July/Sept. 1987「日米女性ジャーナル」号に所収)によりますと、「ことばの創造はシャルル・フーリエ(一七七二—一八三七)と思われるけれども、著書に最初に登場する年は確定できない」とされています。ジャン・ラボアの「フェミニズムの歴史」(一九七八(日本語訳・加藤康子・新評論社)では、近

代的なフェミニズムの発生をフランス革命前夜に位置づけ、一七七〇年代の終わりに、すでに女性の権利を内容とするパンフレット類が三十種類以上も出ていること、オランブ・ド・グージュのペンネームで知られる女性は、一七九一年に十七箇条から成る女性宣言——「女性と女性市民の権利の宣言」を刊行し、第一条に「女性は生まれながらにして自由、かつ男性と同等の権利を有する。社会的身分の区別は、公共の福祉に基づいてのみなされるものである」とうたい、女性の投票権の確立や、すべての高位、官職、公職に就任する権利の承認、租税負担における男女の平等などを求め、「男女の社会契約」という婚姻契約観さえ示した、と述べています。

一七八九年のヴェルサイユへの行進に多数の女たちが参加したことは、多くの文や絵画にも残されていますが、
「自由、平等、博愛」の「博愛」は、「fraternité（兄弟愛）」で「sororité（姉妹愛）」は含まれていませんでした（英語のsisterhoodにあたるsororiteは、今でもフランス語として公認されているわけではなく、一部のフェミニストたちが使っているのにすぎないようです）。

ルネサンスは、人間の発見、人間の復権と言われますが、ルネサンスにしても、フランス革命にしても、その「人間」の中に「女性」は含まれなかった。その含まれなかった者たちの復権運動の一つがフェミニズムである、と言うと大胆すぎるかもしれませんが、いま現在の私は、そういう印象を持っています。

フェミニズムも、最初は政治・教育・法制・経済・社会的諸権利の男女平等を目指しましたから、「女性解放論」「女権拡張論」といった定義が一般化したのだと思いますが、六〇年代アメリカのベトナム反戦運動、公民権運動の中から生まれたとされるいわゆるラディカル・フェミニズム、フェミニズム運動の第二波は、それまでのフェミニズム運動に、質的な大きな転換を迫るものだったと言っても過言ではないと思います。

女性運動が、女権拡大運動だけでいいものか、産む主体としての女に光をあてようという母性を核とする論は、十九世紀にすでに見られますが、ラディカル・フェミニズムは、それをさらに一歩すすめて、女が生と性の主体となることを高らかに歌い上げただけでなく、すべての固定的な価値観や従来の社会通念を女性的な視点で洗い直すことを打ち出したうえに、路面を埋めつくすほどの大デモを繰り返してその実行を迫ったわけですから、アメリカの女性たちが、アメリカこそフェミニズムの発祥地、と自負するのわからないではありません。

この、目の覚めるような女性解放運動、ウィミンズ・リベレーションは、「リブ」の略称でたちまち全世界に

波及しましたが、条件闘争を前面に打ち出したり、女性性のある面を強調した古典的なフェミニズムに対し、「生きる主体としてのトータルな己れの確立」を果敢に主張したところに、ラディカル・フェミニズムのすごさがあったと思います。

「存在が意識を規定する」という社会主義フェミニズムに対して、これは「社会通念」の規制を訴え、その変革を迫り、社会通念の主流となっていた「男性論理」を問い直し、「女性論理」を打ち出しました。私たちは、北極を上に置き、南半球を北半球の下に置いた地図を見慣れています。南極を上に置き、オーストラリアの「下」に日本や中国が位置する地図を示したようなものです。

したがってそのインパクトは、女性問題だけでなく、人類学、哲学、心理学、生態学、動物行動学等の学問にまで及んだわけですが、それだけにまだ完全に成熟しきってない面があり、それが今日の多様なフェミニズムを産み出している一因にもなっているかと思っています。

上野さんは、成熟期に入ったので多様なフェミニズムが生まれたと言われました。たしかに長いフェミニズムの歴史を考えると、成熟期に入ったと言えるし、そういう言い方もできると思いますが、長いフェミニズムの基盤があるところにラディカル・フェミニズムが生まれ、それがなお成熟途上というか開発途上にある。だからこそ百家争鳴なのだし、これからますます百花繚乱の時代が続くと私は思っています。

男社会の中に女の住む場も広げていこうという古典的な第一波フェミニズムに対して、ラディカル・フェミニズム以降の第二波フェミニズムは、男社会の論理そのものを洗い直そうとしているわけですから、これは二十年や三十年でできる仕事ではないと、私は読んでいます。

多様性を産み出す別の原因として、私は、フェミニズムそのものが、常に「運動」を伴っている面も見のがしてはいけないのではないかと思っています。

フェミニズムの思想は常に机上の空論ではなく、実効を目的とする戦術・戦略です。したがって、国により、地域により、時代により、その背景となる社会事情を反映しつつ、千変万化していくのではないかと思うのです。六〇年代のアメリカのラディカル・フェミニズムは、「ベトナム反戦運動」の中でさえ、固定的な男役割、女役

割を強制された女たちの反発から生まれた」という説がありますが、私は、それは恐らく「きっかけ」で、「何のためにベトナムまで出かけて戦うのか」を問いつめたとき、そこに差別と戦争の構造が見えてきたのではないかと、と推測しています。五〇年代から六〇年代にかけて、「黒人はなぜバスに席がないのか、なぜ別の学校で学ばねばならないのか」の「なぜ」が問われたとき、女たちにも席がない実態がはっきりと見えてきた。それは「正義」をうたうアメリカの憲法に反するものではないのか……と。だからこそ公民権運動、ベトナム反戦運動同様、ウィミンズ・リベレーションは大眾運動となり、男たちの心に眠る男性原理をも洗い直す力になったのではないかと推測します。

運動は「原則」を重視する部分がある反面、常に「現実」と対峙し対応します。フェミニズムにかかわる人びとは、「現実」の中で繰り返し軌道修正を迫られてきたと思うのです。その中で考えた軌道修正が一つずつ新しい理論になっていったのではないのでしょうか。

ですから私は、「運動すたれて理論あり」という上野説に対し、あえて「運動盛んにして理論盛んなり」と言いたいと思います。「出歩く女」がふえればふえるほど、フェミニズム論議はますます活発になる、と私は予測しています。(ただ、上野さんが「運動すたれて理論あり」とおっしゃったことにもとても共感できます。「どんづまりになってきた世の中を変えることができれば、せめて物の見方を変えることぐらいしかやれないんで、理論に対する要請や理論の多様化ができた」には共感する部分も多いし、「あの人はエコ・フェミ(エコロジカル・フェミニズム)」とか、「あの人はラジカル・リブ」といった区分けを耳にすると、理論が理論として深められずに、知識のラベル貼りになったら運動もおしまいだな、という感想を持っていますので。)

ところで、「運動」と「フェミニズム」は表裏一体とすれば、フェミニズムへのかかわりは、常に現実的な情動を起点にしているのではないのでしょうか。これもフェミニズムを多様化している一因のように思われます。

労働の場での被差別に出発した人もいれば、家制度の桎梏に苦しんだ人もいます。子連れ女の再就職の難しさから考え始めた人もいます。戦争体験のような極限的な体験が基の人もいます。心身の障害や、出身差別の痛みに発し

た人もいる。食品公害や原発などから気がつき始めた人もいる。中には宗教的な愛から出発した人もいる。というように、実にさまざまです。一九八二年のニューヨーク「平和大行進」に参加したとき、私は「フェミニスト」の集結地点に行き（アメリカのデモでは、それぞれのジャンル別に集結点が決まっており、新聞に発表されます）できるだけいろいろなグループの人に会いましたが、放射能を含む雨による牛乳汚染で立ち上がった母親運動系の人もいれば、黒人運動に出席した人、第三世界との連帯から始まった人、アメリカの中の少数民族運動の人、レズビアンなど、その出発点は実に多種多様でした。だからこそ、戦術・戦略も、「家父長制の解体」「階級制度の解消」「性の解放」「生態系を見直す」「からだを考える」「男性原理の告発」「第三世界との連帯」等々から、「ホンネで話をうね」「リラックス」等々まで、無限に広がっているのではないかと思います。

もう一つ見のがせない要素として、フェミニズムそのものが内包する多様性もあります。

フェミニズムは、自分の感性・感覚が原点です。統制や画一化をきらいます。

画一的な「女は家庭、男は職業」という、性別役割分業の「固定化」に疑問をいただきます。

ヘテロセクシズム（異性愛強制主義）を批判し、同性愛にも異性愛と全く同等の権利を、というレズビアニズムも生まれます。

権利を拡大しなければならないのは女性だけか、という疑問も生まれます。そして、人種、民族、出生、障害などあらゆる差別にまで視線はひろがってきます。

そして、人間という「類」も問題になってきます。生産第一の産業主義ではないオルタナティブな生き方が求められ、人類の存在条件を問う、エコロジカル・フェミニズムも重要な課題になります。

こうした多様性の結果として、それぞれが時として激しく火花を発してぶつかり合いがちですが、一方が他方を「調伏する」という形をとらず、互いの刺激の中で、また新しい思想と行動が生まれていくところが、フェミニズムの限らないおもしろさではないか、多様性はますます多様性を生んでいくだろう、と私は見えています。

*

さて、最初の「日本型フェミニズム」に戻りましょう。

先ほどから申し上げた「多様性」をフェミニズムの一つの特徴とするなら、地域により、時代により、情況により、たくさんの方々のフェミニズムがあってもいいのではないかと。日本には日本式のフェミニズムが育つだろうし、それでいいのではないかと、というのが、実は私の考え方です。

私が話し合った海外のフェミニストは、まだ百人に満たないのですが、それでも、アジア、アフリカ、中東、中南米、北米、オーストラリア、北欧、西欧、東欧諸国等々、地域によって、またその国の国によって、それぞれ微妙に色合いが違ふのを感じます。それぞれの生活の背景になっている条件が違ふのですから、色調や色相が違ふのは、むしろ当然でしょう。

よく、アメリカのリップは過激で、北欧のフェミニズムは成熟しているといった言い方を耳にしますが、同じアメリカの中にもさまざまなフェミニズムがありますし、取り囲む現実と、それを受けとめる個人の感性がフェミニズムの原点ですから、「アメリカ型」とか「北欧型」といったくくり方はおかしいのではないのでしょうか。そういう意味では「日本型フェミニズム」ということはもおかしいのです。同じ日本の中に、「あごら型」やら「行動の会型」やら、「パ・ド・ウイメンズ型」やら、いろんなタイプがあつていいし、ますますいろんなタイプやいろんな議論が出てほしいと願っています。

しかし別の意味では、「日本型フェミニズム」を、逆にどこまでも固執して考えたいと、私はこのごろ思っています。

というのは、第一波フェミニズムは、ほとんど欧米に端を発するものですが、日本には日本のフェミニズムがあつたのか、なかったのか、そのあたりがたいへん気になっているからです。フェミニズムを「女権拡張主義」というように狭義に解釈すると、日本には近代以降にしか見られませんが、欧米の思想に影響を受けたことはたしかだと思いますが、「名利を求めず、貴賤を分たず、脚もとを見つめて、自分も他者も受容していく」、とい

う禪の思想などは、まさにフェミニズムとぴったり合致するのではないか、という気がしてなりません。同じように、現在はまだ情報の発信地にあまりなっていない地域にも、固有のフェミニズムがあるかもしれない、世界の各地で、それぞれ独自のフェミニズム研究がもつとされてもいい、という気がしているからです。

現在の多様なフェミニズムの「多様性」の背景の一つは、世界的に価値観が多様化している時代の反映でもあります。価値観が多様化したというのは、今まで情報の発信者ではなかった弱小階層が発信するようになった、あるいは弱小諸階層の情報が吸い上げられるようになったのも一因ではないかという仮説を私は立てています。また、集団に対する個人という小さな存在も発信できるようになった。そして、マスとしての「正論」に対する個々の「異論」が、「異論」として排除されることが少なくなった時代背景があり、発信者の多様化が、社会そのものをますます変えていく力になっているように思われます。そういう意味でも、従来のフェミニズム理論に対してはほとんど受信者にとどまっていた、アジア、アフリカ、中東、中南米などの諸地域から、積極的な発言をしていくことが、世界のフェミニズムに示唆を与えるのではないか。特に母性原理を風土とするといわれる地域からの発言は、非常に大きな意味を持つのではないかと私は考えています。

もう一つは、宗教的・思想的な背景です。欧米のフェミニストたちと話していると、私は、その基盤のところ、どうしても違う部分を感じることが多いです。

欧米のフェミニストたちの「解放」は、英語で言えば「free from 何々」となるわけですが、そのfree fromに続くことばは、要約すると、どうもpatriarchyというふうに聞こえるのです。

このペイトリアーキーを辞書で引いて、家父長制、などと日本語で考えると間違ってしまう。男性論理とか、父性原理というか、今までのすべての固定観念というか……。

あえて言えば、その中に、ヒューマニストたちが言い続けてきた「神（キリスト教）のイントレランス（不寛容）からの解放」という響きも私は感じてしまうのです。神に対する愛が深いからこそ拘束される、そこからいかに自由になりうるかという、キリスト教圏の人びとの、命を削るような自問自答と、その中から生まれた運動を、私たちはどこまで理解できるでしょうか。

たとえばひと口に「中絶問題」と言っても、キリスト教圏、とくにカトリック圏のフェミニストたちのたたか

ってきた軌跡を、日本人は本当の意味では追体験できないのではないかという気がしてならないのです。言ってみれば議事堂ほどのコンクリートの建物にアリが手向かうようなものだったろう、そしてついに、アリがアリの論理を打ち立てた！

そのすごさに胸を打たれるのです。

対して、日本には宗教がない、などと言われます。たしかにキリスト者たちのように、深く宗教に埋没した人が少ないのは事実ですし、網野さんが言われたように、人びとの生活倫理まで規制する宗教もありません。しかし、日本人として日本に生活しているかぎり、私たちは日本の神様や仏様に、否応なしにどこかで多かれ少なかれ影響を受けているのではないのでしょうか。

「神の前に人は等しく」平等である」と説くキリスト教に対し、仏教では、「女も男も含めたすべての人間だけでなく、虫でも魚でも鳥でも、すべて仏になれる」という平等観を持っています。

「神の前に人は平等である」というとき、崇拝まねばならない神と、ひざまずく人間の問題が生まれます。そこに苦しんだからこそ、「自由」や「平等」についての欧米の人びとの思想は、底深く、さらに深くなっているのだでしょう。

日常の思考の基本になる言語にしても、欧米では *and so* が常に明白です。単数と複数も峻別します。そして、主語と述語と目的語が明確なことが文章の基本です。「何が何して何とやら」で、何となく通じてしまう日本、「姿変われど、ものみな同じ」式に包み込んでいく私たちの風土を、母性原理などと簡単に言ってしまうといいのかどうかわかりませんが、そういう風土の日本で育っていく日本のフェミニズムは、アフリカやアジア、中南米、中東諸国のフェミニズムとともに欧米のフェミニズムとは違った地平を開くかもしれない、という予感を私は持ちます。同時に、父性原理の本当の厳しさを経ていない私たち日本のフェミニズムが、どこまで深く広く根を張り得るだろうかという微かな不安を感じるのであります。

網野さんは、「日本には、人びとの生活倫理まで規制する宗教がなかったから、ヨーロッパに比べてはるかに古くからの習俗が残っている」という見解を述べられました。私は、このあたりにたいへん関心があります。

網野さんは、それを、いわゆるアジールにつながる肯定的な面と、南京大虐殺にもかかわる否定的な面の両面にわたって言及されました。私も、その二面性を感じます。日本の母たちの、大地に根を張ったたたかさ、大らかさ。その一方の、根強い差別の社会通念をどう考えていけばいいのか。

生活倫理まで規制するキリスト教の「力」は、明確な形で見えましたから、反権力運動のエネルギーが生まれしました。しかし「習俗」という、一見やわらかな規制は、もしかしたら、とりもちのように、私たちを見えない形で縛っているのかもしれない。そのあたりを一つ一つ洗い直していくと、日本のフェミニズムの過去も未来も少しずつ見えて来、ほんとうの意味の変革の力になるのかもしれない。既成の学問から締め出されてきた私たちの新鮮な視点が、新しい光を投げかけるかもしれない。そんな漠然とした印象を、今の私は持っています。

*

というのは、私たち〈あごろ〉がいちばん大切にしてきたのは、もしかすると「多様性」と「あいまいさ」ではないか、と私には思えるからです。

きのうのパーティのスピーチで、〈婦人問題懇話会〉の木下さんが、〈あごろ〉という名のユニークさにふられ、「女とか婦人とか女性という字もなければ、会とか団体とかセンターという字もない」と評しておられたのを、なるほど女性史家の目だなと感心してうかがいましたが、一九七二年二月の、雑誌「あごろ」創刊号は、次のように呼びかけています。

小さなあごろが生まれました

あごろは あなたを待っています

AGORAは ぎりしあのひろば

ぎろん・ざわめき・かいもの・ゆうべん

そこからぼりすのぼりしーが生まれました

この小さな〈あごろ〉には

学者もなく、市場もなく、

ただ あなたを待つ心だけがあります

全国ちりぢりにはたらき

全国ちりぢりに考えている皆さん

あごらに声をお寄せください

小さな点が線となり面となって

働く女性のしあわせにひびいてくる日まで

あごらは あなたを待ちつつけます

そしてその下に、「多発する草の根の運動が自然消滅に終わらず、より強く広い根を張る力となるように、この誌上で、できるだけ多くの運動、できるだけ幅広い考え方を紹介し、多様な現実をみつめることの中から前進をはかりたいと思います」と記しています。「多様性」と「あいまいさ」を、ここからすでにお感じになる方もおありかと思えます。

「あいまい」でありたかった〈あごら〉は、あえて「会則」を設けませんでした。が、「それでは混乱のもと」という声が起き、六、七年前でしたでしょうか、「方向性」は明記することになりました。

次の十項です。

- 1 自分も他人もかけがえのない存在として尊重し、人権を侵害するあらゆる差別・戦争・公害に反対する。
- 2 イデオロギーを先行させず、現実根ざし、地域に密着した運動を行なう。
- 3 個人の意識変革を中心に、着実に持続的な運動を。
- 4 ゆるやかな連帯。ゆるやかな方向性。
- 5 「人はすべて可能性を持つ」を信条に、女性の可能性の開花に力をつくし、社会的活動と結びつける。
- 6 フェミニズム運動の中で、特に情報部門を専門的に受け持つ。
- 7 どの政党・企業・団体とも関係なく、自主独立を続ける。
- 8 会費・基金および事業収益を資金とする。
- 9 会員は、自分の情況と、さき得る時間や力に応じて運動する。絵を描く人は絵を、歌を歌う人は歌を…。
「病床でもできる運動」が基本。

10 どの部門にも「長」は置かない。運営の最終責任は、運営会議とする。

これらは、それまで「あいまいに」何となく不文律としてきたことを文字化したものですが、6、7、8、10を除けば、やはりあいまいな大わくでしょう。

男性社会では、「あいまい」は好まれません。実は、女性の仲間からも、〈あごろ〉のあいまいさについて、何度も非難を受けました。

でも私は、なぜかこの「あいまい」な部分が気に入っています。世の中は白と黒で分けられるものだろうか、白から黒までの限らないグラデーションこそ、もしかしたらいちばんたいせつな部分ではないか、そこをたいせつにしたときに、異端の排除はなくなるのではないか、という気が、私はどうしてもしてならないのです。

科学の中でもシステム工学は、あいまいさを最も嫌う工学です。事象をできるかぎり細分化してこれ以上ない厳密な論理構築をする、そのシステム工学の最先端で、このごろ「あいまい工学」が提唱されています。そしてソフトウェアばかりでなく、ハードウェアも、第五世代コンピュータはファジー・コンピュータ（あいまいな部分を持つコンピュータ）になるだろうと言われています。人間と機械が対話しながら使うことのできるマシン・インタフェースを目指すなかで、左脳（智）の役割にとどまるコンピュータの限界を捕い、右脳や旧皮質で情・意を司る人間をつなぐものとしての脳梁（大脳の左右半球を連絡する通信部）の役割が、「あいまい工学」としてクローズアップされてきたわけです。父性原理を象徴するようなコンピュータの原理が徹底的に追求された結果として、母性原理にも似た部分が浮上してきたことに、私はある種の感慨を覚えています。「あいまい工学」の提唱者である寺野寿郎氏は、その著「あいまい工学のすすめ」（講談社、一九八一年）で、次のように述べています。

「人間とは大変複雑なもので、われわれの行動を支配している心の働きにも表と裏の二面がある。裏とは本音のことで、ふつうわれわれは本能的・直観的に、とるべき行動をきめている。これを本音と呼ぶことにしよう。だが、それがただちに実行されるわけではなく、表の部分——これを建前と呼ぼう——がこれをチェックして、自分にも他人にも納得できるような理窟を作りあげないと気がすまない。だが建前論はあくまで後から付けた理

由であつて、本音できめたことをくつがえすようなことはめつたにない。

學問も社会も本音と建前の二本立てで動いている所はよく似ている。社会は人間の集団だから、他人を納得させる手段の一つとして建前論が必要なのは誰にでも理解できる。だが、現代のように複雑な社会では論理の構成自体がややしくなっており、建前論だけで押し通そうとしても誰も納得しなくなっている。ことに日本社会は元来本音をあいまいなルールとして動いているのに、表面的には二者択一的な単純な論理が幅をきかせるので、本音と建前のギャップは拡がる一方である。このギャップを埋めるような新しい手段を考えないと、人びとは本當のジレンマに陥つて社会は形がいつ化してしまうかもしれない。

學問にも本音と建前とがあることは専門家以外の人には案外知られていない。もちろん、完成した學問にも立派な論理体系がある。というよりも論理体系を作ること自体が學問なのである。しかし、新しい体系をつくつてゆく過程では既存の論理はあまり役に立たない。むしろ大切なのは直観とか経験とか、空想など、あいまいなものに進歩の言動力がある。いわば遊びや夢の中に學問の本音があるので、あまり建前にこだわると、過去の理論に合わないアイデアや現象は一切認めないというヘンなことになって、進歩も止まってしまう。

學問も社会もこれまで本音と建前とをうまく使い分けて発達してきたが、それは誰でも心に二面性があることを常識として承知しており、コミュニケーションの際に表か裏か一方を話せば、相手は両方とも理解できたからである。だが、最近はどこから一方しか理解しない人が増えてきたように思われる。(中略)建前中心の世界に對してはもっと素朴な人間の本音を理解することを呼びかけ、一方、本音以外のものに価値を認めないような世代に對しては建前の効用も分らせたたい。それには人間の心にひそむ「あいまいさ」を研究することがどうしても必要となる。」

〈あごろ〉は九〇パーセントが「あいまい」です。それは「多様性」と裏腹な関係でもあるし、また、「論理」が上位とされてきた既存の秩序に、あえてレジスタンスして「本音」にこだわろうとしている意味合いもありますが、「あいまい」だけでいいのか、論理や父性原理を徹底的に分析し、追求しないで、「あいまい」に安住しているのか、「明晰にして判明」と「あいまい」を結ぶものをむしろ考えるべきではないか、このあたりが「第二世代の〈あごろ〉」の大きな課題になっていくような気がします。そして、「あごろ型フェミニズム」でなく、

「まずみ型フェミニズム」「光子型フェミニズム」と、どんどん分化して、丁々発止の火花を放ち合うようになったとき、この問題にも光が当たることになる、私は期待しています。

*

私が、フェミニズムにアクセスした原点は戦争体験です。戦後の私たちの売春と内職に心傷ついたことが、その後の私の方向を決めました。そして六〇年安保で、戦争と権力の関係がはじめて心に焼きつき、やみくもに行動を始めました。それが(BOC) (バンク・オブ・クリエティビティ||創造力の銀行)の前身です。

働き続けてきた女である私にとっては、当時は「女が働くこと」がいちばん関心のあるテーマでした。(BOC)でそれを模索しましたが、どうしても見えてこないのです。もっともっとたくさん仲間と考えたくて、八年後、「求人雑誌」として「あごら」を出しました。それは思いがけず多くの読者を得、読者の中からグループ(あごら)が生まれました。そしてたくさん仲間から、たくさん知恵と勇気を授けられました。その中で、私自身も徐々に変わってきました。小さいときからたえず自死を思いつめていたほどの極度の神経質から、やっと脱け出しました。

まずみさんが言うように、身の丈の自分が見え、自分はどうありたいかをすなおに受け容れていけるようになったことは、「何とも心地よい」のです。

私はダメ人間。でもそれでいいじゃないの、と開き直れるようになったとき、ほかの人たちのダメさにも、むしろ親しみが持てるようになりました。こうなるとますます心地よく、まずみさんのことばを、またまねると、「もう後へは戻れません」という心境です。私がこんな言い方すると奇異に聞こえるかもしれませんが、「(あごら)さん、ありがとう」と言いたい気持ちでいっぱいだし、「フェミニズムっていいわよ」と、誰彼かまわず言いたい気持ちになっています。

でも(あごら)って、フェミニズムのグループとして「世間」からは認知されているのでしょうか。

よく、「(あごろ)って、ふしぎなグループね。リブかと思えばリブでなく、リブでないかと思うとリブなのね」と、よそのグループの方たちに言われます。私たち自身、モグラかゴジラか…と思うことも多いし、雑誌「あごろ」にしたって、フェミニズムの灯を高く掲げて創刊したわけでもありませんが、十五年という歳月が経ち、その実績や模索しつつけた方向性を振り返ってみると、やっぱり(あごろ)はフェミニズムのグループだなアという感じがします。

(あごろ)が大切なものとして感じた「多様性」や「あいまいさ」は、出発時点では異端でした。また、それがフェミニズムに通じると思ってたわけでもありませんが、「女がたまたま女に生まれたために、なぜ働きにくいのか、生きにくいのか」という一つ一つの現実を点検し、「なぜ」にあくまでこだわっていくなかで、「別の働き方もあるのでは」とか、「もっと肩の力をぬこうよ」「女っていいなあ」「男には男の苦しみがありそうね」など、少しずつ幅が広がってきたような気がします。

コペンハーゲンやナイロビの会議に参加して、こういう(あごろ)の考え方が、世界のフェミニズムの中で決して異端ではないこと、それどころか、とくに北欧のフェミニズムなどと非常に一致点が多いことを発見しました。私たちは、もちろん海外からの情報もたくさん受け、直接海外のフェミニストたちから、多くの、そして大きな刺激も受けましたが、私たち自身の現実をいつも見つめ、「それはなぜなの」という模索を怠らなかったことが、今日の(あごろ)をつくる基本になったのではないかという気がします。「日本よりも海外で評価されている(あごろ)」などという世評も時々耳にすることがありますが、世間でどのように見られようと、ますみさんのように「心地よい」と感じるメンバーがふえ続けていけば、それでいいのではないかと、私はなるべく楽観的に考えることにしています。

▲あごろVは、私自身思いもかけなかったことですが、ここまで何とかつづけて来ましたが、女の働く現場としての(BOC)を持ち、働く現実を負う中で考え、全国それぞれのメンバーがそれぞれ生きていく現場で直面する、血が噴き出るような情報と、客観的な資料を集めてつくる雑誌「あごろ」を軸としながら、全国十四の拠点を中心としたAGORAZINEの場があったことが、「育ち育て合う(あごろ)」のいのちを消さなかった

のではないかと思います。もちろん（BOC）も「あごら」も「拠点活動」もまだまだ未熟ですが、「開発途上」ということを、「成長の可能性を限りなく持つ」というふうに私は前向きに受けとめたいと思っています。中でも働く現場としての（BOC）は、多難な問題をまだ山ほど抱えています。が、「女が働くこと」という現実を、いやというほど負ってきたからこそ、「あごら」をつくるエネルギーが逆に生まれた、とも、私は受けとめています。

「あごら」が負ってきた「情報活動」がどれほど意味があるものか、私は福田さんほど手放して讃歌は歌えませんが、情報活動もフェミニズムの一端として必要ではないか、と思ってきたのは、私は女の問題は簡単に言うこと「人間の南北問題」と考えているためです。経済秩序同様、情報秩序でも、女は五パーセントにも達していません。しかも情報の流通は「弱肉強食」、権力のある側から弱い側に流れます。南側の「女」の情報が、もともとと流通してもいい、そして女自身ももっとも情報発信者になる必要がある、という状況は、まだまだ続くと思います。

その情報活動に「女の雑誌」がどれくらい貢献するものか、まして「あごら」のようなミディコミが果たし得る役割はどの程度か、きわめて微々たるものとは思いますが、それでも雑誌づくりを肯定的に思えた一因は、小学生のころから熟読した「婦女新聞」の影響ではないかと思っています。一八九九年に生まれた、菊判十六ページ、今の「婦人展望」を少し大型にしたようなこの週刊誌は、亡母の何よりの愛読書でもありました。この本に書かれていた内容もさることながら、母の、「婦女新聞」への入れ込みように、私は感化されたような気がします。

「あごら」を作るなかで、「本をつくって何になるのか」という批判もいやというほど耳にしましたが、「何かなるかもしれない」という気持ち、私の心の底にずっとあったのは、多分、こういう自分史があるためでしょう。私のフェミニズムへの原点は戦争ですが、同じように戦争を体験し、戦後の女の人たちの状況を見た人は山ほどいるのに、数少ない一人として私がフェミニズムに近づいたのは、幼い日からの情報の集積があったように、私には思えるのです。

ちなみに「婦女新聞」は、一九四二年、軍の圧力の下で、二千百二十号、四十三年間の歴史を自ら絶ちましたが、自爆予告が出た日の母の悲嘆ぶりを、今もありありと覚えています。そしてその終刊号に、「鳥の正に

死せんとするやその声よし」と記されていたことも、少女の記憶に鮮やかです。

九年ほど前、山川先生のご縁で、「婦女新聞」創刊者、福島四郎先生のご子息と連絡がとれ、その夫人が、亡母が廃刊の報を聞いて打った電報を伝えてくださいました。「ハハキトクノシラセキクオモイ」。

雑誌「あごら」は、過分な評価をいただきましたが、廃刊の予告を出す日があるとしたら、こんな電報を受け取ることができるでしょうか。

一冊一冊の「あごら」をつくりながら、いつも感じていたのは、私たちの前を歩いて下さった方々の大きさです。「女学雑誌」も「青鞥」もつくりえず、読むこともなかった多くの女たちも、ひとりひとりが生きている場で、自分の空間を生きやすい場にするために、どんなにか努力を重ねたことと思います。そういう、たくさんの宝物をいただいて、「あごら」が生まれ、生き続けて来られたことを、私は生涯忘れたくないと思っています。

*

きのうの講演会はすばらしく、どのお話も心に深く刻まれましたが、私が思わずヒザを叩いたのは、しま・ようこさんの一言でした。

「フェミニズムもまた公害源たりうる」

フェミニズムの心地よさを、私はさんさん申し上げましたが、「あごら」もまた公害源たりうることを、いつも自戒したいと思っています。

「第二世代」の「あごら」は、これから、もっと若い方を軸にみんなでつくり、育てていくわけですが、どうか「我こそは正義なり」というグループにだけは決してなあってほしくない。これだけは、心からお願ひしたいと思います。

十月十八日にこの話をする予定でしたが、与えられた時間が予定していた時間の三分の一になったため、急きょ軽い話に切り換えてしまいました。当日ご参加くださった方々に深くおわびします。これは当日予定していた原稿に、その後若干加筆したものです。独断と偏見に満ち満ちていますので、さぞかし反論がありでしょう。皆様の反論をお待ちしています。

Ⅳ 「第二世代」のへあごらゝを考える

三人の話に続いて予定していた「第二世代」への討論は、時間の関係でできず、それぞれがレポートを出す約束で散会しました。提出されたレポートの、代表的な二つをご紹介します。

「第二世代」に求められる情報誌像

細谷 洋子

六月に学陽書房から「女のネットワーキング——女のグループ全国ガイド」が発刊された。「ネットワーキング」は「あごら」特集号のテーマとしてかなり前から編集会議で話されていたものである。先を越されたわけだが、お金と人手のあるところにはかなわないという思いと、こうした仕事に取り組む出版社が出て来ていることに十五年の時の流れをあらためて感じている。

女の手による女の情報の提供という（あごら）の最初の役割はもう終わったのではないだろうか。少なくとももう苦労して特集号を作る必然性はなくなったと私は思っている。女性問題が市民権を得、ある程度売れるようになった今、作りたいものがあつたら、企画を持ち込んで出版社に出させることだってできるのだ。

第二世代の（あごら）は、それを前提にした上で、求められている役割と果たすべき役割を考えていかなければならないのではないかと思う。

では、（あごら）ならではの役割とは何なのだろう。以下、私にとって、こうあって欲しい（あごら）について考えてみる。ニーズの一つめは、グループの動きにそったネットワーキングである。私は「あごら」のほかにもいくつかのミニコミを講読しているが、経済的にこれ以上ミニコミを講読するのは難しい。しかし、母子保健法がその後どうなっているのか、女性民教審は、国家秘密法は、夫婦別姓をすすめる会は……等々の動きについて知りたいと思っている。それを取材して集めるのは膨大な人手とお金がかかるだろうが、会報を出しているもの

だけでも集めて、毎月そこから拾っていくことは可能なのではないだろうか（「あごろ」と交換にすれば誌代はかからない）。それも単なるお知らせではなく、その月ごとに、新しい動きのあったものやおもしろいものを何点かピックアップして重点的に掲載する。学陽書房の「女のネットワーキング」は実に五百余のグループを網羅しているが、グループの紹介だけで、日々動いている部分までフォローすることはできない。こういう部分こそ、月刊、定期刊行の強みではないだろうか。

二つめは、やはり故郷としての（あごろ）の部分を持つこと。初めて女性問題に出会う女たちをフォローする、とつきやすく軟らかい部分を持つことによって、広げていくことを模索する。この部分だけの勝負では「クロワッサン」や「モア」等の既刊女性雑誌にかなわないが、これだけにとどまらない部分をも併せ持つことによって勝負していけるのではないだろうか。

三つめは、市井の女たちの発言の場としての機能を持つこと。出版社が女の本を出しているとはいえ、読者はバラバラの点のまま一方通行の情報を受け取っているだけというのがほとんどではないだろうか。地道な実践の記録や、草の根活動家たちの論文等々、広場としての投稿欄にとどまらない草の根からの発言の場を提供し、書き手を育てていくことは大切なことだと思う。そして、プロであれ、アマチュアであれ、原則として原稿には原稿料を払うこと。たとえ安くても原稿料を払い、何月発行の何号に掲載するということを明示し、それを守ることは、情報誌を発行する上で最も基本的なことである。そうした基本的なルールを守ってこそ、原稿にダメを出して書き直してもらったり、期日や字数など書く側にルール遵守を求めることができるのであり、結果として誌面の充実につながると考えている。

四つめは、資料としての部分である。省令や法案の全文または女性問題に関連する部分など、学習資料として信頼できる資料は欲しい。また、ニュースも新聞記者などジャーナリストに依頼して書いてもらうことはできないだろうか。さらに、女の本の紹介もぜひ欲しい。

欲を言えば、時々プロのフェミニズム理論家（エコロジカルフェミニズムやマルクス主義フェミニズムなど今ホットな論争や理論展開をしているものは数多い）の論文も載れば言うことはないのだが、あまりに欲張りすぎだろうか。

というわけで、量としては最低五十ページ程度（背文字が入る）の充実した月刊の発行が、私の望む第二世代の「あごろ」であり、「あごろ」である。全国に散らばっている会員が個々に日常的な活動をしなから有機的なつながりを持ち、互いに支え合っていくために、こうした持続的な情報活動こそが今もっとも必要なことだと考えている。

（八七年十一月記）

これから「あごろ」と『あごろ』

三 好 久 美 子

● 第二世代について

私はこのことばにひっかかっています。

これまで運営・本作りの中心を担ってきた人が、（斎藤・福田・高橋・後藤さんたち）が長くやってきたからとか高齢（？）になったとかリフレッシュが必要とかの理由で後に下がって、次の世代の若い人（？）に中心を移すという意味を含んでいると思われるからです。経歴や年齢に関係なく、今、「あごろ」を続けていく気力があるなら積極的にかわり、見切りを付けたとか、何らかの理由で活動の元気を全くなくしているなら下がるのもしかたないでしょう。元気になったらまた出てくるということでもいいと思います。（右に名前を上げた方々が「あごろ」に熱意と責任感を持ち続けるであろうことは疑っていませんが。）

ただ、私のように、長く「あごろ」にかかわっていないが、斎藤さんに「世代交代」を言われるまで、自分から運営に積極的に働きかけてこなかった無責任さは充分反省すべきと思っています。斎藤さんは疲れ、事務局の人にも疲れ切った次々かわっていったことを思えば、これは、私たち運営委員に本当に「あごろ」を存続させる気があるのか、との問いを突きつけられているんだと思います。もっと義務としての責任を受け持ち果たしていく覚悟が必要なのでしょう。

交替ではなくて、責任を持ってかわる人が増えることを必要と思います。

● 具体的変更

1. 本誌について

月刊作成の拠点にかかわっている者には月刊は楽しみです、他の会員にとってはどうなのでしょう。それが不安です。また〈あごろ〉で育った私には読みごたえのある本誌が心情的にはほしいです。あれに代わる本はまだ出ていないと思うし（他の本や雑誌をよく読んではいませんが）、充分、役割はあると思います。しかし、今までも斎藤さんや事務局の人が作ってきたわけで、その人たちが資金づくりと編集の両面の責任を同時に負い続けることはもうできないと言っているのです。経営不振になれば業務縮小は止むを得ないことです。

2. 月刊について

細谷さんの提案に賛成です。たとえば五十ページとすると、拠点分三十ページと全体企画（事務局主導型）二十ページとかにする。拠点分は今までどおりだが、他の記事を支えるのは、各地に調査やレポートをする記者——個人でもグループでも——を募集し、原稿を寄せてもらう。もちろんどちらも有料。意見と調査報告で原稿料がちがっていてもいいでしょう。そして年間いくつかは責任を持って書くことにしてはどうでしょうか。引き受ける人がいるかどうかですが、まずは、運営委員が引き受けられるか……だと思っています。

3. 費用について

それには正確な予算と予算にしばられた本作りが不可欠だと思います。

そして事務局と各地の委員なり拠点記者がしょっちゅう連絡を取り合わなくてはならないでしょう。

また、出版社、映画等の広告を入れればどうでしょう。

4. 会費について

月刊を雑誌として販売し、会費ではなく、定期購読料という形にしてはどうでしょうか。

5. 運営委員について

義務と権限を明確にする必要があります。

義務があるとなりがたうことが心配ではありますが、応援団としての委員会ではもう〈あごろ〉は続けられないところまでできているのでしょうか、多分。

（八八年五月記）

五月の運営会議では、この二提案を軸に、まずは「月刊」の充実を計ろうと、それぞれが具体的な案を出し合い、横割り項目ごとの分担を決めました。八月号からは、面目一新したものになると思います（ただし、ページ数は予算の関係で三十二ページ以内に納めます）。

主な改善点は次のとおりです。

1. 拠点の事情により、三十二ページで全ページを分担できる拠点もあれば、一部分を分担することからまず出発したい拠点もあるので、拠点担当分を毎号十二ページ以内にし、メイン記事とする。発足もない拠点は、二・三拠点が合同して十二ページを埋めてもよい。また、個人で担当したい人は、レジュメを提出する。
2. 拠点担当部分のメイン記事は、従来どおり、それぞれの拠点が提起する自発的なテーマで自在な腕をふるう。ただし、二十ページは年間を通した横割りのページ建てとし、年間を通した担当者が責任をもって原稿を集め、雑誌としての一貫性、持続性を維持する。月刊の編集に経験を重ねた拠点は、この横割りページの原稿も、可能なら分担する。
3. メイン記事に年間テーマも設け、希望する拠点は、年間テーマに沿ってAGORAZZEEINする。今年度のテーマとしては、現在のところ、「ミニコミ」と「家族」があがっており、「ミニコミ」は八月と十一月、「家族」は来年二月の予定。
4. 毎号掲載予定の横割り項目は、次のとおり。
 - ①とびら（巻頭のことば）
 - ②ネットワーキング（女のグループの活動、他のミニコミの記事紹介）
 - ③聞き書き（有名無名の女性探訪）
 - ④フェミニスト英語（いま世界の最先端に行くフェミニスト用語の日英対訳）
 - ⑤私の仕事（さまざまな仕事につく女性と、その仕事の内容の紹介）
 - ⑥意見・コラム（自由な投稿欄、それを受けた討論の場）
 - ⑦資料（女性問題の最新資料）
 - ⑧集会報告（各地の集会報告）
 - ⑨書評・映画評
 - ⑩海外情報（海外フェミニストの動きおよび、海外フェミニスト誌からの転載）
 - ⑪女性ジャーナリストの目（第一線ジャーナリストの視点）
 - ⑫あいらのあいら（会員の自由な発言）
 - ⑬女のつどい（女性の集会予定表）

5. メインテーマの充実

- ・ 「あごろ」の大きな柱であるAGORAZEINの場を毎号確保し、拠点に属さない個人会員の発言の場をひろげたこと

- ・ AあごろVに毎日のように届く内外のフェミニズム情報、フェミニスト情報をできるだけ紹介する積極的な誌面を位置つけたこと

が今回の改正の主な特徴かと思っています。

誌面に限りがありますので、投稿のすべてを掲載するわけにはいきませんが、「あなたができる情報活動」として、どしどしご投稿ください。採否は慎重に検討のうえ、ご連絡します。ただし、申しわけないのですが、財政が非常に窮乏しているため、原稿料は当分の間、すべて無料にさせていただきます。

八月号のメインテーマは「ミニコミー」、九月号は「女と税制」、十月号は「職場と不倫」、十一月号は「ミニコミー」の予定です。どうぞご期待下さい。

なお、今年度は、特集としてはこの「女縁」と、「新聞切り抜きに見る女の16年Ⅱ」の二冊を出しますが、来年度は、特集は「新聞切り抜きに見る女の16年Ⅲ」一冊を「月刊」のほかに出せるかどうか、財政的に非常にきびしい状況です。この難局を切り開くため、辞意を固めていた斎藤・高橋・福田の三人も、今しばらく運営会議にとどまることになりました。

書くこう！

つくるこう！

『あごろ』は

あなたの雑誌

暮らしの中でフト思ったこと、働きながら考えたこと、—あなたの気持ちをそのままに書いて、送ってください。文章の上手・下手は問題ではありません。形式も、詩、和歌・俳句・随筆、論文、意見、何でもかまいません。表紙絵やカットの描ける方、レイアウトや校正、ワープロ打ち、宛名貼り、発送、雑用が得意な方、ぞくぞく名乗り出てください。

「あごろ」は、あなたの雑誌です。
[送り先] 〒160 東京都新宿区新宿一—九—六 あごろ編集部 ☎03—354—3941

一つの節目に思いきった脱皮を——「第二世代」を提唱する理由

斎藤千代

十五年を区切りに「第二世代」へ、と提唱したところ、意味不明とか、「第二段階」と言うべきではないとか、さまざまな意見が出た。私なりの「第二世代論」を文字化していなかったことも混乱の一因のように思われるので、遅ればせながらその意図を文字化してみよう。

「第二世代」は、もちろん「世代交代」の意味を含んでいる。私が世代交代を熱望しているのは事実だが、個人的な理由で提唱しはじめたわけではない。

（BOC）を始めたときも（あごろ）を始めたときも、内心思ったのは、共に「滅びることが理想となる仕事だ」ということだった。「女のための」職場や本が不必要になる日が大願成就の日、と思ったが、そのどちらも成算は全くなかった。どちらもやむにやまれぬ気持ちで始めたもので、ダメでもともと……と思っていたから、計画や展望があったわけではない。厳密な計画や展望を立てたら、多分、とても着手できなかったろう。

しかし、子どもの七五三を祝うように、切れ目のよい節（ふし）節では、いつも一つの区切りと考えていた。五年目はまだ苦戦最中だったが、十年目には「世代交代」を考えていたし、口にもしている。そしてその時から、十五年目には何があるんでも……と決心していた。

私が「十五年」に意味を持たせたのは、それなりの理由がある。

「世代」というときは、ふつう三十年が浮かぶ。英語のゼネレーションは、親から継いで子に伝えるまでの期間、その平均が三十年の意味だというが、歴史を眺めてみると、たしかに三十年ごとに大きなうねりがあり、その半分の十五年ごとに小さなうねりがあるからだ。

たとえば敗戦の一九四五年を軸に考えてみると、その前の十五年、一九三〇年代からファシズムの台頭、戦争の足音が高まる。そして戦後十五年後の六〇年代から日本は高度成長期に。日本では安保、世界各国でも市民運動や植民地の独立が相次ぐ。その十五年後の七五年には、工業化のひずみが各国で顕著になり、南北問題、女性問題が花ざかりとなっている。

フェミニズムは時代の動きと常に連動している。こういう時代の節目節目をおさえながら、私たちも十五年を節目に転機をはかりたいというのが一つ。

もう一つ、「第二世代」を提唱すれば、否応なしに、その前の十五年、「第一世代」を点検しなければならなくなる。「あいまい」「多様性」の中に盲進してきた（あごろ）だが、これでよいのか。少なくとも十五年に一度はオーバーホールしたい。中枢を担う者の交代も考えたい。

（あごろ）の二本の柱、（BOC）（バンク・オブ・クリエイティビティ＝創造力の銀行）と雑誌「あごろ」を共生させるのか、個別の発展を計るのか。これも十五年を区切りにも再点検したい。

また、（あごろ）に常に生気を吹き込み、その存続を支える大黒柱となったのは、各地の拠点だが、拠点活動にもそれなりの変遷があった。今までの問題点は何か、拠点に属さない、あるいは属せないメンバーの意見をどう吸い上げるか、これから必要な拠点活動は、等々も、原点に返って考えてみたい。

計画を立て、一つの方向に強く導くのはフェミニズムになじまないが、だからこそメリハリをつけるときにはつけてはどうか。良い意味の「あいまいさ」を大切にするためには、ある種の「厳しさ」が必要ではないか。

これが、私の「第二世代」提唱の基本である。

さて、（あごろ）を続けるべきかも含めて再点検して、これからも最低十五年（あごろ）を続けたいとみんなが思い、続くとしても、生成流転するのがフェミニズムだとすれば、十五年後の（あごろ）は、かなり様変わりしたものになっているだろう。

八〇年代初頭に打ち出した「方向性」（二一ページに掲載）がそのまま継承されたとしても、そしてたとえば「フェミニズム運動の中で、特に情報部門を専門的に受け持つ」という文言が仮に同じでも、「情報」を「専門的に受け持つ」作業内容は、かなり変わったものになるのではないか。

現状のような印刷媒体だけでいいのだろうか。印刷媒体そのものも大幅に変わるのではないか。

私は、九〇年代には映像情報はますますその比重を増し、CATV局も相当数生まれていだろうと推測している。また、多くのミニコミは、即時応答と双方向性、無名性の利点を持つパソコン通信のようなものになら

吸収されているだろう、あるいは新しい伝送手段による新しいミニコミが生まれているだろう、と予測している。十五年間を展望するとき、そのことは一応頭に入れておきたい。

問題は媒体だけではない。現在でも過剰な「情報」は、今後、さらに過剰になるだろう。情報過多時代には、より精選された少量の情報が必要になる一方、情報検索情報が求められる、と推測しているが、その中でお流布するに足る情報は何か。

雑誌「あごら」は、これまで、それなりの一つの志（こころざし）をもって発行してきた。第一にシスタッフ。女が元気がでる情報を。女への応援歌。それによるネットワークキング。第二に、多様な価値観に立つ情報。北から南まで、各地域、各世代の女たちが発するなま身の情報の提供。その中で、選択する主体としての個人が育つAGORAZEINの場の提供。第三に、できるかぎり原典を紹介し、二次情報、加工された情報からではなく、一次情報を読破する眼力を深めること。大まかに言えば、この三つが基本だったかと思う。そして、整理され、選択された「論理」とともに、多くの「非論理」やノイズも、むしろ積極的に掲載することを心がけた。従来の学問やマスメディアからはうとまれてきた部分に、人間の皮膚感覚と直結するものがあるのではないかと考えてきたためである。

しかし、これらが十分に実行されたわけではない。また、これらは第一世代の志である。これにとらわれず、新しい展望を試みてほしい。

第二に、中軸を担う者の交代の問題がある。フェミニスト・グループでは、本来、全員が等しい負担を領つのが理想だが、全国規模のグループとなると、扇の要めの部分は現実的に必要である。

十五年を区切りに、私は「運営メンバー持ち回り制」を提唱したい。第一世代は、〈あごら〉というグループが生存できるかどうか、さまざまな試行を重ねたいわば細胞分裂の時期だった。一つの形が出来上がるまでは、その中軸となる部分は、ある程度固定化していることも必要だった。しかし、この十五年で、不完全ながらも、〈あごら〉の方向性も組織も、それなりの形を整えたように思う。少なくとも私は運営の中心からは退きたい。

そのほうが、若い生き生きした芽が自在に伸びると信じる。いま運営メンバーが一度に一新するのは無理だと思うが、せめて三分の一か四分の一は、抽せん制などの持ち回りにし、できるかぎり全員が経験するようルール化してはどうだろうか。この面でも新局面を開きたい。ただし、断っておくが、これは一律に高齢者を排除するということではない。十代から八十代までの幅広いメンバーを含んでいるのが〈あごら〉の大きな特徴であり、その多様な年代が運営メンバーにも反映することが望ましい、と私は思う。

拠点活動のあり方も、第二世代の大きな課題であろう。地域におけるAGORAZEINの場としての拠点を持ったことは、「女学雑誌」とも「青鞥」とも違う、「あごら」の大きな特徴だった。札幌、京都、武蔵野、柏などは、その拠点独自の「拠点通信」も発行してきた。〈あごら〉の大きな目的であるネットワーキングは、拠点活動によって支えられてきたと言っても過言ではない。

送り出した「情報」が、拠点での討論で深められ、フィードバックされた。しかし、その一方で、この十五年間の拠点活動の盛衰には目まぐるしいものがあつた。衰弱したり撤退した拠点を見ると、多くの共通項も認められる。それは、〈あごら〉のたんなる一拠点の問題という以上に、女のネットワーキングの難しさを示唆する貴重な資料のように思われる。単純に隆盛・発展が良いということではないが、地力を増し続けて来た拠点には、それなりの骨身を削る苦労があつたろう。それぞれの経験を持ち寄って、お互いの五年、十年、十五年を資産として次代に渡して行く作業はできないものか。「拠点間会議」の必要性が数年前から提唱されながら実行できなかったが、この秋にでも、持つことはできないだろうか。

拠点に加わらない、あるいは加わるべき拠点的ないメンバーの問題も未解決のままになっている。拠点に加わり、情報の発信者としての力を十分つけたメンバーが、その拠点の担当する「月刊」には登場しても、年間を通しての雑誌「あごら」の力になっていないことも問題だろう。今回の「月刊」の横割り新企画は、そういう個としての会員の発言の場を広げることも一つのねらいになっているが、さらに工夫をこらしたい。

最後に、財政の問題がある。

〈あごろ〉を普通の運動体として考えれば、会費に対応する会報を発行するのが原則となるが、とすれば、毎月十六ページ程度の「月刊」だけ、となる。〈あごろ〉の目的に、「情報活動」があることが、財政を困難にしている。会費を超える「情報誌」(あるいはそれに準じるもの)を発行してこそ、「情報活動」の意味があるとするれば、その負担をどのように分担すればよいか。

①魅力ある情報誌をつくるとともに、フェミニズム運動における情報活動の意味を訴えて会員増をはかる②会費値上げ③カンパ集め④バックナンバーの拡売等、手近な方法だけでもいくつか考えられる。今回の「月刊」の内容改善は、①を多少とも可能にする期待をこめたものだが、さらに名案を寄せてほしい。

ニーズオリエンテッドの情報、中でも収益と結びつく情報には常に高い値がつくが、シーズ(種、原点)としての情報は、発信者が多くを負担しなければならない。女性のシーズ情報誌としての「あごろ」は、決して机上ではつくれない雑誌である。莫大なエネルギーと資金を、誰がどのようにに生み出し、分かち合うか、真剣な討議と実行がほしい。

以上、第一世代が果たせなかったことを書き出してみた。物心両面の多くの負債を未解決のまま第二世代に渡していくことを申しわけなく思っている。同時に、このマイナスを、必ずプラスに変えるに違いない第二世代の知恵とエネルギーを信じている。

私が「第二段階」と言わず、あえて「第二世代」と言うのは、結果として、ゆるやかな段階的移行になる可能性をはらむにせよ、近未来、中未来、できれば遠未来まで展望するフェミニズム論、その中での〈あごろ〉の位置づけを考えたいためである。巨視的な展望を持つ反論とともに、具体的、現実的な多くの提案を待っている。フェミニズムでは「脱皮」はとても大切な要素だと思う。日常的な自己変革と同時に、一つの節目には思いきって脱皮すること。こうした覚悟と、ある種の思いきり、そしていさぎよさがなければ、脱皮はなかなかできないのではないかと思う。

ただし、これらは、あくまで私の「私見」である。率直な反論を期待している。

各地の〈あごら〉連絡先

☐ あごら旭川

- ・旭川市緑ヶ丘5-4 那須友子
- ・☎ 0166=65=5690 〒078-11

☐ あごら札幌

- ・札幌市西区琴似1条6丁目グランドハイツ琴似408号 細田英理子
- ・☎ 011=644=2927 〒063

☐ あごら仙台

- ・仙台市人來田1-8-11 三船照子
- ・☎ 0222=45=5994 〒982-02

☐ あごら柏

- ・千葉県印旛郡白井町大山口1-7-20 桑原ちあ子
- ・☎ 0474=91=4843 〒270-14

☐ あごら新宿

- ・新宿区新宿1-9-6 〈あごら事務局〉
- ・☎ 03=354=3941 (BOC) 〒160

☐ あごら京王

- ・世田谷区南烏山2-18-8 竹内全子
- ・☎ 03=307=3448 〒157

☐ あごら武蔵野

- ・三鷹市下連雀9-9-5-103 寺沢恵美子
- ・☎ 0422=44=2590 〒181

☐ あごら大阪

- ・吹田市岸部中1-29-4 藤井里子
- ・☎ 06=387=6574 〒564

☐ あごら阪神

- ・(準備中)神戸市兵庫区神田町10-12 久保和子
- ・☎ 078=361=0004 〒652

☐ あごら京都

- ・京都市左京区一乗寺築田町56-1 塚崎美和子
- ・☎ 075=791=4623 〒606

☐ あごら山口

- ・下関市竹崎町2-6-3-5-202 重兼久子
- ・☎ 0832=31=9710 〒750

☐ あごら鳥取

- ・鳥取市古海1147 高草団地9号 前田享子
- ・☎ 0857=23=3074 〒680

☐ あごら九州

- ・福岡市中央区笹丘2-4-6 小島サカエ
- ・☎ 092=521=7624 〒810

Bank Of Creativity

女性の創造力と社会を結ぶ銀行です。

1964年創業“創意と誠意”がモットー。

主として下記の仕事をお引き受けできます。

✎リーフ・ポスターから豪華本までの企画と編集・印刷製本

●講演・座談会等の速記・リライト・取材記事作成

✎スライド・映画の制作

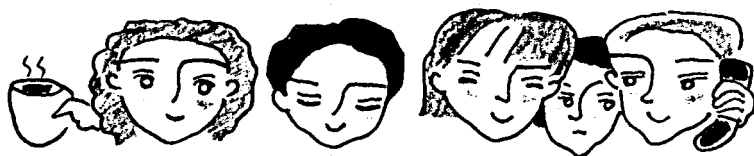
✎各種調査・マーケティングリサーチ



創造力の銀行BOC

〒160 東京都新宿区新宿1-9-6

PHONE 03-354-3941(代)・直線 東京 3-39331



英語を学んでネアカになろう！

語学は毎日学ばねばならぬ。ではあるけれど〈あごろ英語教室初級コース〉87年度の実績は年八回であった。月一回第二月曜PM 6・15〜7・30、テキストあり、夏休み、冬休み、春休みあり。会費五百円プラス肩たたき。進歩は抜群。性格よければ、その進みぐあいはたちまちにして、ニュージーランド、イギリス、アメリカの人歩きも可能となる。

なぜならば、数回学んだ英語が、生きた英語となる授業だからであります。一か月の間に経験したことを数分にまとめて話す。それが、自己主張の訓練となり、率直に意見を述べる人間に変えます。

問題は性格の悪い人です。これもまた、ゆつくりと、英語の上達とともに性格も良くなります。汗水たらたらメガネはくもり、しどろもどろの英語も、徐々に、徐々に、よくなるのであります。

われらの先生 クリスさんの「リラックスしなさい」の教えが効果を現わすのです。

クリスさんは、〈I F J〉の有力メンバー。日本語は「ザーマス言葉」から「ギャル語」まで使います。ですから私たちは、時間中は「英語だけ」を何がなんでも使わなければならないのであります。

華道をたしなみ、〈あごろ〉へはオートバイで通ってくるクリス先生にも弱点があります。肩こりが激しいのです。そこでお礼は肩たたきなのであります。代わる代わる肩たたきしている間は日本語だけ使います。そして、私たちの肩もほぐれて帰るのであります。どうぞ お出かけください。

(桑原ちえ子)

おもしろいですよ、あごろフェミニスト英語クラス

毎月三回、米国やオーストラリアのフェミニストを先生に、フェミニズムについて自由に話し合うクラスです。日本の女流文学におけるフェミニズムからレズビアンまで取り上げるテーマは、かなりワイドでおもしろく、一時間三十分のレッスンがあったという間。

先生のバーバラは、長年日本に住んでいる合気道の大ベテラン。もちろん生粋のフェミニスト。いつも自然体



のステキな女性です。そして花のメンバーは、フリーライター、英語教師、薬剤師とさまざま。月刊「あごら」八月号から「フェミニスト英語」を担当することになり、はりきっています。

この教室はそんなじよそこの英語学校では教えてくれそうもない英語、辞書にも載っていないできたてのフェミニズム用語など、キャピキャピの英語が学べます。ここで学べば、人類みな兄弟、いえ、姉妹、いろいろな国の人たちと地球規模でいろいろな想いを語り合うことができます。

みんなでレッツ・ラーン・イングリッシュ！ ぜひ一度来て見て下さい。

(寺沢恵美子)

「自立の心理学」も、オモロイ！オモロイ！

六月まで半年休講、続けるべきか、頭をヒヤして考えていた、しまようこさんの「自立の心理学」。六月の話し合いで、「誰かが悩みを話し、それについてのアイデアがいろいろ出たら、少なくとも次回は、それを受けてどういう行動をしたか、その結果は…、を報告し合いたい」「漠然とした話し合いではなく、あるテーマに沿って考えることにしたら」などの意見が出、「九月十四日再開」に決まりました。

ああヨカッタ。だって、とても魅力的なクラスですもの。しまさんと話していると、頭の中にあちこちできていたコブみたいなのがパツと割れたり、またゴツンとぶつかってもっと大きなコブになったり、参加しているみんなの発言も、どんなおもしろくなる。一度このおもしろさを味わうと、もう、病みつき……ですわ。

九月十四日(水)、午後七時、興味のある方はいらしてください。この日は七時から八時半まで一時間半の予定ですが、何曜日の何時からにするかと、話し合いの方法や次のテーマは、その日集まったみんなで決めることになっています。私は、たとえば「誤解」をテーマに、と提案するつもり。女のグループ間で、またフェミニストを名のる人たちの間でも、ずんぶんつまらない誤解が多く、それがとてももったいない気がしてしょうがないからです。皆さんも、それぞれ聞きたいこと、考えたいことを持ち寄ってください。参加費は一回五百円(安い！)。しまさんも五百円お出しになり、それでちょっとしたスナックを買ったりしています。ただし、会場が狭いので先着十五人限り。では、お待ちしておりますね。

(斎藤千代)

「子連れ子育て論争」紹介

アグネス・チャンの子連れ子育てをめぐるって、林真理子、宮迫千鶴、上野千鶴子、道下匡子さんたち、当代一流の論客が論陣を張り、話題を呼んでいます。

神奈川の渋谷路世さんから、次のようなお手紙とともに切り抜きが送られてきました。

「私、友人から「超伝導」と形容されている過敏な人らしいので、そう自覚して、呑みこもうとしているのですが、林真理子さん、中野翠さん、山田詠美さん、宮迫千鶴さんの「子どもは嫌いだ」発言に動転しています。なかでも、宮迫千鶴さんの「禁児車」なる発想には、その恐ろしさに体がふるえました。

モチロン、子育て中の私は立派なファシストで、子どもを「ウルサイ！」と怒鳴りつけています。でも、だからと言って子どもを「隔離」せよなんて絶対考えつかない発想です。しかも、さらに私を混乱させるのは、女たちが（子なしも子ありも、主婦も仕事持ちも）「アグネスは我がまま、子どもがカワイソー」とこの「アパルトヘイト」的発言に拍手していることです。いったい、どうなってしまったのでしょうか。

たしかに女は疲れます。仕事も家庭も、と要求したものの、パートナーを巻き込んだのは、まだ少数の女です。子どもぎらいに女がさせられているわけですが、しかし、その敵は、アグネスじゃないのに。昨日、やっこのことで上野千鶴子さんの反論が朝日に載りました。あとは、佐藤洋子さんが短い文章で朝日に書いたのと、「交流」で、ますのきよしさんが正論で切り返しているぐらい。

あんまりだと思っていたら、「We」が宮迫千鶴さんをゲストにフォーラムを企画していると聞きました。きつと、しっかり半田さんは反論してくださるだろうと楽しみにしてるのです。 渋谷路世

*

△あごろVの会員の皆さんも、さぞかしいろいろと言いつ分がおありでしょう。しかし、原文をつくり読み返してみると、それぞれの言い分が微妙にズレて伝わっているような気がします。変なカタチでおチヨクリたくないし、△子連れ子育て論Vの発火点になったアグネス・チャンさんを含めて、まずは応援歌を送りたい、そして問題の本質を考えてみたい。そんな意味で、論争集をまとめてみました。皆さんのご意見をお待ちしています。

いい加減にしてよアグネス
幼稚な「正論」に疎ましさを感じるのは私だけ？

林真理子（作家）

私はかなり気が重たくなってきた。彼女についての資料を読むにつれ、空しい感情はさらに強くなる。

この類の人間に、おそらく何を言っても通じるはずはないのだ。

著作や発言からすると、アグネス・チャンという人は、善意と愛を信じるやさしい女性なのであろう。世界中の人々はいらない人たちばかりで、みんながコミュニケーションをきちんと持ちさえすれば、必ず平和はやってくるといふところまで言っておられる。それはまさに新興宗教と同じだ。口あたりのいいスローガンで、人々を折伏しようとする。

「神を信じますか」と、街頭で話しかけてくる人間を言いかすことが不可能なように、この愛と平和の申し子の女性に、何を言ってもすべてが徒勞に終わるであらう。

こういう鈍感さ（私はあえてそう言う）に、うち勝つものは何もないのだ。たとえば例の子連れ出勤問題にしても、彼女は無邪気にこう言っておられる。

「仕事先の人たちはこちらが恐縮するほどによく理解してくれて、和平がいることを面倒臭がるどころか、むしろ楽しみにしてくれるほどでした」（「中央公論」87年10月号より）

「子どもを連れていったことで、職場の雰囲気がなごやかになりました」

という発言も、何度か見聞きした。こういう感想しか持てない人間に、「仕事場で子連れは是か非か」などという議論をふっかけてもばかんとされるだけであらう。

私は小説を書いているぐらいいだから、人の心の裏をよむことに、たけているところがある。もし私が子どもを出産し、出版社や講演会に連れていったら、たいいていの人がちやほやしてくれるに違いない。また連れてきてくださいね、と愛想のひとつも言うだろう。しかし私は、その表情から、全く別の感情をすばやく察することができる。他人の子どもというものに、すべての人が愛情や好意を持ちはしないということから「迷惑」や「社会生活」という議論はスタートするのだ。

私はこの原稿で、卑怯な手段であるところの伝聞や噂話はいっさいしないことにする。しかし、ひとつだけ言わせてもらうと、私の知り合いに、アグネスとかかわった人たちが何人かいる。テレビや雑誌の仕事に従事する彼らが、本当に嬉々として和平ちゃんをあやしていたか、来てもらって心から喜んでいたかというのは、おおいに疑問の残るところだ。

「いやあ、ケガでもされたらどうしようかと、気が気じゃなかったよ」

という、ある人の言葉は、もしかしたら反対に、私への迎

合かもしれない。が、人間というのはこうしたひとすじ縄ではないかというものは、ある程度の大人なら誰しもが知っていることだ。「みんなが喜んでくれている」という単純さは、ふつうの人はまず持たない。

しかしその単純さを武器に、宗教めいたことをしてしまうところが、アグネスという人物の不思議さであるのだ。

ふつうの大人、ふつうの芸能人が口にすれば、せせら笑われるか、偽善とのしられるであろう言葉が、いつまでも少女のような容姿を持つ女性から、たどたどしい日本語で語られると、ある人々は許してしまう。許すところではない。あたかも素晴らしい啓示のようにもてはやすのだ。

私の気を重くしている原因がここにもある。「週刊文春」で二回ほど、私はアグネス・チャンについて書いてきた。その都度、驚くほど反響をよび、そのほとんどは私の意見を支持する投書だったと記憶している。しかし私はアグネスではないので、みんながこちらの趣旨に賛成してくれているなどとは決して思わない。アグネスの支持者たちは別の週刊誌、たとえば女性誌などを読んでいるのではないかと想像したりする。

そして案の定、思っていたとおりの反応がマスコミからきた。アグネスは私と一歳しか違わないのであるが、キャラクター的にあちらはかなり有利である。ひたむき、けなげ、愛らしいイメージが強い。私でなくてもかなり損な役まわりだ。

「噛みついた」と書いたのは高橋春男氏であるが、こちらは漫画だからすべてを戯画化するのは仕方ない。しかし「朝日ジャーナル」三月二十五日号の「コワイ女が二人でアグネスをいびるの巻」

という見出しは非常に不愉快になった。二人というのは、私と中野翠さんを指すのであるが、彼女は「サンデー毎日」の連載ではつきり書いている。

「アグネスのことはもういい。私が腹がたつのは、こういう人をもてはやすマスコミ、役所関係である」

「ぶくぶくばあ」運動

私と中野さんがそれぞれの原稿を書いたきっかけは、参議院の調査会に彼女が出席し、女性労働と育児に関して意見を述べたことだ。こうなると個人の趣味とか、タレントの子育てパフォーマンスとは次元が違う。私たちが女の物書きとして、多少意見を言わせてもらったことが、どうして「噛みつく」とか「コワイ女がいびる」になるのであろうか。こういう男社会のからかいが、アグネス問題を、低レベルのものにしているのである。

それにしてもこの「朝日ジャーナル」の浅薄さはどうしたことであろうか。アグネス・チャンのことになると、参議院も、大学も、信じられないほど軽薄に大甘になる。が、特に朝日新聞の「アグネスびいき」というのは、目立つものがあ

るようだ。前置きが長くなったが、私はここで日本人、特にある種のインテリがどうして彼女にこれだけ弱いのか少々考えてみたいと思う。つきつめて彼女を論じていけば、現在の日本の姿が見えてくるはずだ。本当はこういうことは、私以外の、もっと教養と論理的思考を持った女性がやってほしいのだが、まともな人は低次元のケンカと思われるのが嫌なために沈黙をし、そうでない人はおおよそ的はずれの擁護にまわったので、私ぐらしいとする人間がいらないのだ。

ここにさる二月十九日に開会された「参議院国民生活に関する調査会会議録第二号」という、長ったらしい名前のついた議事録がある。例のアグネス・チャンが出席し、日本のすべての大新聞が大きく報道したあれである。

日本大学人口研究所名誉所長という人が、出生率の動向と対応について発表した後、いよいよアグネスのお出ましだ。ここで語られた発言の幼稚さ……といったそれは主観の問題で個人攻撃と言われるであらうか。

「休みをいただいて主人と子供三人で箱根へ行っただんです。主人が、君ももうフランス料理なんか食べてないし、たまにはいいところで食事しましょう、あのホテルのレストランはすごくおいしいから連れて行ってあげると言って、それを目指して、そこで泊まって優雅な食事をしようという、本当に浮き浮きして目指して行っただんです。そうしてそのホテルへ着いたら、一番いいレストランから赤ん坊お断わりですと言

われたんです。赤ん坊を連れているんだったら、今特別にある宴会場に設立したベビーレストランみたいなところへ食べにいくてくさいと言われたんです。はるばる横浜から箱根までそのフランス料理を目指して行っただんで、もう涙が出るぐらい。赤ん坊抱えてそのレストランの前で泣きそうになっちゃったんです」

啞然とする発言ではないか。長々と引用したが、他もざっとこんな調子である。この箇所はどうして子どもをレストランに連れていくてはいけなしかと嘆願しているあたりである。つまり、自分が赤ん坊を抱えて、いかに苦勞しているか、訴えているのだ。

この後、質問をしたのは、山口哲夫さんという社会党の議員だ。

「まず、アグネス参考人にお尋ねいたします。私はファン（傍筆筆者）の一人でございます、きょうはわざわざ参考人としておいでいただいたことを大変うれしく思っております。それから、今お話にありました例の大学での講演の一件「中央公論」のたしか昨年の十月号だったと思いますけれども、読ませていただきました。何か変な中傷の中で非常に一生懸命頑張っている、そういうお姿を感じまして非常に感銘を受けました。これからもしぜひひとついいお仕事をしていただくように、ファンの一人としてもお願いしたいと思います」

釧路出身議員の高揚が目に見えるようではないか。浜田幸

一氏の一件もあるし、国会や各種委員会が高レベルの、品位あるものだとはいえない。しかし、これが各新聞で大きく報道された「アグネス、参院で熱弁」の内容なのである。公明党の高木健太郎議員という人も、全くとんちんかんな質問をする。子どもをいろんな場所、たとえば選挙演説の会場や乗物の中に連れてくる人がいる。「そういうときはどうしたらいいでしょうか」という質問に対し、参考人アグネスの答えはこうだ。

「今度新幹線とか飛行機で子どもが泣いてもぜひそばに行つて、いいいいないばあとか何かやってやったら、もしかして喜ぶかもしれない。（中略）後ろのおじさんが急に後ろからばあ、れろれろれろとやると子どもはキャーキャー笑うんですよね。すごく助かるんです。むしろ育児の経験の豊かな人たちがその母親を落ちつけることが多分一番近い道だと思ふんです」

高木議員「そうだと思います。私もいろいろ教えられるところでございますから、今度私はぶくぶくばあをやりたと思います」

笑うより情けなくなつた。この伝でやると私たちは、今度高級レストランや新幹線の中で、泣きわめく子どもを見たら、ぶくぶくばあと機嫌をとらなければならぬらしいのだ。

しかし驚くではないか。こうした種類の話が、国会の中で行なわれていたとは。私は、各新聞社の方々に聞きたい。彼

女のレストランで泣きなくなった話、ぶくぶくばあをしなさいといった発言を、あなたたちはどういうふう聞いていたのか。ユーモアのある楽しい話題と聞いていたのか。他人の失言には、あれほど厳しいあなたたちが、国会におけるこのどうしようもない会話を見逃し、どこも「歌手と子育てを両立」などと好意的な記事に仕立てた。これがレトリックでなくってなんだろう。新聞記者ばかりではない。国会議員のこうしたミーハーぶりも、目をおおいたくなる。そちら方面にも無知なら、黙ってテレビでも見ていればいいのに、へんに若ぶったり、ものわりのいいふりをするのだ。このあたりの野暮ったいセンスというのは、

「アグネスをまね、職場に乳児室を！」という女性の声は確実に高まるだろうし」

と平気で書く「朝日ジャーナル」の記者と同じだ。アグネスは昨年から、テレビや雑誌等でそのことを主張しているが、このことによつて動いた女性団体はひとつでもあっただろうか。そのことを企業に要求した女性たちはいただろうか。私を知る限りひとつもない。

そのことが、女たちのアグネスに対する評価を、よく物語っているではないか。

成長が止つた少女

さて、国会でも話題になつた「中央公論の記事」というの

は、昨年六月に行なわれた彼女の講演会に端を発する。この時「フォーカス」と「週刊朝日」が、彼女の講演料が百七十万円という高額であること、子どもにベビーシッターを含め六人連れでやってくることをすっぱぬいたのである。その後の彼女の強い抗議によって「百七十万円は百万円」「六人はいつもは四人」に訂正されたのであるが、それにしてもかなりの優遇だ。これほどまでに恵まれている女性が、どうして全国の働く女性の苦悩を一身に背負ったようにふるまうのか、どうしても合点がいかぬと「週刊文春」に私は書いた。これに対してのアグネスの反論を私はかなり期待していたのであるが、いささか調子が狂った。

「アグネス・バッシングなんかに負けない」というタイトルで「中央公論」のエッセイは、見事なまでの被害者意識につらぬかれている。

「この夏、平和な我が家に突然台風がやってきた。その名はレジー・メリー。私をめぐって書かれた『真実を歪めた記事』が発端となって、この台風は次第に悪質な個人攻撃の形をとりはじめた」

和平ちゃんを囲む楽しい一家に、牙をむいて襲いかかる台風にはたとえられたわけだが、ここで彼女は大きな間違いを犯してはいないだろうか。アグネスはその時、単に子どもを産んだばかりのやさしいお母さんではないのだ。新聞やテレビで、「子どもを職場に、職場に託児所を」と言い始めて

いた彼女は、公の判断というものに身をゆだねられる。反対の声があがったとしても何の不思議はないはずである。ものを書く、発言するということは、さまざまな大きなリスクを負うことだ。この私とて、アグネスを非難すれば「噛みつく」「コワイ女がいびる」と書かれる。とんちんかんな学者からは、中国人差別と言われる。だが、そういうデメリットを覚悟で、人は言いたいことを口にしようと決意を固めるはずだ。しかしアグネスは、そういう意見をすべて「個人攻撃」としか見られない。この女性には議論をするという厳しさに全く慣れていないのだ。国会という場においてさえ、彼女は別の講演会事件をでれどと話し、こういうふうに表示する。

「アグネスという講師を迎える、そういうことは反対という記事が出たんです。調べてみたら、実際には本当に大学の中にいろんな問題があって、そして政治的に偏った（傍点筆者）人がいまして、その先生と何人かの生徒がやったことみたいなんです」

政治的に偏ったというのはどういう意味なのだろうか。自分を攻撃する人、自分に対して不愉快なことをする人は、偏っている人。これが彼女をつらぬいている幼い思想といってもいい。

信州大の稚拙な講義

この原稿を書くにあたって、私は彼女の本、何冊かにも目

をとおした。そしてわき起こってくる素朴な疑問をどうすることもできなかった。

「このヒトは、いったい何をしている人なのか!」

物書きの一人として、他人の書いたものをあれこれ言うのは気がひけるのであるが、この活字の大きさと甘ったるいもの言いはどうであらうか。これで「岩波」とか「知的生き方文庫」というシリーズにおさめられているのだからおそれいる。二十歳のアイドルが書いた本なら、外国の話もいろいろのついでにそれなりにおもしろいが、アグネスは三十歳すぎの大人である。しかも大学の講師の肩書きを持ち、朝日新聞社主催のパネル・ディスカッションやシンポジウムにも出るような方である。しかし、あえていわせてもらえば、彼女の文章には「研究者」とか「講師」の知識や視点が微塵も見られないのだ。こうなってくると、次に手にしたいのはアグネスの講義録である。これは多くの人間が、かなり知りたがっているもののひとつだ。以前から、私たちのまわりでは、あれほどたどたどしい日本語で、果して本当に大学でものを教えられるのだろうかという話題がたえずあがっていた。

その時、私は、まださまざまなことを信じていたに違いない。大学とかアグネスというものに對し、私はある種の好意的な望みを抱いていたのではないかと思う。こちらとて、あれこれ言われながら、疑問をぶつけ論争しようと思う相手である。たぶんこういう言い方はお嫌いだろうが、「敵なが

らあつぱれ」と思わせてくれなければ困る。

しかし、信州大学の講義録を手にした私は、またまた驚きのあまり暗澹たる思いにかられたのである。私はこれを抜粋するにあたり、担当の編集者に相談をもちかけた。私が意地悪く、わざとそういうところだけ抜き出したように思われるのは、いかにも癪だ。これを全文掲載すれば、アグネスという女性のレベル、考え方がかなりわかるのではないか……。しかし、当然といえば当然であるが、そういうスペースはないと言われた。だから私がチョイスしていかねばならないのだが、本当に気の重たい作業である。

次に挙げるいくつかの箇所は、最低値ではなく、平均値を選んだつもりであるが……。

これは信州大学で行なわれた「ビジュアル日本社会論」というやつである。

「私が関心をもっているのは、いちばん最初にどのようなして人類の文化が生まれ、どのようにしてコミュニケーションが始まったかということなんです。たとえば、原始人の男の人は狢に出ますね。動物を殺し、獲物を持って帰ります。女の人は何をしているかというと、いろいろなところへ行行って木の実とか、果物とかを集めたりして帰って帰ってみんなに食べさせる（中略）。その余った分をほかのものと交換し合う。そこから人間どうしのコミュニケーションが始まったり、文化が始まったのではないかと私は思っています」

「(中国では)彼らのいちばんの大きな情報手段は何だろうといえますと、口コミです。人のうわさです。それがいちばん確実で、効果が大きいんです。印刷してはいけないとか、書いてはいけないとか、話してはいけないものがたくさんあるんです。そうすると、みんな一生懸命うわさをして、そのうわさがいろいろ広がっていくような感じなんです。でも、私が思うのは、けっこうみんなそれで楽しんでいる部分があるんですね。なぜかという、夜になるとだれかの家にみんなが寄るんですね。そこで一緒にテレビを見る。一緒にああだこうだとか話す。一緒に寄って、そこで歌を教えついたり、話を交換したり、情報を交換したりするんですね。このような人間のコミュニケーションはたくさんあって、すごく豊かなんです。母の故郷の貴州には、一週間ぐらいしかいなかったんですけど、夜になると、近所の人々が来るのがすごく楽しみにってきちゃう。きょうはだれが歌ってくれるのかな、みたいな感じですよ。とかなんとかねだられて、つい新しい曲を教えてよ」とかなんとかねだられて、ついこのせられて歌ったりするんですけど、なにか心がワーッと熱くなるんですね」

この調子で、アフリカ、カナダ、アメリカ、東南アジアの「見聞録」が続き、急転直下、日本への非難となる。

「では日本はどうなのか。テレビは東京なら八チャンネルぐらいですか。日本はど生番組の多い国はないと思います。こ

んなに生番組の多い国はない。そのほかにも、ラジオ、新聞、雑誌、それにファックスとかデータベースとか数えられないほど多くの情報量があると思うんです。もちろん一人では全部読み切れない。ただし、たくさんということが豊かなのかどうかということだと思っんです。多ければ豊かであるとは私は思いません。日本の情報社会は決して豊かではないと思います」

彼女は「中央公論」のエッセイの中で、こう書いている。「表現は幼いところがあるかもしれませんが、意気込みは一人前だと思っています」

つまり、信州大も、その意気込みをかったというふうに解釈しなければならぬらしいのだが、なぜ彼女だけにそれほどの優遇をあたえなければならぬのか。物を書いたり、発表したりするというのは、表現をこねくりまわしてなんぼ、の世界だと私は思っている。「豊かだ」「豊かではない」というキーワードを導き出すためには、さまざまな事例をあげ、実証させていかなければならないはずだ。ましてやこれは講演会でも、トークショーでもない。国立大学の、きちんと単位をあたえられる講義なのである。きちっと学問として扱われているのだ。

「日本人ではないから」「芸能人という別のジャンルの人だし」、この程度のものかと思いつつ、片方では「まれに見る国際人」と彼女をもち上げる。この二重構造の不思議さ。日

本人はどうしてこれほど、アグネス・チャンという人間を甘やかすのか。講義録を読んだ私の疑問はますます深くなる。

「国際人」がお題目のアグネス教

アグネス・チャンという人は、実に巧みに二つの世界を生きている人である。テレビの中では頭のいい社会意識にめざめた女性、新聞や雑誌に出る時は、愛らしいタレントの表情になる。この二つの世界は相乗効果をあげ、どちらも彼女に利益をもたらしているようだ。彼女がいくら否定しようとも、おむつのCMは「子連れ講演」で話題を呼ばなければならなかったものだろうし、テレビでの知名度がなければ、講師を依頼する大学もなかったであろう。お断わりしておくが、私は「芸能人のくせに、知的分野に首をつっ込んで」という、一部のマスコミが根底に持っている偏見はないつもりだ。「朝日ジャーナル」の例のコラムなどは実はこれに基づいているものであって、

「可愛いタレントが必死でやっているものを、なにもいい大人が目くじら立ててあれこれ書かなくても……」

という態度がつい、からかいに出る。私のまわりにもそういう人が実に多い。しかし、発言する時の彼女を、私は同じ立場に立つ人間だと思っている。だからこそ、あまりにもレベルの低い発言や行動をとられると、非常にがっかりもするし、腹もたってくるのである。それにしても社会的コメント

をする芸能人がもっと増えた方がいい。今のところはアグネスの独壇場で、それゆえに彼女は全く成長しないのである。

もうひとつ徹しいことを言わせてもらえば、彼女は私の尊敬する類の芸能人ではない。彼女は現在のところ歌を歌っていないし、私を感動させる演技をしてくれるわけでもない。徹底的にプライバシーを売り物にしてきた人だ。

カナダ留学後、何年かバツとしなかったアグネスが再び脚光を浴びるようになったのは、ローマ法王に会える論文入賞であり、北京のコンサートであったと記憶している。ここで彼女は「世界平和を訴える知的タレント」ということで売り出してきた。マネージャー氏と結婚する時は、わざわざ香港、日本で二回の式をあげ、「国際結婚をし、ふたつの文化を手にした人」という演出をした。この、中国と日本というふたつの祖国は、その後の彼女の切り札となる。

ある時は、中国人として、日本人の贖罪意識をつつき、ある時は「和平には半分日本人の血が混じっています」と、日本人としての連帯を口にする。また我々日本人がいちばん弱い「国際人」という言葉も、彼女は巧みに使った。

いくら経済大国になろうと、いくら円が強くなろうと、この「国際人」という言葉に、たいていの日本人は抵抗できない。つい先日のこと、日本航空が、外国人の女性スチュワーデスを何人か採用した。

これに対する記事がさまざまな週刊誌に載ったのだが、

「英、独、仏の三カ国語を操る才女」

というくだりには本当に驚いた。英語圏に暮らす女性なら英語ができるのは当然であろうし、そういうところは学校でフランス語程度は習うであろう。ハワイ生まれのタレントや、外国で暮らした帰国子女は、必ず「英語ができる才媛」と書かれる。一流といわれる出版社の雑誌でも、この程度の認識なのだ。

アグネス教のはびこる素地は、日本において十分できているといってもいい。彼女の著作や発言を聞いていると、「どこその国では」という類の言葉が実に多いことに気づく。昔から、この国で女性評論家といわれる人たちがよく使うテである。しかし、決定的に違ふところがあった。従来の女性文化人がひきあいに出したのは、アメリカ、もしくはヨーロッパである。

「欧米では子どもを、そりゃ厳しく育てます。家庭に招ばれても、大人の集まりにはまず出しません。電車でも立たせません。日本ぐらい、子どもに甘い国はちょっとないんじゃないでしょうか」

しかし、アグネスが例に出すのは、自分の祖国であるところの中国であり、香港だ。（ところでこの中国と香港を、彼女は作爲的に混同させている。著書によると、彼女の父親は熱烈な反共主義者で、そのために香港へ逃げてきたそうだ。しかし彼女はいつもはそのあたりの状況にほとんど触れない。

私は中国人、私は香港人と、その都度使いわけている」

「中国では本当に男女平等です。（傍点筆者）その一つの証拠は、子供が生まれて一カ月たったらもう職場に連れていくんですね。大体どの職場にも保育園があります」（参議院の議事録より）

中国が本当に男女平等なのか、おおいに論議の分かれるところなのだが、参議院でこう言っているところから見ていい。彼女の発言というのは、たいてい情緒につらぬかれているのだが、この情緒というのはそれゆえに、一部の女性たちには心地よかったであろう。こちらでも甘ったるい言い方をさせてもらえば、それはアジアのぬくもりである。

特権意識に基づく主張

少女の頃から「アメリカでは」「ヨーロッパでは」という言葉を吹き込まれて育ってきた日本の女は、同時にかの国の女の厳しさも学べと強いられたところがある。常に前向きに生き、キャリアを積もうと切磋琢磨している欧米の女性に比べ、あなたたち日本の女は甘ったれていると、いろんな人がいろんな場所で書いてきた。そこで突然もたらされた知識が、アグネス・チャンの、

「中国では、お母さんが赤ちゃんを職場に連れてくるのは当然です」

というやつだ。そんなことができたなら、どんなにラクチン

であろう。そんな素敵なことが許されたらどんなにいいだろうかと、一部の女が思ったとしても不思議ではない、いや、一部どころではない、赤ん坊をかかえて働いているすべての女はそう考えただろう。しかし、ふつうの女だったら、「ちょっと待てよ」と思う。この世の中には、要求できること、要求できないことも確かに存在しているのではないか。地域の保育所をもっと完備せよ、零歳児保育を充実させろというのは、当然要求すべきことだろう。しかし、自分の子どもを職場に抱えていて、仕事の合間におっぱいをあたえ、また自分の席に戻ってくるというのは、働く人間としての自負心が許さない。それはあまりにも甘ったれた夢物語だと思うが、そういうふうには考えない女たちもいただろう。そういう女たちにマスコミが「国際人」アグネスのイメージを提供した。そして子連れうんぬんの話はますます信憑性を持ってきたわけである。単なる野放図な欲望に、知的な、革新的ないるどりがあたえられたのだ。

しかし残念ながら、事實はアグネスにも一部の女性にも味方しない。文革以後、中国における人民公社、共同保育のシステムは、次第に数が減っているそうである。ましてや、アメリカ、ヨーロッパという、日本人が大好きな領域での「子連れ出勤」の話など、

「全く聞いたことがない」

と、誰しもが口を揃えている。あちらの方に長く住んだ人

何人かに聞いたが、答えは同じだった。

もう一度聞きたい。「国際人」というのはいったい何なのだろう。世界を駆け足でめぐって、その中から自分に都合のいい事実だけをピックアップすることなのだろうか。それとも国籍をいくつも持てば、それで国際人なのか。あるいは語学ができることなのか。日本においては「国際人」ということが、そのまま商売になる。そして純朴な人々は、「国際人」の言うことに耳を傾ける。彼らの言うことを信じる。私がアグネス・チャンに言いたいのはそこなのだ。

頭を悩ませ、いろいろ考えたつもりだが、この原稿はあなたへの非難になっただろう。悪質な「個人攻撃」とまたもやあなたは言うに違いない。

個人攻撃と言われついでに、本音を言わせてもらえば、日本がこれほど甘ちゃんの国でなかったら、アグネスなどという人が生きていけないではないか。

たどたどしい日本語で、テレビに出ているだけで、お金はどっさりもらえる。彼女は金額が不満らしいが、どうしようもないことを一時間とちよっと喋って、百万円はもらえる。「国際コミュニケーション論」というタイトルをつければ、高校生の研究発表レベルの内容で、講師とまではやしてくれる。「外国人だから」と、すべてのはやしてくれて、しかも「外国人だから」ともてはやしてくれる。（これはアグネス以外は白人種に限られるが）日本というのはありがた

い国である。アグネスに感謝してもらいこそすれ、日本人があれこれ言われる筋合いはないはずだ。

それからもうひとつ、「私たち働く女は、とても困っています」式の言い方はやめなさい。巷の働く女性たちと、あなたと一緒にするのは、彼女たちに対してとても失礼だ。

私もとてもあなたにはおよびもつかないが、講演会へ行けば、何十万というお金を手にすることができる。一冊本を書けば（運がよければ）何百万というお金が入ってくる。そういう私やあなたが、働く女としての被害者の傘の中に入ることは卑怯なことではないか。

私はあなたと違って、OLの経験が何年かあるが、働くということは大変なことだ。月月、十万円とちよつとの給料でこきつかわれ、嫌な上司に仕え、トイレの陰で涙を拭いた。それを思えば、今など天国のようなものである。

ましてや、付き人がいて、ベビシッターを連れて職場にお出ましになるあなたが、どうして子育ての苦勞を国会で訴えたりするのであるうか。夫に氣を使う必要もない。まわりの人は、内心どう思っているかと、あなたとあなたの子どもにべろべろばあという世界。結構なことではないか。それなのにあなたは、さらに世の中を変えろと訴え続ける。そんなあなたには、もはやさまざまな責任がある。そしてそういう場所にあなただけを引きあげた、我々にも責任がある。

大人の女は本当に困っている

「子どもはいろいろな場所に連れていったらいい。そこで泣いたら、まわりの大人が、べろべろばあーをしてあげるべきです」

などと国会で本気で言われたら、我々大人はどうしたらいいのだろうか。たいていの人は忙しくて、他人の子どもの機嫌をとるひまなどない。やっとひと息入れようと、友人とちよつと値のはるレストランへ行けば、そこにぐちゃぐちゃと手づかみで食べる子どもがいたら、やはり疲れる。あなたも子どもを断わられると、

「すつごく泣きたくなる」

かもしれないが、こちらとて涙がこぼれてきそうである。私には守らなくてはならない大人の世界というものがあるのだ。これがこの原稿となったわけである。

最後に締めくくりを、曾野綾子さんのこの文章でさせていただきます。いまから二年ちよつと前、アグネスはエチオピアの難民キャンプを訪ねた。その時見たものを、彼女はまた例の調子で書いたわけだ。

「私が出会った人はみんな礼儀正しかった。いい人たちばかりだった。無表情で感謝の心がないと書いた曾野綾子さんは、いったい何を見てきたんですか」

曾野綾子さんの文章から、

「私が外国の紀行文を書く時のルールは、たった一つです。

それは、ある日、私がそこにいた時、こうだった、と書くだけですが、それがその国の普遍的な状況だと言ひ言ひ方は、私はしないことにしています。私は学者ではないので、普遍化ができません。しかし私は、自分の目に映ったことを、あなたから違ふと言われると「ああそうですね、違ひていました」と言うわけにもいきません。あなたは私の書いたものが、自分の見聞きしたものと違ふ、と非難しておいでですが、私は違ふほうが当然だと思っています。僅かな時の差、運命に似て出会う人々が違ふこと、それを見る人の心や眼や、それらすべてが違ふのですから、見えるものが違ふのも当然でしょう。（中略）しかし「どこそこの人は皆いい人です」という式の言い分は、あなたがおっしゃる分には少しもかまわないのですが、大人は少し困ります。なぜなら、そういうことはこの世にないからです」

コメントはあえて避けるが、一連のアグネスの行動に関し、曾野さんのような方が何もおっしゃらなくなったのが、彼女にとっても、また私たちにとっても不幸なことは確かなのである。（『文藝春秋』八八年五月号より転載）

*

この林さんの文章には、多少前史があります。

八六年十一月一日、アグネス・チャンさんに、和平君が誕生。翌八七年から、子どもは一歳半までは母乳で育てたい、と「子連れ出勤」を開始、マスメディアの注目を集めました。

だが、中野翠さん（『サンデー毎日』八七年五月十日号）や林真理子さん（『週刊文春』八七年七月十六日号）が、「周囲にも気配りを」と忠告。女のケンカを待っていた男たちは、おもしろおかしく喝采。アグネスさんは「アグネス・バッシングなんかには負けない」と、けなげに抗弁します。

八八年二月十八日、参議院「国民生活に関する調査会」で参考人のアグネスさんが「週刊誌で非難された」と発言して論争再燃。中野さんは「ふりかかる火の粉くらいは払っておかないとね。キリッ」（『サンデー毎日』三月十三日号）、林さんは「一応受けてたたなきや」（『週刊文春』三月十日号）と発言。論争の中身よりも「女の争い」がクロージアップして伝わります。「文藝春秋」の林さんの大論文は、そういう俗説に対し、まじめに立ち向かったものでしょう。

女がなぜ子連れで働くか、という本質を離れた俗説のエスカレートに「見てはいられぬ」と登場したのが上野千鶴子さん。「朝日」論壇の「働く母親が失ってきたもの」で、林さんを評価しつつも、子連れ出勤のアグネスを、「女の問題」の本質に位置づけました。以下、「論壇」に展開された諸姉のご意見と、「朝日」「試論私論」の佐藤洋子さんのご意見を朝日新聞社と全ご執筆者のご諒解を得て転載します。

（なお、転載の許可をおたずねした際、「論壇」のタイトルは、原題と異なっているという意議申し立てが一件あり、この誌上では、原題どおりに修正しました。）

論壇



上野 千鶴子

アグネス・チャンさんが、職場や講演に幼い息子連れ歩いてくることを、マスコミ界きつての才女、林真理子さんと中野実さんが週刊誌などで批判している。山田詠美さんも月刊誌の中で、アグネス批判に同調している。最近の朝日ジャーナルの「メディア時評」はこのやりとりを「コワイ女が二人でアグネスをいびるの巻」とやゆきみにとりあげた。それらの発言を「あれはいじめね」「子どもを持ってない女のひがみよね」という「低レベル」の論争におとしめるのはフェアではない。

アグネスさんも月刊誌で「アグネス・バッシングになんか負けない」と、必死で抗弁しているが、不用意な発言も目立つ。それよりアグネス擁護の声が小さいのが気にかかる。ここは買つてでも、アグネス擁護にまわりたい。林真理子さんは月刊誌の中で、大へん冷静な正論を書いている。「子連れ出勤」が「許されたらどんなにいいだろう……」。しかし、仕事の合間におつぱいを与え、また自分の席に戻ってくるという

働く母が失ってきたもの

「子連れ出勤」のアグネスを擁護

だが、こういう「正論」で、女たちはこれまで何を失ってきたのだろうか。「正論」はしばしば抑圧的な働きをする。ルールを守れ、と叫ぶのは、ルールに従うことで利益を得る人々である。女たちはルールを無視して横紙破りをやるほかに、自分の言い分を通すことができなかった。女たちが要求してきたのは、

の芸能人家庭は、お手伝いさんを雇って子育てを切り抜けてきた。庶民には手の届かないベビーシッターも、アグネスさんの収入ならいくらでも調達できるはずである。だがアグネスさんはそれをやらなかった。周囲がどうもを抜かれる中で、芸能界で初の「子連れ出勤」という「非常識」をやった。もち

た必要に「ふつろの女たち」がせまられていることである。いったい男たちが「子連れ出勤」せずにはすんでいるのは、だれのおかげであらうか。男たちも「働く父親」である。いったん父子家庭になれば、彼らも女たちに女たちと同じ状況に追いこまれる。働く父親も働く母親も、あたかも子どもがないかのように職業人の顔でやりすこす。その背後で、子育てが女々ではすまないことを、アグネスさんの「子連れ出勤」は目に見えるものにしてくれた。

アグネスさんの代わりに、こんな「代理戦争」を買って出るのは、かえって彼女には迷惑かもしれない。だが、女による女の「子連れ出勤」批判を、高みの見物して喜んでいるのはいったい誰であるのか。この「代理戦争」の本当の相手は、もっと手ごわい敵かもしれないのである。

のは、働く人間としての自負心が許さない。彼女の「正論」は、プロの職業人として「許されないこと」という「正論」である。歯を食いしばって、職場で男たちと肩を並べてきた女の側の「正論」である。この「正論」から見れば、アグネスさんのやっていることは「甘ったれ」な非常識横紙破りにちがいない。

「仕事も子どもも」「有給の育児休業を」「託児室つきのコンサートを」と、どれも前例にない非常識だった。アグネスさんは、山口百恵さんのように「結婚退職」も、松田聖子さんのように「育児休業」もしなかった。それはアグネス一家が「共稼ぎ」だから当然、という見方もあるが、昔から「共稼ぎ」

倒をみるほかに、さし迫っ

平安女学院短期大学
助教授・社会学Ⅱ投稿

論壇



松崎 陽子

それから一連の関係報道の中で、最も不満に感じるのは、実際に子供を育てながら働いている普通の母親の声がほとんど聞けないことだ。そこで、あまり普通とは言えないかもしれないが、「働くや

十六日付の本欄で、上野千鶴子氏が「子連れ出勤」のアクセス・チャンを擁護されていた。趣旨については異論はない。しかし、何かひっかかるものを感じ、どうにも落ち着かない。熟考してみても、うすうす見えて来たのは以下に述べるような点だった。たとえば「女による女の『子連れ出勤』批判を高めの見物して喜んでいる」真の敵へと飛躍する前に、「子連れ出勤」自体をきちんと検証してほしかった。

や普通な母親」の立場から発言させていたところ。

まず「働く母親が失ってきただもの」について。それらは確かに多いかも知れない。しかし「子供を預けて働くことの痛み」に耐え、勝ち取ってきたものにも目を向けてほしい。それは氏の言われるように「ルールを無視して横紙破りをやる」ことばかりで通し

半端でいいのか「子連れ出勤」

「プロとして働く意味」を考えよう

て来た要求ではない。ルールに従いながら、体を張ってルールを改善してきたのである。このことは実際に働く母親ならば、職場で多かれ少なかれ経験し、実感してきているのではないだろうか。

私も十年間出版社勤めをして、そのうち五年間は働く母親だった。勤務先にはなくさんの「働く母親」の先輩がいて、彼女たちの奮闘によっ

て、彼女たちの奮闘によって、産前産後八週間ずつの産休を取ることが出来るようになっていた。先輩たちが「非常識」や「横紙破り」をやったことがなかったからこそ、プロからこそ、私たちが享受できる権利が出来たのだ。

子供を保育園に預け（二次保育）、引き取りに行っても「疎開」させた先輩もいた（ご主人は単身赴任中）。独身だった私は、正直なところ「そんなにまで」と思ったし、後年自分が子供を持つ時も「子供を犠牲にしてまで続ける価値のある仕事だろうか」と悩んだこともある。何度やめて母親業に専念したほうが……と思ったかも知れない。でも、今胸を吐いて、プロとして働く先輩たちへの評価がこれだ。

だから、私は単なる時代的要請として「子連れ出勤」を論じたくない。「仕事も子供も」大いに結構。しかし、子供を持って働くということは半端なものじゃないのだ。権利の主張は、業務を遂行してこそ可能はずだ。「プロの職業人としての母親」の持つ意味をもっと深く掘り下げなければ、この論争は現実から遊離していくと思う。

消費生活アドバイザー
東京都在住■投稿

論壇



道下 匡子

もしアグネス・チャンが、すべての外で働く母親を代表して、真剣に「職場に保育所を」と訴えたのであれば、彼女は現代のジャンヌ・ダルクになっていかもしれない。しかし彼女は、現実にはまずぐ安心して子供を預けることのできる保育所を必要としている、多くの働く母親たちの支持と共感を得ることはできなかった。

公立の保育所は順番待ち、やっと入れたとしても大半が午後五時には閉まる。さらに「夫の収入で十分なのに妻が働く必要はない」という周囲の偏見と戦いながら、一切の家事もひとりでこなさなければならぬ。こんな彼女たちが日々直面している問題に少しもふれることなく、「保母

さん」「保父さん」を従えての優雅な子連れアグネスが、「職場に保育所を」と訴えたとしても、一体だれがまじめに受け取るだろうか。「子連れパフォーマンズ」をとおしてアグネスは、マスコミで彼女の商品価値を大いに高めただけにすぎない。

本来なら彼女が自分の子供をどこへ連れて行こうが、そ

こそ、フェミニスト運動の最も重要な目的のひとつであるからだ。「女の仕事」の概念を否定するか、受け入れるかを、フェミニストと男権主義者とを分ける最も基本的な違いである。

いま日本では夫のいる女性の五一％、六歳以下の子を持つ母親の二〇％強が外で働いている。彼女たちが必要とし

者の五三％を占める女性票の獲得にやっきになっている。一九五〇年代にはまだ主流をなしていた「両親、二人以上の子供、母親は専業主婦」という家族は、一九七〇～八五年の間に四〇％～二八％に減

少し、もはやさまざまな家族形態のなかのひとつにすぎない。成人女性の五六％、六歳以下の子を持つ母親の五七

「育児は女」の観念を崩そう

米国では保育所問題が政治の争点

れを非難する権利などたれにもしない。しかし彼女が、あたかも普遍的な真理であるかのごとく、母と子のきずなを強

調しはじめたりますと話は別である。この政治的「革命」はまさに台所ですな。父親は、父と子のき

が外で働いている今日のアメリカでは、育児は深刻な政治問題なのだ。

責任についてはこのように考えているのだろうか。というのが「育児は女の仕事」とい

はじまるのである。ところでこの秋のアメリカの大統領選挙では、育児政策が勝敗を分ける力とさえい

わね、民主党も共和党も有権

を崩そう

を崩そう

を崩そう

めに年間二十五億ドルの予算をつぎ込む「育児改善法」、州や市が幼稚園をつくるのを援助する「スマート・スタート法」そして新生児もしくは病気の子供の世話をするために、女も男も二年間に十五週間の無給休暇、さらに一年間に十週間の無給病氣休暇をとれるようにする「家族および医療休暇法」共和党も予算額では民主党に劣るが、州が保育所をつくるのを援助したり、税制に保育費控除を設けることなどを提唱している。

アメリカが今日ここまで到達したのは、明らかに四半世紀にわたるフェミニスト運動のおかげだ。働く女についての諸々の統計に関するかぎり、日米間にそう大差はない。決定的な違いは「育児は女の仕事」という固定観念に対する人々の反応だ。日本の女性有権者数は五一％。私たちに「革命」は可能だ。

映像作家、アメリカ文化研究者 二投稿

論壇



若桑 みどり

五月十六日付本欄の上野千鶴子さんの「働く母が失って来たもの」と題する投稿は、林真理子さんによる「いいかげんにしてよアグネス」論争に対しての反論として高く評価すべきものである。そこで私は、彼女とも林さんともちがう立場——実際に二人の子どもをかかえて、上野さんのことは借りれば「歯をくいしばって」働きつづけてきたひとりのふつうの女として——あえていささかの異議を唱えたい。

現実には、一人か二人の子どもの、十数年間の養育のために自分のライフワークを断念するような女性はいくつもある。医師や看護婦、教師や公務員などあらゆる分野で、自分の人生と仕事を生

きている女性はいくつもある。彼女ら（私たち）は、男性が育児のためにライフワークを断念することなど思いつかないように、子どものために仕事をやめることなど考えてもいない。また、男性が仕事のために家庭や子どもをもつことを断念することなど決していないように、私たちもまた、子どもをもつことをや

めなくてはならないなど考えはしないのである。それらはどちらもごくあたりまえの人間の欲求なのだ。だが、実際問題として、すでに社会のあらゆる階層で子どもをもって仕事をしている女性たちのうち、職場に子どもをつれてゆくなどという女性はいくつもある。その例外的な場合にすぎない。そ

の第一の理由は、何よりも子ども自身のために、規則正しい生活と安定した環境が必要だからである。その上、看護婦にしても教師にしても、シブシブといかない仕事は、生計を通じて、責任のある職業人として働く覚悟をもった女性の第一になすべきこと

努力なのであるし、私たちがつねにそれをしてきたのではないのは、子どもがいないふりをして職業人になりすますためではない。すべての職業は、子どもにかまけていては成り立たぬほど専心が必要とするものだからであり、そして何よりも、子ども自身の健康のためなのだ。現実問題として、働く女性の最大の障害が子どもであることは明白だ。それ故、子どもの存在を盾にとり、女性を家庭と育児に引きもどし、自立へのドアを閉ざそうとする副作用はいつも女性をおそれる。その差別は、子育てを妻におしつけている男性側からばかりでなく、子どもをもたない自身の自立した女性からも加えられる。だが同様に、真の自立した責任感をもたない甘ったれた子どもの女性もまた、責任をもって働いている女性の障害物なのだ。

子どものために何が幸福か

急務は保育制度の充実

（千葉大学教員
・美術史II投稿）

論壇



長崎 暢子

先日来の「子連れ出勤」論争を拝見し、上野千鶴子氏にも、松崎陽子氏の意見にも基本的に異議はない。ただ二点ほど、気になることがある。

第一は「働く普通の母親」は「子連れ出勤」に反対であるかのような印象がでてきたところだ。十八年間「働く母親」をやってきた私は、産休明けから、保育所に預けてきたくちである。時間外保育も、残業のときに人を頼んだ場合もあったし、単身赴任もした。しゅとめにも夫にも大変な犠牲を払った。それによって、職場にはほぼ家庭を持ち込まないようにして行くことができた。

しかし、これでよいのかと常に思っていたことも事実である。家庭や子供を忘れて働くことができた。

見いだせなかった。だからアグネス・チャンさんの「子連れ出勤」のニュースを見たとき、こうした母親が出てきて当然と思えた。それに、「子連れ出勤」はマスコミで騒がれたものの、多くの働く母親がすでにやってきたことなのである。よんどころなく職場や職場の近くまで連れていき、子供に遊ん

職場に保育室あってもいいのでは

子連れ出勤に温かい目を

でもらっている間に仕事する経験を、多くの「プロの職業人としての母親」は持っている。私自身も隣に子供を座らせ、絵を描かせながら研究会を主催したこともある。業務に差し支えないかぎり、それを温かく見守る職場があった。これまで騒がれなかった子供に近くで働く方向はないかと焦ったけれども、方法はいくつかある。私のように職場の理

事で、彼女を「特権的」「外人の甘え」と排除するのでなく、これを一つの実験として、子供を職場や生産の場に近づけるさまざまな試みを、地域の保育所充実の方向とならび、考え、支持して欲しいのではあるまいか。

テニスクールに保育室がある時代に、図書館や職場にも保育室があつてよい。父親も子供を身近に教育できる機会が増えよう。子供の減少に悩む幼稚園などは、こうした需要に目を向けるべきだ。そしてなによりも、働く女たちは職住近接を訴えるべきだ。要は多様な子育てを許さないかぎり、意欲的な男女はますます子供を産まなくなってしまうところだ。「女の時代」は「子供の時代」なくしては長続きしない。第一、アグネスの子供もかわいいが、子連れの林真理子さんなんてオシャレ！ではないか。

解があつてさえ、子持ちであることはどこか後ろめたく、存在を自分で隠してしまっているのが精いっぱいである。

思うに普通の母親の声が出ないのは、内心「子連れ出勤」を支持していても、若かった私がそうだったように存在が不安定だから声を上げられないのだ。だから子育てを終わらせた今、若い母親の冒険を持っている。今回の出来

(東京大学教授・インド近代史Ⅱ投稿)

論壇



多賀 幹子

およそ五年ぶりにアメリカから帰って、日本の女性たちの中で取材に行ったこともあった。アメリカ・チャンさんの「子連れ出勤」についての議論が活発であることを知り、三月末まで暮らしていたニューヨークを思い出した。アメリカは、女が働くのはごく当たり前の国だった。就学前の子供をもつ母親の半数以上が働き、一歳以下の赤ちゃんをもつ場合さえ、四九％が働いている。

それならば、いったいだれが子どもの面倒を見ているのだろう。

私の場合は、子どもたちに手がかるころは日本にいたが、働くためにはしゅとめも、母も、夫も、保育所も、利用できるものはみんな利用させてもらった。どうしても

都合がつかないときは、子連れで取材に行ったこともあった。

都合がつかないときは、子連れで取材に行ったこともあった。

私の「まあ」という声に、店員さんは「ジェニーは、八月月になったところだ」と話してくれた。経営者から「仕事に精通している君に、出産後も働いてほしい。赤ちゃんを連れて来たら」と勧められたそう。

配達する役目をおおせつかったなどのエピソードが、耳に入ってくるようになった。

アメリカで一番多いのはデイクアとよばれる保育施設に預ける例で、三％。次はベビーシッターに依頼するのが二％。三番目は、子供の父親である。奥さんの収入がよい場合、夫が家で家事と育児に専念するカップルも、このと

んな声を出している。私の「まあ」という声に、店員さんは「ジェニーは、八月月になったところだ」と話してくれた。経営者から「仕事に精通している君に、出産後も働いてほしい。赤ちゃんを連れて来たら」と勧められたそう。

ベビーシッターへの給料もバカにならない上、最近はその

マサチューセッツ州のブラッドリー空港では、男性用トイレに、おしめをかえるための台を設置することを決定した。それまで婦人用には用意されていたが、「子連れ出張するお父さんの要望の増加でふみきったという。

「子連れ出勤」は選択の一つ

男性を巻きこまない論争は致命的

ころ着実に増えて一六％である。四位は祖父母などの親類で、五位に問題の「母親自身」が登場する。

私が住んでいたのは、ニューヨーク市郊外であるが、駅前商店街の洋服店に入ったところ、奥に赤ちゃんが寝転がっているのに気がついた。じゅうたんの上に敷かれたシートの上で、バブバブとこきけ

の職の希望者の多くが「スベイン語でわが子に話しかける」「中南米からの移民なのか、悩んでいた彼女は、さっ

なことは、男性不在であることだ。男性不在であることだ。男性不在であることだ。

私が住んでいたのは、ニューヨーク市郊外であるが、駅前商店街の洋服店に入ったところ、奥に赤ちゃんが寝転がっているのに気がついた。じゅうたんの上に敷かれたシートの上で、バブバブとこきけ

また、一般のオフィスでも、赤ちゃんといっしょに働く復帰する女性が増え、キャリアネットをおしめをかえる台として使用したとか、赤ちゃんの友人の弁だ。

もう一つこの論争で致命的

問題なんてありえない。男性も、この論争に巻きこむべきだ。お父さんに、一度子連れ出勤を依頼してみようではないか。

フリーライター
千葉県在住 投稿

論壇



佐野美知子

本欄でも「アグネス論争」が盛んだが、いずれの意見も一理あると拝読しながら、見落どされている一点をどうしても指摘しておきたい。それはアグネス・チャンさんが、子連れ出勤は子供が一歳半になるまで、と期間を限定している点である。論争は子供を連れていくか預けるかといういわば大人の生き方の側でなされているが、なぜ一歳半なのか、なぜそれまで子連れ出勤を敢行したのかという点を考えてみたい。

アグネスさんは、子供には一歳半までは絶対に母親が必要で、それ以後はむしろ母親以外の人が必要になってくる、と言っている。そしてただ連れ歩いているのではなく、その間しっかり母乳を飲

ませていることにも注目したい。周知のとおり、人間の子供は未完成品として生まれてくる。それが乳の力を借りなくともひととおりのものが食べられ、自分の二本の足でしっかり歩けるようになるのが大体一歳数カ月である。

私は第三子同士の出産で知り合った友人の言葉を思い出す。その人は食べ物に気を付

私は育児に専念した

離乳の一年間を待てぬ社会なのか

け、毎晩夜中に起こされながら上の子を一年以上母乳で育てたという。私の場合は三カ月でミルクに切り替えた。妊

娠期間からやっと解放されたのに、この上一年も食事や睡眠を制限されるなんて思っ

た私は、思わず「一年も」と言った。だが彼女はこもなげに「だって長い一生のうち

のたった一年のことでしょ。

私は第二子同士の出産で知り合った友人の言葉を思い出す。その人は食べ物に気を付

け、毎晩夜中に起こされながら上の子を一年以上母乳で育てたという。私の場合は三

ヶ月でミルクに切り替えた。妊

娠期間からやっと解放されたのに、この上一年も食事や睡眠を制限されるなんて思っ

た私は、思わず「一年も」と言った。だが彼女はこもなげに「だって長い一生のうち

のたった一年のことでしょ。

私は第二子同士の出産で知り合った友人の言葉を思い出す。その人は食べ物に気を付

け、毎晩夜中に起こされながら上の子を一年以上母乳で育てたという。私の場合は三

ヶ月でミルクに切り替えた。妊

娠期間からやっと解放されたのに、この上一年も食事や睡眠を制限されるなんて思っ

た私は、思わず「一年も」と言った。だが彼女はこもなげに「だって長い一生のうち

のたった一年のことでしょ。

主婦 東京都在住

投稿

論壇



辻中 若子

「アグネス・チャンさんが、かくもキヤリアウーマンの才女たちの批判を浴びるのも、立派な職業人であるにもかかわらず、子供を四六時中手元に置きたい、などという専業主婦の発想をしてしまった故である。そのことは、働く母親たちを最も苦しめ、悩ませてきたことの根幹にござり突きささってしまったようだ。彼女たちが悩み、苦しみながらあきらめざるをえなかったことを、いとも簡単にやってのけ、それを商品化さえしてしまつたアグネスは、働く女性たちには裏切り者となえ映つたのかもしれない。

現在、主婦を家にとどまらせている最大の理由は、出産とその子の保育である。彼女たちの中には「子供は自分自身で育てる」という主義のため、社会参加をして自己実現を図ることや、経済的に自立する事など、泣く泣くあきらめた者も多いだろう。私自身、三人の子供を持っていたが、核家族の故もあって試行錯誤の末、乳幼児期は自身自身の手で育てることを選んだ。しかし、だからといって私は「アグネスさんの心意

多様な生き方を認め合おう

経済的自立だけが女性の自立か

が悲しいかな、今の日本ではその自由な選択が許される程に社会システムも人の心も熟していないようだ。日本が同質的な社会である故か、今まで人々は性や年齢により、あまりにもその生き方を固定化されすぎた。就職すべき時期、結婚すべき年齢はもとより、年齢と性により人は存在すべき場所、時

は、アグネスさんが一つの自由な選択を自然に行い得たという点自体を素直に評価すれば良いのに、逆に一つの固定化した生き方を強制しているようにみえる。仕事の厳しさを言うあまり、それへの適応の一つのあり方に固執しすぎてゐるのではないか。さらに、論者の中には人間の自立を経済的自立のみに限定

は、あらゆる方向ですめられるべきだ。保育園の整備産後の育児休暇制度、アメリカにあるような高等教育法（中年から新たに勉強したい人、資格を取りたい人などに大学の門戸を開放の採用年齢による雇用差別の撤廃、男女の労働時間の短縮など）。そして、これからもおそろくは出て来るであろう横紙破りに一つの生き方を対置し、たたくことではなく、包容力のある姿勢でのおおの選択を温かく認めることこそが、解放のための一歩となるだろう。

気がらい「など」と言うつもりもない。どういふ子育てを選ぶかは、それぞれの親としての良識にゆだねられて良い事柄だと思ふからである。

自己実現のため働く母親をめざすのも、「家庭の平和と夫と子供のため」「自己犠牲に徹するもの、あるいは父親が主夫となって子育てをするもの、各人の自由だと思ふ。だ

間さても決められているかのようだ。だが、こうしたお定まりの思考こそが、女性の、ひいては男性の解放を阻む障壁となっている。

解放とは、何より自由な選択領域の拡大であるべきなのだ。ところが、この間のアグネス論争というより「パッシンク」は、この原点を見失つてゐるようだ。論者の多く

今、日本は豊かな社会となり、国際化も急速に進みつつある。あふれる情報の中で、人々の生き方は多様化の一途をたどっている。多様な生き方に適した社会条件づくり

「子連れパフォーマンス」をやめたと聞いた。それが本当なら、残念だ。各人が、自然体で生きられるような社会を我々は理想とするべきで、そういう意味では、幼稚で最も保守的と思われたことは、もしかしたら最も革命的なことだったかもしれないのだ。

主婦、茨城県在住

（投稿）

試論 私論

新聞などで展開された、子育てと仕事の両立にまつわる「子連れ出勤」論議を読んでいて、二つのことを考えた。ひとつは、なぜ男性からの反応がないのかということ。ひとつは、女は正直だ。

子連れで働く

性を持つ労働観が意外にも男性を上回るきまじめさを持つところだ。

男性からの反応は表には出ないが、無関心なのではなさそう。その証拠に、私の職場の男性の多くは、かなり熱心に、この論議を読み続けている。

長い間、職場を支配し続けてきたのは男性だ。これらの論議の発端である「子連れ出勤」を

一般の企業で実際にされたらどうだろうか。「デスクの周りを子供にチヨロチヨロされたら困っちゃうな。やっぱりどこかに保育室を作らるうな」「でも、保育室に、始終、オッパイをやり立てれるのもなあ……」。

四十代、中間管理職世代のかということ。ひとつは、女は正直だ。

子連れで出勤しないまでも、

もし男性が乳飲み子か寝たきり老人をかかえて身動きがとれない場合は？

「多少ゆとりのある職場なら、そう長い間でなければ閑職に移すとかするんじゃないかな」

それと同じ状態を、夫のいる女がかかえた場合は？「うー

ん、やっぱり、やめてもらう方向に行くんじゃないかな」

男の互助精神の枠の中にまだ女は入っていない。枠の外で男に認めてもらう働き手になるために、女性たちは「プロ意識」に徹し、きまじめな労働観を身につけてきた。「子連れでは、仕事の責任を果たせない」と。そして、その労働観に拘束されるのは、いつも子持ちの女で決して子持ちの男ではない。

もう、いい加減に、堂々めぐりのクサリを断ち切りたい。子どもを持って働くことが、女にも男にも喜びであるように、少しずつでも働き方をこそ変えていかなければ。

(佐)

試論 私論

アグネス・チャンの「子連れ子育て」をめぐる論争が、

ちまたの話題を集めているころ、三月十九日の「東京新聞」

「本音のコラム」に掲載された宮迫千鶴さんの「禁

児車を」発言は、また大反響を巻き起こしました。宮迫

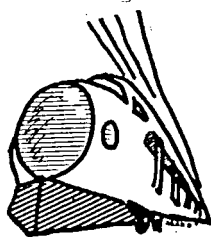
さんはそれに対し、四月二日、同じ「本音のコラム」で

「再び禁児車がほしい」を発表、反響はさらにエスカレ

「禁児車」

発言を

めぐつて



ート、賛成論、反対論、妥協論……殺到する投書に、

「東京新聞」「発言」欄は、四月十二日、十三日、十四

日の三日間、それぞれ八段分を「禁児車」私はこう思

う」投稿特集にあてました。以下にその投書の要約と、

紙幅を費やして展開した、ますのきよしさんの「交流」

誌上の反論をご紹介します。

本音のJTM



※

仕事でひんぱんに新幹線に乗っている友人のJTMスマンが言った。『禁煙車の必要を痛感しているからといって、友人は新幹線内で出くわす昨今の若い母親のJTMスマンが』



宮迫 千鶴

「禁煙車」の次は「禁児車」が欲しい

「禁煙車」は、子供や子供連れの若い母親を乗せない車両であるという。なぜ「禁煙車」の必要を痛感しているかというと、友人は新幹線内で出くわす昨今の若い母親のJTMスマンが。仕事でひんぱんに新幹線に乗っている友人のJTMスマンが言った。『禁煙車の必要を痛感しているからといって、友人は新幹線内で出くわす昨今の若い母親のJTMスマンが』

ハッキリいって他人の子供なんてそれほかわいりものではない。自分の子供だって騒いでいるやうなものを、まして他人の子供である。車内で騒がれるとたまったものではない。しかし、そうであっても大人である私たちが、騒がしい子供に対してどう対応していいかわからない。そのそばで、何ひんぱん注意してあげて、母親のJTMスマンに疲れている。新幹線の中はマイカーに違いない。自分自身もそれを守っている。 (宮家)

本音のJTM



※

「禁煙車」の提案をした。子供以上の乗客を乗れないか。『禁煙車の31歳の主婦の方。たしかに、どうして禁煙車は回転するのでしょうか。おっしゃる通り、禁煙車には必要がない。』



宮迫 千鶴

再び「禁煙車」が欲しい

「禁煙車」の提案をした。子供以上の乗客を乗れないか。『禁煙車の31歳の主婦の方。たしかに、どうして禁煙車は回転するのでしょうか。おっしゃる通り、禁煙車には必要がない。』

「禁煙車」の提案をした。子供以上の乗客を乗れないか。『禁煙車の31歳の主婦の方。たしかに、どうして禁煙車は回転するのでしょうか。おっしゃる通り、禁煙車には必要がない。』

〔賛成〕

よくぞ言ってくれた、大賛成

相模原市、女、アルバイト、40歳

記事を読んで胸のつかえがとれたような気がした。

新幹線に乗るたびに怒りを抑えるのが精いっぱいだった。

禁児車要望がなぜ今まで出なかったかとさえ思う。「禁煙車」よりもずっと多くの車両を獲得すべきだ。

甘やかされすぎの日本の子どもたち

東京都内、女、会社員、40歳

ヨーロッパに住み、学んで、日本の子ども、特に幼児はなんと甘やかされているのだろうと感じた。世の中にはいろいろな人がおり、子どもはあまり好まない人もいる。子どもを持っていても、冷静にみる母と、のめりこむ母がいる。活動的な子どもを狭い室内で静かに、というのも母子ともにつらい。私は自分の子は、静かさが要求される所（美術館、劇場等）には七歳ころまでは連れていかなかった。

お互い気楽に乗れて結構では

東京都八王子市、主婦、30歳

二歳児の母です。禁児車、子連れ専用車、どちらにも大賛成。どれだけ気楽に乗れることでしょう。でもなんだか寂し

い世の中ですね。迷惑なもの、イヤなものは排除する、ではなく、人とつきあうための最低限のルールを守っては。

子連れ専用車も導入してほしい

東京都内、主婦、42歳

まもなく四歳になる男児がいるが、乗り物が大好き。いつも神経を使っている。「禁児車」があれば、子どもが嫌いな人、体の悪い人、仕事をする人はそちらに回ってほしい。チャップリ肩の荷が軽くなる。それに「子連れ専用車」があれば、子ども同士で遊びながら退屈せずに旅行できる。イスのない車両など考えていただければ幸い。私はどちらもほしい。

折り合いをつけるために必要だ

東京都内、女、フリーライター、30歳

車中書き上げなければならぬ原稿があるとか、仮眠をとりたいとか、人それぞれ事情がある。こういう時は迷惑だ。かといって、泣かない赤ん坊、取りすました子は不気味。折り合いをつけるためにも必要だ。

子ども以上に迷惑なのが酔っぱらい。泣き叫ぶ赤ん坊以下だ。車内販売でやたらビールやつまみ売りに来るのも、飲酒を助長しているようで好ましくない。

〔反対〕

思いやりの断絶、反対です

東京都三鷹市、主婦、25歳

「禁児車」——とても悲しいことばに思える。マナーに欠ける人を不快に思いながらも黙認し、他人に不満をもたらずだけでは改善しない。子どもも園児くらいになれば大人の言葉をおぼろげにも理解できる。大人も自分は迷惑をかけないと思い込んではいけない。他人を思いやり、理解する心を断絶した姿が「禁児車」であり、その犠牲となる子どもたちはマナーを学ぶ機会を失うだろう。

「禁長髪車」「禁力ゼ車」も作るのか

神奈川県横浜、女、公務員、27歳

母親として何度も迷惑をおかけしたことは認める。が、迷惑は子どもだけに限るのか。自分では気づかなくても他人にとっては非常に迷惑なこともある。多少気まずくても注意して相手にわかってもらうべきでは。

みんな一緒にしないで

千葉県市原市、女、中学生、12歳

「禁児車」の記事を読んで、とてもいやな気持ちになった。私たちは買い物に言っても順番を待つなど、いつも大人に遠

慮している。この上まだ電車の中でも区別するのか。たしかに新幹線でいやな思いをしたことはある。そのお母さんが知らんぷりなのでムカムカした。大人が怒る気持ちはわかるが、私たちも一緒にするのは、あんまりだ。

大人のエゴで教育不在広がる

神奈川県小田原市、男、元教員、62歳

子どもが騒ぐのはよくないが、子どもを排除しようとする発想は大人のエゴとしか言いようがない。「禁児車」以外の車両でなら、騒いでも走ってもいいことになるのでは。対症療法では子どもは良くならない。教育不在空間を広げるのはよくない。車内のマナーをしっかりと育てることを確かめ合うことこそ必要。「禁煙車」とは、わけが違う。

一人ひとりの自重に任せ規制するな

埼玉県川口市、主婦、24歳

反対です。赤ちゃんからお年寄りまで含めたすべての人の中で世の中は成り立つと思うからです。専用車があれば便利でしょうが、公共の場で多少の不自由さは当然です。赤ちゃんも一緒に乗り合わせて「どうやらここでは静かにしていなくてはならないらしい」と経験から覚えることがしつけの第一歩になるのではないでしょうか。しかし「禁児車」を必要と思わせる母親が多いとは情けないですね。

車内ルール学ぶ場。分離、排除には反対

東京都内、主婦、27歳

「禁児」という分離・排除で手軽に解決してよいとは思えない。子ども世代は大人世代に社会生活を通して学ぶ。自由に騒げる「児童車両」という無法車両にほうりこまれるとは、ぞっとする。

反対の第二の理由は、考え方の基に、交通機関から老人や障害者を実質的に遠ざけている今の風潮をみるから。

本人の努力でこれ以上どうにもならぬ特質は、ある程度、まわりが受け止めてやるべき。ルーズな母親は論外だが、乗り物を好む子どもの特質ぐらいいは理解してしてやりたい。

婦女子専用車の復活を望む

東京都立川市、女、税理士、35歳

「禁児車」の提案には、異質のものは排除するといういじめの原因、ひいては大人社会の病恨があるようで賛成できない。

ただ、勤務先近くのベビールームまで子連れ出勤したとき、「子連れ専用車」があればどんなにいいかと思った。ずっと以前「婦女子専用車」があったような気がするが、「うるさい子どもは排除する」という意味ではなく、事情があつて乗らざるを得ない人たちのために復活を願うものです。

感情に走らずもつと広い目で

神奈川県三浦市、男、高校生、17歳

「禁児車」には絶対反対です。

不快な者、嫌いな人は取り除くという考えは直してほしい、と言うと、「君は子どもたちの行動をみたことがないからそんなことが言える」といわれるでしょう。しかし大多数の母と子は静かにしています。粗暴な子、それを見過ごす母はごく少数です。ごく一部を見て同世代の人はすべて同じだと判断するのは短絡的、感情的でありすぎるのでは？

〔中間派〕

寛大さ求めながら責任も自覚

神奈川県横浜市、主婦、37歳

三児を育てたが、子連れの外出は、とても神経を使う。はた迷惑に感じられるかもしれない。もう少し寛大な気持ちを持っていただけたらうれしいが、なるほど子どもものしつに責任を持たなければとつくづく感じた。

人のこと言つ前に自分を見つめて

東京都小金井市、主婦、35歳

自分の子でもうるさいと思うことがある。迷惑というのは当然だろう。「禁児車」をつくるのなら、「子連れ専用車」もつくるべきだ。お互いさわやかに利用できることだろう。

若いママへの批判が多いが、その若者を育てた今の大人にも責任がある。人のことを言う前に、自分自身はどうなのかと見つめ直すときが来ている。

優しい視線と周囲の協力こそ

東京都内、女、声楽家・36歳

かつて私は騒ぐ子をにらみつけ、「何て母親だ」と、その親に冷たい視線を向けていた。

いま三児の母となり、冷たい視線を受けている。幼児用車の開発もよいが、「私があゝの母親だったらどうするか」と思う心のゆとりも必要。子どもを静めるのは、やさしい視線、母親をしつかりさせるのは周囲の協力で、非難やしつ責ではない。

子育ての反省促す火付け役

神奈川県川崎市、男、元中学校校長、61歳

宮迫さんの提案を読んで、反論が沸騰すると予測した。

案の定、宮迫さんを悪者扱いにした意見が続出したが、宮迫さんは身近な事実がある側面から述べていて、決して誤った言い分ではないと思う。

反論している人も宮迫さんと違った角度から意見を述べていて、これも誤った言い分ではないと思う。

人それぞれ考え方が違っていいという前提のないのは

日本人の悪い面が出ていていやな感じがした。宮迫さんは「禁児車」を作る立法省の政治家ではない。深刻に心配することはない。

それよりも、自らの欠点を素直に反省する謙虚さが失われている日本の親をどうするかを、もっと真剣に論ずるべきだろう。宮迫提言はそういう意味での火付け役と考えたほうが良いひろがりがあると思う。

耳栓を持つて乗るのが一番

神奈川県藤沢市、主婦、76歳

昔から「子は親の背を見て育ち、子は自分が育ったように育てる」と言われてきました。今の親こさんが「しつけ」ができないのは、放任と自由をはき違えて育ったからではないかと思っています。

私は年に一度は上越新幹線に乗りますが、土・日・祝日は避け、必ず耳栓を持参します。これが今は一番良い方法だと思っています。

車内は「人間博物館」なのです

東京都内、男、会社員、30歳

さまざまな人間が存在するのが社会。電車内は、さまざまな歴史を背負った人間が、あるべき社会と未来を示唆する貴重な「人間博物館」でもある。しつけの悪い子に迷惑した経

験が新たなしつけに変換されるだろう。黙認すべきでない時は注意してやればいい。

禁児車以前に考えたいこと

東京都三鷹市、主婦、49歳

コラムを読み、何とも過激な時代になったものだと思つた。たしかにまゆをひそめたことも何度かあるが、乗っている間のひとときと思つて耐えたものだ。

だが、春休みのある日、二組の母子とバスに乗り合わせた。ほほえましかった子どもたちの振る舞いがエスカレートし、周囲に不快感を与えた。注意する運転手に謝るところか子どもたちは尋ねる。「なぜ静かにしなくちゃいけないの」と。母親たちは何のためらいもなく、「あのおじちゃんに叱られるから」と運転手を指さした。

私たちが「禁児車」を論ずるようになったほど、家族間のしつけも、学校での教育も、最悪の状態に陥っていると思う。

要はしつけと教育ですね

東京都田無市、男、アルバイト、68歳

駄（しつけ）という美しい字をなくしてから、子どもの行動が目にあまるものとなったようにも思える。

ある時、バスの中で実に静かな子どもたちに会った。カトリック系の教育を受けている子どもたちのようだった。要は

おとなが気をつけるべきだが、禁児はわびしい。

フランス人の厳しさ垣間見る

神奈川県鎌倉市、主婦、65歳

地区のセンターで若いフランス人の主婦にフランス語を習った。ある日、四歳くらいのお嬢ちゃんを連れてこられた。二時間の授業中、お嬢ちゃんが一番後ろのいすにチョコンと腰かけて、お人形のような。先生もお子さんを見向きもしなかった。日本のお母さんもいつの日か、外国人に感心されるようがんばってください。

（以上「東京新聞」四月十二、十三、十四日号から）

「禁煙車の次は禁児車？」

ますのきよし

三月十九日付東京新聞の「本音のコラム」で、宮迫千鶴さんが「禁煙車の次は禁児車が欲しい」と書いている。その中で彼女は、若い母親の「ルーズな子育てぶり」を嘆き、「鈍感な母親がふえているのは、核家族が定着して、ガミガミ言う姑がいなくなったせいかな」と憂えたあげく、「若い母親たちよ、ビジネスマンは疲れている。新幹線の中はマイカーとは違うのだから、きりっとマナーを守ってほしい」と結んでいる。

彼女に限らず、このところ、このテの発言がやたらに賑やかみたい。「思想の科学」でも、あの山田詠美さんが、林真理子さんの「アグネスチャン批判」に同調して「レストランという所がどういう所だか知ってるのかね。デパートの食堂とは訳が違ふのよ。そこにガキが来るなんて、考えられないよ」、「子供の子供のしつけができないなら子供なんか作るなよな」、「私は子供が嫌いなばかりに、絶対にエコノミークラスに乗れない」、「アグネスにはベビシッターがいるんですよ。家で面倒見させりゃいい」、「女性の働く状況をもっとよくするためにとか、なんとか、そういうだいたいそれた意見にいつのまにかすり変わっているのも、もっとおかしい」とほとんど「週刊新潮」のノリで言っている。

ぼくは、アグネスの擁護という意味でなく、自分自身の立場で、「禁児車」に象徴される考え方を批判しておきたい。

①、まず、「子供はうるさい」という点だが、ぼくの経験ではオジサン、オバサンも同じようにうるさい。いや、ぼく自身、仲間達と列車に乗ったりした際かなりうるさく、周りの人に迷惑かけたらうと自覚している。注意されれば少しは自粛したかもしれないが、ある程度「お互い様」と割り切っている。ぼくが分からないのは、なぜ子供と子連れだけが「禁児車」なのか、である。子供だって、生まれ落ちた瞬間から親とは独立した人権を持っている筈だ。いろいろ条件をつけるにしろ、まずそこから出発することが肝腎じゃないか。校則

で縛りあげて囚人なみの扱いをしてもいい、と思っている人達が多いのも、子供に一人前の人権を認めないからだろう。

「子供のしつけが出来ないなら子供なんか作るなよ」と山田詠美さんは言うが、「おとなの都合で勝手にしつけられてなるものか、自分の人生は自分だけのもの」くらいの気持ちには子供だって持つのではないか。

宮迫さんは「ビジネスマンは疲れている」というが、「若い母親」は疲れていないのか？

一般に「育児は私事で、仕事は公事。だから仕事は育児より上位」という考えがメジャーのようだが、仕事もたかが金儲けにすぎず、第三者にとっては私事でしかないし、「仕事をしなければ社会が成り立たない」と言うなら、育児も同じ。少なくとも対等だ。「仕事に育児を持込むのは甘え」という論理は経営サイドの発想でしかない。

要するに、子供がうるさければ、おとなの場合と同様、静かにするよう注意するしかないのではないか。

②、「うるさい」というモノサシを、「嫌い、迷惑」という具合に広げていくと、「臭い、不潔、うつる（エイズバニックスの時は、アザや皮膚病の人は大変だったらしい）、不快、習慣の違い」など、問題はどんどん増えていく。多数派とか権力を握っている側は、こうしてアパルトヘイト（白人による黒人の隔離）を仕掛ける。

「禁煙車」は「タバコを吸わないで」と言っているだけだ

が「禁児車」は人間まるごと排除するわけだから、やはりアパルトヘイトと地続きだと思ふ。

アパルトヘイトを避けるには多少の不快は、お互い飲込むしかないが、「どうしても子供は我慢出来ない」という人は、初期の嫌煙運動がやったように、「私は子供が嫌いです」という大きなバッジを作つて、胸につけるようにしたらどうだろうか。

そうすれば、字の読める子は寄つてこないだろうし、子連れのおとなも、距離をおくようになるだろう。まさか宮迫さん達も「稿料稼ぎにああいうこと書いただけで、バッジ運動やるほどの根性はないよ」なんて逃げないでしょうね。

③、十四年前、「交流」発刊一周年記念に「子育てを考えるシンポジウム」を開いた時、敢えて託児室は設けず、子どもと同じ場で討論した。当然、子どもはうるさく、おとなも負けないように声を張上げるから、余計疲れた。しかし、あの時、「子どもを隔離した静かな場で、能率よくやろう、という隔離・分業主義は避けたい」と考えたのは間違つてなかったと、今でも思っている。子どもを持つ前のぼくは、育児という能率の悪い問題は視野の外に置き、いかに能率よく生き、行動するか、という立場で物事を考えるクセがついていた。それは、知らない間に能率よくは生きられない人を置去りにしていく立場でもあったと思う。そのことへの反省が、託児室を設けないやり方になったわけだ。いつでもそのやり方が

いい、とは言わないが、能率優先の男の生き方への、自分の戒め方がそれだった。

今、「女の時代」と言われ、女と男の相互乗入れが進むことは良い事だが、それは同時に、ぼくたちが否定してきた「男の生き方の負の部分」へも又、女が入りこんでいくという皮肉な一面をも生んでいるような気がする。

もちろん、㊦㊧の道を選んでいる女がすべてそうだとは思わない。落合恵子さんも㊦㊧の一人だけど、彼女が子供の雑誌を発行したりして、子供の問題に関わっているのも、もしかしたら、㊦㊧の気楽さが持つ落とし穴みたいなものを予感して、バランスをとろうとしたのかも知れない。これは多くの勝手な憶測にすぎないけれども……。

能率よく生きられる自分の強みは、しばしば、逆に「盲点」にもなりうるってこと、忘れないようにしたいね。

(「交流」五月号(執筆四月二十日)より転載)

*

ますのさんの原稿が印刷に回っていた四月二十一日、宮迫さんは「東京新聞」「発言」欄に、一連の論争の感想をまとめ、「「禁児車」をつくれなどと言った自分の青さを恥じました」と、素直に締めくくった。この経過をまとめた「週刊文春」5月12日号とともに転載する。

昭和63年(1988年)4月21日(木曜日)

「禁見車」論戦特集を読んで

予想をはるかに超えた反響に、実のところ驚いた。もちろん、こういうことを言っている人、子育て中の若いママたちから反撃されるだろうな、あるいは自分を喜良で正しい人間でいると信じている人たちから好かれるのである。

あえて「禁」の字使う

私もいいトシだから、まあ

それくらいのことばは承知していた。では、なぜハッキリ言う態度をとったかという「禁見車」という言葉を前面に押し出したほうが、八社会

におけるルール(規則)の意味が明確に見えるからである。どんな社会にもルールはある。そしてこのルールの上

にはじめて八自由な選択がある。このことを私は言いたかったのだ、あえて「禁」という挑発的な言葉を使ったのだ。

愚者扱いされるだろうな、ということばは予想した。

だれだって、キツイ意見より心あたたまる話を聞きたい。

ちなみに、ルールとマナーは同じものではない。マナーとは行儀・作法というものだが、ルールを守る時の態度の表現が、マナーである。子供を育てる時に必要なものは、この二つだ。

「本音のコラム」の筆者

宮迫 千鶴



もちろん、ルールなんてものは最小限にあればいいものである。やたらに「禁」の字がある社会はおかしい。私だって「禁」という字は好きじゃない。「禁見車」なんてつくらなくてもすむ社会のほうがいいにきまっている。

「大人の質の向上」訴えたかった

だが、ルールが最小限ですむ社会というのは、まっとうな社会性

を身につけ、「禁」という字に監視されなくても自分を律して生きていける魅力的な大人がふえないと成立しない。だれも見えていないからと平気でゴミを捨てたり、旅の恥はかきすて式の醜い大人から脱却しないといけないのである。

つまり、私が言いたかったことは、大人の質の向上である。最小限のルールを美しく守ることのできる大人でありたいと思うのである。

自分の青さを恥じる

だが、私がつとも感動したというか、「おそれいりまして」と平身低頭したのは、藤沢市の主婦・家田いとさん(76歳)の「耳栓を持って来るのが一番良い方法だと思えます」という意見でした。さすがです。遠慮とはこういうことでしょう。「禁見車」をつくれななど言った自分の青さを恥じました。(画家)

子づれに鉄槌を！

宮迫千鶴サン「禁児車」提言の顛末

『週刊文春』5月12日号の記事

「正直言って、こんなに反響が大きいとは思ってなかったんです。今、子育てで大忙しのお母さんといえ、三十歳前後でしょう。そういう方達から目の敵にされるだろうな、とは覚悟してましたけれど、何日かして新聞社の方から連絡があって、「賛同の意見が多いんですよ」と聞かされた時には、ちょっと驚きましたね」（宮迫さん）

泣く子と地頭には勝てぬ」と言うことわざがあるくらいだから、日本人は昔から子供の我儘には甘かったのかもしれない。周りにあまり人のいない所なら、「腕白でもいい……」で済ませるところだけれど、これが人の多い所、特に逃れようのない移動中の乗物の中だったらすると、ちょっと困りものである。指定席でたまたま隣り合わせた家族連れの大騒ぎに、心中閉口しながらも、他人の子を叱るわけにもいかず、イライラした経験をお持ちの方も多いのではなからうか。

そんな経験から、禁煙車ならぬ「禁児車」という耳慣れない制度を提唱したのは、「ハ女性原理V」と「写真」など多数の著作を持つエッセイスト、画家の宮迫千鶴さん（40）。「禁児車」とは文字通り、子供や子供連れの若い母親を乗せ

ない車両のこと。故郷の広島に帰る時に利用した新幹線の車内で、子供を泣くままに放置している若い母親と一緒にあったのが、この文を書く直接のきっかけとなった。

三月十九日付の東京新聞「本音のコラム」から、彼女の主張を少し引用してみよう。

▲なんていうか、子供を連れていることをある種の特権のように思っている若い母親がふえているような気がする。……若い母親の子育てはなゼルーズかといえ、彼女たちに公共心が希薄だからである。子供たちに、公共の場でのマナーを教えるどころか、自分自身もそれを身につけていないらしい。……大人である私たちは、騒がしい子供に対していらだつのではない。そのそばにいて、何ひとつ注意しようとしなくていい母親のマナーに対する鈍感さに対して腹が立つのである。

このコラムが掲載されると、東京新聞には読者からの投稿が殺到。賛否両論のうち、いくつかが投稿欄に採用された。予想以上の反響があったことを背景に、同紙ではさらにこの問題に関する投稿を「課題募集」。四月十二日から三日間にわたり、同紙投稿欄の全てを使って、「禁児車」論争特集が組まれることとなった。掲載されたものだけでも、十二歳の少女に始まって七十六歳の主婦に至るまで、投稿者の素顔は多種多様。

「短期間の募集にしては異例なほど投稿がありました。もう締め切って一週間以上になるんですが、今でも一日に二、三

本は来てますね」(東京新聞)

もっとも当の宮迫さんは、そんな大反響に苦笑いしている。「日本は村的な社会から都市型の社会へと移行している最中なわけですが、まだまだ日本人の意識の方は、村的なところから抜け切れていない。周りの人間が皆、自分と同じような考え方、感じ方をすると思っていると信じているところがあると思うんです。たとえば、日本では子供のことを「可愛い」と言わなければ、凄く変な目で見られる。冷たい……とかね。だけど本当のところを言えば、もちろん母親にとって子供は可愛いものでしょうけれど、誰もが自分と同じように、自分の子供を可愛いと思うとは限らないわけです。そのことを分かった上で、子供を社会に連れ出すべきだと思うんですよ。子供のやりたいようにさせてやることばかりが、良いことだとは思いません。

ただ、今度の論争を振り返ると、何だか自分がすごく古臭

いことを言ってるようで、嫌になっちゃいましたね。「モラルがない」とか「駄が悪い」とか……。冗談じゃない、私はそんな人間じゃない(笑)。

禁児車という言葉をやわざ持ち出したのは、それくらいの言い方をしないと、右の耳から左の耳へ抜けてしまうのが日本人だからです。「電車のなかでは静かにするよう子供に言いましょ」と言ったところで、誰も気に止めないでしょう。別に「どうしても禁児車が欲しい」なんて、こたわるつもりは毛頭ありません。これはキャンペーンじゃなくて、当然守るべき社会的な原則なんですから。

この間も友人と話したんですよ。この論争がもとで、J Rが車内放送なんかを使って、「子供連れの方は静かにしましょう」などと始めたら嫌だなんて。だって、却ってうるさくなるでしょう(笑)。

(「週刊文春」五月十二日号より転載)

自費出版のおすすめ — あなた自身の本をどうぞ —

随想集・研究論文・私的な女性史・詩集・句集・歌集・童話・絵本・遺稿集など……

「こんなもの……」とお思いになるものでも、他者にとってはすばらしい値打ちのあるものも、たくさんあります。活字に残しておくことが、貴重な女性史の証言になることも……。

一般的に広くおすすめておきたいと思うものは、BOCの出版物として、全国的に販売することも可能です。具体的にご希望を出してご相談ください。ご企画ご予算に添って、編集から造本までお引き受けします。

BOC出版部

★★★婦人週間四十周年記念全国会議から★★★

婦人週間もことしで四十年。女性宇宙飛行士が逆転して宇宙を翔ぶことしのポスター、「いま個性が性を超える」は格別好評だった。労働省主催の四十周年記念全国会議も満員の大盛況。入れない人も出たほどで、女の問題が確実根づいて来たことを感じさせられた。

日比谷で開かれた全体会議の概要と、三か所で行なわれた三テーマのフォーラムの一つ、「仕事と育児を考える」の概要を紹介する。

佐藤ギン子（労働省婦人局長） 四十年前というのは戦後の混乱期でしたが、それから四十年の間、婦人週間を続けて来られたのは、みなさまのお励まし、ご支援、ご理解、ご協力のおかげです。お礼申し上げます。また特にマスコミのみなさま方にはテレビ・ラジオ・新聞・雑誌その他あらゆるマスメディアの中でご協力いただきましたことを心からお礼申し上げます。大臣も楽しみにしていたのが、国会の法案審議で来られなくなりましたが、くれぐれもみなさんよろしくとことです。

昭和二十四年というのは戦後の混乱期でしたが、敗戦というのは私たち女性にとっては、必ずしも悪いことばかりではなかったわけです。戦前は、私たちは男性と同じ法制上の権利がなかったけれど、戦後の民主化の波の中で、憲法で、法

を行使することができるようになり、また教育の面でも、帝国大学や私立大学で女性に試験も受けさせない状況だったのが、戦後はほとんどの大学で受験することができるようになりました。戦前は六年の義務教育の間は男女共学でしたけれども、その後は男女別学になって中学と女学校ではカリキュラムの水準が男性より女性が高いという状況の中で勉強してきたわけです。それが戦後さまざまな法制上の改革の中で、女性の地位が向上してきました。女性は飢えたり、着る物、住む家がなくても意気軒昂たるものがあつたし、特に、教育の機会均等が女性の能力を伸ばして来たという面があると思います。だからこそ第二の追い風とも言える国際婦人年や国連婦人の十年の動きの中で、女性のみなさんがこの動きを上手に活用されて、女性の地位の向上に結びつけられたわけで、婦人の十年の間に女性の地位の向上の面でも見るべきものが

たくさんあったと考えています。

それではすべてが完全になったかと言うと、法制上の平等という点ではかなり改善が進んだけれども、事実上の平等という点ではまだまだしなければならないことがたくさんあるわけで、婦人週間の催しを含め、さまざまなこともまだまだしていかなければならないと思います。

ただ女性の地位の向上につきましては、政府の努力だけでは限界があって、本当の意味で女性の地位が向上するには、もうすでに能力が十分に高まっておられる女性のみならず、男の努力、お力に負うところが大きいわけでございますし、また今日は心強いことに男性の方に大勢おいでいただいております。男性の方々のお考えも非常に影響があるわけですから、今日は男性の方々も含めて、参会のみならず、もう一度婦人の地位の向上について考えていただく機会になればと期待をいたしております。

講師にすばらしい方々がお揃いでございますので、今日一日みなさまにこの会を十分にエンジョイしていただき、今後の活動のご参考にしていただけたら、これ以上の喜びはありません。今日は大勢来ていただきありがとうございます。

中村道子 記念すべき婦人週間四十周年全国会議でお祝いの言葉を申し上げますことは、私にとってはとても感激でございます。そしてこんなに大勢の方が集まっておりますことは、たいへん嬉しいことで、また心強く

思っております。

私が今日は代表として参りました。国際婦人年の決議を実現するための連絡会Vを簡単に説明させていただきます。市川房枝先生を中心に、一九七五年に国際婦人年日本大会を開催し、その大会に参加しました全国組織の婦人団体と労働組合婦人部の四十一団体が、その会の後で国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会V、たいへん長い名前ですが、そういう会として今日まで運動を続けてまいりました。

四十一団体が四十八に増え、現在は五十一団体が加盟しています。総勢二千三百万の女性を代表しているわけでございます。この連絡会は国連婦人の十年、一九八〇年には政府が女性に対するあらゆる形態の差別を撤廃する条約に署名するように運動しまして、一九八五年の国連婦人最終年に向けて、条約を批准するように働きかけました。そしてナイロビ将来戦略を受けまして、政府が新国内行動計画を作成するのに際し、連絡会はいろいろと注文をつけました。昨年春、新国内行動計画が発表され、私どもはこれを拝見して、秋に二回にわたって新国内行動計画の推進について各省庁に質問する会を開催しました。二十二省庁から三十六人の担当官の参加を得ました。各省庁での女性の登用状況なども伺いました。あの男性は、その会に出席するため、女性の登用状況の資料をまとめるにあたり、なぜ女性の登用が少ないのかあれこれと調べてみたと言われました。これはたいへんな進歩だと思ひ

ました。女性のことがボツボツと全政府閣僚の意識にのぼりつつあり、新国内行動計画に真剣に取り組む姿勢が垣間見られるような気がします。願わくば、海外から日本は女性後進国だと言われないように、いつその努力をしていただきたいと思ひます。

連絡会では新国内行動計画を勉強して、二〇〇〇年にむけて私たち民間女性は何をなすべきかを模索しております。教育・マスメディア・労働・家庭・福祉・政策決定参加・平和・国際協力 of 各分野別にそれぞれ検討し、その成果を全体会にかけて審議し、あわせて学習会も開き、今年中にそれをまとめて、民間行動計画を作ろうと努力しております。

四十年の間に、女性の役割に対する社会の考え方はずいぶん変わりました。私の一生においてもめざましい変化がありました。教育では男性と同じ教育を受けることなど考えられない時代でありました。また労働の面では、今は既婚・未婚を問わず、女性が働くことについて人々はあまりこだわらなくなつた、むしろ働くことを誇りに思うようになりました。

四十数年前、私は未亡人で子どもを抱えておりましたので、仕事をしなければならないと思つておりましたが、父は猛反対。自分がいるのに外へ出て働くとは何ごとかと、たいへん不機嫌でございました。つまり男は外で働き、女が内で家事をするような役割分担の考えでした。しかし母の支持を得て、私は仕事をするようになりました。私は父が台所に入るのを

見たことはほとんどありませんが、いま娘の夫が休日に台所でいそいそと食事を作るのを見て隔世の感がします。この頃は男性がスーパーなどで買い物をする姿などを見ても、誰も不思議に思いません。女性のみなならず、男性の役割に対する固定的な考え方が少しずつ変わっています。この調子なら私どもの努力次第で二〇〇〇年までにどんな世の中になりますことでしょうか。一所懸命がんばれば、すばらしい世の中になると思ひます。おおいに希望をもつてそれぞれの立場で、より明るい人間社会を築く力を得て前進することを願つてお祝ひのことばとさせていただきます。

国連婦人の地位委員会の報告

有馬真喜子 婦人の地位委員会報告と申しますと、つまりは、いま世界の国々、あるいは国連というところでは、婦人問題がどういう方向で動いているかということをお話することになると思ひます。最初に婦人の地位委員会というものについてひと言述べさせていただきます。

婦人の地位委員会というのは、国連の中の経済社会理事会の下部機構である機能委員会の一つでございます。国連の婦人問題を扱つただ一つの委員会です。ずっと一つだったので、六年ほど前にもう一つの委員会が作られました。これが女子差別撤廃委員会と言ひまして、女子差別撤廃条約の施

行状況がどうなっているのかを審議する委員会です。

現在はこの二つの委員会が車の両輪のような形で婦人問題を扱っていると言っていると思います。一九七五年国際婦人年をやるうと決めたのも、女子差別撤廃条約の中味を審議して決めたのもこの婦人の地位委員会です。それから現在、二〇〇〇年に向けての婦人の地位向上のための将来戦略、よく「ナイロビ戦略」と申しますが、ガイドライン・基準を定めた条約の中味を作ったのもこの委員会です。三回の世界会議の準備委員会を作って準備してきたのもこの委員会です。国際的な舞台では、婦人問題のおおよそその大きな流れの方向を定めているし、その下準備というか、事務的なことがらを処理している委員会であるところを理解いただければよいと思います。

今年の婦人の地位委員会は第三十三回で、三月十四日から二十三日まで、オーストリアのウィーン国際センターというところで行なわれました。今年の婦人の地位委員会は次の二つの点で、新しい一步を踏み出した委員会であったと言われています。

一つは、昨年婦人の地位委員会を毎年開くということが決められて、その最初の委員会であったということ。もう一つは、優先課題、つまりこれから二〇〇〇年に向かって婦人問題を解決していくために、どういう問題に優先権を与えて取り上げて解決していくか、去年の委員会でも五年間分が決めら

れたのですが、その優先テーマを討議する最初の委員会であったわけです。

議題は全部で七つありましたが、その中で主なものは、一、国連システムに関するプログラム作成と調整 二、婦人の地位向上のための将来戦略の実施に関するモニタリング（監視）三、プライオリティーテーマ（優先テーマ）——これは平等については、ナショナルマシーナリーと言われる国内での婦人の地位向上のための組織、それから発展に関しましては、農村婦人の問題、平和については情報と平和教育へのアクセス（接近）、それと婦人に対する暴力の根絶といったテーマが主なものでした。

これらをめぐる討議が行なわれ、その結果二十六の決議案が出ました。二十六の決議案というのはたいへん多いのですが、これは婦人問題についてそれだけ具体的な点で決めることが多くなって来ているということです。その中で三つの決議案が投票に付されました。二十三の決議案は全会一致満場一致のコンセンサスで通ったのですが、三つだけが一致をみなかったわけですから。その三つとは、「アパルトヘイト下の婦人と子ども」「ナミビアにおける婦人と子ども」「パレスチナ婦人の状況」で、三つとも政治的意味あいを強く含んだ決議案でした。これらの決議案に対しては、この婦人の地位委員会でも扱うべきではないという意見、あるいは制裁をするということに対しては反対だという意見などいろいろ出ま

したが、いずれも賛成多数で可決され採択されました。

このほかの議案の中で主なものをあげますと、たとえば「一九九〇年の拡大婦人の地位委員会」という決議案があります。これはその前の年にアジア・アフリカ・ラテンアメリカなどのそれぞれの地域会議を開きましようということと、「拡大婦人の地位委員会」と平行して、NGO、民間会議を開きましようということが、この決議案をめぐって決められました。一九八五年に国連婦人の十年が終わってナイロビ会議がありました。それ以後五年ごとに、ナイロビ戦略、つまり西暦二〇〇〇年に向けての婦人の地位向上のための将来戦略をもう一度見直して、評価し直しましよう、それれどどんなふうに行なわれているかということをもう一度検討しましよう、そして次の政策を考えましようということなのです。その五年の節目が一九九〇年で、そこで婦人の地位委員会を拡大してやりましようということです。これは世界会議ではありませんが、オブザーバー国としてたくさんの国が参加して、NGO（民間会議）も行なわれますので、ミニ世界会議になりそうだという予測もあります。開催場所は今のところウィーンで、そこで同時に次の世界会議の時期も検討されますが、どうも一九九五年ということになるのではないかと思っています。

このほかの大事な決議案としては、婦人の地位委員会のメンバーを増やすことが決まりました。メンバーを多くしてい

ろんな地域の意見を拝見することができるようになるということで、現在三十二か国であるのを四十三か国に増やすという案が出まして、満場一致で採択されました。

それからもう一つ、女子差別撤廃条約に関して決議案が決まりました。婦人の地位委員会と女子差別撤廃委員会の二つの委員会が、連絡を緊密にとつて、婦人の地位委員会はナイロビ戦略を要として、女子差別撤廃委員会が女子差別撤廃条約を要として、それぞれが意見やレポートを交換し、婦人の地位のために十分働くことができるようにという決議が出て、満場一致で採択されました。

そのほかには、国連の中で女性の雇用に関してですが、国連は婦人問題を各国にこうしなさい、ああしなさいと言っているのに、かんじんの国連の婦人の採用状況とか、婦人が政策決定の高い地位に登用されているかということを考えてみると、まだまだ問題があります。一九九〇年までに国連職員の女性の割合を三〇%にするという決議案が前に出ています。現在女子職員を雇う役目の事務次長や高い地位でコードイネーターの人がいますが、その人の任期をもっと延長して、国連でもっと女性を採用し、特に開発問題に婦人をもっと入れていきなさい、いろんな問題をみていくときに、婦人問題の視点なしではいけないですよ、という決議案も出ました。

そのほかには、みなさんも興味がおありかと思いますが、言葉の問題もあります。たとえば国連では女性の議長を呼ぶ

時はマダム・チエアパーソンと書いていますが、これが文書になって出て来ますと、チエアマンという昔からの言葉使いになっているので、これもおかしいんじゃないかということが出ました。このような女性差別的な表現をなくすという決議が出され、これも満場一致で採択されました。

プライオリティーテーマについては、国内組織、農村婦人の問題、情報と平和、婦人に対する暴力の問題が取り上げられました。今年はどういうテーマが取り上げられるかという、平等については、婦人の経済、社会的参加の平等です。発展のテーマとしては婦人と教育です。特に現在開発途上国の女性識字率が低いので、それを高めるということ、また、人口問題が開発の問題として取り上げられています。

平等のテーマとしては、国家建設および公正な社会経済システム建設への婦人の完全な参加ということになっています。つまり国のあり方、社会経済のシステムのあり方について決めていくところに、婦人が完全に参加をしましょうというものです。それが来年の優先テーマとして取り上げられます。

会議を見ましての私の感想といたしまして、一つは、カナダとオーストラリアが婦人問題について非常に活発に発言しているということ、それに加えてアジアの諸国もたいへん活発になってきたということです。特にパキスタンが、全体に対して開発途上国の立場でさまざまな提案を出していると思えました。

二番目の感想として、二〇〇〇年に向けて婦人問題は開発途上国に移っているということです。発展途上国の国々の発言はもちろん、いわゆる先進国と言われる国々の代表の方たちの発言も開発問題に集中して来ております。それは今日、国際婦人年および国連婦人の十年を経て婦人の地位は向上し、婦人問題はかなり解決をみた部分もあるのですが、開発途上国においては婦人の状況は悪くなっているという部分があります。これは貧困の問題で、識字率が低いという問題や、健康が害されている、雇用が十分でない、失業率が高い、水の供給が不十分、などの問題のほか、国を造っていく中に婦人が少しも参加できないという問題など、さまざまな問題を抱えています。これに対して先進国の人たちは、できることがあったらしていこうじゃないかという姿勢が非常に強くなっております。婦人と開発の問題というのが二〇〇〇年に向けての、おそらく中心テーマになるであろうというほど関心が高まっております。

最後に日本の立場ですが、この優先テーマにつきましては、今年の一月に行なわれました情報ネットワークについての専門家会議開催のためのお金を出したことで、婦人の地位委員会でおほめの言葉をいただきました。それから最近国連から「国連と女性」という出版物が出されましたが、これも日本がお金を出したことが評価されています。けっしてまだ十分な貢献とは言えないと思いますが、こういう場でも評価をさ

れたということは、とても嬉しいことだというふうに思いました。

そこで私どもの課題といたしましては、国内の婦人問題の解決に努力することはもちろん非常に大切なことですが、それとともに世界の婦人問題、特に開発途上国の婦人の困難な状況について十分知って、GNP第一位の恵まれた国の中で暮らしている私たちとしましては、その女性たちの問題の解決に手を貸していく姿勢をもつことが大切なのではないかという感じがいたします。

婦人週間「昨日」「今日」「明日」

司会（縫田瞳子） 「婦人週間、昨日・今日・明日」というテーマですが、「昨日」というのは、国連婦人の十年の始まった昭和六十年まで、「今日」というのはそのあとから現在まで、「明日」は西暦二〇〇〇年ということぐらいを共通の理解といたしまして、自由にお話をしていただきたいと思っております。

今日の会は婦人週間の四十周年の会でもございますので、昨日・今日の流れを婦人週間に合わせながら考えてみたいと思いますので、イントロダクションの意味を含めまして、最初に私がこれまでの背景というようなことからお話をしてみたいと思います。

婦人週間というのは説明するまでもなく、昭和二十一年四月十日に、日本の女性が衆議院の選挙に一票を投じたのを記念しまして、昭和二十四年から労働省が、婦人の地位向上促進週間としてもうけたものでございます。そしてこの婦人週間にはテーマと言いますか、目標を掲げまして、今年はいま、個性が性を超える。という、マスコミなどではお役所らしくない、とてもさわやかなテーマだということで、かなり話題になりましたけれども、これまでの三十九回は、別掲のようなテーマが掲げられております。過去四十年を振り返ってみますと、時代の流れ、その時に女性がどういう環境の中で生活していたか、あるいはどういうことをしなければならなかったか、あるいはしたいと願望していたか、期待されていたかということ、このテーマが物語っていると思います。たとえば昭和二十年代のテーマの中心は、当時戦後法律制度のいろいろな改革が行なわれた時代でしたから、女性が新しく得た権利と義務をしっかりと認識しなければならぬ、認識しようということが運動の中心になっていたように思います。

また昭和三十年代は、高度経済成長の時代に入った時で、この経済状況の変化は、女性の生活や意識にも大きな影響を与えました。そこでこういった変化の中で女性の果たすべき役割は何なのかということが、関心の中心になっていたと思います。

昭和四十年代は経済の安定成長の時期だと思うのですが、こういう中で女性を着実に職場に進出してまいりました。また時間的にも、物質的にもゆとりをもつようになった女性は、職業につかなくとも、いろいろな地域活動に関心の目を向けるようになりました。したがってこの時代は、女性がいろいろな活動をするためには能力を磨かなければならない、能力を開発しなければならぬということで、そういうことに重点が置かれていたと思います。

そして昭和五十年代には、国際連合の大きな動きがございまして、『国際婦人年』それに引き続いて『国連婦人の十年』という大運動がございました。国連がめざした目標に呼応して、日本でも男女平等の立場で社会参加をしようという運動が起こってまいりました。従来は主として家庭内の領域が女性の分野で、家庭外の領域が男性の分野とされていましたが、領域を分けるのではなくて、家庭と社会両方の分野に男女が共に平等の立場で関わり、役割を果たし、義務を果たさなければならぬ、こういう価値観の変化と言いますか、意識を変えろという運動目標というものが、かなり一般的に広がってまいったと思います。そして現在につながって来ていると思います。つまり戦後一票を獲得して政治に参加したのが出発点となりまして、女性が家庭役割とともに社会の一員としての役割を果たすということが、外からも要請されました。外からの要請というのはいろいろな動機、要因があつていろ

いろと問題があるので、おそらくそういったことが、今日の話題になるのではないかと思うのですが、外からの要請と同時に、女性自身からもそういう認識・願望が高まって来たことを感じます。伝統的な役割がくずれていく、流動化していく中で、家庭・職場・地域での女性の生活と地位が変わっていきまして、そういう中からいろいろな矛盾が生まれて、その矛盾の中に女性が悩み、そしていろいろな模索しているというのが現在の状況ではないかと思われれます。

それでは牛尾さんからお願います。

◆「昨日」は忘れて「今日」を見つめよ

牛尾治朗 私が三十歳そこそで経営者になったときに、女性をどう使うかということとは、たいへん重要なことでありました。私はその二、三年前にアメリカに留学しておりまして、アメリカの女性のすごさというかたくまじさを体験して帰って来ました。けれどもその当時日本では、女性の力というのは能力給で使われて、男性は一括採用の終身雇用体制で使われていました。昭和三十年、四十年頃というのは女性は明らかに能力給的な競争、条件の激しい中で使われていたわけですが、私は同期の男性と比べると、女性のほうがはるかに人間としての成熟度が高いということに気がつきました。体験・見識において、むしろ女性のほうがより成熟しているとい

うケースが多いことを職場で実感して、ある雑誌に書いておもしろがられたのが昭和三十年ぐらいです。

しかし、最近の女性問題というのは、「時流は女流」として流れているだけに、女性はいちんとモノを考えていけないとむずかしい時代になったように思います。職場的にもいわゆる製造業からサービス業へ、サービス業の中でもソフトの仕事の能力のある人に求人が集中し、男性よりも女性に対する求人が多い時代になってまいりました。福祉産業でも、教育産業でも、女性の地位というのは非常に高くなりましたので、そういう点では産業構造の変化というのは、ますます時流は女性の方に向かって吹いてくるということは言えるだろうと思います。

この女性問題というものは、我々がほとんど意識しないで考えることが最終のゴールだろうと思います。この春に六十八年続いた「婦人倶楽部」が廃刊になりましたが、これは主婦というものを対象にするよりも、働く女性をターゲットにしほった雑誌のほうで、どんどん増えて来て、世の中のほうもそういうことをはっきり認め始めたということだと思いません。

「婦人週間、昨日・今日・明日」ということで一番申し上げたいことは、昨日の婦人問題の現状の中に、日本の婦人問題を捉えようとされないほうがいい。世の中が非常に断続的にしかし急激に変化している中で、今日の婦人問題はまず今

日の女性問題と改めて、昨日の婦人問題の経過ははっきり忘れて、現実の中で男・女・職場における仕事というものをながめて、そこで新たに今日は今日として考える部分が五〇％ぐらいあるんじゃないかと思い、問題提起をいたします。

◆激変した「今日」——しかしまだ残る多くの問題

猪口邦子（上智大学助教授） いま牛尾先生のお話を聞いていて、男性的視点が非常に強く出ているな、と感じました。まず第一に、昨日と今日は別だから、昨日のことは忘れて今日は今日と捉えて、明日を見て行こうと……（笑）。女性はやはりもう少し時間の流れの中で歴史を大切に、もう少し全体の有機的なつながりというものを考えながら前に進んで行こうと、そういう発想をするんですが――。

私は今日、この会場にいらっしやいます私より年上のすべての女性に、ほんとうに心からお礼を申し上げたいと思って参りました。ほんとうにありがとうございます。というのはその方々のお陰で、私たち日本の女性の若い世代は、かつてないほどの新しい機会といろいろな可能性と役割を負っていく機会に恵まれているのです。

私は国際政治学を上智大学で教えておりますが、アメリカに留学するとき、あるいは政治学を専攻するとき、あるいは大学に職を求めるとき、それぞれいろいろなバリエーション

ました。しかしそのバリアーというのは、自分が何らかの努力をすることで十分克服できる程度のバリアーに、私が職を求めているときにはすでになっていたのです。そのような時代に生まれ、そしてそのような時代に職業を手にすることができたというしあわせを、私は時々ふと思い起こして感じるのですけれども、多くの今日の日本の若い女性に、さまざまな個性や能力を生かす機会が広がっているのは、先輩の女性の方々が、非常に長きにわたって精力的な努力を重ねて下さったお陰であろうと考えたいと思います。

もちろん現実にはいろいろな問題があります。しかし現実の問題を考えると、実際私たちは今まで何を達成したのかという評価も十分に加えていかなければならないと思います。それでなければフェアでないと思う。実に多くの成果を出して下さって、その上で、いま若い世代はかつてないほどの機会を手にしたと申し上げたいんです。

たとえば「今日」の部類に入るのでしようけれども、雇用均等法が施行されて一年になりますけれども、私は大学の職場で女子学生を指導していて断固として証言できることは、この一つの法律が、実に大きく女性の就職機会を変えたということとです。私のゼミから二年前に就職した女性は、いわゆる一般事務的な形でしか就職の機会がなかったのですが、同じゼミから二年後に就職してゆく女子学生たちは、総合職で就職できている。つまり同じゼミから就職しているにもかか

わらず後輩のほうが政策決定に関わるような形で就職機会に恵まれたということですね。この問題は、今までに先に就職した女性が、今後組織内でどう処遇されるかという大きな問題を含みますが、いずれにしても先輩女性の方々の努力によって、目に見える変化がいくつか確実に起きており、それは十分に評価すべきことであると感じます。女子学生の就職機会の拡大については、日本の社会はほんとうに良くなっているんだなあということを久々に確実に実感できた数少ないこととさえ感じしております。

しかしながら実際には今日の女性の労働現場を見てみますと、新しい形の問題が出て来ていると思います。女性の労働雇用機会が増えていることは確かですが、マスコミなどで華やかに報じられるものとは裏腹に、実体というものはいろいろな問題を含んでいると思います。女性労働というのはきわめて知的労働というものを提供しているにもかかわらず、社員としては登用されていません。たとえばカタカナの職業と言われるような、コピーライターとか、エッセイストとか、スタイリストとかフリーライターとか編集者とか、いろいろな職業に女性が就いていますが、彼女たちはいつでも切り捨てられるようなフリーな社員としてしか登用されていなくて、いろいろな面で不安定要素を抱えていると思います。

日本の女性の労働市場構造というのが、三つぐらいの層を成して来ているという気がするんです。大企業、あるいはプ

レステージを気にするような部門において、女性を積極的に登用するところもみられます。そういうところでは非常に象徴的な形でしか女性の登用がなされていない。ですからここに、ほんのひと握りの成功をおさめる女性という存在があるんですね。それとは別のところに、きわめて高度な専門性のある労働あるいは知的な仕事を提供しているにもかかわらず、フリーな立場に甘んじている大量の女性という層があると思います。それから最後のところに、従来どおりの組織内の補助的な労働に従事しているような大量の女性がいると思います。このような構造をもっている中で、象徴的な成功をおさめている層がどうやって拡大できるだろうか、フリーの地位に甘んじている、実際には組織的にきちんと登用されたいと思っている女性がどうやってそれを実現していけるだろうか、また組織の中で女性というだけで補助的な仕事に押し込められた人たちが、まさに個性が性を超えて、その人の個性に合うような仕事を手に入れていくことができるか、今日、そして明日にとって非常に大きな問題ではないかと思っています。

さらに私が強調したいと思いますのは、いろいろな場において、政策決定権を持つような形の社会参加をしていく方向を追求していく必要があるということです。

たとえばアメリカの大統領選挙の候補者の奥さんたちをみてみると、かなりの人が有職婦人です。共和党のドール候補

の奥さんは運輸大臣でありまして、夫の選挙運動のためにその職を退きましたけれども、その他弁護士であるとか、大学に関わっているとか、編集者であるとか、ライターであるとか、多種多様な仕事をもっている人たちです。それに象徴されるようにアメリカあるいはヨーロッパでは、かなり個性を生かせる場にいろいろな女性が進出していますが、日本の女性ももう少し政策決定の場に進出してみるべきだと思います。審議会などでも縫田先生が紅一点でいらっしゃるという話を聞きましたが、紅一点云々ということは、日本の女性の問題がまだまだ解決されていないということであって、決定権をもつようなところが女性に開かれていないということではないかと思っています。

男の人たちは、いろいろな人たちが同じような志をもって同じような努力を積み重ねながら仕事をしていますので、ネットワーキングがかなり自由にできるわけですが、女性の場合、職場で紅一点であったりすると、いい時はいいののですが、何かあった時に孤立してしまう、そういう弱さを常に抱えていると思います。それはたいへんしんどいことだと思います。

私の願いは、ひと握りの女性が象徴的な成功をおさめているという時代はもう終わり、これからは女性が層を成して政策決定に関われるような形で、自分を生かせる仕事を手にしていくということです。それによって女性間の職業的なネットワークも可能になり、その時に初めて本当の意味で、

社会進出あるいは社会参加ということが、男性と同等のレベルで達成されるのではないかと思います。

◆女性の地位はほんとうに上がったのか

司会 先ほど牛尾さんから、現在産業界で女性が求められているという、非常に希望をもてるようなご発言があり、そのことについて猪口さんから問題提起があったのですけれども、私はやはりこの点については、員数として女性は数えられていますけれども、いろいろな経済情勢の変化の中で、けっして本當の戦力として認められていない状況であり、女性の地位は上がったとは言えないのではないかと思います。そういう問題点を少し聞かせていただきたいと思っています。猪口さんはまた、社会参加、方針決定の場合への参加の重要性をご指摘になりましたが、私もまったく同感でございます。

たとえば、いま日本の国会の中で女性の議員の占める割合は三・八パーセント、地方議員が増えたと言っても二・一パーセントという状況ですし、審議会のメンバーは、六十年までに一〇パーセントという目標が達成されていません。女性委員の率は昭和五十年の二・四パーセントが六十二年の六・三パーセントに増えましたけれど、なかなか遅々として進んでいません。

それから地域活動の中でも、女性はずいぶん活躍している

はずなんですけれど、その長はほとんど男性が占めております。五十八年の労働省の数字では、地方組織の長にあるのは九六パーセントが男性であるという状況です。猪口さんから、アメリカの大統領候補の婦人の話が出ましたけれども、日本との違い、なぜ日本ではなかなか出られないかということも含めてご発言いただきたいと思います。

牛尾 かなり豊かで文化生活を送ることができるようになった世界の他の国でも、レベルの高い文化生活を送ろうとすれば共働きをするのが、基本的な収入の条件であることが通念になっていっていると思います。三十五歳の男性がひとりの収入で妻子を養うのは無理になっている。しかし、いい生活を送ろうとすれば、夫婦共稼ぎがあたり前なんだという通念は、日本ではうまくいかない。いっしょに働くっていうことは、常に奥さんがご主人より後から出勤して、ご主人よりも先に帰って来るような仕事を選ぶということが事実としてあります。奥さんがご主人よりも早く家を出たり、ご主人よりもはるかに遅くなるというとき、同じようにかばい合い、家族もそういうことを理解し、それをあたり前と思うように、これから男女ともに努力して社会通念を作り出すことは重要なことだと思っています。

最近では従来型女性の採用方針と、男性型総合職で採用する場合がありますが、総合職の場合は転勤はもちろんしてもらいますということで、それを受け入れることが総合職の条件

になるわけです。一方で、男性の中では、自分はもう転勤型出世はいやだ、定住型のコースで行きたいという希望者がたいへん増えて来ました。そうなるのと地方の時代ですので、最近では転勤型コースと定住型コースに分けて、両方ともそれぞれ違った道ということで差をつけたいというふうに変わって来ました。今後経済が激しくなると、もう十年後にそういうことを可能にするピラミッド型の組織というのは無理になって来ます。最近ではほんとうに能力のある人は、正社員になってがんじがらめの中で休暇もとれないという社員生活よりも、自由でありたいという傾向が出て来ました。女性の場合、フリーになったほうがより豊かな生活ができるという感覚がかなり強くなっています。そういう点で、男女間の問題は相当体質が変わってきているということを私は申し上げたい。

最後の問題提起の、政策参加とかマネージメントとか、意志決定に女性がどう参加するかということですが、これは男性でもどうしたら自分が参加できるのか(笑) たいへんむずかしいことであって、女性だから排除されている部分も若干ありますが、やはりそういう地位まで達するには男女ともに努力が必要ということだと思います。

日本の男性というのは人間関係をやたらに気にして小心翼翼として根回しをしている人が多い。その点女性のほうがスカッと物を言う人がわりと多いです。女性がいま男性と同じ

ように仕事をしようとすると、たくさん障害があると思いますが、男性同士の間でも学歴尊重などいろいろなものがありますが、いろいろな障害がありますから、それを男女の問題としてクローズアップするとかえて男女の緊張を強めることになってしまふ。ここまで来るとあんまり障害があるというより、女性のほうに有利な時代の流れをつくって、どんなんだれ込んでいったほうがいい——男性が逃げて行くような(笑)。そういう意味で昨日の婦人週間のやり方と、今日の婦人週間のやり方を変えられたほうが楽しいしおもいroyと思います(笑)。

◆「異質」を取り込む社会になったときこそ平等が

司会 それでは猪口さん、先ほどのことと、まとめの「明日」ということも含めて、続けてお話しただけですか。

猪口 牛尾先生から競争社会の厳しさというご指摘がありましたが、私もそれは非常に重要だと思っんですね。別に事前に打ち合わせてエールを送っているわけではないのですが、

あるところまで女性の権利が実現していったその先のことは、個々の女性がどうやってその競争的な関係の中で、それぞれの能力を伸ばしていくかということにかかっているわけです。その先は、女性だから差別されていたとか、女性だから機会がなかったというような言い方は、もはやできなくなっていく

る。これは非常に言いにくいことではなかったかと思うのですが、指摘していただいて、それはまさに現実的で重要な点だと思いました。

先ほど縫田先生から質問を受けましたアメリカあるいはその他の国では、女性がかなり高い意志決定の権力をもつようなところまでいつているのに、日本では必ずしもそうではないのはなぜかということをやっと考えていたのですが、いくつかの理由があると思います。一つには女性の社会進出が欧米の場合は日本より少し早く始まったということです。どの社会にも年功序列的な傾向というのはありますから、早くから女性が社会参加をしていけば、その世代の人たちが、大量にそういう重要なポジションを占める世代になって来ている。日本にもその世代にそういう女性の方たちがいらっしやるわけですけども、大量にというわけにはいかなかった。アメリカの場合はかなり大量に社会参加が始まる時代が早かったので、いま五十代、六十代の女性が大量に社会に残ったまま、社長のポジションであるとか、政府高官のポジションであるとか、大学の教授職であるとか、そういうポジションを占める潜在的な母集団を成しているということだと思えます。

もう一つは、日本の場合はまだまだ象徴的に女性ひとりふたりを入れるという場が、実際的には非常に多いのではないかと思います。女性がいないのもおかしいから、誰か女性が

いないかという感じで、委員会とか審議会とかあるいは職場においても大学においてもそういう形での登用のされ方があられると思います。もちろんその方が女性だから登用されたということではなくて、能力があって登用されたわけですが、能力のある女性はまだまだほかにもたくさんいただろうけれども、十人採用されたということがなかったということです。日本の場合にはまだまだ象徴的という形ですから、会議でも、メンバーであっても座長にはならない。今日は座長が女性であることで私は非常に嬉しく思います。

それからもう一つの理由があると思います。それは日本の社会により深く関わることで、女性だけの問題として切り離すこととちょっと違うのですが。私は日本の社会というものは、異質な物を排斥するというような構造を、今までは少なくとももっていたと思うのです。外国人を排斥して来たということはすぐ思いつくと思うのですが、必ずしも外国人だけではありません。日本の社会のつくる同質性あるいは職業的空間がつくる同質性というのは、あえて言うなら中高年日本男性のつくる同質性だと思うのです。中高年、日本、男性、この三つの要素に反するものをもっている人たちは、等しく本流からはずされてきたんじゃないかな、という気もするんです。つまり中高年に対する若い人たちは、日本の組織の中で、いろいろな差別的なとり扱いを受けて来た。年功序列という形があることもその一つですが。それから日本人に対す

る外国人、男性に対する女性という形で、今までは同質性へのこだわりが強かった。しかしいま国際化あるいは対外開放ということが進行中で、同質性へのこだわりというものが、次第に改善されてきて、これからはいかに異質のものを取り込むかということこそが、競争力アップの決め手になっているということとは、牛尾先生が何よりもご存じのことだと思います。

古代以来文明というのは、異質がまざるところに花開いてきたわけで、何かいきづまった時には異質なものととの出会いによって、新しい考えなり発想なりが生まれてくる。そうするといまの日本の社会の経済にとって、異質なものをどうして取り込むかということが非常に大きな課題だと思います。その中で、日本・中高年・男性というものと違う性質、資質をもった人たち——中高年に対するヤングパワー、新人類といわれる人たち——が組織の中で非常に活発に登用されるようなところに来ている。日本人社員に対する外国人社員も使われるようになってきている。また男性に対する女性の感性とか知性というものも、非常に尊重され重宝がられるようになってきた、ということだと思います。

しかし先ほども指摘しましたように、そのように異質なものを日本の社会が取り込んでいるけれども、その取り込み方というものが、いつでも切り捨てられるという形でしか取り込んでいないということですね。若い人たちもフリーな形、

女の人たちもフリーな形、外国人社員もフリーな契約という形で取り込む場合が多いのではないかと思います。

それから新人類ということを申し上げたんですけれども、新人類だけでなく、新しい男性というものが若い人たちの中で出て来ていると思うんですね。育児や家事をさりげなく奥さんと協力してやってしまおうということが、いまほんとうにナウイ男性像になりつつあるということも言えると思います。私たちも仲間内で研究会などをやってまして、男性の研究者が、これから保育園に子どもを迎えに行かなければならないと言って立つて行くことがあるんですが、むしろそういうことが、非常にむずかしいことを抱えているんだというのではなく、カッコイイという形が出て来ているんじゃないかなと思います。ですから新しい男性と女性の共存関係、さりげなく家事その他をやってしまうような関係というものが、若い人たちの間には出て来ているかなという気がします。そういうふうにかえまして、改めてアメリカにおけるウーマンリブのあり方と、日本における女性解放運動のあり方が、性格的に非常に違ったものであるかなということを思います。アメリカの場合は非常にラディカルな性格を一面もったわけですが、日本の場合は社会と共存、男性と共存、あるいは家庭と共存、という形で、女性が社会進出を果たして来て、それが古来から調和というものを大切にしているような日本の風土に合った形で女性解放運動というものがこの社会に開花

したんだなという気がいたします。

私たちの世代になりますと、リブというよりポストリブという形になって来ていると思います。ポストリブというのは、新男類の登場によって男性社会あるいは家庭と女性の社会進出が共立していくということが、それほど肩ひじはらずに可能になってきている。もちろん日々の家庭なり育児の現場というのはたいへんだろうと思うし、日々のミクロのレベルでは、まさに肩ひじはってやっていかなければならないことが多いかもしれませんが、全体的にはそういう傾向になって来ているのではないかなという気がいたします。

最後にいくつかの問題点を指摘したいと思うのですが、この女性問題について、一ついま心配なのは、東京と地方における意識の格差の拡大ということです。東京の一極集中が議論されて久しくなるわけですが、全体的にこのような問題についての意識の格差というものも、地方と東京の間で発生して来ているのではないかな。そうすると水が低きに流れるごとく、女性というのは差別の少ないところへ流れていく。

昔から「都市は人を自由にする」という言葉がありました。

その言葉はいまではほとんど意味をもたない言葉になっていくのかのように思われていますが、女性についてはそれがまだ言えるのではないかな、東京はやはり女性を自由にする、東京は差別なきさまざまな機会を与えている。それに対して地方においては、まだまだ女性蔑視的な社会感覚が残っていると

すれば、次第に女性が、あるいは個性ある女性が、みんな東京に吸収されてしまつて、地方の人材不足という問題が出て来ていると思います。経済自体が異質なものを取り込むことによって、さらに成長できるようなそういう局面に来ているときに、その異質性を差別によって、あるいは蔑視によって排斥してしまった地方経済のさらなる衰退をまぬがれなくなるのではないかなということも言えるのではないかなと思います。二十世紀と二十一世紀の問題を比べて考えてみますときに、どの時代にも時代を貫くようなキーコンセプトというようなものがあるんじゃないかなと思ったんです。二十世紀のキーコンセプトというのは何かなと考えると、それは効率を極大化する、そして集中化していくことではなかったかと思うんです。二十世紀に大企業が登場しますし、都市も大きなメガロポリスが登場しますし、国家権力の面でも官僚機構が完成するのは二十世紀の現象かなと思います。そして集中する中で求められていったことというのは、効率がいいということだと思ふんですね。その理念は人の生き方にも影響を及ぼして、人もまた非常に集中的に都市に集中し、そして自分の人生をある仕事に集中して片寄って生きることが社会的に良いとされて来たし、男性が仕事に集中し、女性が家庭を守ることに集中すると、そのほうが効率が良いからということではなかったかと思ふんですね。

ここでこの集中化のいろいろな弊害が出て来て、その中で

いま求められていることは、どうやって社会のメカニズムを、もう少し分散化していくかということではないかと思えます。政治のレベルでは、もう少し地方自治体が強くなること、企業の面では、大企業では身動きが取れなくなっているところ、ベンチャー的な経営が求められているのかもしれない。

都市もまた一極集中型の負の側面というものが注目され、その中で人の生き方も、もう少し分散的なバランスの良いものを求めるようになって来ているのではないかと思うのです。

集中が効率の良さを實現していくのに対して、より分散的な社会というのは何を目指しているのかということを考える、それは「バランスの良さ」だと思ふんですね。場合によっては効率は若干損うかもしれないけれども、ひとつの国が、町が、産業が、あるいはひとりひとりの人間が、よりバランスの良い生き方をしたい、そして女性が家庭も仕事も持ちたい、そして男性もさっきの新男類たちは、仕事でもがんばりたいけれども、夫であり父親であるという生活も大事にしたい、ですからそこで求められているのは、仕事だけに集中する生き方というよりも、むしろバランスの良い人生をどうやって築いていくかということだと思います。そういうことに向けて二〇〇年を目指し、日本の社会がいろいろなレベルで良くなっていければ、と思います。

司会 牛尾さん、明日への展望をひとことをお願いします。

牛尾 私は市議会などでも、女性が四分の一ぐらいになるの

は、当然許容できる数だと思います。そういう人を誰がどうやって押していくかということが非常に大事だろうと思えます。女性が女性の代表を押していくときに、女性だけで押すのではなくて、男性といっしょに押すといういき方をする、ことが大事だと思います。

女性の地位については、二十一世紀においては極めて楽観的でありまして（笑）、自信をもってやりになればうまくいくだろうと思います。努力、競争はもちろん必要ですが、明るく、あんまり被害者意識をもたないで（笑）おやりになったほうがうまくいくだろうと思います。みなさんのますますのご健闘をひたすらお祈りします。

司会 お話を伺っておりまして、たいへん私の印象に残りましたことは、牛尾さんが婦人の問題を考えるとき、あまり過去にこだわるな、延長線でものを考えないほうがいいのではないかとおっしゃったのに対して、猪口さんが、いや積み重ねということを大事にしなければならないという意味のことをおっしゃいました。私は進行係という役目のために、二つに同調するのではなくて、まったく両方ともにほんとうに共感をもつんです。冒頭に申しましたように、この四十年の婦人週間の流れを見ますと、まず女性自身が現状認識をするということから始まりまして、その中で自分の役割を考え、ど

ういう役割を果たすかということと能力を開発し、能力を生かし、そして社会づくりに参加するという流れがあったわけです。この流れは非常に大事なことで、これから二十一世紀、西暦二〇〇〇年に向かって常に私たちは、こういうことを頭の中に置いて進んで行かなければならないと思うんです。けれども牛尾さんの言われたように、やはり新しい発想の転換というのが非常に大事であって、それが昭和五十年代に出て来た、国連の目指したものの、差別撤廃条約の中に貫かれていくあの基本的なものの考え方です。そしてこれを取り入れたナイロビで採択された将来戦略、あるいはこれを受けた国の行動計画、あるいはみなさま方の都道府県の行動計画というもの、をガイドラインにしながら、新しい発想の中で、過去のこととは過去のこととして、新たに進んで行くことが大事だろうと思います。

今日は男性、そして若い世代から、ほんとうにすばらしいお話を伺ったと思って感謝しております。この婦人週間の半世紀の五十周年記念の時には、こういうことになっておりますか。おおいに期待してみんなでがんばって行きたいと思えます。ありがとうございます。（拍手）

（まとめ 事務局 山口のり子）



真実伝えて四十年 女の日 女の力 女の輪

1946年創刊以来、女たちの手で創られ続けてきた週刊新聞です。情報化社会といわれながら、私たちの側からの真の情報はとても得にくくなっている今、婦民主新聞の価値がますます高まっています。どうかあなたも読者として、この新聞を支える仲間になってください。

1ヶ月600円
(送料込)

お問合せは 婦民主新聞 東京都渋谷区神宮前3-31-18
お申込み 電話 03(402)3244・3238

仕事と育児を考える

司会 (小宮山洋子) (NHKアナウンサー) 最初にきょうの講師をご紹介します。

汐見稔幸

東大大学院で教育学を専攻、子どもたちの発達的人間学を研究、ご自身の体験から子どもの側からの発言、また育児へのかかわりによって見えることについてのお話、それから母親が働いていたほうが子どもの発達によい影響を及ぼすという研究結果などについてお話しいただきます。

前田 薫

昭和四十五年に伊勢丹に入社、人事部の労務担当係長から同課長へ。伊勢丹は育児休業制度も充実していて非常に働きやすい職場。女性のためのそういったさまざまな制度の効果や問題点といったものをお話しいただきます。

ヤンソン由美子 フリージャーナリスト。私たちが男女平等

が最も進んでいる国であると考えているスウェーデンで女性のおかれている現状はどうなっているのか、など、私たちにとって参考になる点をお話しいただきたいと思います。

司会 私がこの役割をなぜやるかというと、私も子育てをし

ながら仕事をしている一人で、中学二年を頭に三人の男の子がいます。ここまで来る間に仕事をやめようと思うこともありましたが、そのとき保育園の先生から聞いたある言葉が今日まで仕事を続けてきた原動力になっています。それは「保育園で子どもたちを見てきて、お母さんが仕事をしていて子どもと接する時間が少ないからといって必ずしも子どもの成長によくないということはない、むしろ、信念を持って仕事をしているお母さんの子どもは、保育園でも他の子どもと同じくらい関係がつくれるし、うまく育っていている。母親が信念を持って生きているかどうかが問題だ」という内容でした。

ちょうど、曲がり角にさしかかって悩んでいるときだったのでその言葉にたいへん勇気づけられてなんとかここまで仕事を続けてくることができたのです。

小さいうちは親が子どもの横にいたほうがいいと思いますが、親が離れていることで子どもがその自主性を育てるということもあります。子どもは生まれて来たときから自分の人格を持っていると思います。いつもそばにいて情報量はより多く与えることはできますが、大事なものはそれを判断する力を育てることだと考えて、私は今日までなぜ仕事をするのか、どうして出張をするのかなどについて、子どもにわかりやすい言葉で伝えてきました。小学校三十四年になると少しずつ私の伝えたいこともわかってくるのかなと実感し

ています。

三年前に開かれたナイロビの世界婦人会議でもこれから二十一世紀にむけての課題として、家庭や地域における男女の役割分担の見直しという古くて新しい課題の解決が最も重要なことのひとつとして言われたわけですが、これからのお話ではこういったことにもふれたいと思います。

◆接し続ければ父親にも「母性本能」が根づく

汐見 私はある調査で子殺しについて調べたことがあります。その結果、子殺しをする大部分の母親は専業主婦であることがわかりました。つまり育児ノイローゼにかかるのは専業主婦のほうが多いというのが一つの仮説となりました。

働きながら子育てを続けている母親と、わりきって専業主婦になった母親との子育てのしかた、父親の子育てへの参加度合い、育児不安、育児疲労の度合いの違いなどを調べてみました。ゼロ歳―三歳で夜泣きをしたりする年齢の子どもの父親と母親を調査したところ、この段階でも仕事を持つ母親のほうで育児不安や育児疲労は少ないことがわかりました。少しデータをあげると、「子どもが寝るとき、子守歌をうたいますか」という質問に対し、子どもを保育園に預けている母親の四六％、そうでない母親の三八％がイエスと答えており、若干差があります。

また、「子どもをあやす遊び（チョーチチョーチなど）を毎日するか」に対しては保育園に預ける母親の五〇％、そうでない母親の三八％がイエスと答えています。さらに「添い寝をするか」に対して保育園児の母は七七％、家庭児の母の六一％がすると答えています。

子どもと接している時間は専業主婦のほうが多いのですが、子どもと関わる密度、一緒にキャッキャと遊んで楽しい時間をすごすということについては保育園に預けている母子のほうが時間は短いながらも必ずきちんとやるという結果が出ていて、育児の実態に若干の違いがでてきています。

それから、父親の育児への参加度合いについては「父親が毎晩何時頃帰宅するか」を調べたところ、夜の九時をすぎても帰宅が週の半分をこえる父親が、家庭児、保育園児にかかわらず約五割いました。そしてその中の四分の一の人は子どもとの相手をほとんどしたことがないと答えています。たいへん深刻な問題だと思えますが、父親が家にいる状況は両者で似かよっているにもかかわらず、育児に参加し、子どもと関わる度合いは保育園児の父親のほうがはるかに高いのです。

例をあげると、「子どものおムツをよくかえる、あるいは時々かえる」父親は、保育園児で七〇％、家庭児で三五％、また、「子どもにミルクをいつもあげる、あるいは時々あげる」のは、保育園児の父親の六〇％、家庭児の父親の三〇％。「夜泣きしたとき自分であやしますか」という質問に対し、

前者の父親の三六%、後者の父親の二二%がイエスと答えています。「服を着換えさせますか」に対しては、六五・一%、二八・九%。「風呂に入れますか」はそれぞれ七〇%、五八%となっています。

共働きをしていると、当然父親も育児に参加していかないとやっていけないので、帰宅時間は変わらないのですが、保育園に子どもを預けている父親のほうが育児により参加しているという結果が出ているわけです。

家事への参加度合いについては「食事の支度を毎日やりますか」に対し、「いつもないし時々」と答えた人は、保育園児の父親九・三%、家庭児の父親一・五%。「洗たく」については前者二一・五%、後者一・二%というように、保育園児の父親のほうが参加度は高くなっています。

これに対し、母親のほうの夫に対する評価にはそれほど差はありませんでした。「自分の夫は家事・育児に協力的ですか」と聞いた場合、家庭児の母親は六二%が「協力的またはまあまあ協力的」と答え、保育園児の母親のそれは七一%でした。

次に育児疲労、育児不安ですが、いろいろ質問してみた結果、育児疲労がたいへん強い母親というのは家庭児の母、つまり専業主婦で一七・五%いたことがわかりました。つまり毎日子育てをやっているに非常なたいへんで疲れるという母親が六人に一人の割合にいることです。保育園に子どもを

預けている母親の場合は九・四%で十人弱に一人の割合です。あまり大きな違いではないという見方もありますが、一七・五%と九・四%の差というのはとても大きいのではないかと思います。

もう一つ興味深かったことは、育児疲労がたいへん強い母親をピックアップしていくと、いろいろな特徴がみられたことです。例えば、友人の数を聞いてみると、友人がほとんどいないと答えた母親の二〇%ぐらいは「育児疲労・育児不安がたいへん強い」という結果がでています。一方、友人が多いと答えた人が育児疲労を訴えるのは四%です。また子どもが乳児期であっても、社会活動をする機会を持っている母親は「育児疲労がほとんどない」という人が半数を超えていますが、そういう機会がない母親で育児疲労・不安がないという人は一四%で、大きな差が出ています。

以上のような調査をいろいろしてきてここから言えることを申し上げます。いま小宮山さんが理想を言えば子どもは小さい頃は親が家にいて育てるほうがよいと発言し、一般的にもそのように考えられがちですが、現在の日本の文化状況のもとでは、家で子どもを育てることとは子どもと四六時中顔をつきあわせて生活することです。そのうえ、子育ての知恵といったものもきちんと伝わっているわけではないので、子どもが泣いたときにどうしていいかわからない、発熱したとき手助けしてくれる人もいない、出かけたが預ける人が

いない、というようなイライラに日々出くわしてしまうという可能性が非常に強くて、そうなってくるとかえって子育て自体が面倒なものになってくるのではないか。その結果、子どもにマイナスの影響が出てくる。母親がイライラすると、当然子どものほうもイライラしてくるわけです。

この状況から解放されようと、お母さんは公園へ出てみた、いろいろな工夫するのですが、結局今まで述べてきたことを通じて、日本全体として見ても「家に入って子育てをいろいろやってみなければ、子育ては意外とたいへんだなあ」という気持ちを専業主婦の母親のほうがいよいよ強く抱いていることがわかります。

保育園に子どもを預けている母親は夕方五時頃子どもを迎えに行って、だいたい九時頃まで、短い時間だからこそより濃密に子どもとかわらうとします。そして調査結果では、仕事を持つ母親のほうに、その精神面や、子どもの発達の面で若干の差ですがより健全な傾向が出てきており、非常に考えさせられました。

さて、私たちは、ついでに「専業主婦として子育てにかかわっている母親が、なんとか育児ノイローゼにならないために自らを解放していくために工夫をしていないのか」と調べてみたところ、子どもが一歳、二歳のお母さん方がずいぶんいろいろなところで集まってグループ活動をしていることがわかりました。特に団地や社会教育関係で子育て講座などに

参加し、終了した後、皆で週一回か二回集まってどこかに行ったというようなことをやる母親が非常に多いんです。私の住んでいる団地でも、幼児グループを十二もつくていて、一つのグループに数十人活動しており、全体で五、六百人のお母さんが参加していることがわかりました。

こういう活動をしている母親たちにアンケートをとって調べてみたところ、とにかく一人でやっていると不安で仕方がない、うちの子どもは満足に育っているのかどうかわからない、子育ての仕方がわからないのでグループを組んでいる。皆で集まるだけで解放されるという人が多いですね。

ところが、活動を観察させてもらうと、集まってやっているのだけれど、どうやって子どもを遊ばせていくのかについて専門的な知識がほとんどないのでとまどっている、というのも現実です。こういう事態に対して行政的な援助ができないものかと思ったのですが、現在のところ、そうした幼児グループがどれくらいあって、どういう活動をしているのかをつかんでいるというデータを持っているところは皆無です。

したがって援助の動きもありません。

しかし、日本全体をみると、子どもがゼロ歳、一歳、二歳の段階でも、なんとか育児を共同で行なおうという志向は親の中で強く出ています。アンケートで「子どもが幼いうちから集団の中で生活することについてお母さんはどう思いますか」とたずねると、家庭児・保育園児をとわず八割の母親

がやはり必要だと思つて答えています。

こうしたことから、今日のテーマにつなげていうと、結婚したり子どもが生まれたりした場合、これをきっかけに仕事をやめて家庭に入るといふお母さんが非常に多いのですが、データから見るとか家の人に見てもらつてとかして働き続ける状況をつくっていくことが必要なのではないか、そのほうが母親にとつても子どもにとつてもいいことだという調査結果が出たことをはじめに報告します。

自分自身の子育てに関しては、我が家には三人の子どもがいますが、私は母親がやるようなことをすべてやってきました。私が大学院生で家内が保母だったということもあってオムツをかえたりねんねこしょって、病院につれていったり、今から十年も前のことでそういったことがたいへんめずらしいころでした。

今年十歳を迎える息子が二歳になる直前、夜中に四十度近い熱を出しました。見ると目を白黒させてうなつており、ケイレンもしている。こうした経験は初めてだったので驚きあわて、子どもを毛布にくるんでタクシーで病院につれていきました。幸いたいたことはなかったが、医者からは「頭を一発トンカチでなぐられたようなダメージはあるので、今後一年間ぐらひは絶対に高い熱を出さないように気をつけてください」と言われました。

このことがあつてから後の一年間、私は毎晩三時になると目がさめるようになりました。そして、子どもどころへ行つて毛布などをかけ直す。自分でそうしなくてはいけないと思つていゝのではないのですが、どんなに疲れていても必ず一回目がさめるんです。なぜ、こんなことを一年間も続けることができたかと、今では不思議に思えますが、こうしたいろいろな事実を重ねて考えていくと、母性本能とはこういうものではないかなというのが僕なりにわかつて来ました。母性本能というのは本来母親に備わっていると言われていますが、あれはウソだと思ふ。母性本能は子どもにかかわつて苦勞している人間には当然出てくるのではないかと思ひます。

母性本能は母親の中で発達するものであり、当然体験的にも父親の中でも発達するものだと言へます。母親は子育ての一番たいへんな時を一手にひき受けて自分の成分をしぼり出して子どもと接する。だから子どもがいとおしくなつてくるのです。同じことを父親がやれば父親だつてそうなるのであるということが体験的にわかり、このことから、母親・父親の役割をこういうものだと限定して決めつけるのはどうも勝手な論理ではないかという気がして、それから父親論・母親論に対してうさんくさく思ふようになりました。

親としてどういふ役割を果たすかという大きな問題はありません。しかし「父親は強くて母親はやさしくて」というのは、ある一定のタイプの親像を押しつけることになるのではない

す。

◆女も男も家事と育児が両立しやすい伊勢丹

前田 私はず、女性の労働者がどういう状況かということから述べます。私が勤めている伊勢丹の正社員は六千名で、七〇％が女性。その平均年齢が二九・六歳、平均勤続年数が八年八か月です。ちなみに男性は平均年齢三十八歳、勤続十六年五か月。女性の役付き者への登用の状況は最高が課長で二十三名、全体の四％です。係長になると百十五名おり、全体の二五％を越えています。

女子の年齢別の構成は二十九歳以下の女性が六五％、三十歳以上が三五％で、女子の既婚率は約二〇％——二十代では一〇％、三十代では約三五％、四十代になると四〇％となっています。先ほどの役付き女性の三分の一が既婚者です。

職場の制度は、女性のためにつくられた制度もありますが、そればかりではなくて、男女一緒の制度でも育児に役立っているものがあると思うので、トータルに見ていきます。最初に男女同一の制度について説明します。

まず、連続休暇制度。これは四月一日に年間二十日間有給休暇を付与された際、これを計画的に使い、残日数を次年度に持ちこすことができます。そして有給休暇の日数により、最高五週間半まで継続して休みをとることができます。休暇

でしょうか。僕はほうほういろいろ観察していて、母親が強く父親がやさしくてという夫婦も実際にたくさんあるのに気がつきました。子どもには強さとやさしさと両方示さなければいけないので、それを分担して示すことを考える必要もあります。こうした役割をどちらか一方のものと限定してがんじがらめに役割を決めていくことは必要ないと思います。

そこで「子育てというのは企業でも地域社会でも決して得られない父親にとってかけがえのない（たいへんだけれども）仕事なんだ」という事実を、父親のほうでも理解することが大事だと思いました。そういう楽しみや喜びを奪われているお父さんはかわいそうだと思います。どうも、こういうパネルなどをすると女性が男性をせめるという感じが強いのですが、そして父親というのは男女の関係では優位に立ってえらそうにやって来たのですが、だからといって「お父さん家事も育児ももっとやりなさいよ」という具合にせめるだけでは、父親がほんとうに家の中で子育てをやるようにはならない。お父さんは会社人間としていろいろつらい仕事をさせられている。それ以上に家事も育児もやりなさいと言っていくのではなくて、「お父さんはほんとうは子育てというたいへんだけれどとても楽しい仕事をやるのに、その機会を奪われている、かわいそうな存在なのだ」というふうな問題を立てたほうが、お父さんにも共感されやすいのではないかと思います。

の計画は半年先まで仕事の状況と見合わせて組むという方法をとっているので、私の会社では入社二年目で有給の消化率は一〇〇%です。この連続休暇制度は最低一週間続けてとらなければならぬのですが、子どものいる人は子どもの夏休みにあわせて自分の休みを計画的にあてることもできる利点があります。

それから週休二日制の問題ですが、会社の休みは毎週水曜日で、あと一日は交代で休むようにしています。ほとんど平日の休みになるので、子どもの学校や保育園の平日の行事にも参加できる利点があります。

看護休暇という制度もあります。これは三十日欠勤の後、三か月間休暇できるという制度で、同居している家族、子ども、夫、老人などで看護する必要がある人がいる場合にとれます。この制度を利用する人はそれほど多くないのですが、それは先に述べた連続休暇で代用する場合がほとんどだからです。

次に女性を対象としてつくられた制度としては、昭和四十六年につくられた育児休暇の制度があります。対象は勤続一年以上の者で、期間は最長三年。賃金は無給ですが、社会保険については資格を継続し、従業員負担分は会社がたてかえるということになっています。この制度発足当時は、会社が負担分を全部支払う決まりでしたが、休職中に会社を辞めるとか、復職後すぐに辞めるといったケースが出てきたため、

制度の主旨が活かされていないのではないかとという声がありました。このままいってしまおうとせっかくのよい制度が、ダメになってしまふのではないかと心配し、いろいろ検討した結果、申請者には必ず人事部の者が会い、復職後の生活設計や休職の期間をもう一度考え直してもらおうということを始めました。そして保険料の会社のたてかえ分は休職中や復職後一年以上に辞めた人については全額返還してもらおうことになりました。一年以上勤めた人の個人負担金は会社が全額保証します。

これまで制度を利用した者は三百五十人で、出産して仕事を継続する人の約三五%です。約二十名の人が常時育児休暇に入っている状況です。最長三年という期間は、母親は三歳ぐらいまでは子どもと一緒にいることを望むだろうという判断で設定しましたが、実際フタをあけてみると七〇%の人が一年以内で復職しています。一番多いのが六か月と十か月で、十か月は産後休暇とあわせて一年になります。どうしてこのような結果になるのか私も興味を持っていろいろ聞いてみたのですが、せっかく復職するのならあまり長く職場をあけてしまふよりはできるだけ早く復帰してみんなと仕事をしたいということ、また、子どもが大きくなってお母さんの手をひくようにまでなってしまうと復職しづらくなってしまうので一年ぐらいのところが適当だというような声が多いようです。復職率は全体の九〇%です。その中で一年以上の休職希望

の人の復職率は九五%です。

この制度の効果や問題点としては、できるだけ長く勤めた人という希望を持つ人がこのごろの若い人の間で増えているので、そういう人にとつての安心感につながっていると思います。大卒の女子は毎年二十名ぐらいいしか採用できないのですが、応募者は一千名をこえます。私も就職希望者とよくお目にかかりますが、今の学生は各会社の女性が長く勤められるための制度についてよく研究していて、そういう意味では、この制度は企業のイメージアップにつながっているのではないかと思っています。それと優秀な女子社員を育児のために手放さなくてもよいということのメリットは非常に大きいと思います。

問題点は、育児をしながら仕事をしている人の声を聞くと、産後休暇や育児休職の期間だけで子育ては終わっていないわけ、この後もいろいろやりくりしながらの現状があるということ。デパートの営業時間が夜型の方向で拡大してきていることとあわせて、育児休職後のことも考えていかなければならない必要性を感じています。

また、休職制度をとる人の七〇%が一年だということ。また、出産する人の六五%は休職せずに、出産休暇明けの時点で復帰するという現状から考えて、育児時間はあるのですが、その期間をもう少し長くして働く時間を短くしていければ、もっと働きやすくなるのではと考えています。育児時間を一

時間か一時間半長くして、実働五時間ぐらいが適當ではないかと考えています。このように少し長期的な展望で、一時的に家事・育児のために勤務時間を短くするという制度を検討中です。育児だけでなく、三五%いる三十歳以上の女子は、そろそろ親の面倒を見ろということも出てくるので、こうした問題にも対応していけるような制度を考えております。

女子の再雇用の制度も昭和四十年につくっていますが、過去十年間で十四名の人が利用した実態です。待遇について細かい点が明確でないのでこれから見直していきたいと考えています。

◆スウェーデンの女性は、なぜ解放されたか

ヤンソン由実子 今日日本の女子をめぐる労働条件や環境を少しでもよくしていくために皆で考えあう会で、この時にどうしてスウェーデンの話なのかと思われる人もいますが、私はこの仕事を依頼されて、恐らく日本の女子労働をもっとよくしていくという政策の中で、外国との比較が大きなテコ入れになるのではないかと思い、参考になればとお引き受けしました。

スウェーデンは、女性差別撤廃条約に最初に批准した五つの国の一つであり、職場における男女平等法というものも、国連婦人の十年の中間年の一九八〇年に制定されるなど、制

度的には非常に発達した国です。では現実の生活はどうか、このあたりの紹介は非常に少ないと思うのですが、私がフリーのジャーナリストとして、この二十年、日本とスウェーデンを行き来して感じてるのは、すぐれた制度を生みだすだけのすごいエネルギーのある国だということです。ヨーロッパの古い国はだいたい保守的で、新しく制度が変わるというのはとてもむずかしいのですが、スウェーデン、デンマーク、ノルウェーという国は新しい制度を他の国に先がけて導入することに於いてヨーロッパの中では異質なのではないかと思えます。どういふところが画期的かという点、スウェーデンは男女平等の社会実現を国是としていると大げさですが、制度や行政のあらゆる施策の根底に置いていることを前向きに出している国です。その理想主義をまずは認めているのが、他の国と大きく違っているところでしょう。

スウェーデンも一九六〇年代（二十年前）には四十数%の女性しか働いていませんでした。ところが現在は就労可能な女性の就労率はおよそ八〇%で、十人のうち八人までが働き続けている状況です。その八名の女性の内わけを見ると、就学前の子どものいる女性の八四、五%が働いています。一番多い層は子どもが七歳から十六歳の女性です。

では、残り二〇%の働いてない女性はどういう人たちかというと、女性が働くようになった時代以前に結婚して、就職のための訓練を全然受けていないとか、高齢の人、退職者も

入る、これが一つのグループ。それから勉学中の人、病氣の人がいます。

社会的に女性のステイタスを表わす「主婦」という言葉は完全に死語になっていると言つてよいでしょう。主婦には価値が与えられておらず、例えば、非常に金持ちでまったく働く必要はないけれども、夫の社会的なステイタスのためにパーティーをしたり人脈を作ったりするための「おおかえホステス」のような役をする人たちがハウスワイフをしている状況です。結婚して労働していない人たちというのは、失業中の人などはもちろん別に、百人の内に一人もいないのではないかと思ひます。

もう一つ、主婦が社会的にはどういう意味あいを持つかというと、これは日本の主婦にとつてはたいへん耳の痛い話ですが、無能者というハンコを押されるのと同じだということ。自分のことを「私は主婦です」という人は恐らく皆無だし、人との会話で「あなたは主婦ですか」と聞くのはたいへん失礼であり、「お仕事探していらっしゃるの」というような言い方をします。

こうした見方には、働くことに非常に価値を置く国民の考え方に基づいています。経済力を持つことが個人の自立であるという六〇年代の女性解放の意識がスウェーデンの隅々にまで浸透したので、女性たち自身がそう思つて就職し働き続けているということがあります。

もう一つは、六〇年代はスウェーデンの経済が非常に伸びた時期で、労働市場のニーズに見合ったという背景があります。

七〇年代に入り、女性の母性機能は社会機能だという考え方が出てきました。つまり子どもを産み育てるのは女性の個人の努力でやっていくという性質のもではなく、社会ができるだけ援助するという考え方です。保育園づくりという面でもそうですが、親たちへの給金、休暇、休業の制度を社会保障の形でやっていくなど、制度が働く女性たちをバックアップするものになってきています。

また、女性が働き続けたほうがよいと判断するもう一つの側面として、税金制度が改革された点があげられます。それまでは、夫婦こみで課税の対象になったので、共働きをしていくと累進課税で税率が高くなりましたが、これが一九七〇年代のはじめに変わりました。結婚してよいよいといまいと個人はそれぞれの経済生活を持つものであるという考え方によって一人ひとりに課税されることになったのです。こうした税制のテコ入れによって、夫婦共働きであっても損をするようなことがなくなり、これをきっかけにずいぶん多くの女性が外へ働きに出るようになりました。

こうして、女性自身の自覚、労働市場の要請、社会制度のバックアップ、この三つの大きな要因があって女性たちは働き続けられるようになりました。この働き続けられるという

現状に大きな意味があります。

しかし、女性が働き続けられるようになるために、男性の理解や協力があつたのかというとそうではありません。専ら女性が八時間勤務を六時間勤務のパートに切り換えたためというのが真実です。スウェーデンでは、働く親のどちらかが申請によって正規の雇用で六時間勤務につくことができます。二時間労働時間を短縮することができる権利があるわけです。日本の場合、パートに切り換えると時間給になったり、保障制度がまったくなくなったりしてたいへん不利な勤務状況になります。スウェーデンの場合は正規雇用の時間短縮ということなので、給料が実質六時間分の額に減るだけで、その他の諸権利は変わらないのです。

この制度は夫婦のどちらか一人だけしか適用されないもので、私たちの関心は、では父親と母親のどちらがとるのだろうかということになりました。これはもう圧倒的に女性です。子どもを持って働く女性の十人に六人までが短縮労働に切り換えています。このことはスウェーデンの中でもすぐ問題になっています。男性にもこの六時間労働の権利を行使させる方法はないかと……。また別の例でみると、両親保険というのがあります。社会保険の内の、医療保険、歯の保険、失業保険、労災保険のつぎに定められているもので、いわゆる子育て保険です。出産後、仕事を休んでも自分が普通働いてもらう給料の九〇%が国の社会保険省から支払われる、とい

う制度です。この期間は夫婦あわせて三百六十日となつていますが、女性には、平均して出産後の休勤（仕事を休むこと、私はこう表現する方が適當だと思ふ）を二百七十日とります。これに対して男性は平均四十七日しかとっていないという調査結果が出ています。つまり女性の五分の一です。

両親保険の一つは育児休勤ですが、そのほかには、子どもの定期検診や学校の用事などでもどうしても仕事を休む必要がある場合のために、年間二日間有給休勤が認められています。また、子どもの疾病のための休勤もあり、子どもが十二歳までで年間六十日まで認められています。

こうした制度をとっているのはすべて圧倒的に女性が多いのです。これはどういうことかという点、社会制度は整っているけれど、制度と家庭内の男女の關係がはつきりと分けられており、家に帰ると「お母さんは台所、お父さんは新聞」という役割分担がそのまま残っているのです。この二十年の間ほとんどこの固定的な役割分業は変わってこなかったのが残念です。

制度は整備され、六時間労働にはなりましたが、実際八時間労働が行なわれている職場で六時間しか働かないと、大事な会議に出られないとか、昇給・昇進の機会が遅れがちになるという不利益をうけることになります。そういうことからいつまでも制度的なテコ入れだけを頼っていてはほんとうの男女平等の社会を実現することはできないと、女の人たちが

考えはじめました。つまり、今までこの問題に触れると衝突するからと避けられてきた「家庭内での男女の力關係こそを変えなければほんとうに自分の力を発揮することはできない」ということに気がついたのです。スウェーデンの女たちは、見ようによつては計画的、言い方を変えれば執拗というか、しつこい性格で、はじめは男性に向かって帰宅した際など「どちらも同じように疲れているのだから家事は半分ずつにしましょう」とか「子どもが泣いているといつも私がとんでいくけれど少しはあなたも行ってよいのでは」というようなことを攻撃的に言っていました。しかし女性たちはだんだん学んできました。男たちは労働社会の中で実権を握っていること、家の中で動かないでいることを既得権だと思っている。そして制度上では男女平等が保障されたけれど家庭の中ではどうなのか、と男たちに問うていった場合、「それは關係ないのではないか」「個人の自由ではないか」と逃げたりしている現状があるのだから、このところを変えていかないと、女たちはいつまでたっても家庭と職場の二重労働でズタズタに疲れているところからは抜け出せないとはつきり悟ったのです。そして、ではどうしたら男を変えていけるかというところで、今までの攻撃的な接し方から一歩下がって、「男の人が家庭に入ってきたほうが子どものためにも私たちが夫婦のためにもこんなによいことがある、楽しいことがある、今の生活ではほんとうに男性は損しているのではないか」と

いう具合にアプローチするようになってきたのです。

行政のほうでもこの問題に手をつけました。一九八三年にスウェーデンの労働省が、なぜ男性は育児休勤や六時間勤務の申請をして権利を行使しないのかという問題意識のもとに大がかりなリサーチを実施したのです。人口八百三十万人のうち成人は三百六十万人弱ですが、このうち五千人を無差別抽出して行ないました。

この調査の結果わかったのは、スウェーデンの男は原則的には、男女平等に賛成だが、実生活ではあまり実行していないこと、また、固定的な性別役割分業によって男性自身も「男は家族を養うもの」「男は強いもの」だという意識をもたされ、その幻想にまどわされているということなどであり、これが具体的数字として出て来ました。これはどういうことかというところ、男性は危機に弱い傾向があります。危機とは、失業や、先に妻が死んでしまうこと、離婚、離別、子どもの病気や死別などで、こういった人生の危機に対し、仕事優先人間や家族とあまりかわかってこなかった男性ほど非常に多いんですね。例えば、壮年男性の自殺は壮年女性の自殺の三倍です。また、危機の後の対処の仕方として女性は日常生活にもどっていくのがすみやかにできるのですが、男性はそのあと二次的な自己喪失に陥る場合が多い。アルコールに走る人も多い。男性の犯罪者は女性の十六倍、ストレスからくる心臓病などにかかる率も男性が圧倒的に多いんです。

こういう実態は必ずしも職業生活だけからきているのではなく、男性が与えられたと自ら思っている男性の役割というものに対応していけないストレスが引き金になっているのではないのでしょうか。

男女平等の動きは女性にはいろいろな形で表われています。テレビや小説でも、歩き始めた女性たちを表わすものはたくさんあります。女性にインタビュースると、働くこと、子育て、生きることを情熱をもって語る人はたくさんいますが、男性たちは話す言葉を持っていないのです。一番典型的なのは、インタビュースしても個人生活の感情を表わす言葉を持っていないこと。人によっては「なぜ個人の生活を話さなくてはならないのか」と攻撃的になったり、防衛的になったり、あるいは「この話をすると報酬がもらえるのか」となったりで、話すことに用意がないということがわかりました。

このように、男女平等の社会的な潮流によって男性がどのような影響を受けてきたのかを調べたデータは、これまでほとんどになかったということがわかり、スウェーデンではいま男女平等の社会に望まれている男と女の共業に男の側からどういうふうに参加していったらいいのか、この点が一番ホットな話題になっています。

◆子育てにかかわれない男はかわいそう

司会 家庭における男性のかかわりの問題がクローズアップされました。先ほど、汐見さんからも「男性はかわいそう」という発言がありました。このへんのことについて討論のきっかけになるよう補足の発言をお願いします。

汐見 僕がそのように言うのは、男性が女性と同じように家の中でごはんをつくったり、家事をするのはそぐわないという見方が日本にはまだまだあるが、ある程度訓練していくと料理にしてもとても楽しいものになってくる。子育てにしても、夜泣きにつきあったり、一緒に買い物に行ったりして、子どもとていねいに接していくと、それを通して子どもが少しずつ少しずつ成長していくのが、実感としてわかるようになる。こうしたことが、たいへんではあるけれども人間的な営みであるのだと思うからです。これはともかくやってみなければわからないことです。

しかし、少なくともこの百年間、男女の役割分業のもとに男性がこの大切な営みをまきあげられてしまっているという具合にぼくはとらえています。各家庭の文化を一つひとつつくっていく営みに参加できず、あるいはその喜びを表現せないうまま、妻と子どもをやしなうのが男の仕事という幻想を抱き働き続けてきたことがかわいそうだと思うのです。もちろんこの状況をつくってきたのは、ほかならぬ男性自身です。このように言っても男性自身がすぐに変わっていくとは思いませんが、しかし、男をしつけていくことは大事です。子ど

もが生まれて、これは私の仕事よ、とばかり女性が頑張ってやってしまうと、男は職業にかまけていきます。女性は男性を励ましながら家庭の文化をつくっていく大事な営みに男性をひきこんでいってほしいと思います。会社を一步出た男性が飲み屋に向かうか家庭に向かうかの問題であります。お父さんの家庭での居場所をつくっていく方向で働きかけてほしい。

ヤンソン 婦人学級などに話をしにいく機会が多いので、ここでの体験を通して考えていることをのべます。

多くの女性はパートナーの男性を変えることをほとんど無理だと考えていて、少なくとも自分の子どもだけなんとかしたいとおっしゃる。しかし、現実の父親と母親のあり方から子どもは一番影響を受けると思うし、自分の人生の相棒に一番愛情と時間をかけることが大切なのではないでしょうか。だから、夫との関係でもう少し頑張ってほしいと思うのです。が……。

それから、「夫が死ぬのを待つしかない」という発言もほんとうによく聞きますが、このことはぜひ男たちに聞かせると思います。それほど変えることが無理だと思っている人が多いんですね。しかし、スウェーデンの女性たちは実に丁々発止とやりあいます。彼女たちの殺し文句は「私がこれほど一所懸命言っているのにあなたは自分の生き方を変えようとしなののか、私のことを愛しているなら、あなたは変わら

なければならぬ」です。これを言ってパートナーにくだる。それで、結果的に変わらなければ、女性を愛していないことになって離婚の危機も出てくるので、家庭を失いたくない思いから男たちは変わっていくという状況です。スウェーデンの離婚は破綻主義をとっていますから、愛情のない関係が十分離婚の理由になりうるのです。

私は会社にいる時だけでなく私生活においてまで企業や職場に仕えている日本の労働者は異常だということを言いたい。日本の働く女性たちは二重労働に苦しんでいると言いますが、それは標準を今の男性のあり方のほうに置くから、家事・育児がハンディになるのだと思います。しかし、女性は辛か不幸かではなく、幸いに子を産み（育てる）営みをしているがゆえに、仕事人間にならずになんとか人間らしい生活をかろうじて維持できているという皮肉な状況ではないかと思えます。欧米、先進国は軒なみ労働時間の短縮を打ちだしています。日本人の労働について根本的に考え直す必要がどうしてあるのではないのでしょうか。



（まとめ 池田千鶴子）

（最新刊）

羽生槇子詩集

木、鳥、娘たちとわたし

装幀・絵（La mer一海） 井上公三

46変型判 73頁 定価1000円／送料250円

プレゼントに最適！

やわらかく あたたかい感性で 自然を、人間を

自然と人間の響き合いを、うたう 羽生槇子の詩の世界へ

さあ、あなたもどうぞ！

●好評重版出来！

男女で学ぶ家庭科の新時代に自信をもって贈る

半田たつ子編 **家庭科新時代**

A5判・360頁 定価2000円／送料300円

ご注文は最寄りの書店に。（地方小出版流通センター扱）

ウイ書房に直接お申し込みの場合、単行本は、送料をお添えの上、振替で。（書名明記）

ウイ書房

調布市西つつじヶ丘2の25の14
電話 03 (326) 1 3 8 0
振替口座 東京6-59867

あごら読書室

夜明けの航跡

かながわ近代の女たち

かながわ女性史編集委員会編著

ドメス出版

巻頭まず百三十五ページにのぼる年表

が延々と続く。「一八六八（明治一）年

4・17東征総督、横浜洲千弁天境内に軍

陣病院設置し、初めて女看護人おく」に

始まって、「一九四五（昭和二〇）年8

月、占領軍による婦女暴行の流言で避

難する女性多数」で終わる七十八年間の

歴史。週刊誌大（B5判）に、新聞より

も小さな活字がビッシリ、と聞けば、聞

いただけでおそれをなすかもしれないが、

上段に「神奈川の女性」、中段に「一般

情勢」、下段に「解説」を並べた構成は、

一読、巻をおくひまもないほど興味深い。

特に下段の解説には、新聞記事あり、社

史あり、小説の引用あり、誰が読んでも
わかりやすく、具体的なイメージが次か
ら次へと浮かび、まるで映画でも観てい
るよう。

第二部に入ると、一転して女性史専門
家の見事な論文が展開される。明治期Ⅱ
吉見周子、大正期Ⅱ江刺昭子、昭和戦前
期Ⅱ加納実紀代、どれも「三つの時代・
地方」と「女性」の視点からの章題
どおりの、たしかに視点が光る。

第三部は聞き書き。「ひたむきの年輪
―八十人に聞く女の暮らし―」は、
一八九〇（明治二三）年生まれから一九
二四（大正十三）年生まれまでが語った
テープ起こし。1おいたちと暮らし（家
庭・生活・民俗）2はたらく姿（生業・
職業・労働）3学びの歲月（教育・芸能）
4大きなできごと（大震災・戦争）の各
章、四百字詰め七百枚の克明な掘り起こ
しが、生きた女性史をいきいきと伝える。

最後に典拠文献、写真図版一覧、そし
て索引と、至れり尽くせりの内容。

神奈川県立婦人総合センター開館五周
年記念行事として、センターの講座「近
代女性史」受講生を軸に、神奈川県内の
多くの女性団体と民間女性が、センター
と協力して編み上げたという。ペルシャ
じゅうたんを織るように丹念な作業を続
けられたたくさんの方々、そして総指揮
をとられた金森トシエさんのご苦勞に、
ただただ感謝の思いでいっぱいになった。
ページ数三一八、一万円を超えて当然
の定価は、なんと三千三百円。神奈川革
新県政の大きな援助があったのだろう。
官公立女性センター是非論を折々耳にす
るが、かながわは、ここでもすばらしい
見本を示してくださった。（87年11月刊）

（千）

続わが道

（二）ころの出会い

藤田たき著
ドメス出版

思わせるし、婦人少年局ほか思い出多い人びとの心あたたまるエピソードは、そのまま現代女性史の第一級の史料である。（88年1月刊、四六判、三四九ページ、二千三百円）（S）

信州・女の昭和史Λ戦前編V

青木孝寿著

信濃毎日新聞社編・刊

十年前に刊行された「わが道」の続編が出た。米寿を迎えた著者は、交通事故の後遺症・白内障手術後の視力の不自由とたたかい、「羽ぶとんさえ重く、眠れぬ夜の連続、一日に二、三時間も机の前に坐っておればぐったりする今日この頃です」という状況のなかで、「長かった一生のうち、書き記した日記、随想、講演のメモのようなものうち、その時代、時代というか、私の生涯の節目、節目を物語るものなども出てきましたので拾ってみました。でも今でも通用するものはほとんどありません。当然のことです。日本は変わったのです」と、謙虚にその序に記しておられる。

しかし、通用しないどころか、二十二歳の娘としてアメリカに向かい、学んだ日の日記は、幼い津田梅子の渡米の日を

「祖母や母と、それをとりまく村や町のすがた、そしてそこに結びつく多くの人々の、だれにも共通している民衆の苦悩や喜びのもつ意味の重さは、私という男の歴史、人間の歴史を考える基盤になっている。女の歴史は男の歴史をみる鏡であり、人間の歴史を照らす視角である。そう考えながら、女の男への従属の歴史と解放の歴史を、信州の地域で具体的に明らかにしたいと願うようになった」という筆者が、「信濃毎日」に連載した記事をもとめたもの。廃娼運動・婦選運動・部落解放運動・女性だけの労組等の

先達として活躍した女性たちにまじって、娼婦の聞き書きなどもあり、強まる国家主義、その中で女教師たち、戦時下の婦人団体、総動員と銃後の生活へも鋭い視線があてられて、女性史であるとともに、見事な地方史、人民史にもなっている。続編が待たれる好著。（87年7月刊、四六判、三四二ページ、千八百円）（涼）

大正・昭和を飾った女たち（上・下）

遠藤憲昭編

国書刊行会

花街の名妓・映画女優、女流作家、ポスターの美女等々、話題を「飾った」女たちの写真集。「悲劇の女性」の項目に、伊藤野枝や波多野秋子が「飾られて」いたりする。髪型、服装等、百聞は一見に如かないが、庶民の女の写真が少ないのが残念。しかし、戦場の慰安婦、飛行機を整備する女性たちなど、貴重な写真も目をひく。（62年12月刊、B4変形、上下各一〇八ページ、各四千八百円）（り）

自分だけの部屋

ヴァージニア・ウルフ著 川本静子訳

みすず書房

一九二八年ときくと、私は反射的に、

天才画家佐伯祐三がフランスで狂死した年だと思い、昭和三年の三・一五左翼大弾圧事件があった、と、暗い日本の歴史をふりかえったりする。スパイと知らずに男に献身する悲劇の女性、熊沢光子はまだ十八歳で白い衿カバーのついたセーラー服を着ていた……と思ひめぐらせもする。

佐多稲子がみかん箱の上で書いた処女作「キャラクター工場から」を発表し、林芙美子の「放浪記」も活字になった。野上弥生子の「真知子」も、昭和三年、つまり一九二八年の作品だ。

この年、海に向こうイギリスでは、一人の女性作家が二つの女子大学で講演をした。その講演の草稿に、加筆訂正をしたエッセイが、ヴァージニア・ウルフの「自分だけの部屋」である。

彼女の講演のテーマは「女性と小説」。これに対し、彼女の結論は本の題名のとおりである。

「女性が小説を書くようにするのなら、年に五百ポンドの収入とドアに鍵のかかる自分自身の部屋を持たねばならぬ」というのである。

その根拠を、彼女は一人の架空の女性に名門男子大学の手入れのよい構内を歩かせたり、豪華な図書館へ入ろうとして追いだされたりすることを経験させて、イギリス女性のおかれてゐる差別的状況の現実を知らせることで、読者に一つ一つ納得させてゆく。

その手腕のみごとさ。想像力と創造力の勁さに舌をまく。

——私たちは見失った小説家や、もみ消された詩人や、ものを書くことさえしなかった無名のジュエイン・オースティンや荒野で頭を打碎いて死んだか、或は天賦の才に苦しめられて気が狂いしかめっ面をして街道をうろついていたどこかのエミリー・ブロンテなどの

手がかりを得るのだと思います。本当のところ、私は名を記さずにあれほど多くの詩を書いた「読み人知らず」はしばしば女性だったのだらうと、大胆にも想像しているのです。

俗謡（バラッド）や民謡（フォークソング）を作ったのは、それらを低い声で子供たちに歌ってきかせたり、それらを歌って糸紡ぎや冬の長い夜をまぎらわせていた女だらうと——

このエッセイを読んでいると、六十年も前のことであるのに、今もなお、女性創造的な仕事にたずさわろうとする時に横たわる数々の障碍が、多少はとりのぞかれたとはいえ、著者の指摘のまま今も残っていることに胸が痛くなる。

フェミニズム精神につらぬかれた名著と絶賛したい気持ちと、男はなぜいつまでも頑固に自己の優位性という虚妄にとりすがらねば生きられぬ弱い生物のままであるのか、という嘆息とが同時に生まれる。（88年2月刊、四六判、二一八ページ、一八〇〇円）（山下智恵子）

本音で生きよう

主婦の新しい顔

灘神戸生活協生活文化センター編

灘神戸生活協同組合

この号をまさに印刷に入れようとする
ときこの本が届いた。見ると高橋ますみ
さん登場の記事がある。大急ぎで斜め読
み、とにかくご紹介を。

「主婦」と名のることになんとなく後
ろめたさと不安を感じている主婦たち
へ主婦をほんねで語る会V（会合五回、
延べ出席者九十人）の学習会の記録であ
る。講演会では、司法試験で猛勉強中の
貴重なデパートで「ねえ、ベールを毎週
読まない」と要求した良妻に「男は変わ
らない、変われない」と言いながら変わ
ってしまった弁護士松尾直嗣さんの「女
も男もイキイキ・ワクワク生きるには」
が抜群におもしろい。

そして庄巻は、パネルディスカッショ
ン「本音で生きよう——主婦の新しい顔」。
「主婦は決断力がないからキライ。ある

種のキャリアウーマンは決断力がありす
ぎるから怖い」「でも、四十歳というの
は、専業主婦やってきた人とそうでない
女同士が実は対等のところにきているの
ではないか」という宮迫千鶴サンや、
「本音で語れと言われても主婦の経験が
ないので語りようがない。男の目で見た
客観的事実を話す」という大阪市立大の
本多淳亮教授と並んで、まさに経験から
生まれた自立論を堂々と打ち上げる我が
ますみサンの実践論の迫力はさすが！
ただ惜しむらくは、へ東海BOCVは
繰り返されてもへあごろVの「あ」の字
も出ない。ああああ、これでは、会場で
「あごろ」は売れなかったろう、と、ヒ
ガミにヒガンだ。

（88年3月刊、B6判、二〇四ページ、
八百円）（斎）

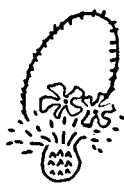
***** 第二回女のからだから合宿一九八七

82年優生保護法改悪阻止連絡会

一九八二年、優生保護法改悪の動きを

食い止めようと集まった女たちが（阻止
連）をつくってから五年あまり。墮胎罪
・優生保護法・母子保健法は女の生い性
を管理している「魔のトライアングル」、
「女（わたし）のからだは女（わたし）
のもの」という当たり前のことを実現さ
せようと、八五年の第一回合宿（早稲田
奉仕園）に続き、八七年十月、第二回
「女のからだから合宿」が開かれた。そ
の楽しい記録をまとめたもの。

イラストあり、資料あり、何より文章
がナウイ（ああ、これを読むと、「あご
ら」がなんと古色蒼然とみえること！）。
（阻止連）健在なり。「阻止連式フェミ
ニズム」健在なり。ぜひ一読をおすす
める。（88年5月刊、B5判、九六ペー
ジ、七百元、送料二百円。申し込み先は、
東京都新宿区荒木町二三、中沢ビル3F
「ジョキ」内、（阻止連）（い）



ネットワーキング

家庭科は必修にならない？

家庭科の男女必修をすすめる会

昨年暮の教育過程審議会の答申によって、家庭科の男女必修は国の制度として決まりました。けれども、実際には男女別学習になってしまいう可能性が大きいのです。

関係者の中には必修に消極的な人がまだまだ少なくありません。

「あとは現場の問題です」と、もう何も努力しないつもりで文部省担当官――

「男女の特性は生かさなければ」と、男女に違った学習をさせるつもりで校長先生――

「男女一緒では女子の技能レベルが下がる」という古い考えの家庭科の先生――

「男子に家庭科四単位なんて無理。設備もないし」という男子校や進学校の先生――

◇ 中学校「技術・家庭」では、十一の学習領域のうち「木材加工」「電気」「家庭生活」「食物」の四領域は男女全員が必ず学習することになります。ほかに「金属加工」「機械」

「栽培」「情報基礎」「被服」「住居」「保育」の中から三領域以上を選択することになっていますが、実際には生徒個人が選択するのではなく、学校が決めることになりそうです。そして、各学校で男女別の指導が行なわれるかもしれないのです。

◇ 高等学校では、すべての生徒が「家庭一般」「生活技術」「生活一般」の三科目の中から一科目選択することになっていますが、実際には一科目しか置かない学校が多いでしょう。「生活技術」は、家庭生活で用いられる電気、機械、情報処理や園芸などに関する内容を含み、中学の「技術」に似ています。実際には家庭生活にあまり関係なく、電気などについて学習することになりかねません。

「生活一般」は前半と後半に分かれ、後半二単位については、やむを得ない場合は、当分の間、技術や情報に関する科目や体育で代替してもよいことになっています。当分の間、というのがいつまでのことかはわかりません。

多くの女子校は「家庭一般」を、工業高校など技術の設備のある学校では「生活技術」を置くことになりそうです。男子校、共学校の多くは「生活一般」を置いて、後半二単位については男子は代替履修ということになるかもしれません。共学校の中には女子は「家庭一般」を、男子は「生活一般」を、という指導をするところが出てくるかもしれません。

これでは、男子は技術、女子は家庭」というようなことになってしまいます。

そこで、私たちは要求します。

すべての教育関係者に対して、女子差別撤廃条約を尊重し、その周知徹底に向けてさらに努力することを。

文部省と各自治体に対して、施設、設備の充実、教員の増員などについて年次計画を立て、予算を組むことを。そして、必修のためのあらゆる障害を取り除く努力をすることを。

各学校に対して、男女別の指導を決してしないことを。そして高校では、男女別の指導が行われやすい「生活一般」や、家庭科とはいえない授業が行われやすい「生活技術」でなく、新しい内容の「家庭一般」を全生徒に履修させることを。

そして、すべての中学、高校で、家庭科の男女共修が本来に実施されるまで運動を続けます。

(このことを大勢の方に知っていただくため、マンガ入り
のリーフレットをつくりました。お入用の方には無料で何枚
でもお送りします)

〒151 東京都渋谷区代々木 二二二二二
婦選会館内

家庭科の男女共修をすすめる会

今度の教育課程では家庭科は・・・

高等学校では

中学校では



中学校の生徒と先生

生活一般は、前半と後半に分け、後半の単位については、やむを得ない場合は、当分の間、技術や情報などに開く科目や体験で代替してよいことになっています。その間は、いつまでのことかわかりません。



男子高校生



男子高校生

高等学校では、すべての生徒が家庭一般、生活技術、生活一般の3科目の中から1科目を選択することになっていますが、実際には1科目しか履修しない学校が多いです。

中学校技術・家庭には11の学習領域があり、その中で全科目必修しなければならないのは木材加工、電気、家庭生活、理科の4領域、ほかにも金属加工、機械、放送、映像、調理、遊戯、住居、保育のうちの3領域以上を選択履修することになっていますが、実際には生徒個人が選択するのでなく、学校が決めることになりそうです。

多くの女子校は家庭一般を、工業高校など技術設備のある学校では生活技術を置くことになりそうです。男子校、共学高校の多くは生活一般を履修して後半の単位については男子は代目履修ということになるかもしれませんが、共学高校の中には女子は家庭一般を、男子には生活一般を、という所を設けるよう力出てる方もあります。これでは、男子は技術、女子は家庭、ということになってしまいます。

生活技術は、家庭生活で用いられる電気、機械、情報処理や図表などに開く内容をめく、中学の技術に似ています。実際には基礎的な知識ばかり関係なく電気などについて学習することになるかもしれません。



男子高校生

女子高校生

女よたわむれに姓は変えじ

池田玲子

老後を共に暮らせる人でないと見極めがついて、此のたび離婚した。

将来の責任は自分で背負う覚悟は出来ているのに、自分の離婚が、私事で終わらないいやらしさ、を身をもって体験したのである。

私は子供も大きいし、さらに「離婚は恥でない」という考えがあるので、旧姓にきちんとどうとうとしたのだが、姓を変えるということは手間ひまとお金がかかる上に、自分の離婚を天下にしろしめすこともなり、これが社会習慣上、女のほうにだけかかっているということは、やはり大変な差別である、と気づいたわけである。

具体的にのべて見ると、改姓にあたっては、いろいろな手続きが用意されていて、一つごとに、お前は離婚したんだぞ、ということを知らしめ、男に弓をひいた女を、有形、無形にこらしめる仕掛けになっている。というのは言いすぎだろうか。

ためにしに男側がこれだけのことをされてみるがいい。まず職場に申し出る。これだけで離婚したことがすぐわかる。言わなくても良いと言われても、このせまい日本社会ではいつ

か必ず二重姓がばれて、かえってあやしまれるばかりである。戸籍抄本をとるのに、理由がいり、時間と費用がかかる。上司は改姓届を出せという。

私はこのたび [] により改姓致しましたので、戸籍抄本をそえて、お届け致します。

記 改姓理由 []

改姓名 [] 旧姓名 []

この [] に、離婚 — と記入して行くうちに、ふつふつと怒りがわいて来る。

改姓発表のあと、出勤簿に新姓(?)を押印していたら、台帳を持って来られ、正式に認められるまで、今までのハンコを押しておけと言われる。そのくせ、後日、許可制でないからもう今のでいいんですよと言われ、また消して押し直す。このあたりで、何で女だけがこういう目に逢わなければならないのか、悔しくてギリギリとなる。

こうして女だけが、実印を作り直し、三文判を買いかえ…これなど、仕事もなく、子どもをかかえて離婚した人には、本当にいらぬ出費だろうと思う。

思えば男たちはぬくぬくと暮らしている。結婚しても姓は変えずによし、女のほうがいそいそと変えるだろうから。子どもが出来ても腹はふくれず、子育ての修羅場はぐららず、老親の看護もせず、離婚しても誰にも知られず、老後は女に頼り…すまして人生を歩きよる。

るには、この社会はなかなかシンドイところだなあとのことです。とにかく仲間が欲しいです。(新潟県 太田佐和子)

◆私たちは小さい子どもを抱えながら、公民館で女の生き方等を学習し合っているグループです。私たちといっしょに活動して下さる方ご連絡下さい。

国分寺市東元町二―三―一三、A三一〇
04231261158 橘 裕子

◆特集号(新聞切り抜きに見る女の十六年)どうもありがとうございました。二歳の子の育児について「社会的な目」を忘れてしまいがちな今日この頃です。ゆっくり読みたいと思います。近く転居の予定なのですが、それが終わったら在宅で何かお手伝いさせて下さい。また新宿は少し遠いので横浜あたりで集まりが(定期的に)開かれると嬉しいのですが、会員の方はいらっしやらないのでしょうか。

(横浜市 下村陽子)

◆「ナイロビ号」カンパは送れなかったけど、身のまわりの人に、すすめて、買

ってもらう、読んでもらう、ということ
を自分に課そうと思ってます。

千円か、二千元、おくないわけじゃないけど、それで、済んだ気になってしまうのが、自分には危険な気がしますので。

なぜ、フェミニズムにひかれるのか。

どう考えるのか、ナイロビと私。

私のまわりの人に働きかけてみることに

事務局に対して、やさしい言葉かけたり(?)ハゲマシたり、応えんも大事だけど、自分が応えん要員になってしまっ
て、自分は、まわりを変えない、戦わない、
というのは、ズルイ、イケナイ、と思
いました。二千元も出すのだから、買った
人はきつと、いつか、開いて読むもの、
きつと!

とりあえず、目標は一万円カンパ五冊、今、友人に手紙かいてます。日ごろ御無沙汰の人にも、TELします。見知らぬ人からの注文書、まっけて下さいね。

(札幌市 久須美房子)

◆集会で「ナイロビ号」を買いました。
女性の生きがいと世界の婦人たちが一生懸命働きになっていらっしやることを知りました。感謝申し上げます。

めまぐるしい時代に落ちこぼれ人間にならないためにどのような努力をして人生を過ごしたらよいのか、ご指導をお願いします。
(新潟市 渡辺てる子)

(新入会)

◆昨年の六月に結婚して関西より千葉に参りました。結婚してから、よりいっそう女の生き方について考えるようになりました。何か女の集いに参加したいと思いつつ今までできまじましたが、これから何か始めたいと思います。

(千葉市 妻鹿ふみ子)

◆知人から聞いて、貴会の存在を知りました。古書店の番頭をやっております。江戸時代の女性史や女性問題(男性の側を含む)に興味があります。上野千鶴子さんの著書などおもしろく読んでおります。

(東京都 山崎信雄)

資料Ⅰ 均等法で職場の女はどう変わったか

総評内部資料「均等法の協約化・時短・育児休業の法制化を中心とした女性労働者の'88春闘」より転載

―制度改善への企業のとりくみは―

男女雇用機会均等法の施行（一九八六・四・一）にともない、総評は、この法律の施行を新たなたたかいの出発点としてとらえ、この法の積極面を有効に使いこなし、職場に男女平等を定着させることを、基本的課題としてとりくんできました。

そして、いま一年余をすぎましたが、男女雇用機会均等法で、職場は、女性労働者は、どう変わったでしょうか。

―制度上の改善はすすんだが―

① 募集・採用、初任給、新入社員教育など、雇用の入口における制度上の改善はとりくまれています。男女別の定年制もふくめて、差別扱いが判然としているものは、制度のうえではかなり改善されています。

しかし、職務配置や昇進・昇格などの均等扱いについては、改善はすすんでいません。

② 公務員については、均等法施行を契機に、現実存在する差別扱いを洗い出して、公務員法を守る条例・規則づくりにとりくむことを提起しましたが、均等法に比べてさらに弱いとりくみになっています。

③ 育児休業や再雇用制度など、女性が企業でキャリアをつむために必要な条件をつくるとりくみは殆ど手がつけられていません。

④ 企業別のとりくみを見ると、大企業ではとりくみがすすんでいるが、三百人以下の企業ではわずかに一割程度のとりくみにおわり、中小企業の対応が非常に遅れています。業種別では、小売、金融、サービスなど女性労働者の多いところのとりくみがすす

んでいます。女性労働者の少ないところは放置されています。

- ⑤ 金融関係や商社、流通業界など女性労働者の多い産業に、資格要件や職務の範囲、転勤の可否によって労働者を総合職コース、一般職コースに区分する「差別的コース別人事管理制度」が導入されています。コースの選択は自由といっても転勤を前提とする、女性にとっては選択のしにくいシステムであり、殆どの女性が一般職にふりわけられています。コース別人事管理制度によって、女性を結果的に差別することになっています。

- ⑥ 企業側は、本人の意欲と能力が出世をきめると主張していますが、企業の体質である女性排除の傾向は依然として改められていません。

- ⑦ 四年制大学卒の女性を戦力として採用する企業が増えていますが、短大や高卒の女性たちは均等法施行前に比べてよくなっています。高卒の採用はむしろ減る傾向にあります。

— 就労制限の緩和・廃止などは —

- ① 労働基準法の改正による時間外労働などの変更については、企業側が積極的に提起し、この部分の改訂だけが先行してとり扱われているケースが少なくありません。

- ② 時間外労働の規制を変更したところは約五〇％、大企業で規制の緩和がすすんでいます。

時間外労働、深夜業の規制をはずされた指揮命令者、専門的業務従事者（「四業種」）については、一部男子のみにするところがありますが、該当者の範囲をきめたり、深夜業の規制の措置をとらせるなどのとりくみがされています。

- ③ 出産休暇については、ほとんどのところで改訂されていますが、拡大された期間は「無給」にするなどの問題がでています。

- ④ 生理休暇については、約七〇％のところは従来どおりで変更してはいませんが、一部では、見直しや「病氣休暇」に変更するところがあります。また、これまで有給であったものを無給にするなどの便乗改悪や生理休暇制度を廃止するなどの改悪がだ

されています。

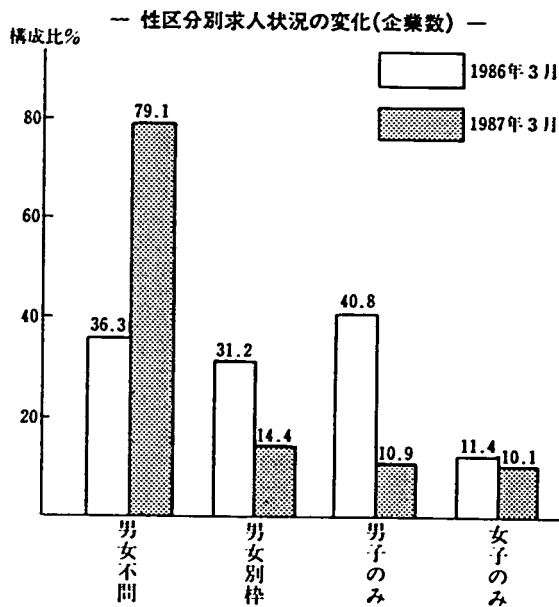
—波紋を広げるのはこれから—

均等法に対する労働組合としての対応は決して充分とはいえませんが、当初の予想をはるかにこえて、つぎのような均等法の波及効果がでています。

- ・企業は少しずつ女性に門戸をひらいている。
 - ・女性がゼロであった職場に進出した。
 - ・これまで男性の仕事とされていた専門職にも女性が進出している。
 - ・会社の重役や支店長、政府機関の部長、局長への登用が増えている。
 - ・職場でも管理職、役職が増えている。
 - ・長く働く女性が増えている。
 - ・男女が平等に働くことについて、男子をふくめて議論ができるようになった。
- また、昇進、昇格の差別や扶養手当での差別支給の是正をもとめる行動がおこなわれています。芝信用金庫の昇進差別、鉄鋼連盟の仕事差別は正の訴訟や郵政事務官の昇任、昇給差別についての行政措置要求など。

—男女不問は増えたが……募集・採用—

実際に公募をおこなった企業のとりくみは、新規卒者および中途採用者のいずれについても「法施行前から、すべての募集・採用区分について女子も公募していた」または、「公募したのは、指針の適用除外に該当するものであった」ため、「変更する必要はなかった」とする企業が過半数をしめています。

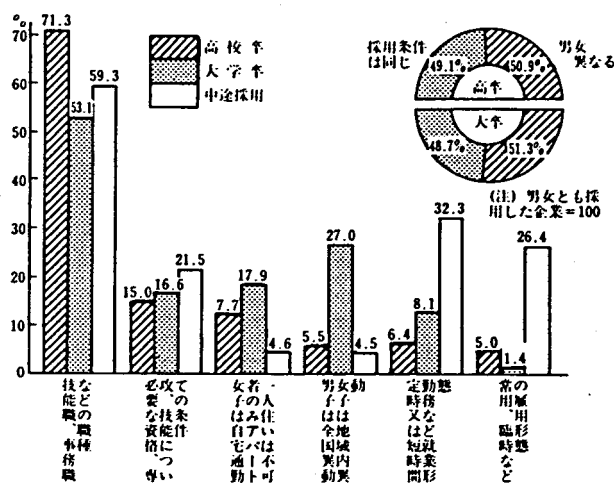


「変更した」企業は、高校卒一一・六％、短大卒一七・六％、大学卒二一・九％、専修学校卒一九・四％、中途採用者一四・五％となり、とくに大学卒についての割合が高くなります。

なお、「検討中」および「まだ検討していない」企業が、あわせて一〇％前後となっています。

募集・採用条件について、新規学卒者および中途採用者のいずれについても「法施行前からすべての募集・採用区分について女子に不利な条件を付していなかった」ので変更する必要はなかった」とする企業と、「変更した」企業をあわせて九六・九八％に

一 男女異なる採用条件(M.A) —
(男女雇用機会均等法施行前)



(注) 男女とも採用したが採用条件が男女で異なる企業=100

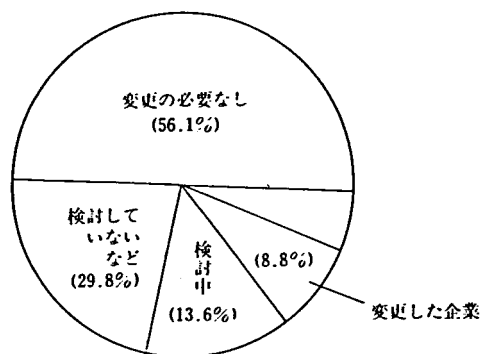
資料出所：労働省「女子労働者の雇用管理に関する調査」(1984年)

り、改善が進んでいます。とくに大学卒については「変更した」企業が二七％と高くなっています。

— 改善が進まない職場配置 —

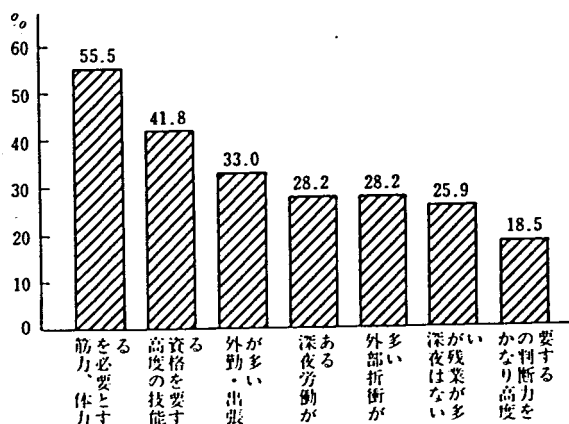
女子の配置の方針の変更状況は、「施行前から、すべての職務に女子を配置する方針でいたので、変更する必要はなかった」とする企業が、全企業の五六・一％、「従来男子のみ配置していた職務の一部に女子を配置するなど変更した」企業は、八・八％です。一方、「検討中」や「検討していない」企業がまだ四〇％以上あり、改善は進んでいません。

— 女子の配置方針の変更状況 —



資料出所：労働省「女子労働者の雇用管理に関する調査」
(1986年)

— 女子を全く配置していない仕事の主な特徴(M.A) — (男女雇用機会均等法施行前)



(注) 女子を全く配置していない仕事がある企業=100

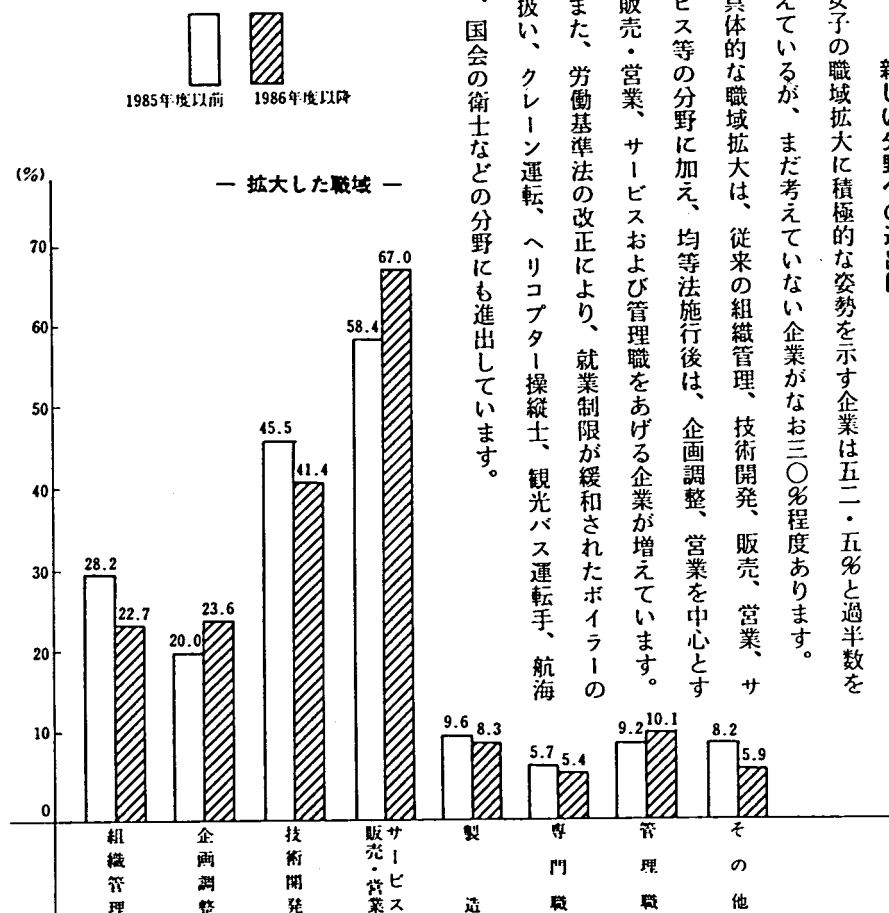
資料出所：労働省「女子労働者の雇用管理に関する調査」
(1984年)

— 新しい分野への進出は…… —

女子の職域拡大に積極的な姿勢を示す企業は五二・五％と過半数を
 えているが、まだ考えていない企業がなお三〇％程度あります。

具体的な職域拡大は、従来の組織管理、技術開発、販売、営業、サ
 ービス等の分野に加え、均等法施行後は、企画調整、営業を中心とす
 る販売・営業、サービスおよび管理職をあげる企業が増えています。

また、労働基準法の改正により、就業制限が緩和されたボイラーの
 取扱い、クレーン運転、ヘリコプター操縦士、観光バス運転手、航海
 士、国会の衛士などの分野にも進出しています。



資料出所：雇用職業総合研究所「企業における女子の戦力化・活用に関する調査」（1986年）

— 職域拡大の方針 —

— 今後は拡大した職域での量的充実を図る —

基本的に男女に差はなく、今後もその方針でいく	従来も今後も職域拡大を図る	今後は積極的にとりくむ	今後は積極的にとりくむ	今後はについては検討中	これまでのところ、職域拡大については考えていない
(27.6%)	(12.5%)	(12.1%)	(7.1%)	(11.8%)	(28.9%)

(50%)

資料出所：雇用職業総合研究所「企業における女子の戦力化・活用に関する調査」（1986年）

(注) 職域拡大の方針は、4年制大卒女子に関するものである。

— ひろがるコース別管理・差別 —

法の施行を契機とした雇用管理の見直しのなかで、金融機関、商社などを中心として、「コース別人事管理制度」が導入されました。制度の導入に関心をもっている企業は三〇%を超えており、今後、導入の拡大は必至です。企業規模では、一〇〇〇〜四九九九人の企業で一八九%、五〇〇〇人以上の企業では一四・五%と大企業になるほど、導入へのとりくみが多くなっています。

— 改善がすすむ小企業…昇進 —

昇進について、企業が制度や方針についての変更のとりくみは、昇進の機会、昇進可能な範囲についての変更状況は、「法施行前から男女とも同じ取扱いであったので、変更する必要はなかった」とする企業は、全企業の五三・八%で、大企業になるほど、その割合は高くなっています。

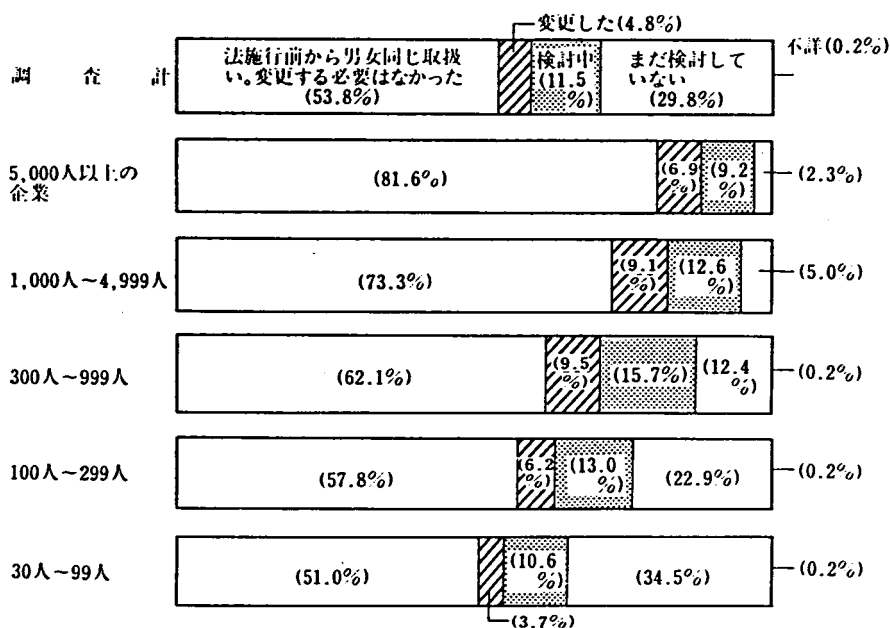
しかし、その反面、「検討中の企業」(一一・五%)と「まだ検討していない企業」(二九・八%)があわせて四〇%を超える多い企業があります。とくに、企業規模が小さいほどその割合は高く、改善は進んでいません。

— コース別人事管理制度の導入・検討状況(産業別) —

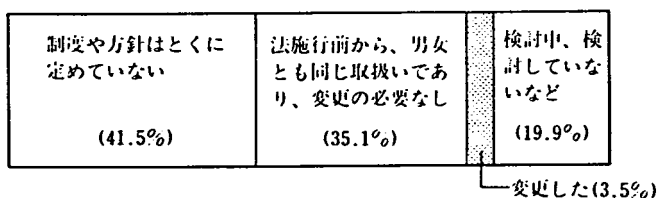
調査計	導入・検討 (88.2%) = 100				不明 (11.8%)
	ある (7.6)	検討中 (9.1)	検討の予定 (25.0)	(56.4%)	
製造業	導入を決定済み(1.9%)				(9.7)
	(7.0)	(9.5)	(28.8)	(52.6)	
卸売・小売業 飲食店	(90.3%) = 100				(12.1)
	(7.7)	(10.7)	(25.5)	(54.3)	
金融・保険業	(87.9%) = 100				(7.7)
	(8.3)	(11.1)	(34.0)	(43.1)	
サービス業	(92.3%) = 100				(14.0)
	(7.7)	(6.7)	(19.1)	(64.9)	

資料出所：雇用職業総合研究所「企業における女子の戦力化・活用に関する調査」(1986年)

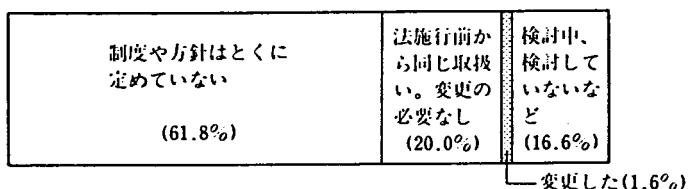
— 昇進の機会・昇進可能な範囲の変更状況 —



— 昇進に必要な勤続年数、在級年数等の条件 —



— 昇進のための試験の受験資格 —



資料出所：労働省「女子労働者の雇用管理に関する調査」（1986年）

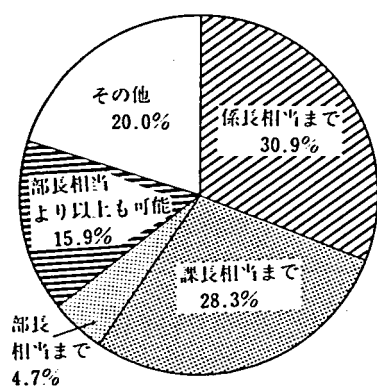
— 改善が進まぬ女性の多い産業……教育訓練 —

「新入社員研修」「管理職研修」および「業務の遂行に必要な能力を付与する研修」については、これらを実施している企業では、かなりの企業で改善されています。

しかし、小企業では新入社員訓練を実施していない企業が多く（三〇人以下の企業では四八・九％）なっています。また、産業別では、女性の多いサービス業、不動産業、製造業でも、新入社員訓練を実施していない割合が高く、改善も進んでいません。

「変更した」企業のうち、男女同一の扱いに変更した事項は、一般教養訓練、訓練対象、職務関連訓練が主となります。

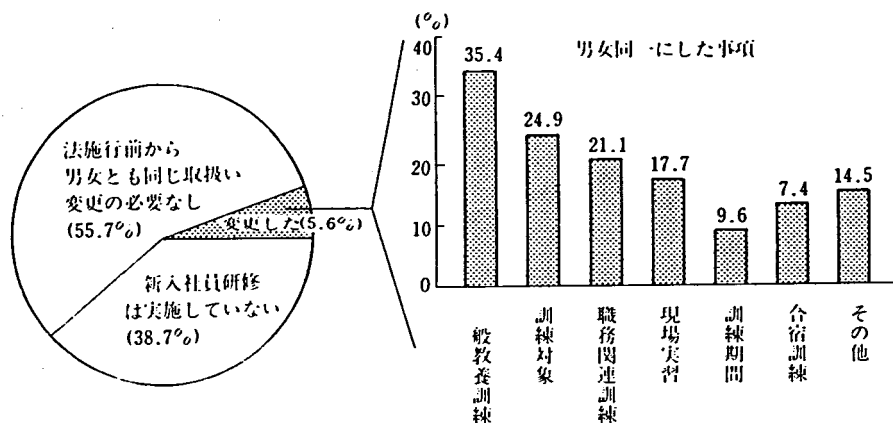
— 女子の昇進可能な役職 —
(男女雇用機会均等法施行前)



(注) 女子にも昇進機会がある企業
= 100 (56.3%)

資料出所：労働省「女子労働者の雇用管理に関する調査」(1984年)

— 新入社員訓練の変更状況 —

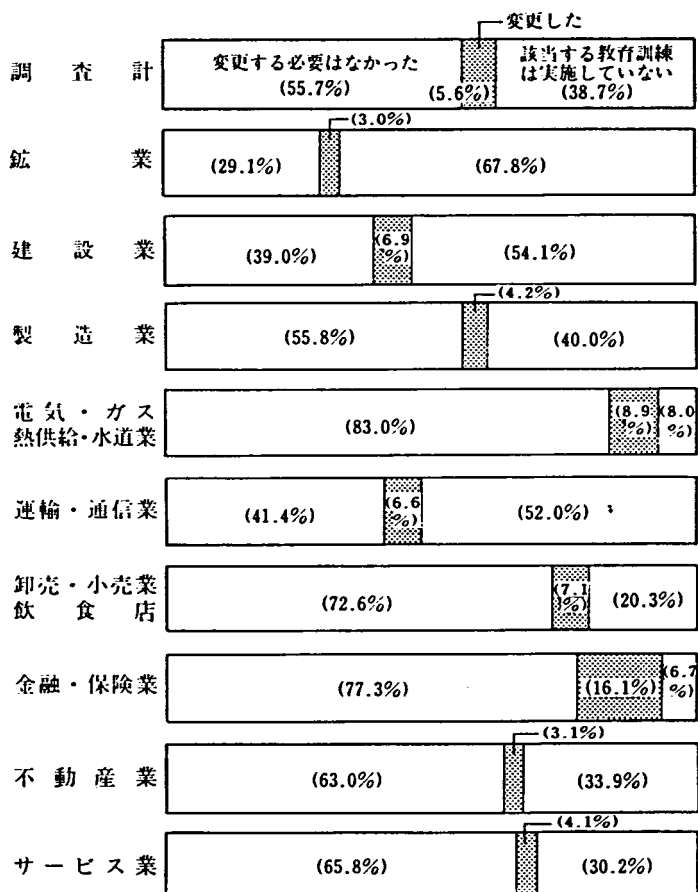


資料出所：労働省「女子労働者の雇用管理に関する調査」(1986年)

住宅資金の貸付け、世帯用住宅の貸与など、法が規制する福利厚生措置については、これらの措置を設けていない企業が半数以上あります。これらの措置を実施している企業では、すでに「変更する必要はなかった」というところが多く、男女の差別扱いはほとんどなくなっています。なお、住宅資金の貸付け、世帯用住宅の貸与については、五〇〇人以上の企業で取扱いを変更した

―― 男女差別は改善、だが拡大する企業間の格差……福利厚生 ――

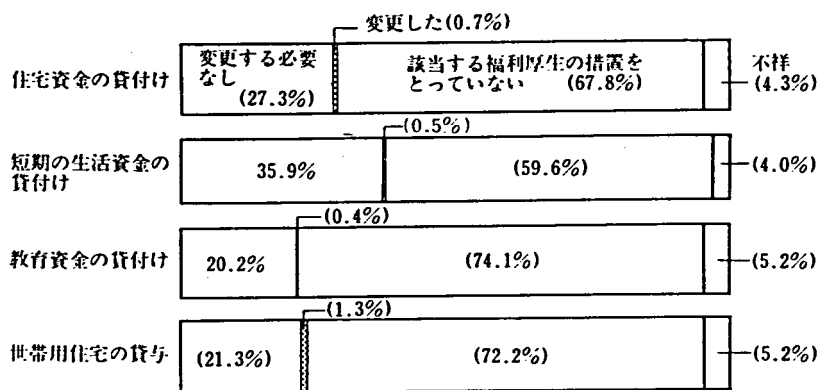
― 新入社員研修の変更状況(産業別) ―



資料出所：労働省「女子労働者雇用管理に関する調査」（1986年）

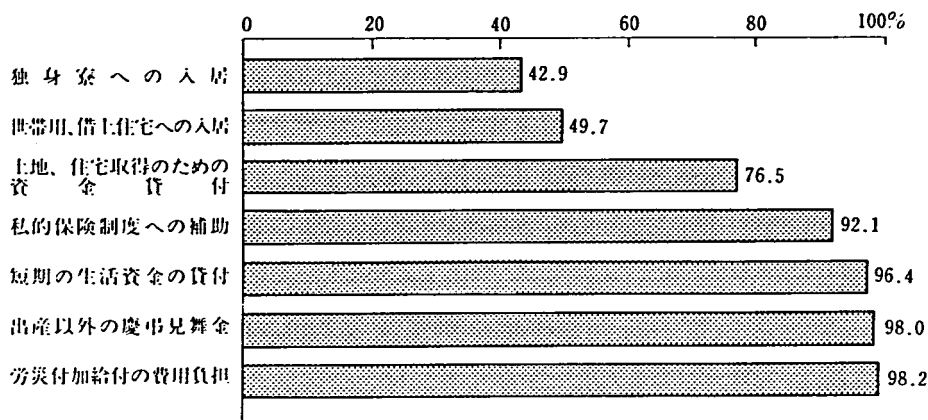
ところがそれぞれ六・五%、九・七%となつて、大企業での改善がすすんでいます。

— 福利厚生の変更に状況 —



資料出所：労働省「女子労働者の雇用管理に関する調査」（1986年）

— 男女とも同じ取扱いが行われている福利厚生 — (男女雇用機会均等法施行前)



(注) それぞれの福利厚生を実施している企業=100

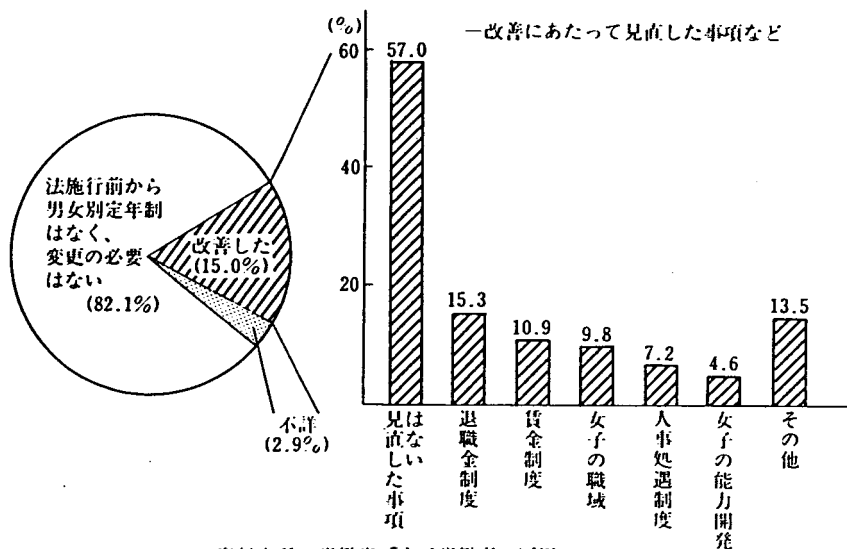
資料出所：労働省「女子労働者の雇用管理に関する調査」（1984年）

— やっと実現した男女同一の定年制 —

男女別定年制については、「法施行前から該当する制度はなく、対応する必要はなかった」とする企業が八二・一％と多く、「改善した」企業は、一五・〇％でようやくほとんどの企業で、定年制は男女同一となりました。

男女別定年制の改善にともなうその他の人事管理上の諸制度の変更是、「改善にあたって見直した事項はない」とする企業は五七・〇％、「見直し」をおこなった企業で、とりくまれたのは、「退職金制度」(一五・三％)、「賃金制度」(一〇・九％)、および「女子の職域」(九・八％)でした。(複数回答)

— 男女別定年制改善にともなう諸制度の改善状況 —



資料出所：労働省「女子労働者の雇用管理に関する調査」(1986年)

資料Ⅱ 婦人週間四十年間のテーマとスローガン

参 考 事 項

Ⅰ 第二回（一九四九）―第七回（一九五五） 〔テーマの特徴〕

法律上の男女平等が認められたが、実態が伴わなかった時期。婦人をめぐる環境の民主化と整備、婦人自身の成長に重点を置いた目標、スローガンが掲げられた。

第一回（一九四九・昭24）

1. 婦人の解放に関する法律の正しい理解
 2. 婦人の地位の向上を妨げている種々の原因を明確にすること
 3. 婦人の地位の向上のために役立つ既存施設の周知徹底
- スローガン（もっと高めましょう 私たちの力を私たちの地位を私たちの自覚を）

第二回（一九五〇・昭25）

1. 家庭から職場から封建制をなくしましょう
 2. 私たちの権利と義務を知りましょう
- スローガン（目標と同じ）

第三回（一九五一・昭26）

1. 婦人の市民としての意識を高める
 2. 婦人の市民活動を促進する
- スローガン（社会のためにやくだつ婦人となりましょう）

45年（昭20）

・衆議院議員選挙法改正公布、初めて婦人参政権実現

46年（昭21）

・国連、婦人の地位委員会設置
・衆議院議員総選挙に初の婦人参政権行使、婦人議員39名当選

・日本国憲法公布（47年施行）

47年（昭22）

・教育基本法公布・施行
・労働基準法公布・施行

・労働省設置・婦人少年局発足（婦人の地位向上所掌）

48年（昭23）

・国連「世界人権宣言」成立
・都道府県に婦人少年局職員室発足
・優性保護法公布

<p>第四回（一九五二・昭27） 婦人の地位の再認識とその向上 スローガン（よりよい社会をつくるために権利と義務を生かしましょう）</p> <p>第五回（一九五三・昭28） 婦人の自主性の確立 スローガン（のびましよう自分で考え行動する力）</p> <p>第六回（一九五四・昭29） 婦人の実力の涵養 スローガン（婦人の実力を育てましよう ― 家庭や社会の経済生活において―）</p> <p>第七回（一九五五・昭30） 社会人としての婦人の実力の涵養 ― 個人関係・地域社会・職場等においてまた世論形成者として― スローガン（よりよい社会をつくる力になりましよう）</p>	<p>52年（昭27） ・都道府県に婦人少年室設置（地方職員室の改組）</p> <p>53年（昭28） ・労働省主催第1回全国婦人会議開催（第22回まで年1回開催）</p>
<p>Ⅱ 第八回（一九五六）―第十八回（一九六六） （テーマの特徴） 婦人の生活ばかりでなく、国全体の状況が、激しく変化した時期。急速に変動する社会における婦人の役割を社会の各分野の問題に関連して取り上げ、婦人の地位向上を考えた。</p>	

第八回（一九五六・昭31）

婦人の力を役立たせる―特に明るい家庭のために―

スローガン（みんなで日本の家庭を明るく）

第九回（一九五七・昭32）

婦人の力を役立たせる―とくに近代的な人間関係の確立のために―

スローガン（まず話しあいましょう 明るい人間関係をつくるために）

第十回（一九五八・昭33）

婦人の力を役立たせる 正しい協同活動をととして

スローガン（育てましょう正しい協同生活を）

第十一回（一九五九・昭34）

婦人の自主性の確立―とくに集団との関係において―

スローガン（個人の自由と責任が集団をそだてる）

第十二回（一九六〇・昭35）

生活時間の自主的な設計

スローガン（まず生活時間割をそして自由時間を―自分のためにみんなのしあわせのために―）

第十三回（一九六一・昭36）

次の世代の成長に貢献する―とくに社会のよき一員としての人格形成に―

56年（昭31）

・ 売春防止法公布（32年一部施行・33年全面施行）

57年（昭32）

・ 国連婦人の地位委員会に日本初当選（代表谷野せつ婦人少年局長）

59年（昭34）

・ 国民年金法公布施行（大幅改正昭和60年公布61年施行）

60年（昭35）

・ 女性初の大蔵誕生（厚生、衆議院議員中山マサ）

スローガン（次の世代の成長に婦人の深い英知を）

第十四回（一九六二・昭37）

変化のはげしい社会の中で生活を再検討し、新しい秩序をそだてるために努力する

スローガン（生活に新しい秩序をそだてよう―変化のはげしい今日の社会において―）

第十五回（一九六三・昭38）

婦人が社会的良心を生かしそだてて明るい社会を築くよう努力する

スローガン（みんなの社会的良心が住みよいあすを築く）

第十六回（一九六四・昭39）

現代社会における家庭の役わり―産業化と家庭の問題―

スローガン（目標と同じ）

第十七回（一九六五・昭40）

わたくしたちの文化―その現状とあすへの課題―

スローガン（目標と同じ）

第十八回（一九六六・昭41）

今日における婦人の役割―進展する社会のなかで―

スローガン（目標と同じ）

64年（昭39）

・母子福祉法公布・施行（昭56年一部改正、母子寡婦福祉法と改称し57年施行）

66年（昭41）

・母子保健法施行（公布は前年）
・いわゆる結婚退職制にもとづく女子労働者の解雇、無効判決（東京地裁）

Ⅲ 第十九回（一九六七）―第二十六回（一九七四）

〔テーマの特徴〕

急速に進展する社会の各分野において、婦人の能力の發揮が一層求められ、婦人の側にも、社会の動きに即応して参加、貢献する意欲が高まりつつあった時期
また、婦人参政25周年を経て国際婦人年への胎動の時期。

婦人の能力を社会に生かす、婦人の権利・責任、女性の役割等が主要テーマであった。

第十九回（一九六七・昭42）

婦人の能力を生かす

スローガン（婦人の能力を生かす―ゆたかな人生のためにあすの日本のために―）

第二十回（一九六八・昭43）

婦人の能力を生かす―社会のよき一員として―

スローガン（婦人の能力を社会のために）

第二十一回（一九六九・昭44）

婦人の能力を生かす―自主的な生活設計をもって―

スローガン（自主的な生活設計を―あなたの能力を生かすために）

第二十二回（一九七〇・昭45）

67年（昭42）

・ILO一〇〇号条約（同一価値労働、男女労働者同一報酬）を批准

・国連「婦人に対する差別撤廃宣言」採択

69年（昭44）

・女子従業員の若年定年制に無効の判決（東京地裁）

70年（昭45）

・家内労働法公布、施行。労働省に家内労働室設置
・労働省婦人参政25周年記念シンボルマーク決定

<p>婦人の能力を生かす―社会参加と家庭責任―</p> <p>スローガン（目標と同じ）</p> <p>第二十三回（一九七一・昭46）</p> <p>今日に生きる女性の権利と責任―婦人参政25周年にあたって―</p> <p>スローガン（今日に生きる女性―その権利と責任―）</p> <p>第二十四回（一九七二・昭47）</p> <p>婦人の地位―その現状と課題―</p> <p>スローガン（目標と同じ）</p> <p>第二十五回（一九七三・昭48）</p> <p>日本を考える―これからの社会と女性の役わり―</p> <p>スローガン（目標と同じ）</p> <p>第二十六回（一九七四・昭49）</p> <p>日本を考える―これからの社会と女性の役わり―</p> <p>「物と心」</p> <p>スローガン（目標と同じ）</p>	<p>72年（昭47）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 沖縄県に婦人少年室設置 ・ 勤労婦人福祉法施行 <p>74年（昭49）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 婦人の逸失利益に関する判決（最高裁）
<p>IV 第二十七回（一九七五）―第三十七回（一九八五）</p> <p>〔テーマの特徴〕</p> <p>国際婦人年とこれに続く「国連婦人の10年」においては、世界の国々で「平等・発展・平和」を目標とした女</p>	<p>75年（昭50）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際婦人年 ・ 育児休業奨励金制度創設 ・ 労働基準法第4条男女同一賃金について、婦人労働者勝訴

性のための諸活動が展開された。我が国においてもこの間に民法国籍法の改正、男女雇用機会均等法の制定等女性の地位向上のための法律や制度の整備が行われた時期。テーマは、前半期には「男女平等と婦人の社会参加」であり、後半期には「あらゆる分野への共同参加」であった。

女性に対して社会参加を促すとともに、従来の社会慣習の見直しを行い男女の役割と責任に対する固定的な考え方を変えること、あらゆる分野に女性が男性と等しく参加することを強調。

第二十七回（一九七五・昭五〇）

男女平等と婦人の社会参加をすすめる

スローガン（目標と同じ）

第二十八回（一九七六・昭五一）

男女の平等と婦人の社会参加をすすめる――「婦人の10年」のはじめにあたって――

スローガン（男女の役割をみなおす）

第二十九回（一九七七・昭五二）

男女の平等と婦人の社会参加をすすめる

スローガン（社会慣習をみなす）

の判決（秋田地裁）

・第60回ILO総会、婦人労働者の機会及び待遇均等を促進するためのILO行動計画採択

・国際婦人年世界会議開催（メキシコ市）

・世界行動計画採択

・義務教育諸学校等の女子教育職員及び医療施設社会福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律公布（昭五1年施行）

（昭五1年施行）

・総理府婦人問題企画推進本部設置

・総理府婦人問題担当室設置

・政府主催、国際婦人年記念日本婦人問題会議開催

・国際婦人の10年（一九八五年まで）

76年（昭五1）

・離婚後も婚姻中の姓を称し得る民法等の一部改正

・労働省主催、第1回婦人問題会議開催（第12回まで年1回）

77年（昭五二）

・婦人問題企画推進本部、国内行動計画策定

・婦人問題企画推進本部、婦人の政策決定参加も促進する特別活動推進要綱策定

・労働省、若年定年制・結婚退職制等改善年次計画を策定

・国立婦人教育会館開館

・婦人問題企画推進本部、国内行動計画前期重点目標発表

・婦人問題企画推進本部、国内行動計画前期重点目標発表

第三十回（一九七八・昭53）

男女の平等と婦人の社会参加をすすめる

スローガン（慣習をみなおし新しい生活態度をそだてる）

第三十一回（一九七九・昭54）

男女の平等と婦人の社会参加をすすめる

スローガン（婦人の活動分野をひろげる）

第三十二回（一九八〇・昭55）

男女の平等と婦人の社会参加をすすめる——「婦人の10年」の中間年にあたって——

スローガン（これまでの活動をふまえさらに発展させる）

第三十三回（一九八一・昭56）

あらゆる分野への男女の共同参加——家庭で 職場で 地域社会で——

78年（昭53）

- ・ 特定職種育児休業利用助成給付金制度創設
- ・ 労働基準法研究会、労相に対し労働基準法の女子に関する規定の基本的問題について報告

79年（昭54）

- ・ 国連「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」採択

80年（昭55）

- ・ 女性初の大使誕生（駐デンマーク特命全權大使、高橋展子）
- ・ 国連婦人の10年中間年世界会議開催、「女子差別撤廃条」署名式（デンマークのコペンハーゲン）

81年（昭56）

- ・ 民法及び家事審判法の一部を改正施行（配偶者の相続分引上げ等）
- ・ 男女別定年制に無効の判決（最高裁）
- ・ 婦人問題企画推進本部、国内行動計画後期重点目標発表
- ・ ILO、男女労働者特に家族の責任を有する労働者の機会均等及び均等待遇に関する条約及び同勧告を採択

第三十四回（一九八二・昭57）

あらゆる分野への男女の共同参加―明日を築く役割と責任―

第三十五回（一九八三・昭58）

あらゆる分野への男女の共同参加―婦人の10年の目標「平等・発展・平和」達成をめざして―

スローガン（1）社会生活における婦人の政策・方針決定への参加をさらに進める。（2）家庭生活への男性の理解と関心をさらに高める。）

第三十六回（一九八四・昭59）

あらゆる分野への男女の共同参加―平等・発展・平和をめざす「国連婦人の10年」最終年に向けて―

スローガン（これまでの成果を踏まえ、残された課題の達成をめざす）

第三十七回（一九八五・昭60）

あらゆる分野への男女の共同参加―「国連婦人の10年」最終年にあたって―

スローガン（これまでの成果を踏まえ、残された課題の達成と今後の発展をめざす）

82年（昭57）

・男女平等問題専門家会議、労相に「雇用における男女平等の判断基準の考え方について」報告

84年（昭59）

・雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保を促進するための労働省関係法律の整備等に関する法律案を国会に提出

・労働省、婦人少年局を再編整備し、婦人局を設置

・労働省、パートタイム労働対策要綱策定

85年（昭60）

・父系血統主義から父母両系血統主義へ

・国籍法・戸籍法改正施行

・男女雇用機会均等法成立、公布

・国連婦人10年世界会議開催（ナイロビ）「婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略」採択

V 第三十八回（一九八六）―第四十回（一九八八）

〔テーマの特徴〕

「国連婦人の10年」の間に婦人の地位向上のための法律や制度の整備がすすんだが、それだけでは実際に婦人の地位が向上するには不十分であり、女性の能力については社会通念や男女の固定的な役割分担を見直すための努力の継続が必要である。そこで固定的な性別役割分担意識の見直しをテーマとする。

第三十八回（一九八六・昭61）

女性の能力や役割についての固定的な考え方を見直す

―男女雇用機会均等法の施行を契機に―

スローガン（家庭・社会・職場において次のような考え方が残っていないかこの機会に見直しを行う。

- ・子供の教育レベルを「男の子」は大学まで「女の子」は短大までと区別していないか。
- ・大学等における専攻分野について「女子は人文科学系」と女子自身が限定していないか。
- ・家庭において家事・育児は妻の仕事だけと決めていないか。
- ・職場では、「女性」は補助的な仕事と限定していないか。
- ・社会的活動の場において「男性」と「女性」の役割を固定的に考えていないか。）

86年（昭61）

- ・男女雇用機会均等法施行規則、事業主が講ずるように努めるべき措置についての指針及び女子労働基準規則を公布・施行
- ・男女雇用機会均等法及び改正労働基準法施行
- ・婦人少年室に機会均等調停委員会を設置
- ・女子再雇用促進給付金制度創設

第三十九回（一九八七・昭62）

女性の能力や役割についての固定的な考え方を見直そう

スローガン（家庭・社会・職場において次のような考え方が残っていないかこの機会に見直しを行う。

・「男の子だから」「女の子だから」というしつけをしていないか。

・子供の教育レベルを「男の子」は大学まで「女の子」は短大までと区別していないか。

・大学等における専攻分野について「女子は人文科学系」と親や女子自身が限定していないか。

・仕事を選ぶ時、自分が何をやりたいかを考えずに「女性向きの仕事」を探していないか。

・家庭において家事・育児・老人の世話は妻だけの仕事と考えていないか。

・職場では、「女性」は補助的な仕事と限定していないか。

・社会的活動の場において「男性」と「女性」の役割を固定的に考えていないか。

・女子自身が「女だから」とあきらめていないか。「女だからできないことってありますか」

第四十回（一九八八・昭63）

女性の能力や役割についての固定的な考え方を見直そう

スローガン（「いま個性が性を超える」）

87年（昭62）

・婦人問題企画推進本部、西暦二〇〇〇年に向けての新国内行動計画策定

・労働省、男女雇用機会均等法施行初の女子労働福祉対策基本方針策定

資料Ⅲ 雑誌『あぐら』のバックナンバー一覧

(ケイ囲みは「本誌」、後の「特集」)



●創刊号	72・2	200円
女が働くこと		
●2号	72・6	200円
女性の進出のために		
●3号	72・11	200円
主婦の解放をめぐる		
●4/5号	73・6	300円
何かしたい主婦のために		
●6/7号	74・3	350円
運動をすすめよう		

●8号	74・8	380円
子殺しを考える		
●9号	74・12	430円
働く女と主婦の接点を求めて		
●10号	75・3	700円
女と法		
●11号	75・6	750円
女と教育		
●12号	75・10	750円
メキシコ会議と世界行動計画		
●13号	76・1	750円
国際婦人年を考える		
●14号	76・4	750円
女の記録		
●15号	76・9	750円
職場の中の女性差別		

77年1月『あぐらミニ』発行
(B5判十六ページ)



●77・1号	150円
快談怪談Ⅱマンリブ・ウーマンリブ／紹介Ⅱ女性史資料館	
●77・2号	150円
怪談Ⅱ夫についてホンネを語る／東海Vスタイリストの死	
●77・3号	150円
怪談Ⅱスタイリストはなぜ死んだ／報告Ⅱ三十歳定年闘争	
●77・4号	150円
怪談Ⅱ転動を考える／報告Ⅱ初任給格差とたたかって	
●77・5号	150円
●77・6号	100円
女の代表として立ちまゝす！	
田中・吉武・俵・榎	
(この号から八ページとなる)	
●77・7号	100円
ルポⅡ新・女時局大演説会	
・TVの女性番組を考える	
●77・8号	100円
展望Ⅱ参院選を終わって	
ルポⅡ婦人問題対話集会から	
●77・9号	100円
問題Ⅱ化粧品は顔の農業／ルポⅡ母親大会・婦人研究者会	
●77・10号	100円
主婦の再就職アタック失敗談	

△東海V／ルポⅡ女性史の会

●77・11号 1000円

座談会Ⅱ結婚についてホッネを語る(続編)△北海道V

●17号 77・11 780円

女と生涯教育・生涯学習

●77・12号 1000円

特集Ⅱあごら全国集会報告

各地の△あごらVの経過報告

●78・1号 1000円

女が働くこと△九州V・問題

Ⅱ愛知県の教育研修の手びき

●78・2号 1000円

問題Ⅱおくらている都道府県の行動計画／ルポⅡ全米大会

●78・3号 1000円

しあわせの総和は一定か／調査Ⅱ女子短大生の意識△東海V

●78・4号 1000円

結婚についてホッネを語るⅡ(続編)△北海道V

●78・5号 1000円

痛みの共有をとまった女性

解放運動を／△北東京V発足

●78・6号 1000円

体験記Ⅱ自立への模索△東海V
随想Ⅱ文学伝習所の女たち

●18号 78・6 1300円

いま女性解放は

●78・7／8号 1000円

しあわせの総和は一定かをめぐって△北東京V

●78・9号 1000円

絵本の中の性差別を調べて／絵本リスト一覧△札幌V

●78・10号 1000円

働くことだけが「翔ぶ」こと

か△東海V

●19号 78・10 8000円

女にとって子どもとは

●78・11号 1000円

調査Ⅱ子どもの目が見た働く母／座談会Ⅱなぜ女は家庭？

●78・12号 1000円

△あごら京都Vの一年を振り返って／△お解連V結成

●24号 79・1 1000円

平等と保障の確立の年に／子連れ女と学習△東海V

(この号から「ミニ」は第三種郵便物となり、通巻番号で表示)

●25号 79・2 1000円

ルポⅡ私たちの男女雇用平等法を作る大集会△東京V

●26号 79・3 1000円

アピールⅡ地方選こそ女の出番／ルポⅡ都知事三候補の声

●27号 79・4 1000円

出口がないということ

報告Ⅱあごらの財政について

●20号 79・4 13000円

ひろがる女性解放と男女雇用平等法

●28号 79・5 1000円

主婦の再就職は可能か△京都V

／山本かなえさん当選

●29号 79・6 1000円

細胞分裂開始△北東京V

討論Ⅱ20号を読んで

●30号 79・7 1000円

家庭の日ってなに
激論ⅡますのVS梶谷ほか

●31号 79・9 1000円

第二回全国あごらの集い報告

激論Ⅱますのさんへ(梶谷)

●32号 79・10 1000円

私の出産から／安心できる産院リスト△札幌V

●21号 79・10 11000円

子にとって母とは何か

●33号 79・11 1000円

自分が変われば社会が変わる

／これでいいのか(あごら九州)

●34号 79・12 1000円

討論Ⅱ家族のゆくえ／女と自由と愛を読む△京都V

●35号 80・1 1000円

出産を考えるⅡ(札幌)

夫が立ち合った出産体験記

●36号 80・2 1000円

八〇年代を我が胸に／デンマークの世界会議に参加しよう

●37号 80・3 100円

実現された長時間保育／老後を考える／東海

●38号 80・4 100円

座談会Ⅱ自己解放とセクシュアリティ／北東京

●39号 80・5 100円

語り明かして／養護学校義務化に思う／京都

●40号 80・6 100円

ななかまどの町から／パートの実態報告（旭川）

●22号 80・6 1200円

男女平等と母性保障

●41号 80・7 100円

女たちの映画祭上映を終えて／技術家庭は女子向き（九州）

●42号 80・8 100円

松井やよりさんの講演によせて／農村の女から／武蔵野

●43号 80・10 100円

討論Ⅱリブって何？／東海／運営会議発足へ

●44号 80・11 100円

報告Ⅱ私たちに有効な男女雇用平等法をつくる札幌集会

●45号 80・12 100円

高橋ますみ・女と主婦の状況を聞いて／京都

●23号 80・12 1500円

女たちは、いま変わる

●46号 81・1 100円

座談会Ⅱ老後の問題は私たちみんなの問題／京王

●47号 81・2 100円

自分をもつめる眼Ⅱ野上・志賀・漆田・大野ほか／北東京

●48号 81・3 100円

結婚の「現場」から／浦和／講演会Ⅱ女と戦争

●49号 81・4 100円

私、どんな仕事ができるのかしら／東海

●50号 81・5 100円

「待つ女から創る女へ」を聞いて／九州

●24号 81・5 1500円

女と戦争

●51号 81・6 100円

いま、私たちにあってボーウ・オワールとは……／旭川

●52号 81・7 100円

戦争への道を許さないために／淡谷・山本・曾田／武蔵野

●53号 81・9 100円

女・子ども・障害者・家族・地域——阿部・塚崎／京都

●54号 81・10 100円

「フェミニスト・セラピー」を聞いて／札幌

●55号 81・11 100円

「主婦とおんな」を読んで／沖本・桑原・加藤／柏

●56号 81・12 100円

「八十七歳の青春」を上映して／国井・宗久・松崎／浦和

●57号 82・1 100円

●25号 81・12 1500円
女と情報

●57号 82・1 100円

おめでとう！こしも翔ぼう／大成功の藤井エミ作陶展

●58号 82・2 100円

私にとって老いとは 高橋・嶋田・川野・関・斎藤（京王）

●59号 82・3 100円

エコロジー運動とフェミニズム運動／北東京／核廃絶を

●60号 82・4 100円

本音を語るⅡあれから五年、いま、私たちは（東海）

●61号 82・5 100円

討論Ⅱ女と組織——女とのつながりを求めて／武蔵野

●62号 82・6 100円

選び取れない姓／結婚改姓私たちの場合（札幌）

●63・64号 82・7 100円

あごら10周年記念全国大会を前にQ&A

●26号 82・7 1500円
いま女がモノを言うといつこ
と

●65号 82・9 2000円

いま、私は言いたい「紀平・

松本・丹羽ほか(10周年大会

●66号 82・10 1000円

とにかく仕事を始めた三人

小坂・木久・田代旭川

●67号 82・11 1000円

私にとって戸籍とは／反戸籍

運動紹介へ浦和

●68号 82・12 2000円

いま、なぜ「平和か」へ九州

・伊藤ルイさんを迎えてへ佐

世保

●27号 82・12 1500円

いま平和を支える

●69号 83・1 2000円

優性保護法改「正」をめぐる

地方議会の動きへ新宿

●70号 83・2 2000円

今、男と女は「阿部・石川・

稲垣・木野村・竹沢へ京都

●71号 83・3 2000円

優性保護法から見えてきたも

の／27号を回し読むへ仙台

●72号 83・4 2000円

女どうしが連帯したら強い

だろうけどへ柏

●73号 83・5 2000円

「らしさ」の順送りへ大阪

・六月選挙が天王山へ新宿



「らしさ」の順送りへ大阪
・六月選挙が天王山へ新宿

●74号 83・6 2000円

あなたにとって家事ってなあ

に・結婚改姓を考えるへ東海

(この号から、サイズをA5

判に改め、増ページする)

●28号 83・6 1800円

産む・産まない・産めない

●75号 83・7 2000円

女と政治「荻野・佐藤・松平

・細木・加我・細谷へ札幌

●76・77号 83・9 3000円

女・「障害者」そして……

全障連第八回全国大会分科会

●78号 83・10 2000円

「からだを考える」へ新宿

こどもとおんなのからだ育て

●79号 83・11 2500円

座談会「いま旭川で思うこと

林・田代・那須・小坂へ旭川

●80号 83・12 1000円

はたらく女性の選択「九州」

・核兵器の脅威へ新宿

●81号 83・12 1400円

子どもがあぶない(特集29

号)(この号から第三種郵便

となり、「ミニ」と通巻番号

とする)

●82号 84・1 3500円

女から女たちへ(新年交換

雇用平等法に異例の中間報告

●83号 84・2 3500円

85年へ向けて私たちはいま

私たちのESCAPをへ京王

●84号 84・3 3500円

人間の自由と「戸籍」へ京都

・保障と平等なき試案に怒り

●85号 84・4 3500円

・平等法上程を急ぐ労働者

・ESCAP婦人会議終わる

●86号 84・5 3500円

・「奇怪禁等法」にわかに浮

・「女鎖」労働省を包囲

●86号号外 84・5

「禁等法」ほとんど諮問案ど

おりに閣議決定、国会へ

●87号 84・6 3500円

・「禁等法」原文／社労委会

議録／畠山裕子・母子家庭は

●88号 84・7 3500円

・野党提案「平等法」全文

・「禁等法」攻防戦傍聴記

●89号 84・8 1600円

均等・平等・保護(特集30号)

- 90号 84・9 350円
- ・「禁等法」の周辺でハ旭川V
- ・「禁等法」社労委議事録
- 91号 84・10 350円
- ・実効ある平等法の請願を／
- 大脳雅子・女性会議84なごや
- 92号 84・11 350円
- ・フェミニストドラマ「ある
- 日花子は」(九州作)
- 93号 84・12 350円
- ・女が働くということ／小樽会
- 議―そしてこれからハ札幌V
- 94号 85・1 350円
- ・十歳になったハあごら東海V
- ／水田珠枝ハ大脳さんに反論
- 95号 85・2 350円
- ・山口県少年保護育成条例改
- 「正」をめぐるハ山口V
- 96号 85・3 350円
- ・生命の流れを見つめてハ京
- 都V／新連載ハ老人介護
- 97号 85・4 350円
- ・女から男からハ柏V

- ・女性会議なごやをめぐる
- 98号 85・5 350円
- ・女から男からハ湘南V
- ・禁等法、連休明けに成立か
- 99号 85・6 350円
- ・ドイツ 青ざめた母―そし
- て私たちハ旭川V均等法解説
- 100号 85・8 1600円
- 均等法・派遣法・そして(特集
- 31号)
- 101号 85・9 350円
- ・私たちが見たナイロビ会議
- ・売春行為実態調査に驚く
- 102号 85・10 400円
- ・高橋喜久江ハ売春調査は必
- 要／労基法改「正」大詰め
- 103号 85・11 400円
- ・指紋押捺を考えるハ山口V
- ・均等法諮問案出る
- 104号 85・12 2000円
- ・ナイロビが語りかけるもの(特
- 集32号)
- 105号 86・2 400円

- ハあごら札幌Vの十年／座談
- 会ハ自らを装うハ札幌V
- 106号 86・3 400円
- ・歩き出した主婦たち(東海
- BOCV
- 107号 86・4 400円
- ・高木葉子さんを借しむ／今
- いるところで花開けハ九州V
- 108号 86・5 400円
- ・自立のおしゃべりに風穴を
- あける／大槻さん全面勝利
- 109号 86・6 400円
- ・指紋押捺を考える／九州・
- 山口・交流会ハ山口V
- 110号 86・7 400円
- ・みんないっしょに生きたい
- ね(母子保健法)ハ札幌V
- 111号 86・8 400円
- ・ハ東海BOCVの七年
- ・人材派遣110番スタート
- 112号 86・9 400円
- ・幌延問題と私たちハ旭川V
- ・母子保健法への布石始まる
- 113号 86・11 400円
- ・佐世保の街と私たちハ佐世
- 保V／夫婦別居配転全面勝訴
- 114号 86・12 400円
- ・下関に人工島が出来る！
- ・労基法改悪の動きハ山口V
- 115号 87・1 400円
- ・「実践的女性学」に学ぶ
- ・シニアウーマンズハウスを
- 116号 87・2 400円
- ・女のネットワーキング
- ・均等法で職場は変わったか
- 117号 87・3 400円
- ・フェミニズム運動のない国
- ・ノーノー！核のゴミ捨て場
- 118号 87・4 400円
- ・国家秘密法に反対する
- ・いま選挙に燃える女たち
- 119号 87・5 400円
- ・女たちの'87地方選挙レポ
- ト／パート現場報告ハ事務局V
- 120号 87・6 400円
- ・母子手帳の様式改訂に疑問

・ いらな いっしょ 原発ハ旭川V
● 121号 87・8 400円
インタビューハ九州V

・ ごまかされまい 労基法改悪
・ NOWのNY支部を訪ねて
● 122号 87・9 400円

・ 性と生 生き方の交差点
・ わたしの性、あなたの性
ハ札幌V
● 123号 87・10 400円

(雑誌『あごら』の流れ)
● 126号 88・1 400円

一九六四年一月、東京で生まれた(BOC) (バンク・オブ・クリエイティビティ)は、女のさまざまな創造力と社会を結ぶ窓口を志したもの。創造力を持つ女たちと、それを求める社会のニーズを結ぶ「情報」の流通は、初めから必要だった。このため、発足まもなくから、ハガキ通信「BOC通信」を毎月発行した。

ハガキは情報量が少ないと考えられがちだが、写植で打てば約千二百字を取載できる。正式な印刷にすれば読みやすい。封書だと封を開けないまま捨てられる心配もあるが、ハガキなら、少なくとも最初の一、二行は読んでもらえるだろう。封筒代や封筒に入れる手間も省かれる、などが、ハガキ通信を選んだ理由だった。

しかし、ハガキでは不十分で、もう少し内容のある雑誌に

・ 美鈴選挙を振り返るハ鳥取V
・ 女から女たちへ
● 127号 88・2 400円

・ 「夫育て」をめぐるハ事
・ 真宗大谷派における女性差別
別Ⅱ/日産の家族手当差別
● 131号 88・6

・ 有縁の女・無縁の女・選択の女(十五周年記念号)
(特集34号) 1800円

● 128号 88・3 400円

・ 女性の地位(資料)・フェミニスト向きのマンガ・映画
● 129号 88・4 400円

したい、という思いはあり、六〇年代の終わりから、雑誌づくりの作業を少しずつ始めた。

一九七二年二月創刊の『あごら』はA5判九十六ページ、二百円。テーマは「女が働くこと」。女のオルタナティブな働き方を模索した(BOC)をまさに反映したものだった。

(BOC)の実践の中で、働く女の根源的な問題が浮上した。それを考え、話し合う同志を求めた「求人雑誌」のスタートだった。

普通ならミニコミの形をとるところだが、あえて「ミニディコミ」を志した。ガリ版刷りのミニコミが盛んな時代だったが、特定少数を視野に置くミニコミではなく、ある程度多数の、女の問題に関心を持ちそうな読者を対象に、情報としては市販にも耐えられるものをそろえた。活版印刷、二千部、

そのうち六百部を（BOC）会員に、四百部を女性グループに無料配布した。

マスメディアにも献本したが、「毎日」の都内版タウン案内にはんの一行、創刊を伝える記事が出ただけだった。しかし、本自体がセールスウーマンの役を果たし、（BOC）会員の約半数（三百人）と、他の女性グループのメンバーやその他の知人約二百人、計約五百人が会員になった。類書のない時代だったからだろう。

従来のハガキ通信「BOC通信」は「あごら通信」と改称、毎月の例会の通知やミニコミ的要素を盛り込んだ。

が、さらにミニコミ的要素のものが要求されるようになり、七七年一月、「あごらミニ」を創刊。以来、従来の「あごら」は「本誌」と呼ばれるようになり、資料誌の性格を強める。

七三年を除き年三回刊だった「本誌」は、以降、年二回刊となる。「ミニ」は、本来「あごら」が目指したAGORAZ E I N の場となる。B5判八ページの手軽さが受けて、やがて拠点間の持ち回り編集も定着。各地方からの新鮮で多様な問題提起は「あごら式フェミニズム」を育てる大きな力になったと思う。「情報」の受信者でなく、女もすべて発信者に」の発想だったが、各拠点に確実に書き手がふえて行った。

しかし六年も経つとややマンネリ化、「もっと内容のあるものを」の声があがった。本誌を第三種郵便物として送料を軽減したいねらいもあり、本誌と同じA5判に変え、名称も

「あごら」に統一した。八二年六月スタート。最初は十六ページ。まもなく二十四ページから三十二ページにふえた。こちらを「月刊」、従来の「本誌」は、この後、「特集」と呼ばれるようになる。「月刊」はこれ以後、「ミニコミ」よりも次第に「ミディコミ」色を強くし、「特集」は三百ページ前後、単行本に近い印象となる。書店等での売上げもふえていく。

が、やがて「特集」の売れ行きが止まる。財政難は深刻化した。が、折しも優生保護法、均等法等、「あごら」ならではの役割も会員から期待される。財政難を承知で続刊したがついに限度に。「特集か月刊か」の二者択一論が繰り返される。「月刊を八ページ程度にして特集は年二回厳守」の声もあったが、現実には月刊がむしろ増ページされた。刻々変化する均等法攻防戦の中、地方の会員からは、「東京からの情報」が、砂漠の水のように求められたからである。私たちも昼夜兼行で情報集めに奔走した。日頃おとなしい（あごら）の会員たちが各地で一斉に立ち上がり、地域の活動の中心になったこと、若い会員たちに「あごら」で足腰を鍛えていたから聞えた」と言われたことは、十五年間の中でもいちばんうれしい記憶である。しかし反面、この時期、主婦会員が続々と去った。「私たちとかかわりのない「あごら」になった」と。均等法と主婦は深くかわると思えばこそ死力を尽くしてきたつもりだったが、それを結び得なかった非力を痛感す

る。会員減は財政難に拍車をかけ、挫折感は深まった。財政難のため、八六年度は「特集」は刊行できず、八七年度に発行、代わりに八八年は二冊発行という変則的な発行になった。以上が概略の経過である。普通ならミニコミからミニデコミへと進むところをミニデコミから出発し、途中何度か軌道修正しているところが特徴かと思う。「何がなんでもこうで

なければ」式の固定的な発想はできるだけとらないようにしてきた。近年の「月刊」の沈滞については、建て直しの急務を感じながら、資金づくりに追われて果たせなかった。八八年八月号からは、「月刊」の内容を一新、読者増を目指す。毎号二千部の発行が持続できなければ、従来のような形で続刊は難しい現状である。

(斎藤 千代)

〔編集後記〕

◆十五周年全国大会は昨年の十月でした。それから十か月たつてようようその記録集をみなさんのお手元にお届けすることができました。これですっきりと夏の後半が楽しめそうです。

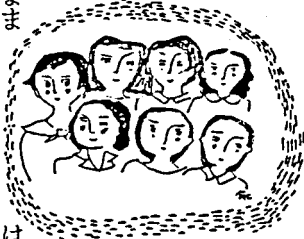
これからの「あごろ」に何を求め、何をしたいのか、また何ができるのか、ひとりでも多くの方からご意見をお寄せいただけるよう事務局ではお待ちしています。

(山)

◆まだか、まだか、の矢の催促にウナされながらも、こんなに遅くなりました。

以前のような不眠不休の努力はやめ、あるがままの現状を見ていただくことにしました。

◆六日のあやめに菊が添えられることを祈っています。(斎)
◆ハあごろVの活動を支える一人に私もなりたいたいと思い、ま



ず取材録音のテープおこしの行動から始めました。なにことも行動を通して真実になるという真実に少しずつでもせまっていきたいと思います。

(池)

◆転載許可を取るのって、ほんとに大変ですネ。長梅雨をボヤキながら右往左往しました。

こんなふうにしてつくってる「あごろ」、あっさりコピーされてしまうことが多いんですけど、せめて一言、声をかけてください。カンパもいただければ最高。(ま)
◆十五年前は、まだ十代。創刊号は知りませんでした。もっと早くハあごろVを知っていたら、私の人生もだいぶちがっていたでしょう。でも、二十代で読み始めたのはラッキーだったと思います。

(恵)

◆何度も校正をしたおかげで、ハあごろVの歴史がやっと少しわかりました。ABC Vは、いま新しい構想を模索中です。秋には展望を発表したいと、ワクワクしています。(り)

へあごらは、ギリシャ語でへひろばの意味。

女の生き方、人間の解放について話しあうへひろば。さくのないへひろばです。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、

と、一九七二年以来、資料誌『あごら』を、また一九七七年からは『月刊あごら』を発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにはしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなた自身の情報を、どしどしお寄せください。

全国各地のへあごら拠点にもお出かけください。

●へあごらは、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係。

会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②『月刊あごら』および『特集あごら』の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行(BOC)の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室(英語教室、再就職準備講座など)の運営、その他。

●会費は月額六百元(月額七千二百円)、前納制。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あごら事務局(T E L 03-354-3941)へ

『あごら』131号(特集34号) 1988年6月10日発行

- 編集 伊藤ハツエ/池田千鶴子/荻原有菟/黒沢照代/後藤多見/齊藤千代/砂川理子/竹内全子/寺沢恵美子/羽後静子/藤本美千子/山口のり子/山下智恵子/(表紙・本文イラスト) 野原まさこ
 - 発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-354-3941 ●振替東京 0-5264
 - 発行人 <あごら> 運営会議 ●定価 1,800円
-

